

語り継ぐ 9

**阪神・淡路大震災が発生したとき、
生まれたばかりか、母のお腹の中にいた。
家族や近所の人が、助け合って守ってくれた。
そんな話を聞きとって、記録に残します。**

**兵庫県立舞子高等学校
環境防災科 3年**

親の体験

新井秀太

I、前日の晩

父親の会社の後輩5、6人を家に呼び、ご飯を食べた。そして、深夜に就寝。

II、1月17日

(1) 5時46分。

ゴオーと激しい揺れ

ともに母は起きた、すぐ横にまだ寝ていた父を起こした。揺れが収まると、窓を開け状況を確認、母方の曾祖父母の住んでいた新長田方面ではオレンジ色の光が見えた。家の、中は周りの家に比べると安全だったので外に出るか迷ったが、とりあえず、ラジオを聴きに車へ、だけど、母は妊婦だったので散乱した廊下を進むことが出来なかった。父が道を作りその間、母はたくさん上着を着た。道ができ、外に出るときに隣の人が足元をライターで照らして靴を履いたが父は左右逆の靴を履いていた。車の中でラジオを聴いている間に、歩いて5分の父方の祖父母の実家への無事を確かめに行くのが決定。実家へ、その間余震が続いた。

(2) 6時過ぎ。

父方の実家の塀は崩れ、家は傾いていた。それにもかかわらず、家の外にはみんなが居なかつたので、みんなの名前を叫んだ。すると案外迷惑そうな顔でひょっこり出て来た。その時にお腹の子が動き、身内の無事を確認。それと同時に安心し、腹が減った。それを祖母に伝えると、「おっしゃ。まかしひとき！」と傾いた家へ、祖母は炊飯器の米とキムチ、スプーンを持って「これ食べとき。」と車の中へ入れられた。水がなかったので、実家の前の商店からポカリを持ってきた。その間父は母に頼まれ、母方の曾祖父母の無事を確認へ、その間母は昨日の残り物を取りに行き食べていた。

(3) 昼過ぎ。

父が帰ってきた。父はすぐに新長田についたが、曾祖父母の家は傾き、中には人はいなかつた。当時の新長田には多くの避難場所があり、1つ1つまわり祖父母の無事を確認に時間がかかった。無事を伝えた父に母は「家の名谷を見に行ってくれ」と頼み、父は名谷に、父はなかなか帰ってこなかつた…

(4) 夕方。

父が帰ってきた。父は帰ってくるなり「渋滞はすごいけど、あっちは天国や。」と言った。名谷は長田に比べ周りの被害も少なく、母方の実家の被害はウィスキーが落ちて匂いがするぐらいだと聞いたとき、父方の祖母が、「早よ帰り。」と言われるままに、荷物をまとめ名谷へ行った。道は大渋滞だった。

(5) 8時ごろ。

名谷の実家に着いた。その時祖母はウイスキーのごみを出していた。一応念のために、両親は、叔母の家族と祖母と東落合小学校で寝た。

III、1月17日から3日間

(1) 1月18日 朝。

父は東落合小から仕事場へ、その時に、昨日の晩にご飯を食べに来た後輩の彼女が彼女の家の一番大きい柱の下敷きになって亡くなるのを聞く。

母は叔母の家族と実家に帰る。水は出ないので、服の洗濯ができない、ガスが出ないので、ミルクやお風呂に入れることができないため、お腹の中に子供がいて良かったと思う。

(2) 1月18日 夕方。

父は「家族を残して1人ぬくぬくおられへん。」と、父方の家族が避難している兵庫高校に帰る。1日をそこで過ごす。

(3) 1月19日 朝。

父は父方の祖母に「佳子ちゃんがお腹おつきいのに、そばに着いとったり！」と名谷に返される。

(4) 1月19日 晩。

父は家族と同じ境遇の東落合小に母を連れ、寝に行く。母は「なんで、実家で寝られるのに、ここで寝なあかんねん。お腹に子供がおるのに…」と思うが父の気持ちを察して一緒に寝た。東落合は、長田に比べ全壊の家や半壊の家が少なく、避難する人は少なかったが、父や母のように東落合小は、夜になるとみんなが寝に来るため昼に比べると人が多くなっていたらしい。

(5) 1月20日 朝。

実家に帰ると、母の兄のお嫁さんの実家が明石で精肉店をやっているので、米、食糧や水を届けてくれたが、何かを作るときに水が足りなくなり、東落合小に来た給水車に水をもらいに行くために、東落合小へ行く。

このころから、東落合は電気が復旧し、テレビを見ることができるようになる。母は何もすることがなくまた、お腹に子供もいたのでなにもできず、テレビみて過ごす。

IV、1995年にあった事

(1) 2月上旬。

母方の祖母が、仕事場に復帰する。このことで、母は一人になりがちになった。

(2) 2月下旬。

実家から叔母の家族が出る。このころに、母が家に服を取りに帰る。兵庫高校で炊き出しをやっていることを聞き、父方の家族に会いに行くついでによると、炊き出しの列にいた、芸人のポンチおさむに会う。テレビカメラがいなかつたので、「この人はいい人や。」と思い。声をかけ、お腹の子が元気に生まれてもらえるように、お腹をさすってもらう。

(3) 3月28日。

自分が産まれる。また、このころは、まだ祖母の家に住んでいた。

(4) 4月上旬。

母方の曾祖父母が避難していた避難所から余った、オムツや粉ミルクを大量にもらう。ベビー用品で困ることが無かった。

(5) 5月下旬。

母方の実家から歩いて2～3分のところに新しく出来た賃貸に引っ越しをする。

V、その後～現在

(1) 1996年11月。

妹が生まれる。この時は神戸に瓦礫はさすがに無かったが、まだすごく更地があった。

(2) 2001年3月。

保育所卒園3～5日前に今の家、長田に引っ越す。そしてそのまま12年が過ぎ、現在に至る。この時に、更地を久々に見た。名谷では更地が無くなってきたけど、長田は、ぽつぽつ更地があって何も思わなかつたけど、その映像は、今も忘れることが出来ない。この不思議な経験は大切な思い出としてこれからも残っていくだろう。

VI、震災を知らない子に伝えたいこと。

(1) 母の場合

伝えたいことが3つある。1つ目の言いたいことは、「当たり前をたいせつにすること。これが一番難しくて、気づいたときに一番やっておけばよかつたと、自分を責めたり、後悔したりしてしまうから。特に、ご飯の時に「いただきます。」「ごちそう様でした。」を言うのは、当たり前だけど、心をこめて言ってほしい。あの震災では、たくさん的人が被害を受けて、ガス、水が使えなくてお米も炊けなかつたし、もちろん、家の食糧がなくなつても、お店が開いていなかつたので、温かいご飯が作れる環境に自分がいることを分かつてほしい。それに、あの時の赤ちゃんを大きくした両親特に、お母さんへの感謝も忘れないでほしい。」

2つ目の言いたいことは、「災害に対して準備をすること。阪神淡路大震災では、早朝に揺れたため家族の安否確認は、たぶん、比較的にしやすかったと思う。でも、今回の東日本大震災は、昼で新聞にも家族とやっと会えたなどの記事があつたから、災害時に家族との集合場所を決めていてください。そうすることで、早く家族に会えることができると思う。

また、阪神淡路大震災では、知り合いが家具の下敷きになつたと言つてゐたので、家具固定具を付けてください。もしかしたら、けがをしないで済むかもしれないし、最悪の結果にはならないと思うから。私はこれぐらいしか出ないけどもっと工夫ができると思う。その工夫の数が多いと災害での被害が少なるので、災害の準備をしてください。きっと役

に立つと思います。」

最後に言いたいことは、「とりあえず災害時は、がむしゃらに生きてください。あの時の精神的苦痛がありました。それは、その人自身で違います。例えば、私はあの時にみんなが、色々動いていたのに、お腹の中に子供がいて何もできなった無力感。など数え切れません。しかし、その時の苦痛や絶望感は震災後に生きてきた長い時間であった楽しいこと幸せなことで忘れることがあります。あの時ちらほら自殺したらしいということを聞いたけど、がむしゃらに生きてください。あの時は、辛くて嫌だ、生きても意味がないと思うかもしれません。でも、あの時に、この辛い震災の話を必要としている人はいなかっただけで、いまこうして話すことになっている。

たぶん、あなた達が生きている間に災害が来ると思う。私はあの時より被害が出る地震が日本で起こらないと思っていたけど、東日本大震災が発生した。また、原発の被害などこれからいろいろと問題が出てくる災害が発生した。本当に、この先どんな災害が起こるかわからない。だから、災害が発生した時は、がむしゃらに生きてください。そうすることで、あの時私みたいなのが、防災につながることができるとは思っていなかったが、今自分の体験談を必要とする世代が出て来たから、その世代に教えることが出来るのはあの時を生き抜いたからだと思う。私は今すごい事をしていると思う。この気持を味わってほしくないけど、さっき言った通り、この先何が起こるかわからない。でも災害が発生したら、生き抜いて次の世代に自分の体験談を話して、みたいな気持ちをすこし味わってほしい。決して、悪い気持にはならないから。」

（2）父の場合

「僕は、実際17年前に起こった震災をもう思い出したくない。でも震災を知ってもらって、次に生かすことはいいことだと思う。これから、何度か語り継ぎを聞くことや見ることもあると思う。その時に、本当は思い出したくない人が自分のために話をしてくれているのだと思って、熱心に聞いてください。そうすれば、話した側も話してよかったです。と思うはずだから。」

後、普通の高校生はこんな事はしないと思う。だから皆さんは誇りを持ってどんどん防災のことについて学んでください。そして、災害が発生した時に、私たちに色々指示をしてください。」

VII、自分の感想

自分は今回、両親から阪神淡路大震災についての話を初めて聞いたと思う。自分が高校選択の時に「半端な気持ちで震災の勉強をするなら行くな。」と言った理由が分かった。いつも明るい父が、「できれば、震災の話はしたくない。」と言うと思わなかった。「時間によって災害で負った心の傷はいえない。」という言葉が、こんな近くの人に適用していたことが知れて良かった。

また、母が震災を知らない世代に言いたいことが3つもあったことが非常に驚いた。な

ぜなら、母は、自分が阪神淡路大震災でこんな勉強をしたと伝えると、興味がない返事をしていたので、全然阪神淡路大震災について、興味が無いと思っていたが、今回、震災を知らない世代に伝えたいことがあるのか聞くと、スラスラ伝えたいことが出て来た。母は、阪神淡路に興味が無いと思っていた自分がすごく恥ずかしく思った。母は、阪神淡路についてかなり思っていたことがあった事を知れて良かった。

また、父が最後にボソッと「災害の時に、助けてくれ。」と言ったことが忘れることが出来ない。自分は、そのように思われているとは思っていなかった。これが環境防災科の目標であると思う。自分たち環境防災科は、そのような人間にならないといけないと思う。そのことに気づけて良かった。しかし、自分は、災害時のリーダーになるにはまだまだ未熟なことも気づけた。そのようなリーダーになるために自分はこれから3つの事を直さないといけないと考えた。

1つめは、もっと、落ちつき、しっかりと話を聞かないといけないと思う。なぜなら、災害時に的確な判断をするために、落ち着いて周りを見ないといけない。さらに、他者からの意見を聞くと良い判断ができると思う。今自分が、リーダーになると、自分が話してばっかりなので、他の人の良い意見を聞く機会をつぶすことになる。話を聞いてくれないなら勝手に自分の意見を実行すると思う。そうなると、避難所の中で混乱を生むことになるので、そのためには、自分が落ち着き、しっかりと他の人の話を聞かないといけないと考えた。

2つ目は、もっと的確な判断をしないといけないと思う。自分はかなり優柔不断で、もし、今自分がリーダーになると、リーダーが迷っている間に、被害が悪化し、混乱が生まれると思うので、もっとしっかりした的確な判断をしないといけないと思った。そのためには、もっと深く、物事を考えてなければいけないと思った。たぶん、自分の優柔不断は、2つや3つの物事を浅く考えて、その物事の良い点しか見ていないと思う。だから、物事を深く考え、物事の良い点、悪い点がわかるようになりたい。

3つめは、知識を増やさないといけないと思う。自分は知識が全然無い。知識が有ると無いとでは大きな違いがある。やはり、多種多様な知識を持っていると色々な問題に柔軟な対応が可能である。しかし、自分には知識が無いし先ほどにも言った通り、落ち着きが無いため、より対応できる問題数が激減すると思う。そのためには、今新聞を少し読んでいるが、さらに読む記事を増やし、災害などの本を読んでいくことで知識の少なさの問題点は、解決すると思った。

最低でもこの3つの点は、自分でも分かっている短所なので、3つの短所を直していくことで、父が言った災害時のリーダーに近づくことができると思う。また、この3つ以外の短所が出てこないことを願う。

地震と共にこれからも生きていく

石川 夏帆

1. 母から

(1) 1995年1月17日5時46分 兵庫県南部地震発生

『ドッドドッド…』

「ゴジラが来た!! ゴジラが枕元で走っている!!」

地震発生時母は1週間前に見たゴジラの映画が夢に出てきたのかと思ったと私に話してくれた。

私は当時生後3か月の赤ん坊だった。

父と母と当時7歳と5歳の兄が居りその日は家族全員で2階の和室で寝ていた。

幸いにも全員無事だった。私は母の近くで寝ていたらしく地震発生してまもなく母に抱えられた。

部屋には頭上にテレビ、足元にはタンスがあった。テレビは当時5歳の兄の頭上すれすれのところで落ちかけていた。タンスは2段式で上下横にずれていた。

そのテレビがもしも兄の上に落ちていたらと考えるとぞつとする。

「地震が起ったんは明石海峡大橋のせいちゃうか。」母はこう考えたこともあるという。

当時明石海峡大橋を建設していて海に支柱を埋めていたりした。

その時に断層を刺激したから地震が発生したのだ。と明石海峡大橋を恨んだという。

家は9か月前建てたばかりの新築でほとんど被害がなかったが新築にも関わらず家にははっきりとひびが入っている。

母は地震保険に入ろうかと迷っていたらしいが銀行の人に「神戸は地震来ないから入らなくてもいいんちゃいますか?」と言われ入らなかった。「今になって後悔している。17年経った今でも家のひびは直っていないからなあ。」と少し苦笑いしながら話してくれた。

「神戸は地震が来ない。」なぜ17年前の人々は言い切れたのか私には不思議で仕方ない。17年前までの常識が覆された瞬間が1995年1月17日5時46分のことだった。

(2) それからの1週間

地震発生後、父が1階へ様子を見に行った。

リビングに置いてあった水槽の床が水浸しで、ぶら下がり電球はぶつかりあつたためか割れて床や水槽の中にガラスが散らばっていた。このことからぶら下がり電球は危険だと感じやめたという。

食卓のテーブルの上には食器棚から出たコップの破片が散らばっていた。両開きの食器棚はどちらも開いていた。

「一旦外に出ておばあちゃん家に行こう。」徒歩5分の場所にある祖父母の家にまで行こうと玄関を開けようとしたが全く開かなかった。

父が蹴り上げてドアを強引に開けて外に出るとガスの臭いが充満していた。家の瓦も落ちていた。

「やばい。これは危険や。大変や。」母は直感でそう思った。

祖父母の家もまったく被害がなかったわけではないが無事だった。

「何があった？」「地震なんかな？」電気も来ていない。水道もでない。不安が募るばかりだ。

祖父が持ってきたラジオで神戸が大変なことを知った。

まもなくして明石消防に勤務している父は出勤していった。

母は「私たちはどうしたらしいの？」と不安だったという。兄も父に反感をもつたらしい。父の友達が家に来てそのとき初めて阪神高速が落ちていると聞いた。衝撃的だった。

外が明るくなった頃電気が通っていて一旦家に帰った。

家に帰ると「ブーン」といった音がしていた。地震の時に知らないうちにドライヤーのスイッチが入っていた。台所では「ジャージャー」と勝手に水が流れている。

炊飯器の中には昨晩予約炊きしてあったご飯が出来上がっていた。それがとても助かった。再び祖父母の家に戻り一緒にご飯を食べた。昼過ぎぐらいからまた水が止まった。

夜になりまた家に帰った。父は当日に帰ってきた。「次の日神戸に応援に行ってくる。」そのため帰ることが出来たという。

私の家族は寝る場所も食べる物も少しある状態なので避難所生活はしていない。

2日目母は7歳の兄とともに近くにある給水場まで水を取りに行ったりしていた。

3日目は父が蹴破ったドアと瓦を治すために大工さんに来てもらった。

5日目千葉にいる父の兄が神戸に来てくれた。

私のおむつや水を溜める容器、食料をたくさん持ってきてくれた。すごくありがたかった。

「たくさんの人の支えがあり耐えてこられた。夫が消防士であるからには子供たちは自分が守らなければならない。消防士の嫁は強くなければならない。」と母は話してくれた。

私の母はとても芯があり強い人だ。何事にもめげずどんなことでもこなす母を私は誇りに思うし、尊敬している。私も自分の力で子供だけではなく人も自分も守れる強い人になりたいと母を見て強く思った。

2. 父から

(1) 地震発生

「キヤー!!」

父は母の悲鳴で目を覚ましたという。すごい衝撃だった。

最初は「トラックが家に突っ込んだのか?」と思ったらしいがすぐに冷静になって考えると地震だということに気付いた。

地震が治まり家族の安全確認をした。全員けがもなく無事だった。

すぐに1階の様子を調べに行こうとスリッパを履いて階段を降りようとしていたら兄が父に着いて行こうとしていた。「呼ぶまで待つといて。」と言い残し階段を下りて行った。

その時兄は「僕がこの揺れを止める。」と言って一生懸命息を止めているらしい。

1階の様子はすさまじかった。

「とりあえず。おばあちゃん家に行こう。」そう思い家族で外に出ようとしたがドアが開かない。

ドアを蹴り上げて開けた。今でもこのドアは傾いていて隙間があり冬はとても寒い状態だ。

外に出るとガスの臭いがしていた。その時に「仕事に行かなければ。」と思った。

家族を祖父母の家に避難させ、仕事に行った。

「仕事行ってくるわ。」「なんで行くん?」「行かなあかんやろ。」「私らどうしたらいいんよ。」

「いや、でも行ってくるわ。」母の不安な気持ちは分かっていたが父は自分のやるべきことをしに仕事に行った。

行く途中に友達から電話がかかってきていた。「大丈夫か?」自分を気遣ってくれる友達がいることに感動した。この後から電話の回線が繋がりにくくなったり。あと少し電話をかけてくれるのが遅ければその友達の大切さには気付かなかっただろう。と話してくれた。

(2) 職場へ

当時父は明石の中崎にある消防本署に勤務していた。職場まで車で20分程の距離である。その行く途中の信号はすべて消えていた。「本当にすごいことがあったんだ。」と改めて実感したという。

職場に着くと全ての車が出動していた。父は消防用のパトカーで明石市内を回っていた。あちこちでガスの臭いもしていたし火災も発生していたため消火活動を行った。

職場に戻ると神戸の方が被害が大きいと聞いて明石から応援に来てほしいと要請があった。メンバーを選抜して父は次の日の第2陣で出動することが決まった。

地震の次の日の出動ということでその日のうちに家に帰れた。明石では水も出ていたため大きな容器に水を満タンに入れ家に持って帰った。その水で晩御飯を作ったり体を拭いたりしてその日を過ごした。

(3)悲惨な現場

次の日職員と車に乗って長田の方に向かった。須磨から長田まで行く途中衝撃的だったという。

焦げた臭いが町中に充満していて、周りは焼け野原に近かった。「何があったんや。地震じゃなくて本当は爆弾が落ちたんちやうか。」それほど悲惨な状況の中、車は活動場所に向かっていた。

その被災地での活動は消火活動、人命救助だった。

色々な地方から来ている消防士たちと一軒の倒壊した家屋から人命救助をした話を聞いた。その倒壊した家屋の2階から瓦や柱を取り除いて1階に侵入しようとしていた。やっと1階部分が見え「助けられる!!」と思っていたが父が発見したのはこたつで抱き合って亡くなっている2人の女性だった。

その他にもたくさんの人を発見した。しかしほんどの人が亡くなっていた。「助けに行つたのに助けられんかった。悔しかったな。」と父は言っていた。

父は2日間活動して家に帰った。

次の日、明石市内警戒のためパトカーで市内を回った。

それからは神戸の病院の燃料が足りないと要請があり重油のタンクを先導して運んだりしていた。

明石では明石市役所に「被災者相談窓口」といったものを設置して市民の要望に応えた。

そこに父も1か月ほど勤務していた。

多くの要望は「ここ危険やねんけど、どうにかして。」といったものだったという。

また、家屋の全壊、半壊の調査などを行っていた。

明石消防は地震から3か月ほどで通常勤務に戻った。

父はこの地震でたくさんの辛い経験をしてきた。しかし、「人を助けたい」その力だけでこの辛かったことを乗り越えた。そんな父は本当にすごいと思う。私ならたくさんの人の死を目の当たりにし助けられなかったとしたら耐えられなかっただろう。父はその助けられなかったことをばねにし消防で優秀な成績をあげている。そのような悔しさをばねにして頑張れる父も私は尊敬している。

3. 感想

今回両親から震災の話を聞いて父も母もどちらも辛い経験をして今があるということを知った。

小さな頃にも震災の話を聞いたことがあった。その時に聞いた話はほとんど覚えていなか

ったが母が言った一言だけは今でも鮮明に思い出せる。「地震があったのは本当に辛かった。でも子供らの笑顔見ていたら『がんばろ!!』って思えてん。」このことを言われた時すごく嬉しかった。「赤ん坊でなにもわからない私にも人を元気づけることが出来たんだ。」そう思った。

震災当時5歳だった兄は家族を置いてまで仕事に行った父に反感をもったと先ほど話したが、そのことで兄は苦しんだ。父がそこまでして仕事に行った理由が知りたくて環境防災科に入学しその理由がわかったとき、兄も消防になりたいと強く思ったと話してくれた。その兄は今、父と同じ職場に勤務している。すごく大変そうだが仕事にやりがいがあるらしく、「仕事に行きたくない。」などといった愚痴は聞いたことがない。そのように一途に「人を救いたい。」と思える兄を見ていると私の家族は立派で尊敬出来る人たちばかりだと思った。その立派な家族を持った私は幸せ者だ。大災害が起こった中でも生き残ったこの大切な命を無駄にしないようにしたい。

人を守れて、誰かに尊敬されるようなそんな立派な人になれるようにたくさんの経験を積み努力を重ねて、母のように芯のあり、父のように負けず嫌いで、兄のように素直な人になりたい。

4. これからをどうするか

阪神淡路大震災を私たちより後に生まれた後輩たちは経験していない。それは当たり前のことなのだが「経験をしていないから興味がない。」「関係がない。」と思われるものがとても怖い。

しかし、実際に小学校に出前授業をしにいくと小学生は阪神淡路大震災について知ってくれて、授業の感想を読むと「興味が持てた。」と言ってくれた。それは本当にすごいことだと思う。こうやって経験していない世代が興味を持ち次の世代へそのまた次の世代へと震災について興味をもってもらう連鎖を起こして阪神淡路大震災を風化させないようにしたい。

そのためにどうするのかをこれからの残り少ない環境防災科での授業で学んで実行していきたいと思っている。

5. 東日本大震災

2011年3月11日に東日本大震災が起こった。
その時私は母と一緒にテレビを見ていた。一緒に津波が来る映像も見ていた。「全然ちやう風景やし、津波とかなかったけどなんか思い出す。怖いわ。」と言っていた。

「神戸もこんな感じやったんかな。」そのような疑問が私の中で生まれた。

5月に東北に行くことが決まったときその疑問が解決出来ると思ったが実際に被災地に行ってみても神戸と同じようには見えなかった。

私は地震を経験はしたが覚えていない。しかし、なんとなくだが母が言った「地震を思い出す。」ということは被災者同士にしかわからない気持ちなのだということがわかった。

私もその気持ちに寄り添いたいと思うがそれは今はまだ無理なのかもしれない。

初めて被災地に行ったということもあり衝撃が強かった。石巻の方をバスで行ったときには涙が出た。自分がちっぽけだと思った。その前までボランティアで活動をして達成感があったがそれもすぐになくなった。「自分がした行動に意味はあったのか。」このことについて悩んだ時期もあった。

しかし、授業で「自分がした行動に意味があった。」ということが分かった。

2012年1月14日に東北の中学生が来た。ホームステイで私の家に東北の中学2年生の子が来てくれた。とても楽しかった。1月17日の追悼式にも参加してくれてそのことを東北に帰って発表すると言っていた。こういった被災地と被災地が繋がっていくことはとても大切なことだとこの時気付いた。

そして私はこれからも被災地を支援していきたいと強く思った。

進路も防災とは直接関わりがないかもしれないがボランティア団体に入り、心のケアをしていきたい。

環境防災科で学んだことはたくさんあったし私の考えを教えてくれた。

それは阪神淡路大震災があって、語り継ぎ活動があって私が興味を持てたからなのかもしれない。

私はこれからも阪神淡路大震災も東日本大震災も忘れずに後世に語り継ぎたいと思う。

「語り継ぐ」

伊藤 早穂

午前5時46分

地響きとともに大きく家が揺れた。家族は深い眠りについていた中での地震だった。母は揺れに気づき、私を抱えて揺れがおさまるのを静かに待った。2階では2人の兄が寝ていた。1人は揺れに気づいたのか1階まで降りてきたそうだ。揺れがおさまると、父は2階に上がり、家族の無事を確認した。

それから、家の中を見ると、食器が割れていた程度で大きな被害はなかったそうだ。

そのあと兄弟は何事もなかったようにまた眠りに入ったと言っていた。

それから・・・

ふとテレビをつけると、神戸の街がすごい被害になっていて、ただことじやないということがテレビを通してわかったそうだ。

ただ事じやないと思ったそうだが何もできなかつたと言っていた。

その後、壊れた食器を片づけいつも通りの生活を送っていた。

中学校に入って

中学校に入り毎年1月17日前後に「阪神・淡路大震災」メモリアル行事などを行っていたが、その当時にどんな被害があつてみんながどういうおもいだつたかは全く被害にあつてない私にはわからなかつた。

家族が大きな被害にあつたわけでもなければ避難所生活をしたわけでもない。

でもその震災は自分が住んでいる兵庫県に起こつてゐる。でもその震災のことを自分は何も知らない。きれいごとに聞こえるかもしれないが、ほんとうにこれでいいのかと疑問におもうこともあつた。

そんな中、中学2年になり震災学習で長田と鷹取に聞き取り学習に行く機会があつた。

震災前煙草屋をしていた方の話を聞いた。

あの当時は、何が起つたのか理解するまでに時間がかかつたと言われていた。

煙草屋は揺れで一瞬にしてつぶれたそうだ。商店街だったこともあり、泣き叫ぶ人もいれば自分のつぶれた家をただ茫然と見る人、必死に救助を求める人みんなが混乱していた。

煙草屋にあつたものはすべて使えなくなり、お店をしていた人はもう歳も歳だから再建するのは無理だろう諦めようと考えていたそうだが、商店街のみんながもう一度みんなで頑張ろうと立ち上がつたから自分もやり直そうと頑張れたといわれていた。

もともと活気があった商店街だったそうだが、その活気が戻るまでには大変苦労したといわれていた。

他にも散髪屋さんにもお話を聞かせてもらった。

地震が起こったときは、戦争が始まったのかと、とても驚いたと言われていた。周りはほとんど地震で倒壊してしまって、商店街の人と励まし合いながら頑張ってきたと言われていた。

震災が起こる前はもっと店が並んでいたけど、今は少しだけになってしまった。けど皆と協力したからこそ立ちあがることができた。

そんな話を聞かせていただいたことを今でも鮮明にではないが覚えている。

聞き取り学習以外にも震災で被害にあられた方の話がテーマとなったテレビなど総合学習を通して勉強した。

このころから、もっと震災についてしっかりと知りたいと思うようになった。

自分の生まれた年にそのようなおおきな地震が起こっていて、そのことを知らずに過ごすよりは、少しでも勉強したいと思った。これも何かの縁といういい方はおかしいかもしれないが、知るべきだと強く思うようになった。

聞いた話

震災当時に活動されていた方の話を今回聞かせていただいた。その時の話だ。

震災から半年がたって東加古川駅近くに仮設住宅が立ち並び始めた。

仮設住宅数は1千棟にもなり神戸からたくさん的人が避難してきたそうだ。

しかし仮設住宅に入るのも、長い時間かかり政府の対応が遅かった。中には、目の不自由な方もいたそうだが、その方も同じように並ばなければいけなかった。政府や市対応が疑われたそうだ。

仮設住宅にはたくさんのお年寄りが避難してきていた。その人が言っていたのは、みんな初めは、体育館などのプライバシーのない空間から仮設に移れて喜ぶが、お年寄りは日が経つにつれて過去を振り返り始めなぜ自分はここにいるのだろうと思い始めるそうだ。そこから1人でいることがさみしくなり、孤独感がうまれ、孤独死してしまうお年寄りが多くなると言われていた。

だから、仮設住宅に行ける日は行きお年寄りの方と話をしていたそうだ。また集会場のようなものもありそこで集まって歌をみんなで歌を歌ったり、話をしたりと工夫していたことと、比較的大きな被害を受けてない人が活動を続けていたこともありここで孤独死でなくなる方はいなかつたそうだ。

舞子では命の助かった人が自殺をしてしまうことが多かつたそうだ。

そこでそこのマンションの花壇にコスモスの花を咲かせると、自殺をする人はいなくなつたと言われていた。

他にも女人人がおにぎりを作り、男の人はバイクに乗り神戸まで配りに行つたこともあると言われていた。

中には神戸で大きな被害を受けているのに、「自分は励ましてもらう側じゃなくて、命があるんやから、励ます側や」と言って立ち上がった人もいて話をしてくださった人は、やつてよかつたと言われていた。

中には被害を受けながらも自分のできることを探して、電車に乗り被害の大きかったところに向かう人もいたそうだ。その人には子供がいて「どうしてお母さん、行っちゃうの」と初めは行ってほしくないと言っていた子が、最終的には「お母さん、今日も気をつけて行ってきてね」とおくってくれるようになったそうだ。

この話を聞いた時、子供をおいて行くのはお母さんも辛かったと思うし、こうやって人のために家族を後回しにしてまで動いてくれる人がいたからこそ、元気になることができた人がいるのではないかなと思った。

震災後、台風が2回来たそうだ。

その時仮設にいた人は、風で仮設が揺れそれが地震のようで怖いと言われていたそうだ。そこで行政に台風がおさまるまでもう一度学校などの体育館に避難したほうがいいのではないかと提案したそうだが、そうすればいいというだけで、何もしてくれなかつたそうだ。そこでみんなで車をだしあい避難したといつてた。その時人と人の助け合いは大事だと感じたと言っていた。

また行政を待っていたのでは、なかなか動いてくれないから自分たちでできることは、みんなで協力しなければいけないと言っていた。

それから4~5年が経った

4~5年経って仮設住宅はなくなつたそうだが、コスモスの花を咲かせた頃から「コスモスの会」という集まる会を年に1回つくり今でも活動しているといわれていた。

17年経つた今でも活動を続けることが大切なのだと改めて気づかされた。

17年経つた今でもそのような活動が続いていて、年に1回集まることでみんなで世間話をしながら、また震災当時のことを思い出すことができ、忘れないためにもこの活動はすごく意味のあるものだと思えた。

この話は環境防災科にはいったからこそ聞けた話だとおもっている。ここで学んでいるから、そのような話を聞けるのではなく、もっと身近に阪神・淡路大震災だったり他の災害だったりとみんなが聞けるそのような場が増えるといいと思った。

感想

今回改めて、阪神・淡路大震災のことを親や他の人から聞いて思ったのは、まだまだしらないことがたくさんあると思った。

今まででは、長田や鷹取のことしか聞いたことがなかったけど、身近に活動されている方もいて、被害のあまり大きくなかった外側の人がどうやって動くべきか考えるいい機会になれた。

本当に知らないことばかりで私が住んでいるところにたくさん仮設住宅ができてそこに神戸の人が避難してきていたということも知らなかつたし、おにぎりを作つてそれを分担して被害の大きかつたところに配りに行くということも知らなかつた。この考えは、1人ではできなかつたと思う。その方のように何かしたいと思う人がいたからこそできた活動だと思う。その方だけでなく本当にたくさん的人がこの時震災のことを考えて動かれていたのだと知ることができてよかつた。

こんなときだからこそみんなで協力することが大切なのだ。そしてこのことをこれから震災を知らない子たちに伝えていくことが重要だから、今回話せてよかつたと言つてくれた。私も今回この方の話を聞いて学ぶことはたくさんあつた。どうして仮設住宅に移つたお年寄りが孤独で亡くなるかについては1人でいることがさみしいことと、どうして自分がここにいるのかわからなくなってしまうことから孤独死につながることもあるということがわかつた。

それに17年経つた今でも今回のように知らないことがたくさんあったのだからまだまだ知らないことがやまほどあるはずだ。

でも17年経つて少しずつ震災のことが忘れられている。風化しないようにするためにもできることをしていきたい。そして震災を知らない次の世代の人たちに伝えていきたい。そのためには、まず自分がこの震災のことを忘れずこれからも学んでいきたい。今回は1人の方にしか聞けなかつたが、東加古川の仮設住宅で活動されていた方は、その人が知つている限りで100人ぐらいいると言われていたのでその方たちの話も聞ける機会があれば聞きたいと思った。

このような震災は起こつてほしくないけど、これかも必ず起つるはずだから、その時はこの方のように自分にできることをしたい。

私が思うのは震災の被害の大きかつた地域や、被害の大きかつた地域の周りでは地域を通して、避難訓練や防災訓練をしている。しかし私の地域ではそのような活動は行われていない。

被害の大きかつたところだけが教訓から備えるだけではなく、日本全国でこのような取組が行われて少しでも災害での被害が減るようになればいいなと改めて感じた。

東日本大震災

今東日本大震災が起こって、私の父はこの震災を経験した。

宮城県の若林地区のマンションを借りて暮らしていた。

その時東日本大震災が起きた。とても大きな揺れだったそうだ。この震災に母はテレビの速報で気づいた。父に電話をかけたがなかなかつながらなかつたそうだ。何度も何度もかけ続けてようやく電話が繋がり父の無事を確認した。

その後父は職場に向かったといっていた。

すると今度は、テレビから津波が住宅を襲っていく映像が流れた。どのチャンネルを見ても津波の映像ばかりで本当に母が心配そうな顔していたのを今でも覚えている。

父と連絡が繋がったのは震災から2日くらいのことだった。

職場は膝くらいまで浸かったそうだ。それから毎日仕事場の片付けに追われたと言っていた。店も開いていなくて、避難所と仕事場の往復の日々が続いた。しかし避難所にいっても帰る時間が遅くて食事は残っていなかったそうだ。

幸いにも住んでいたマンションはプロパンガスだったので、水も比較的すぐに使えるようになったので困らなかったと言っていた。

しかし食べ物がなくて、当分おにぎりと、お菓子で2ヶ月くらい過ごしたと言っていた。

父は子供用の商品を取り扱っている会社に勤めているので、店が開ける状態ではなかったから外で使えるものを販売したと言っていた。子供がいる親はおむつがなくて困っていたからこのように店を開けてくれるのはありがたいと言われていたそうだ。

父はこの言葉を聞いて、よし頑張ろう！と思って頑張れたそうだ。

父が東日本大震災を経験して、2ヶ月くらいまともな食事ができなかつたことや、他にもたくさん不便なことがあったという話を聞いて、今の生活は当たり前じゃなくてありがたいことだと改めて考えることができた。

震災から1年がたって少しつつテレビでも被災地の情報は少なくなつた。しかし今でも不便な暮らしをしている人はたくさんいるはずだ。だからこれからも東北のことに目をむけるようにしたい。そして忘れないように語り継いでいきたい。これがわたしにもできることの1つだ。

震災を語り継ぐ

岡野優希

当時僕は8ヶ月だった。なので、その時の記憶は全くない。

過去に母に震災の話を聞いたが、いまいち、その恐怖は伝わってこなかった。しかし、家族みんなに震災の話を聞くにつれて、臨場感やその時の苦労が伝わった。自分でいうのもなんだが、家族は生後間もない僕を必死に守ろうしてくれた。ちょっとした時間の流れや行動の違いで、家族は、また僕は今ここにいないかもしれない。今の僕があるのは家族のおかげだ。特に母には苦労を掛けている。2歳のころから女手一つで、育ててくれた。もっと感謝しなければいけないのだが僕はできていない。そう思いながら、母に震災のこと訪ねた。

何度も母の口からきくのは「プリンのように揺れた、家が崩れてしまう」という言葉だった。疑似体験で震度7を経験したが、とても立っていられず、飛ばされそうになった。それは、揺れるタイミングが分かっていて周りには何もなかったが、実際には、予告はなく、あたりには家具という凶器が存在する。さらに、ガス漏れや漏電により火事になるかもしれない。

僕の母の体験

母「家にトラックが突っ込んだのかと思った。」

息子は1994年5月20日に生まれた。阪神・淡路大震災が発生した当時は、生後8ヶ月程度だった。その頃は長田区の一軒家に、私、息子、私の母、私の弟の4人で暮らしていた。

いつもの夜は本棚のある1階で息子と寝ていた。だが、その日に限って弟が2階で寝ることをすすめた。断る理由もないで2階で寝た。5時30分ころにトイレに起きた時、かすかに揺れを感じた。地震かな?とは感じた。その数分後、激しい揺れが家を襲った。私はその揺れを今でも覚えている。揺れは長かった。家の中でガラスの割れる音が響く。「ああ、死んでしまう。」やっと何が起きているのかわかった。揺れの最中はずつと息子を抱きしめていた。

揺れが軽くなり生きていることを確かめた。周りを見渡そうとしたが、暗くて何も見えない。電気もつかない。懐中電灯の場所もわからない。「大丈夫！？」1階の弟に呼びかけた。返事がない何度も何度も呼んだ。すると返事があった。母も大丈夫だ。家族の無事は確認できた。とりあえず明るくなるのを車の中で待つことにした。

明るくなり家の中を確かめた。食器棚は倒れ、飛散している。電気もとまりガスも水もない。後でわかったことだが本来、寝るつもりだった部屋には仏壇が倒れていた。もしも1階で寝ていたら、下敷きになっていたかもしれない。外では地面が、ひび割れブロック塀が崩れていた。どこからかわからないが消防車のサイレンが聞こえた。焦げ臭い空気があたりを漂っていた。

私と母は、すぐ近くの高取台中学校に避難した。弟は家に空き巣対策で残った。中学校は多くの人であふれていた。長田の町を映像で見たときは映画かと思った。数日は家から持ってきたパンや水でしのいだ。オムツもミルクも家から。だが、じきにつきた。避難所のトイレは臭く体育館も臭かった。いるだけで気分を害した。教員の方はよくしてくれた。だが避難して数週間、ここを出ることを決め、名谷に住む姉の家に避難させてもらった。そこはとても居心地がよかった。日常がこんなにも幸せだと改めて感じた。

後で弟に聞いたが家の前のアパートは通電によって火災が起り、全焼した。揺れだけでなくその後にも被害はでていた。家に燃えうつらなくて本当によかったと思う。

私はこの震災をずっと忘れないだろう。忘れてはいけないと思っている。震災で家族を亡くさなかつたことがなにより。今の暮らしでとても満足できている。食事できること、お風呂に入れること、買い物ができること。それはなにげないこと。できなくなつて初めて価値がわかる。孫にもちやんと伝えたいと思う。

僕のお婆ちゃんの体験<母のお母さん>

お婆ちゃん「戦争を思い出した。」

私はお弁当を作るために5時過ぎには起きて作っていた。5時40分ころにはお弁当は完成した。使った食器を洗い、棚に直した直後だった。激しい揺れと共に食器が崩れ落ちた。

私は近くの机の下に隠れた。ゴゴゴという音と共に食器棚が倒れた。もし机の下に入らなければ、下敷きになっていただろう。割れた皿のかけらが飛び散り、私は足にけがをした。幸いたいしたけがではなく、すぐに治る程度の物だった。

揺れが収まった後家族が心配になった。同じ階にいた息子（母の弟）をまず心配した。私を呼ぶ声が聞こえる。無事ということが分かった。2階からは娘の声が聞こえた。娘と孫も無事のようだ。家族の無事が確認できたとき、安心して机から出ようとした。そのとき初めて足の痛みを感じた。あたりは暗く、とても歩きづらかった。息子が車の中に避難しようと言ったので、また揺れの感覚が残っている体でゆっくりと玄関へ向かった。車の中で明るくなるのを待った。ほんの数時間だが、とてもなく長く感じた。

明るくなったとき、地震のひどさを知った。家にはひびが入っていて、倒れるとと思った。戦争を思い出した。よくみんな生きていれたなあと感じた。娘と私は、近くの中学校に避難することにした。そこでは多くの人たちが、恐怖におびえていた。みんな状況が分かっていないように思えた。年寄りの私にとって、ここで生活するのは厳しいと思った。すぐに避難してきたので、洋服もなくになかった。まだ1月なので、とても寒く不安で、精神的に追い詰められていた。娘が家に一度戻って洋服や食料を持ってきてくれた。その間はとても孤独で、いつも以上にさみしかった。弟は空き巣対策に家に残っていてくれた。頼もしいがもし何かあったらと考えると、心配だった。

しばらく避難所で生活していたが、限界が来た。娘と相談して名谷のもう一人の娘（母の姉）の家に行った。長田とは違って、わりときれいだった。避難所で生活していたせいか、ここでの生活がとても幸せいなものに感じた。子供たちの顔を見ると生きていて良かったなという思いに駆られる。

あれから、17年がたつ。こうして生きていられることが私の幸せだ。たとえ家が崩れても、食べ物がなくても、寒くとも、家族がいれば私は生きていられる。そう改めて考えさせられた。

僕の叔父の体験＜母の弟＞

叔父「爆弾？」

僕は大きな揺れと共に目を覚ました。それはまるで爆弾が落ちたかのような揺れ。揺れは長くて激しかった。僕の部屋はあまりきれいではなくて、積み上げられた雑誌や物が一気に崩れ落ちた。揺れが収まり、部屋を出ようとしたが、足の踏み場がなくドアまでたど

り着くのに苦労した。ドアを開けようとしたが、なかなかあかなかつた。揺れでゆがんでしまったんだろう。なんとか家は崩れずに済んだが、しばらくの間部屋から出られなかつた。強引にドアをこじ開けて、リビングに行った。

2階からは姉（母）が僕を何度も呼ぶ。大丈夫だと一度返事をして、母（母の母）のもとへ行った。リビングでは皿のかけらが飛び散り、歩けそうになかった。スリッパをはいて母のもとへ向かった。ガラスをはけながら玄関まで誘導した。車のエンジンをかけ、家族みんなを避難させた。

朝が来て、私以外の家族は中学校に避難して、私は家に残つた。1人で部屋を片付けながら過ごした。まるで片付かず、とても苦労した。地震から3日後に家の近くのアパートが全焼するのを見た。後で知ったことだが、通電による火災らしい。偶然だがガスも電気も止まっていたので、二の舞になることはなかつた。すこしづつしたが、安心した。

仕事があったが、それどころではなく、家でも片づけを優先した。たまに中学校にいる家族に食料や水を持って行った。正直避難所より家のほうが快適ではないかと思った。だが、家が崩れるかもしれないと考えると、不安と恐怖がこみ上げてきた。

母の姉の体験

姉「何が起きたか理解できなかつた」

私は震災当時名谷に住んでいた。娘が3人いた。激しい揺れと娘たちの泣き声と共に、目を覚ました。家は団地で、崩れてしまつては命はないと思った。揺れが収まった後、とりあえず外に出て、周りを見渡した。同じようにあわてている住人の方が見えた。

外に出るのは危ないと思い家で待機することにした。幸い名谷では被害が少なく、食料等は困らなかつた。震災発生後、妹（僕の母）がこちらに避難してきたといふことなので、快く受け入れた。こういう時は賑やかに限る。

親戚に亡くなつた方はいなかつた。お義母さんは淡路に住んでいた。木造の家で古かつたので、不安だったがけがもなく、元気だということを知つた。今回の地震で火事が多かつたらしいが、家の近くでの火災はなかつた。しばらく、妹の家族と過ごした。その間は、避難所生活での苦労や、長田区の様子の話をきいた。テレビでも長田区の様子が映しださ

れていて、映画のよう感じた。

私にとって震災は、日常と向き合う機会であり、一人の大人として、母親として、責任や命の大切さを感じさせられる出来事となった。あれから、さらに男の子が生まれ、その子にも震災の話をすることがある。将来孫ができたら、その子たちにもぜひ話してもらいたいと思う。

感想

始めに書いたように、僕は2歳のころから女手一つで育ててもらっている。父は病気で亡くなつた。きっと、苦労しているし、ストレスもあつただろう。また僕はテニスを習つていた。金銭的にも苦労を掛けた。にもかかわらず、僕は口答えや、偉そうなことを言つてしまふ。震災から17年さまざまな苦労と迷惑をかけた。今の僕にできることはなんだろうか。環境防災科に入って、深く考えることが多くなつた。東北でのボランティアで実際に被災された方の話を聞くと、とても悲しそうで、こちらも悲しくなつてくる。母もあんな感じだったのか。そう思うと、親孝行しなければと考えるが、行動にうつせない。今の目標は、しっかり大学に受かり、安定した職に就職し、金銭的な不安から解消することと、毎日苦労しているので、旅行に連れて行くことだ。言葉でありがとうなどの感謝の気持ちを伝えるのは、照れくさくて、ちゃんと言ったことはないけれど、心の中で思つてゐる。口答えした後も、罪悪感があり、謝ろうと思うが、謝れない。そんな今の自分が、恥ずかしく思う。新聞に載つたとき、僕のお婆ちゃんは、泣いて喜んでくれた。お婆ちゃんは小さいころに、遊びに連れて行ってくれたり、かわいがってくれた。そのお婆ちゃんも年を取るにつれて、口数が減り、けんかも増えた。お婆ちゃんにも恩返しができていない。大学に入ってバイトをして、お金を稼いで、母と同じように旅行に連れて行ってあげたり、マッサージチェアを買つたりしてあげたいと思う。将来は、人の命や安全を守る警察官になりたいと思っている。だが、その前に家族を大切に思い、僕が支え、危険から守れるような存在になる。それが、目標であり、使命であると僕は考える。結婚して、子供が生まれたら、阪神淡路大震災や東日本大震災のことを伝えて、命の大切さや、防災に対する興味を持ってもらいたい。

語り継ぐ

北川 愛里沙

1、家族の 1995.1.17

(1) 祖父

「うわ～助けてくれ～!!!」

何が起きたかわからなくて、咄嗟に布団を頭までかぶり、叫んだ。そうすることしかできなかった。どれだけ長いことそうしていただろうか。やっと揺れが収まると次に心配なのは妻だ。いつも2階で寝ている妻のもとへ急いだ。妻のベッドの頭側には、タンスを置いている。大丈夫だろうか。呼んでみると返事が聞こえた。どうやらけがもしていないらしい。

そして簡単に家中を掃除した。その時の家の様子は、食器棚の中の食器が飛び出していたり、シャンデリアが落ちていたり、で床はガラスの破片でいっぱいだった。今思うと、足に一つもけがをしなかったのはとても運がよかったのだろう。家の中はとにかく足元に注意していればよかった。家の外はどうだろうか。見てみると、家の隣にあるブロック塀が倒れていた。家の基礎にはヒビが入り、瓦がなくなっていた。何が起きたか明確なことは全く分からないが、何かとてつもなく大変なことが起きたのだと感じた。

9時ごろになると妻は銀行に出かけて行った。自分はブルーシートが必要になるだろうと考え買いに出かけたが、どこに行っても、売り切れか個数制限があって、必要な分だけそろえることが出来なかった。その日は孫が退院する日だったので、一旦家に帰り、妻と一緒に息子の家に行った。息子の家でも、本棚の本が全て落ちていたり、水槽の水がこぼれて絨毯がびちゃびちゃになっていたり、片付けるだけで大変だった。簡単に掃除をしてから孫を迎えに行った。

細い道は必ず混んでいるか、消防車のホースがあるため使えないと考え、大きい道路を使って病院まで行った。それでも病院につくまでには相当な時間がかかった。須磨海浜公園から板宿にかけては、家はつぶれていて、所々から黒い煙が上がっていたため、火事だと分かった。その火を消すために、川から水を汲んでいたが、川の水もなくなってしまい、そうなるまで火事が大きいのだと思った。

やっと病院に着いたが、病院内もぐちゃぐちゃで、一つの部屋にマットレスを敷き患者さん全員を集めていた。おばさんはみんなの顔を見ると泣き始めた。それほど心細かったのだろう。お礼にお菓子の袋詰めを看護師さんに渡すと、みんなに食べてもらうことができると喜んでくれた。病院には、哺乳瓶を求めてやつ

てくる人も多かったが、一回ごとに消毒していけるような水はない。簡単な手洗いでもいいならと、みんなに分けていた。その後、孫はおばさんの実家がある名谷で過ごすことになった。

その日のうちに、もう一人のほうの息子が家族5人を連れてうちにやってきた。男手がひとつ加わっただけで、出来る作業の範囲が広がり、屋根の上にブルーシートもかぶせることができた。ブルーシートの足りない分は、自分のつてを使って手に入れることができた。今思うと、その日のうちに走り回っていたから、2日後くらいに降った雨にも対応できたのだろう。雨漏りは多少仕方ない部分もあるが、そのような被害は最小限に食い止めることが出来たように思う。孫3人一気に来てくれて嬉しい気持ちもあったが、電気・水・ガスなどライフラインがまったく整っていないため、どれくらいの生活をおくらせることができるかさえ分からぬ。とりあえず食料はたくさんいることだけはわかったが、それは妻に任せることになった。

(2) 祖母

「あかん!! タンスが倒れる!!」

私は何とかベッドに座って頭から布団をかぶり、頭上のタンスから身を守った。揺れが収まる

と、少ししてから一階にいる夫が声をかけに来てくれた。2階は本棚の本がすべてといつていいほど床に散乱していて足の踏み場もなかった。1階はもっとひどい状況で、食器がすべて床に落ちてしまっている。気に入っているものや思い出深いものまですべて割れてしまった。すごく残念に思った。しかし、このままにしていても足を切ってしまうかもしれないし、邪魔になるだけだ。とりあえず掃き掃除から始めた。

家の被害の様子から見て、「これからはお金が必要になる」そう考えた私は、銀行が開く9時に合わせて家を出た。銀行にはすでに何人もの列ができていた。係りの人がカギを開けてくれるまで待っていた。とても寒かった。こういった状況だからかわからないが、お金を少ししか引き出すことができなかつた。

そのまま近所のスーパーに行き、買い物をしたが、そこにもすでに10人以上の人があんでいた。並んでいるときに余震がおこった。スーパーがあるビルの上のはうは、ガラスが割れているらしく、ガラスの破片が落ちてきた。余震のたびに並んでいる列がぐちゃぐちゃになるが、余震が収まると、その列がまたもと通りに戻っていく。誰も順番を抜かす人はいなかつた。

スーパーでも、1人が買える数が決まっていて、その時は5個しか買うことができなかつた。どんなものを買っても5個までなので中身の数が多いものが一番人気ですぐ売り切れていた。

家に帰ると、夫と一緒に孫を迎えに行った。

それからもう一人のほうの家族5人が家に来た。上の子二人はもうオムツも取れて、それなりのものを食べることができるようになっていたが、一番下の子は、おむつもつけていたし、歯の生え具合によってはまだ限られたものしか食べることができないだろう。この緊急事態にそういうのが手に入れられるのか、さらに、水、ガスが使えないでの、お風呂にいつ入ることができるのが心配だった。

それからは食事の用意は私が中心となって用意するようになった。今までではすべて二人分の用意で済んでいたものが、すべて7人分用意しなければならなくなつた。どれくらいの量かわからなかつたが、スーパーに行っても次に何がどれくらい入荷するのかわからない。とりあえず、量が入っているものを選んで買った。その買った中からは、名谷のほうの孫にも持つていったりもした。

(3) 母

はっと目が覚めた。何が起きているのかまったくわからない。咄嗟にわが子に覆いかぶさつた。どれくらいの間そうしていただろうか。ずいぶん長い時間が過ぎたように思う。しかし、窓の外はまだ薄暗くそれほど時間は経っていないことが分かつた。わが子は3人とも寝ていた。私は夫と話をし、台所とリビングを見て、やっと今起きたのは地震だったと分かつた。食器棚が倒れ、床の上で粉々になっている。私たちは簡単に片づけた。しかしそれから何をしていいかわからなかつた。最初に一番上の子が起きてきた。幸いなことに食料は少し買い置きがあったため、それを食べさせた。次に真ん中の子、最後に一番下の子が目を覚ました。一番下の子はまだ0才だったが3人目ということもあり、何を食べさせてもいいのか知識は身についている。わが子は全員好き嫌いを言うことなく、その場にあつたものを食べててくれた。

それから、何度かの余震を体験した。これからも続くと思うと、子どもが3人もいることもあり心細くなつたので、夫の実家に行くことになった。夫の実家も大変な被害で、やはり食器棚から食器はほとんど床に落ちていた。家自体に基礎にヒビが入つていて、瓦がなかつたりした。

ブルーシートが必要だということで、買いに出かけたが、どこにも売られていない。というより売り切れている。ブルーシートはお義父さんが用意してくれた。ほかの買い物は明石のスーパーまでバイクで買いに行った。

加古川のほうにお風呂に入りに行ったこともある。コインランドリーをフルに活用したことを覚えている。さらに明石のほうは被害が少ないようで、電気もガスも水道も通っていた。場所的にはほんの少ししか違わないのに、一方は上着をめいいっぱい着込んで寒さをしのぎ、代わり映えのしない冷たい食べ物を食べて生活しているのに対し、一方では暖房を利かせた部屋でホカホカのご飯を頬張っている。この事実と直面し、なんだか虚しくなってきた。でも、無気力になったところで状況は良くなるわけではない。行政や自治体が何も手助けをしてくれないのなら、自分たちのことは自分たちで何とかしなければならない。

そんな生活をおくっていると、少ししてから、近所で水が出る水道があると聞いた。私はすぐにタンクを持っていき水をもらった。

そのまま神戸で生活をしてもよかつたのだが、今度は私の実家である北海道から連絡が入った。子ども3人を連れていったん帰ってきたらどうかという話だった。私はその話に甘えることにした。神戸の家の復旧をするにしても、まだ小さい3人がいてもなんの役にも立たないだけでなく、身動きが取れない。その時ちょうど北海道では札幌雪祭りが行われていた。北海道で震災の話をしたり、テレビのニュースなどで神戸のようすが映っていたりすると、自分だけこんなところでのほほんと生活をおくついていいのか、と考えた時もあったが、子供がいるから仕方がないと思った。それから北海道で一ヶ月生活をした。その後神戸に帰ってきた。ライフラインも何とか復旧していた。家の片づけは夫がなんとかしてくれたため、すぐに普通の生活に戻ることができた。

2、場所による違い

(1)ひいおばあちゃんの家（祖父語り）

震災から少しして自分のお母さんのところにも行ってみた。かなり古い家だから絶対に家は潰れているだろうと思っていた。案の定、道はがたがただった。だが途中から道も普通で、山のほうに行くにつれて、街並みも普通になつていた。だからお母さんが住んでいた家もまだ残っていて、被害は垂水のほうがひどかった。東からは自衛隊が来てくれていたが、それも須磨までだったそんなだから、食料は一切届いておらず、おにぎりを持っていったらすごく喜んでくれた。

(2) 明石・加古川・姫路方面(祖母語り)

孫がおむつをしていたため、お風呂に入れてあげたかった。その念願がかない、最初にお風呂に入ったのは家の近所にできた仮設だった。私と、息子の嫁で3人の子どもを順番にお風呂に入れていった。しかしそのお風呂を使ったのは、1回だけで、次からは明石や姫路・加古川の温泉に行った。コインランドリーがあれば、そこでたまっている洗濯物を一気に洗濯した。姫路・加古川方面は震災の被害が全くなくて、どこの町も電気がついていて普通に賑わっていて、明るかった。しかし、明石・舞子まで戻ってくると、真っ暗で、そこでギャップを感じた。

さらに、明石には検問があり、それより東に行くためにはどんなに家がすぐそこでも、遠回りをしなければいけなかった。垂水は特に何の援助も受けてないまま、自分たちだけで頑張ってきたのに、そういう検問や規制だけはちゃっかりしている。すごく腹が立った。規則は規則で仕方がなかったかも知れないが、須磨などにも検問を増やしたり、免許証で住所を確認するなど、臨機応変な対応をしてほしかった。

3、水運びの日々(祖父語り)

震災から少ししてから、消防署で水がもらえるという噂を聞いた。息子と消防署に行くと、近く

にある公園まで行ってくださいと言われた。その公園に行くと聞いた噂通り、水をもらうこと

ができた。1週間くらいはその公園に通い詰めて、水を得ていた。そうしていると、近くの市営

住宅で水が出た。という話を聞いた。その市営住宅に行ってみると、本当に水は出ているようだ

った。しかし、水を出すための栓がなくて、水をもらうことができなかつた。その時息子は、水

道局に務めていたため、その栓は持っていたが、つけたままにしていると、市営住宅の人にとっては

れてしまって、やっぱり水をもらうことはできなかつた。市営住宅の人の言い分は「自分たちが

水道代を払わなければいけないのだから譲れない。」ということだった。水道局に文句を言った

が、状況は変わらなかつたため、家の水が出るまでは、最初に通い詰めていた公園まで行って水

をもらっていた。確かに市営住宅の水道代を建て替えることはできないが、ライフラインがなく
て困っているのはみんな同じ、少しくらい譲ってくれてもいいだろうと、市営住宅の人たちの考
えが理解できなかった。

4. 感想

私は今まで、震災の話を聞いて、まとめてきたことがありました。でも、その時の話は、ご

くごく一部だったんだと、今回話をきいて思いました。震災があってから 1 か月もの間北海道で

過ごしていたことや、買い物は明石まで行っていたこと、お風呂に入るために姫路・加古川まで

行っていたことなど初めて知りました。さらに今回は、祖父や、祖母にも話をきくことができて、

今まで知らなかつたことをたくさん知ることができました。

震災の話を聞いたときは、助け合っていけたなどとたくさん聞いたが、本当はやつぱり醜い部

部分もたくさんあったんだと知りました。

「震災と自分」

北崎 翔太

今から約 17 年前の 1 月 17 日に阪神淡路大震災は起こった。そのとき僕はまだ生まれていなくて、震災当日から 9 日後に生まれた。だから僕は震災を全く知らない。

1. 震災前

これは父さんから聞いた話なのだが、神戸で震災が起こる前に東北などの各地でいくつか小さい地震が起こっていたらしい。それがたぶん震災から 1 か月前の間だと思う。短い間に立て続けに地震が起こっていたので、いつかはわからないけれど、もしかしたら近いうちに大きな地震が日本にくるだろうと予感していたらしい。それがまさか神戸で起こるとは思ってもみなかったそうだ。これを聞いたときは絶対嘘だと思った。そんなことを僕の父さんが地震などの専門家でもないのにわかるわけがない、今になってから気が付いたものだと思った。しかし、父さんは「俺はわかってたんや。」というばかりで本当か嘘かはわからない。でもその予想が当たって本当に起こってしまったのだからすごいなと思った。出来れば起こってほしくはなかったのだが。

2. 震災当日

(1) 午前 5 時 46 分

1 月 17 日午前 5 時 46 分、すごい地鳴りとともに地震は起こった。地震が起こったとき、父さんは飛び起きた。地震のことを「ゴジラが町を襲ってきた！」と思ったらしい。そう感じるくらいとても激しい揺れだと父さんは言っていた。ゴゴゴゴゴゴ！！という大きな地鳴りから、ドンッ！と突き上げてくるような縦揺れ、そしてその後にくるグラグラグラ！という大きな横揺れ。擬音語ばかりでよくわからないと思うが、とても言葉では表現できないくらいの揺れだったのがうかがえる。今までに体験をしたことがないもので起こった瞬間何が何だかわからなかったらしい。地震を体験できる起震車などが最近ではあるが、そういうものと比ではないくらいにとにかくすごい揺れだったらしい。僕も実際に東日本で震度 5 強くらいの地震を体験したけど、阪神淡路大震災は震度 7 というからどんな揺れか想像つかない。震度 5 強でもとても怖かったのにそれ以上となると嫌になる。絶対に体験したくないなと思った。この地震が起こったとき父さんは母さんとお腹の中にいる僕を守るために布団を被せて覆いかぶさった。母さんと僕を守るのに必死だった。

(2) 震災直後

地震がおさまり家の中を見渡すと、グチャグチャだったという。棚は倒れていたり、食器は割れたりして散乱したりしていてひどかったそうだ。だが、住んでいた団地はなんとか地震をもちこたえた。その頃は家の中のものも少なく、寝室にも箪笥などおいてなかつたので、こういった状況でも両親は無事だった。もし箪笥などが寝室に置いてあつたりしていたら命はなかったかもしれない。幸運だった。耐震や家具固定もしていなかつたらしいので本当に危なかったと思う。

その時は電気が通っていて地震は起つたと認識していたけれど、ベランダから外を見ても家が倒れている様子もなく、それほど甚大な地震とは思わなかつたらしい。目につくような被害がなかつたからだ。だが、その被害に気付き始めたのは昼ごろだった。

昼ごろにご飯の用意をしようと、とりあえず水道の蛇口をひねると水が出てこなかつた。ガスを使おうとしても使えない。この頃によく地震の被害に気付いたそうだ。まさかこんなことが起つるとは思わなかつたと言う。そりやそうだと思った。周りの建物も倒れたりしていないし、目にあたるような外傷もなかつたそうだ。別にたいして被害は出でていないだろうと思っていていきなり、ガス・水道が使えなくなるのは誰でも驚くだろう。一気に何もできなくなってしまった。その後、家を出た。近所の人もみんな外に出ていて、みんな今がどのような状況なのかあまり理解していない状況だつたらしい。でも、近所の人たちは母さんのほうを見るなり自分たちが被災しているにも関わらず身重な母さんに寒い中体を冷やすのはおなかの中にいる赤ちゃんにも悪いと言って毛布を貸してくれたりした。僕は、震災の時に近所の人たちに助けられていたなんて今まで全然知らなかつた。助けられるのを求めるわけではないけど、周りに助けてくれるような温かい人たちがいてよかつた。こういった震災や何かが起つた時こそ助けあうことが大事だと思ったし、人の温かさをあらためて感じた。近隣の人との普段からの付き合いがこういった助け合いを実現させるのではないかと思った。そして災害時ではそういった付き合いが一番効力を發揮するのではないかと思った。

家を出た時に一番驚いたことが、雪と一緒に灰が降つてのことらしい。長田などで起つた火災の灰が風に流れ僕の住んでいる垂水まで来つたのだった。その日風が強かつたのかは知らないけれど、震災から数時間しかたっていないのにそう言った灰が流れてくるのは、それだけ大きな火災が起きていたということだったに違いない。でも、そのときは火災などの情報が全く入つてこなかつたのでなぜ灰が降つてきたのかわからなかつたらしい。その灰が長田の火災によるものだったと知るのはそれから後のことだったそうだ。

3. 震災後

地震の後、とても家では安全に過ごせるような状況ではなかった（グチャグチャだった）ので、被害の少なかった美山台に住んでいる祖母の家に転がり込んだ。僕の生まれる予定期日が2月だったのでそれまで住まわせてもらつたらしい。だがそこもガス・水道が使えなくて電気だけが使える状況だった。けれど、そこに住めるだけでも幸運だった。普通家に住めなかつたら、指定されている避難所に行ってそこでライフラインが復旧するまでとか、家の中が片付くまで過ごすしかないと思うのに、そういったところに行かず、雨風がしのげるところで生活できるのはなかなかないと思う。しかし数日後、母さんの容態が変わり、ずっと通っていた旧国立病院に行くことになった。旧国立病院が震災に耐え、機能していく幸運だった。

（1）病院で

病院では怪我人などいろいろな人でごった返しており、ほとんど先生や看護士・看護婦さんが足りていなかつたらしい。他の病院も同じように被災していて機能している病院が少なかつたため、灘のほうからきている人もいたそうだ。そういう中だったので僕が生まれる時まで手当ては受けていたが、母さんはほつたらかしの状態だった。病院でも満足に食事がとれるわけではなく、全員に食べ物が行き届かない状況が続いた。物資が満足に届いていない状況だったのか1回の食事でも食パン1枚とかおにぎり1個とかそういう感じだつたらしい。食パン1枚でもこの時では貴重だった。だがここでも身重な母さんを遣い、見知らぬ人たちが「大丈夫？」などと声をかけてくださったり、毛布を貸してくれたりした。食事でも、少ない食べ物を妊婦だから食べなあかんと言わんばかりにわけてくれたりしてここでも人の心の温かさに助けられたそうだ。お風呂でも、須磨のほうでは早く水道などが復旧していたらしく、普通では並ばないといけないのに優先的にお風呂に入らせてもらつたりした。妊婦でなかつたら他の人と同様にどこかに食べ物など買いに行つたり、水や食料をもらうために列にならんだり、風呂に入るために遠いところまで足を運んだりしていたけど、それらをほとんど全部他の人たちがやってくれて、いろいろな人に助けられながら過ごしていた。自分が生まれるまでにこんなに助けられているとは思わなかつた。

地震の時に生れたとは聞いていたけれど、普通に病院に行って、そんなに不自由もなく普通に生れたのだと思っていた。今となってはそういう考えはとても甘かったなと思った。そんなことがあるわけないと後に思った。どこにいても、こういう状況だからかもしれないけども、人と人は助けあえるものであったのだと感じた。声をかけてくれた人も毛布を貸してくれた人もなにか事情があつて病院に来ているのに、自分のことでいっぱい

だろうに、他人を気遣えるのはすごいと思った。そういった気遣いでも人は元気づけられたり、励まされたりするだろう。災害は嫌なことや苦しいこと、悲しいことばかりを生み出すだけではなく、支えあいや助け合い、人の温かさに気付かしてもらえるものだと思った。そして、僕は周りの人たちに助けられながら1月26日に生まれた。予定日よりも約1カ月は早い誕生だった。祖母は被災して亡くなった人たちの生まれ変わりだといっていた。僕もそれを聞いた時、そうなれたらいいなと思った。

4. その後

僕が生まれてからは土山にいる曾祖母の家に住まわせてもらった。そこは震災の被害も少なく、電気・水道・ガスがすべて通っていて、赤ちゃんだった僕にしてはとても環境のいい場所だった。身の周りの衛生状況がよくないと免疫力のない赤ちゃんが危ないので、ここでもまた恵まれていた。こんな状況で周りの環境が整っているのはとても珍しいと思う。こんな状況でなかつたらきっと両親もとても大変だったのだろうなと思う。もしこんなに恵まれていなかつたらどうなっていたのだろう。もっと苦労していたのだろうか。

父さんはこの土山から仕事を行っていた。土木関係の仕事だったので、その当時は毎日毎日震災で出たがれきや廃棄物をダンプカーに乗せて廃棄場に捨てに行っていた。捨てに行くといつてもたくさん的人が同じことをするので、朝早くにがれきや廃棄物を取りに行き、廃棄場に運んで行った。しかし道はほぼそういった車の渋滞で1日1回しか廃棄場に行けなかつたらしく、夜遅くに帰ってくることが多かつたらしい。運んでいるときも周りは震災で崩れているものばかりだったので気持ち的にもとてもしんどかっただろう。話を聞いた時、震災後の神戸はどんな状況かをたくさん話してくれた。有名な高速道路が倒れているところのこと、建物が傾いたり倒れたりしていること、住宅を取り壊している時の様子など。実際に父さんも住宅の取り壊しもしていたのでそういった状況も詳しく聞くことができた。どれも全然今の神戸からは想像できなかった。でも自分にとって新しい震災の状況を聞くことができてよかったです。それに神戸の町の復旧・復興に自分の父さんが少しでも関係して頑張ってくれていたことにうれしく思った。

休みの日には自宅に帰って1人で片付けをしてくれた。母さんも手伝おうかと言ったらしいが、僕のことがあるのと、震災のことで心に傷を負うかもしれない、体に悪いっていう父さんの考えがあつたらしく手伝わせてもらえないかった。少し心配症ではないかとは思ったけど父さんらしかった。でも、1人で家のことや仕事をやってくれてとても大変だろうに、そういうことをしてくれてとても家族思いの父さんだと思った。

それから3カ月が過ぎ、もとの家に戻ることができた。電気・水道・ガスのライフライ

ンがすべて復旧したからだ。家の中は先ほども言った通り父さんが片付けていてくれたのでそこに住むことができた。それからは震災の影響もあまりなく過ごしていった。震災からもとの生活に戻るまであまり苦労もせず生活できたのは奇跡だった。

5. 最後に

こういったことを両親から聞いて、自分のことを改めて知ることができたと思う。今まで自分の生まれたころがどのような状況かわからなかつたので、こういう機会があつてよかったです。自分がどれだけ助けられて生まれてきたか、どれだけ周りの環境が良かったか、どれだけ運がよかつたか、何回も言うけれど本当に恵まれている。もっとほかの人が体験したのと同じくらい苦労すべきではなかつたのかなと話を聞いていて思ったくらいだ。今までこういった体験談を聞くことがあつたけれど、どれも苦労話が多かつた。苦労話で片付けるのも良くないけれど、それと比べるとこういうので語り継ぐは成り立っているのかなと思った。被災しているから苦労はしているけど、そう言ったことと比べるとたいして苦労もしていないし、避難所生活も1日もしていない。長い時間水や食料の為に長蛇の列に並ぶこともあまりなかつたし、住むところもあった。これも全部僕の両親が体験していくことで僕が偉そうに言えないけれど、こんな話を聞いても誰も共感とかそのような気持ちになるのかなと思った。でも、どんな話であつてもそれが本当の話なのだからしようがないだろう。誰もが同じような体験をしているとは限らない、その人その人の体験があるのだと開き直った。このように、自分に近い体験を聞くことによってまたいろいろな考え方もできた。1つの内容だけではなくて、いろいろな人の体験を聞くことで自分の幅が広がる感じがする。今まで阪神淡路震災のことについて写真や、話を聞いて受け答えをしていたのだが、今回でバリエーションが増えた気がした。この「語り継ぐ」の機会でいろいろなものを得られたと思うのでよかったです。

語る大切さ

木村 征秀

1、はじめに

僕が生まれた場所は、歴史のある古い建物がたくさんあって、美しい街並みが広がる神戸だった。生まれた日は震災の5か月前、もちろん震災を経験したことや、震災を経験する前のことなんか全然記憶にない。17年たった今、震災の話を父親や母親から改めて詳しく聞いた。

震災の朝、母親は5時前に起きて、生まれてから5か月しか経っていない僕の世話をしていた。父親は神戸市の兵庫区にある仕事場に向かうために、支度をしていた。僕の兄はまだ眠っていた。いつもと変わらない日常だったという。そして、人生を大きく変える出来事が刻々と迫ってくる。

2、震災の朝

1995年1月17日午前5時46分ごろ、母親は小さな揺れを感じていた。父親は少し揺れに対して鈍かったので全く気付かなかった。母親が小さな揺れを感じてしばらくすると、大きな縦揺れに襲われた。食器棚に置かれていた食器は割れ、衣服を入れる大きなたんすが倒れた。僕は小さなベッドで寝ていて、大きな揺れが来た時に、もう一つの小さなたんすは、僕が寝ていたベッドの方向へ倒れてきた。小さなたんすに挟まれたら大人でもけがをするのに、赤ちゃんが挟まれたら即死だ。母親は小さなたんすをどかして、僕の安否を確認した。なんと僕は無傷だった。僕を覆った布団のおかげでクッション代わりとなつて僕を守ってくれたという。僕の安否の確認が終わると兄が起きてきた。兄も無事だった。父親も無事だった。

母親は祖母に連絡を取ろうと電話を取ったがつながらない。電気はつかないまま停電が続いていた。水道も止まったままだった。ガスもつかない。父親は外の様子を見に行つた。僕が住んでいた場所は神戸市中央区のポートアイランド、海に浮かぶ人工的に作られた町である。外の様子は地面がすべて水たまりで覆われていたという。父親が車のラジオをつけると「神戸市で巨大な地震が発生」といった声ばかりだ。父親は仕事に向かおうとしたが心配になった母親が引き留めた。しかし仕事場のことを心配していた父親は「様子だけ見に行ってくる」といって仕事場に向かつた。

大きな揺れがあつてから1時間がたつた。近所の人が「大丈夫ですか」とマンションの1件1件を訪ねている。僕の家にも近所の人が訪ねてきた。後から聞くと僕たちが住んで

いたマンションの住人は全員無事だったという。マンションの住人の確認ができた後、電気が回復して何とか親戚と連絡を取ることに成功した。しかし木村家の祖母には電話が繋がらなかった。だから母親は支度をして神戸市灘区にある木村家の祖母の家に向かおうとした。しかし、交通機関はすべてストップしていた。まだ小さかった兄と僕を留守番させておくのも無理であったので、3人で祖母の家に行くことになった。

灘区へ行くためには神戸とポートアイランドをつなげた大きな橋を通って行かないといけなかった。母親はとても怖かったと言っていた。大きな橋を渡り終わり、三宮を通って祖母の家まで行くつもりだった。しかし、瓦礫によって歩ける道がなかったので遠回りをして祖母の家に向かった。三宮の街並みは荒れ果てていたと母親は言っていた。普通なら2時間あればいける距離のところを4時間もかかった。祖母の家が見えたとき、様子がおかしいと母親は言っていた。

3、神戸市灘区の様子

祖母の家まで行くと、家の1階部分がつぶれていて2階部分しか残っていない状況だった。母親はこのとき焦りを感じていた。家の様子を見ても誰の声もしてこない。母親は何度も何度も祖母や家に住んでいた祖父、叔父と叔母、従弟の安否を確かめ続けていた。すると、家からではなく、近所の公園から声がしたのである。母親はすぐに祖母の家の近くのある公園まで走っていった。公園には祖母の家の地域の人であふれかえっていたそうだ。母親はすぐに祖母たちの安否を確認しに行った。

探すこと2分、たき火の火の周りに祖母たちの姿があった。母親は喜んだ。母親はなぜここにいるのか祖母たちに聞いてみると、祖母の話は次のような内容だった。

震災直後、揺れによって1階部分が崩れ落ちて2階部分がきれいに残ったと言ったそうだ。幸い1階部分が崩れ落ちたその家の造りは、1階部分が自営業の事務所となっていて、2階部分が住居となっていたため、全員の命が救われることになった。もしも、1階部分で寝ていたら確実に命は奪われていたに違いない。震災から10分後、家の中にいる全員の安否の確認ができる外の様子を確認しに行こうとして階段を降りようとするといつもある階段がなくなっていた。1階部分が崩れ落ちていることにその時気が付いた。祖母たちは家から脱出しようと試みたが脱出するための出口がどこにも見つからなかった。ベランダから降りようとしても1階部分が崩れ落ちたために生じた瓦礫の山で着地する足場を埋め尽くしていた。「救助を待って家で待機しておいたほうがいいと思う」と叔母は言ったらしいが、叔父は「今、救助を待っていたところで誰も助けてはくれない。自分たちで何とかしないといけない」と反論した。全員で出口を探していると「3階部分からもしかしたら降りられるかもしれない」と祖父は言った。実は家は3階建てであり、3階部分のベランダから2階部分の屋根に上ることができ、外に出ることができるようになっていた。祖父

は初めに3階部分のベランダから2階部分の屋根に上り、外へ脱出した。それに続いて、祖母、叔母、叔父と全員外へ脱出した。地震が発生してから全員が脱出するまでに約2時間かかったらしい。近所の人も自力で脱出していた人がほとんどを占めていた。祖母の話を僕は母親から聞いたとき、人は大きな災害に遭うと余裕のある人以外は、自分たちのことや家族のことしか考えなくなるものなのだと思った。でも、仕方がないと思った。

祖母が話し終わると、近所の人が「助けてくれ。手伝ってほしい」などと声を発したらしい。しかし、誰もその声に反応する者はいなかつたらしい。でもその中で、僕の祖父と叔父は反応して、近所の人の救助に向かったそうだ。その祖父と叔父の姿を見た人々は共に救助に向かった。この話を母親から聞いて僕はとっても嬉しかった。祖父と叔父の行動に深く感心した。災害に遭ったとしても、助けたい気持ちがほんの少しあれば人の身体って、救助に向かうために勝手に動き出すものであると思った。

祖父と叔父は近所の救助に向かってから約2時間後、公園に帰ってきた。救助された人は軽いけがで済んだ。しかし、残念ながら亡くなった人もいたようだ。やはり救助の知識がない人だけで救助をしていても限界があり、素人だけでは助からない命もあるのだと僕は実感した。

3、震災の夕方

震災当日の夕方、季節は冬であったために日が暮れるのが早い。もちろん寒い。公園に集まっていた人はたき火の周りに集まり持参してきた毛布で寒さをしのいだそうだ。木造の建物もちろん食べるのも飲むのも手元にほとんどない状態であったそうだ。もちろん震災当日だったため、自衛隊や被災地ボランティアなどの支援もなかったそうだ。祖母の家の水道、ガス、電気、まとめてライフラインと呼ばれるものはすべて全滅だったそうだ。その中で何とか僕たちのような子供に何か与えないといけなかつたので母親と叔母と祖母はコンビニまで食料を買いに行つたらしいが、近くのコンビニが地震によってつぶれていたために遠くにあるコンビニまで食料を買いに行き僕たちに買った食べ物を食べさせてくれた。そして、長いようで短かった1月17日は終わった。

次の日、祖母は親戚に電波が生きていた公衆電話で会話をして、少しの間、祖母たちは親戚の家で暮らすことになった。祖母の親戚は電話で会話してから3時間ぐらいかけて公園の前まで迎えに来てくれたそうだ。母親は迎えの車が来る前に、祖母と一緒に荷物の整理を行つて母親も帰るために支度を始めた。

4、地域格差

家に帰った後、甚大な被害が出た長田区に住んでいる親戚に電話をして、安否を確認することができた。長田区では地域によっては被害が少なかったところもあり、テレビなどで放送されていた長田区の様子はほとんど壊滅状態の地域を撮影しているということだった。

幸い被害が少なかった長田区の地域に親戚は住んでいたので無事であった。ライフラインも一日で復活したそうだ。しかし、食料を調達するためには、近くの市場に行かないといけなかった。いつも親戚が利用していた市場は、しばらくの間、店を開くことはなかつた。震災があつてから一週間、避難所から出る食料を共有してもらったり、近所の人と食料を共有したりしていたそうだ。

西区に住んでいる親戚も揺れそのものが小さく、普通に自宅で生活できるほどだったそうだ。買い物も自由にすることができた。西区にいる親戚は震災により被害を受けた三宮、神戸、長田などの様子をテレビで見て涙ぐんだそうだ。同じ神戸市に住んでいるのにこんなにも地域によって被害の格差がでることに対して、僕はとても驚いた。また、芦屋市などの神戸市以外でも大きな被害が出た。

5、ガスが復旧するまで

自宅の電気、水道は戻っていたが、ガスは復旧していなかったそうだ。風呂に入ろうとしてもお湯ができなかつたので、施設の風呂を借り、施設が開いていない場合は、キッチンの蛇口だけは電気であつたので、桶に蛇口から出るお湯をいれ、その桶に入れたお湯を浴槽に移したそうだ。何度もキッチンから風呂場まで往復して、一時間かけて浴槽にお湯が溜まつたそうだ。ほかにも、ガスが使えないで料理をするために電気ホットプレートを使用したそうだ。4月ぐらいによくガスが復旧したそうだ。母親は「春になるまでとても生活が苦しかつた」と言った。母親は東日本大震災の様子を見て、共感する部分がたくさんあると言つていた。

6、震災後

あの震災から約6年後、僕は神戸市の西区に引っ越してきた。引っ越ししてから2年が経ち僕は8歳になつた。家の掃除をしていると箱のなかにあったある一枚の新聞記事を僕は見た。かなり日にちが経つた新聞記事のようだつた。それはある地震のことについての記事であった。僕は母親に「これってどこであったの、いつ起きたの」と質問したが、母

親は沈黙を続けた。

理由もなく沈黙するはずがないと思ったので、その新聞記事を凝視した。すると、新聞記事に神戸市と書かれていた。日付は1995年1月17日であった。この時に阪神淡路大震災というものの存在を知った。沈黙を続けた母が口を開いた。「あなたは震災と同じ年だよ」と言った。初めは言っていることがよくわからなかつたが母親から詳しい話を聞くと、ある程度は理解できた。

その話を聞いてからテレビで震災をテーマにした特別番組などを見る機会がてきた。例えば震災の被害を受けた住宅のインタビューをすることや震災記念の行事をすることが多くなつた。年が経つにつれて震災行事や震災についての授業をすることが多くなつた。「なぜそこまでするのだろう」と疑問に思ったことも何回かあつた。

でも震災を忘れてはいけないということだけはわかっていた。その理由は、数多くの死者、被害を出した阪神淡路大震災のことを忘れたら、震災で家族を亡くされた人、生活が困難になった人に失礼だと思った。後世に震災を伝えていくべきなのだとと思った。このように思うことで自然と疑問がなくなつていった。いつの間にか震災のことをもっと学びたいと思つたり、風化させたりしないと思うようになった。

7、環境防災科

中学校3年生になった僕は、行きたい高校を決めることができていなかつた。普通科に行きたいっていう希望もあつたが、推薦入試で入れるところが数少なかつた。しかし行きたい高校がなかなか見つけられなかつた。

ある時、夏休みの間に一つのニュースを見た。それは8月の半ばに台風により山崩れなどの被害が発生した兵庫県佐用町で舞子高校の環境防災科の学生がボランティア活動を行つてゐるとのニュースだった。僕はそのニュースを見たとき「この学科にしよう」と何のためらいもなく思った。震災のことをもっと勉強したいと思ったし、みんなにわかりやすく災害で起つたことを、説明したいと思った。

そして舞子高校の環境防災科に入学することができた。環境防災科の授業の中で震災についてたくさん勉強してきた。そして震災のことを自分の心の中にしまつておくだけでなく、語り継いで震災のことを忘れないことが、大切であることが改めて分かった。

8、これから

僕は今年で18歳となる。震災も18年を迎える。2011年に起つた東日本大震災のことは誰も忘れられないであろう。津波での被害、原子力発電の風評被害など世界的に大きな被害をもたらしたので、忘れたくても忘れないはずだ。しかし阪神淡路大震災

のこと知らない世代の人や、忘れてしまった大人もいるに違いない。しかし、17年経った今、震災復興住宅から出て行かないといけないことがある。それでも伝えていかないといけない事実、教訓はどんな災害であろうとも必ずあるはずだ。

将来何人の人が阪神淡路大震災のことを覚えているのだろうか疑問に思う。だからこの文章の中で綴った自分の震災体験をみんなに知ってもらいたい。そして皆さんに語り継ぐことの大切さを分かってもらいたい。

阪神・淡路大震災

久保 力也

1. 阪神・淡路大震災前日

震災が発生する 1 日前、私たち家族の住んでいた家の近くの団地には、多くのカラスが止まっていて、近所の方と「何だか気持ちが悪いな」と話していた。何か嫌な気がしたらしいが、まさかあんな大惨事になるとは思いもしなかったという。

2. 震災当日

震災が発生した当日の朝、私は赤ちゃん用のベッドで寝ていた。両親はそのベッドの下で寝ていた。5 時 46 分、地響きで目が覚めると突然下から突き上げられた。何が起こったのか何も理解していなかったが、その時に母がとっさに私の上に覆いかぶさり身を守ってくれたそうだ。幸い、家は無事で父、母ともに大きなケガもなかった。5 分くらい揺れていのではないかという程長く感じ、いつ搖れが収まるのか不安と恐怖で一杯だった。電気も付かず、和室にあったローソクに火を灯し台所を見に行った。家具が倒れ、食器が飛び散り、危険な状況だった。いろいろなものが散乱しているのを見て地震だとわかったそうだ。余震に恐怖を感じながら、とりあえず食料の確保をしようと近くのコンビニに車を走らせた。だがコンビニに行って驚いた。食料が何もなかった。店員が避難したコンビニでは、泥棒が入り何も買えず仕方なく家に戻った。とりあえず、各実家が心配になり連絡を取ろうとしたが繋がらず、各実家の様子を見に行くことにした。まずは西明石の実家を見に行き、その後西区の実家を見に行った。どちらも大きなケガもなく無事だった。だが水道、ガス、電気が止まっていた。幸い自宅では水は出ていた。また、ごはんは炊けていたためすぐにおにぎりにして実家に水と一緒に届けた。また近所で水が出ない人にも水を分けてあげた。その代わりにとお菓子をいただいたらご飯を少しもらったりした。地域の方々と協力した。困ったときにはみんなで協力しようと、助け合うことができた。そして震災当日の夜は余震の度に泣く私をなだめながら、ほとんど熟睡することなく不安な一夜を過ごした。

3. 震災発生から 2 日後～

震災発生から 2 日目からは、兵庫、長田、板宿に住む、曾祖母の安否確認と友人の安否確認に走った。普段なら渋滞があっても 1 時間もあれば着くところが、半日以上かかった。道は地割れで通行禁止になっていた。また信号が止まっているため、みんな我先に急ぎ、前に進むことで道が渋滞し、たどり着くことが大変困難だった。やつとの思いで避難所に

着いてもどこにいるかわからず、幾つもの避難所を探し回った。その時はただ友人の無事な姿を見たい一心であまり覚えていない。だが頻繁に起こる余震も恐怖は今でも忘れられない。何日目に誰の無事を確認できたかも覚えていないほど、恐怖との戦いだった。その中で覚えていることは、私の食料確保のことだ。自分たちの食料よりの当時 0 歳だった私の食料やオムツの確保に必死だった。近所の方も私のためにオムツを見つけては持って来てくれたりして本当に多くの人に支えられた。そうしてなんとか生活はできた。

発生から 2 週間ほどが経つと、寒さに耐えることが辛かった。発生当初は安否確認や食料の確保などで寒いと言っている余裕もなかったが、2 週間くらいからお風呂で温まることもできない状況が続き体の芯から冷えていた。そんな状況を知り、母の兄が姫路まで暖房器具を買いに来てくれた。姫路方面では大きな被害はなく、特に不自由な生活をしているわけではなかった。だがしばらくすると近所の水の出なかつた家の水が出るようになり、困っていたことが少しづつ回復した。だがテレビでは長田の焼野原や避難所の様子が映し出され、同じ神戸市でも被害の差が明確だった。自分も被災者で救援物資に頼って生活をしている。自分たちより困っている人を少しでも助けたいという気持ちはあったが、自分たちのことで精一杯だった。震災から 1 週間が経った頃には驚くほどの支援があった。赤ちゃん用の服は近所の方が見つけ次第持って来てくれた。だからいろいろなサイズの服があり、服の買い替えは困らなかつたし、家にはお菓子やカップ麺やお米も余るほどあった。こんなに多くもらっていいのかと躊躇もした。同時に多くの支援に本当に感謝した。人の暖かさ、優しさを実感した。

4. 父、祖父の仕事

父は運送会社に勤めていた。他の企業は電気が通らないから仕事の再開が困難だったりもしたが、震災で多くののがれきが出て、それを運ぶ仕事の需要はあった。だから仕事ができず、給料が入らないということはなかった。その点では、困ることはなかった。また長距離の運送が多く、何日か家を空けることが多かつた父だったが、神戸市内にあるがれきの運送を優先と会社が決めたため、朝に出れば、夜には家に帰ることができた。余震の続く中、母は不安だったと思うが、夜には父が帰ってくることで安心できたということもあると思う。もし違う職業で、家に帰れない日々が續けば母にかかる負担はもっと大きなものになったのかもしれない。また祖父も運送会社に勤めていた。父と同じようにがれきの運送を行った。祖父は運送中、長田や兵庫の被害を見て本当につらかったという。がれきの前で泣き崩れる人を見たり、お花が添えられてあつたり、その横を大きなトラックで通ることがなんだか辛かったそうだ。

5. 震災から半年

家の周りや被害の大きかつた長田や兵庫の方も徐々に震災当日より落ち着きました。だが、もちろんまだまだ復旧といえるような状態ではなかった。私はまだ小さな物音で怖が

って泣いていたそうだ。今では当時の記憶は全くないが、体で震災のことを覚えていて恐怖を感じていたのだと思う。その頃両親は、私を少しでも元の環境に戻してあげたいと、水族館につれて行ってくれたり、海に連れて行ってくれたりした。その時はあまり泣くこともなく落ちついていたそうだ。少しでも恐怖を感じないように私にとても近くしてくれた。自分の地震の恐怖が残る中、子供に不安を抱かせてはならないと自分の恐怖を押し殺し、私に寄り添い不安を和らげてくれた。

6. 震災から10年

神戸のまちはいつの間にかきれいになっていた。母自身は徐々にきれいになっていくまちを見てきたから、あまりきれいになったという実感は湧かなかったそうだ。だが改めて震災当時の映像を見ればとてもきれいになったと実感する。いつから復興したといえるのかわからないが、あれほどの状況から今の神戸があるのは本当に多くの人の支えがあるからだと感じたそうだ。

7. 震災から17年

震災から17年。毎年1月17日になると当時の困ったことや、その中でも嬉しかったことを思い出すという。そのたびに私に当時のことを話してくれる。また私にとってうれしいことを言ってくれた。「阪神・淡路大震災の時に泣くことしかできなかつた子が、環境防災科に入り、ボランティア活動や災害のこと、また阪神・淡路大震災のことを学んでいることを誇りに思う。誰に対しても誇らしく息子の活動を話すことができる。」これを言われとても照れ臭かつたが嬉しかった。

また2年下の妹も環境防災科に入学した。志望動機に、兄と同じように少しでも人の役に立ちたいと書いてあった。母は本当に喜んでいた。震災の年に生まれた子と、まだ生まれていなかつた子が防災に携わろうとし、阪神・淡路大震災について学んでいることに。そうして防災の輪が広がつていけば、今後来るであろう、大きな災害にも負けることなく、みんなで立ち向かつていけるのではないかと感じている。

8. 震災から17年 母なりの教訓

震災から17年、改めて阪神・淡路大震災を振り返ると何を感じ、どのようなことが母なりの教訓なのかを聞いてみた。母なりの教訓は「家の中をいかに安全にするか」だった。震災のときに困ったのは家具が倒れ、家の中での移動が危険だったこと。食器などのガラスが飛び散り危険だったこと。家は安全で家族が疲れを取るために安らぐ場所である。震災がおこり精神的にも、体力的にもしんどかったが、家に戻ってもガラスが散乱していれば掃除をしなければならないし、ケガをしないように細心の注意を払わなければならなかつた。そんなところではゆっくり体を休めることもできない。だから地震が来ても家具が倒れないようにする。寝室には大きな家具は置かないようにする。通路が塞がつてしま

そうなところには家具をおかない。寝るときは部屋の扉を開けたままにする。このように地震がきても命を守れる。家が危険な場所に変わらないようにしている。家庭でできる防災、備えはするようにしている。阪神・淡路大震災で感じたことを体験として終わるのではなく、その体験を無駄にしたくない、子供たちに同じ苦労をさせたくない。そう考えている。でもいざれは地震が来て不自由な生活を強いられる日が来る可能性が高い。その時に子供の負担を少しでも減らすことができればいいと話してくれた。私が環境防災科に入ったこともあり防災にも関心を持ち、家庭内でもよく家の防災について話をして改善するところはしている。そのように教訓を伝え実践していくことが大切だ。

9. 母の震災体験を聞き～感想～

阪神・淡路大震災から17年が経過した。私は今、阪神・淡路大震災をきっかけに設立された舞子高校環境防災科に通っている。そこで震災の話を多々聞く機会があり、また語り継ぐことを毎年続けている。そこで今回母親に当時のことをちゃんとした形で話を聞く機会となった。何度か話を聞いたことはあったが、詳しい話をしっかり聞くということはなかった。だが今回の授業のテーマでどのように自分自身が親に守られ、いろいろな方に支えられて生きているということを実感した。

まず初めに感動したのが、大きな揺れを感じた時にとっさに母が私の上に覆いかぶさり、自分のことよりもまず私を守ろうしてくれたことだった。何が起こっているのかわかつていなかつても私のことを一番に考えてくれた。とっさに自分の身ではなく他の人を守ることができるのだろうか。本当に親の優しさ、思いやりを感じることができ、普段は細かいことにまで口うるさい母だが、本当に私のことを思ってくれているのだと嬉しくも感じる。そして震災発生の夜、母自身も余震におびえ、眠れないなか、泣いている私のことを気にかけ、このときも私のことを最優先に考えてくれた。

また近くのコンビニに行ったときにはすべて商品がとられなくなっている光景を見て本当にむなしい気持ちになったと聞き、私もむなしい気持ちになった。商品を取った人は自分がよければそれでいいという考え方なのだろうと思う。それに大惨事が起ころうとも、店の物は店の人の物に変わりはない。犯罪は犯罪である。大変なことがあっても悪いことをする人、自分さえよければいい人がいることがむなしく感じる。そんなときだからこそ助け合いが必要だろう。そんな時にみんなと協力し辛いことは共有し一緒に乗り越えようと率先できるような人材が必要で、またそんな人材になりたいとその話を聞き、そう感じた。

そして震災発生から2日目、親族の安否や、友人の安否確認に車を走らせ、友人は無事なのか、親族は無事なのかというような不安、もしかしすると巻沿いになり・・・ということを考えながら車を走らせたのではないかと思う。不安定な中、普段の何倍も時間をかけ避難所を幾つもまわり、全員の無事を確認できた。幸いなことに震災で知り合いが亡く

なることはなかった。もし知り合いが一人でも亡くなつていれば、当時の母にかかる負担は想像もできない。私の食料やオムツを最優先に考え探し回ってくれた。そのうえ、小さな揺れや衝撃でも驚き泣いている私に気を使わなければならなかつた。そして知り合いの死が重なれば、母にかかる精神的、体力的負担が非常に大きかつたと思う。そのときに感じたのは、東日本大震災では多くの方が亡くなり生き残った人も多く苦しんだ。神戸は津波を経験したわけではないが、大きな地震がきて、多くのかたが犠牲になったのは東日本大震災も同じだと思う。同じようなことを経験した被災地同士だからこそ分かり合えることもあると思う。神戸だからできる支援、神戸だからできる防災活動に今後つながっていくことができればと同時に感じた。

そして震災から半年がたつたころ私はまだ小さな揺れでも震災の揺れを思い出し泣いていた。半年が経っても母は優しく寄り添い続けてくれた。近くに安心できる人がいることで気持ちが楽になっていたのではないかと思う。環境防災科の授業で被災者にどのような支援をするか、被災体験や辛い体験を聞いた際にどのような言葉を返すかを教わった。その中で話を聞き寄り添うだけでいい。優しく隣で寄り添うということを教わった。当時の母は自然と私にそれを作ってくれたのだと思う。赤ちゃんの私は「辛い、怖い」などの感情を言葉に表すことはできなかつた。それは泣くことで表現していたのだと思う。その表現に対し、母は寄り添い安心させてくれた。本当に寄り添うだけでいいのだと母の話を聞き感じることができた。

親が本当に苦労し、私を必死で守り、安心させてくれた日々から 17 年が経ち、環境防災科で、阪神・淡路大震災のことや、防災の勉強、そしてボランティア活動をしている私のことを、母は誇りに思うと話してくれた。17 年前泣くことしかできなかつた私が、東日本大震災の被災地に入り、活動してきた。また地域でのボランティア活動にも参加するようになつた。そんな息子を誇りに思うと直接言われ、恥ずかしかつたという気持ちもあるが、本当にうれしかつた。今まで迷惑をかけ続けてきたし、親孝行もろくにしたことがないのに、誇りに思ってくれていることが嬉しい。自分にできる親孝行はずつと自分の息子を誇りに思う。と言ってもらえるような活動や行動をやめないことではないかと感じた。それは母を喜ばすとともに、困っている人をほんの少しだけサポートできることにつながると思う。だからずっと続けていきたいと感じた。

また阪神・淡路大震災を振り返り教訓を聞くと「家中をいかに安全にするか」と話してくれた。私は正直驚いた。なぜなら母が家の中で、教訓を生かし実践しているからである。教訓は～だという人は多々いるが、それを実践に移せている人は何人いるだろうか。環境防災科の生徒でも非常持ち出し袋や、家具の固定をしている人と聞くと、手はなかなか上がらないのが現状だ。普段から災害の怖さやリスク、対策を学んでいても実践に移せている生徒は少ない。だから母が教訓を実践していることに驚いたのだ。母の教訓を実践

する、そのような行動的な所は本当に見習わなければならないと感じた。そしてこの行動でも私のことを考えてくれている。もし今大きな地震が来れば、17年前の苦労を子供にさせなければいけない。同じことを繰り返してしまう。大きな地震が来れば、困ることは本当に数えきれないくらい起こる。それを1つでも少なくしてくれていることに嬉しく感じる。17年前の赤ちゃんの頃も、18歳になった今も私のことを一番に考えてくれている。ずっと変わらず守られているのだと感じ、今回の「語り継ぐ」を通して母に改めて感謝が生まれた。過去の話することで教訓がわかり、また親のありがたさを実感した。少しは親孝行しなければいけないと感じることもできた。今回自分がどのように守られたのか、どんなサポートがあり今の自分があるのかということを実感することができた。授業のテーマで「語り継ぐ」を行った。これで終わるのではなく、今後の防災の勉強に生かしていきたい。

10. 将来の夢

将来は舞子高校環境防災科に教師として戻って来たいと思っている。そこで東日本大震災の被災地に入り感じたことや、「語り継ぐ」で話を聞き感じたこと、そして本当に多くのサポートがあり、今の自分があることを伝えたい。そのように困ったときには多くの方がサポートしてくれ、また誰かが困っているときにはそっと手を差し伸べることのできるような環境作りができるような教師になりたいと感じている。

阪神・淡路大震災

河野 沙耶

1. 震災の前日

1995年1月16日、その日は私が生まれてちょうど4か月目だった。私は両親にとって初めての子供であり、祖父母にとっての初孫だった。毎月1か月ごとに記念日として食事会を行っていた。4か月目のこのときは天ぷらをたくさん揚げていた。「この1か月も何事なく育ってくれた。」そう言いながら母たちは食事会を楽しんでいた。まさかこのとき、数時間後にあのような出来事が起こるとは誰も想えていなかっただろう。

2. 震災当日

(1) 発生直後

1995年1月17日、早朝の神戸はまだ静かだったそうだ。母は私のミルクの準備にかかると目を覚まし、布団から起き上がるようとしたときだった。午前5時46分、地震発生。「ドン!という強い衝撃と同時に体が宙に浮いた。何が起きたのか全く分からなかった。」母はそう言った。激しい揺れが続く中で押入れの戸が開き、中に入っていた布団の乾燥機が私に向かって落ちてきた。母はそれを咄嗟にかばった。そのおかげで私には当たることがなかったが、母の肩に乾燥機がぶつかり怪我をした。しかしその怪我に気付いたのは発生から3日後のことだったそうだ。

私たちの家族は震災当時、神戸市兵庫区三川口というところに住んでいた。私の家はマンションで建物自体は大丈夫だったが、前日についていた天ぷらの油が台所に飛び散っていた。火事になると危ないと思い、火が燃え移りそうなものを全て片付けた。その時、母はまだ地震が起きたことを知らなかったそうだ。家の近くには立体駐車場がいくつもあり、車のクラクションが鳴り響いていたため、大きな事故があったのかと思っていたらしい。「今考えれば、そんなことあるはずないのにね。」母はそう言った。しばらくして様子を見に外に出た瞬間、母は言葉を失った。いつも見慣れていた街がなくなっていた。「本当に地獄を見ているようだった。」近くのマンションやビルは崩れ、また斜めに倒れ掛かっていた。民家はほとんどがつぶれ、火事になっているところもあったそうだ。ただ事ではない。そう思った母は私にできるだけ暖かい服を着させ、車にできるだけの荷物を積み、祖父母の家に向かった。祖父母の家まではそれほど遠い距離ではなかった。家に着くと息をのんだ。祖父母の家は全壊していた。安否がわからなかった。近所の人たちが必死に瓦礫をどけて助け出してくれたため、二人とも無事だった。そのときはもうお昼を過ぎていたという。

その後広い公園へ避難するも、食料などがもらえないことから近くの兵庫大開小学校へ避難した。そこでたまたま付いていたテレビがあり、みんな釘づけで画面を覗いたという。神戸の街が変わり果てた姿になっていたからだ。学校の外では消防車のサイレンの音やヘリコプターの音が鳴り響いていた。テレビを見ていると、その時わかつていた亡くなつた方々の名前が読み上げられていた。母が辛くなつたのはその中に 0 歳児の子供の名前がたくさん流れていつたことだという。私と同じ年の赤ちゃんがたくさん亡くなっている現実が信じられなかつたそうだ。

（2）夜

電気も何もないまま一晩を過ごそうとしていたとき、避難所を運営していた人たちから今すぐこの学校を出てください、と言われた。なぜそうなつたのか。大開小学校の隣にはNTT の電波塔があり、それが倒れてくるかもしれないということだった。そこに避難していた人々は兵庫中学校へ避難場所を変えることになった。暗い道を歩いて移動していると、いろんな人を見たけたそうだ。着の身着のままのお年寄り、壊れた家を眺める人、毛布にくるまれた遺体…「怖かった。」母はそう言った。兵庫中学校に着くともう人が入れないほどになつていていた。しかたなく階段の踊り場に毛布一枚で過ごすことになった。しばらくするとカチカチのおにぎりが配られた。お年寄りや子供には食べられそうにないくらいのものだったという。しかし食べなければならぬから文句を言わずみんな食べていたそうだ。

3. 震災発生後 2 日目

なかなか情報が入つてこないので今どのようになつているのかがわからない状態だった。唯一わかっていることは震源地が淡路島だったということだ。淡路島は母方の祖母の地元で親戚もたくさん住んでいた。しかしながら連絡が取れず、祖母は不安でいっぱいだったそうだ。

男の人たちはみんな救助を行つた。女性たちは避難所の掃除などをしていったそうだ。救助を行つた男の人たちはたくさんの光景を目の当たりにした。瓦礫の中から人を救い出しが、腕しかなかつたり、顔がわからないほどむくんでいたり…みんな心にとても大きな傷を負っていたみたいだった。母は私がまだ小さいのを気にしてずっと人から離れたところにいたそうだ。泣いたりして迷惑をかけたくなかったからだ。しかしそのような母の思いとは違い、周りの人たちが何時間もかけてミルクやおむつに並んでくれたそうだ。みんなで助け合つて生活していく。それはこのようのことなのだ、そう母は思うようになった。

また夜になつた。ほとんど情報がない。配られるごはんはカチカチの乾パン。それでも我慢しなければいけなかつた。1月ということもあり寒さに耐えるにも限界があつた。毛布一枚で過ごすのはとても大変だった。家族や祖父母は私が風邪をひかないようにと常に温か

くしていくのだった。ずっとサイレンは鳴り響いていた。まだ助けを待っている人がいた。みんながみんな不安だった。しかし、そんな中で避難している人たちの元気のもとになったのが、まだ生まれたばかりの私のような赤ちゃんの何気ない笑顔だったそうだ。赤ちゃんは何もできない、むしろ泣いたりして迷惑をかけるほうだ。しかし何も知らない、何もわからない私たちの笑顔は何にも変えられないすごいパワーを持っていましたと母は言った。みんな家をなくして、家族や親戚を亡くして絶望していた。でもそんな時ふいに笑う赤ちゃんを見て、「この子たちの未来のために頑張ろう」とみんな口をそろえていったそうだ。

4. 1週間後

避難場所でインフルエンザなどが流行りだした。集団生活をしていく中で大きな問題になっていた。そこで父方の祖父母が住んでいる大阪へと車を走らせた。大阪へ向かう途中、倒れた高速道路や曲がってしまった線路、折れ曲がった鉄骨のビルを見て母は辛くなつたそうだ。

大阪に着くと神戸とは比べ物にならないほど普通の生活をみんなはしていたそうだ。普通に電気がついている、ガスがある、暖房器具がついている。母は愕然としたと言っていた。ほんの少ししか離れてない場所なのにこれだけ生活が違うものなのか。神戸の人たちはごはんもろくに食べられない状況なのに大阪の人たちはおなか一杯ご飯と食べることができ、中には千鳥足になるくらい呑んで酔っ払っている人たちもいたそうだ。そんな現実に母は耐え切れなくなったのと、祖父母を神戸に残してきたままだったので3日後には神戸に戻ったそうだ。母は「最初は愕然としたけど、だんだん腹が立ってきた。」と言っていた。

神戸に戻り、一度家の様子を見に行った。すると家から宝石などが盗まれていた。なぜこういうときに犯罪をするのか、母には全く理解できなかったそうだ。

一方で避難所では髪を染め、耳にピアスをたくさん開けた若いお兄さんが自分を構わずに、ずっと一人きりのおじいちゃんやおばあちゃんに寄り添っていた。なぜか不思議だったと言っていた。普段はあまりよくないことをしている人たちが人のために、ずっとそばにいてあげている光景がなんだか不思議で微笑ましかったと言っていた。人間はいざとなったとき、悪い部分が出るか良心の部分が出るか、それが一番目に見えると思ったそうだ。

5. 復旧、復興へ

避難生活も1か月が経とうとしていたころ、ライフラインが復旧してきたので私たち家族は避難所を出て自宅で生活することになった。限られた生活環境の中でできるだけのことをした。祖父母の家は全壊していたため一緒に生活をした。だんだん街の瓦礫が片付けられていき、街には何もなくなつていった。その後仮設住宅が各地で建つていて、みんな

自分たちで生活できるようになっていった。母は、今まで連絡が取ることができなかつた人たちに連絡を取つていった。みんな母のこと、そして生まれたばかりの私のことをとても心配してくれていた。しかし中には、連絡がつかなかつた人もたくさんいた。

私の祖父母は地元で寿司屋を営んでいた。その店に私はよく遊びに行つていた。そこで常連のお客さんたちに私はとても可愛がられていた。しかしその周辺はとくに被害が多く、その常連のお客さんたちもたくさん亡くなつた。身近な人たちが一瞬にして亡くなるという現実を受け入れるには長い時間がかかつたと母や祖父母は言つていた。

朝起きて支度をして、家を出る。外に出るとたくさんのビルが立ち並び、電車が通り、車も通る。近所に住んでいる人とあいさつを交わし、仕事場に行く。そして家に帰ると温かなご飯が待つてゐる。明かりがついてゐる。お風呂がある…今まで何十年と同じような毎日を暮していき、どんどん便利になっていく日常に慣れすぎていた。すべてが当たり前だと思っていた。しかし地震が起き、非日常な生活を毎日繰り返していく中で今までの生活がいかに裕福で贅沢な暮らしだったか、そのことを痛感させられたと母は言つていた。なぜ人間は失つてから大切なことに気付くのだろうか。なぜすべてを当たり前ととらえるのだろうか。地震が起きてからでは遅すぎた。なぜもっと早く気付かなかつたのか…母は震災が起こつてからそのように毎日のことを考えていたという。目の前でたくさんの方が亡くなり、たくさんの人たちが苦しみ、一方で今までと何も変わらず普通に生活している人もいる。そんな現実の中を必死で生きていくのはとても大変だったと母は言つた。

母はこの体験談を昔から1月になると毎年聞かせてくれた。「この震災のなかでお母さんは本当にたくさんの人々に支えてもらつた。たぶんお母さん一人だったらあんたを助けながら避難生活を続けるのは無理だった。なぜ乗り切れたのか。それは一緒に避難所にいた見知らぬ人たちがともに励ましあい、たくさんのボランティアの人たちが勇気と笑顔を届けてくれたから。あんたが今いるのはたくさんの人たちの支えがあるということを忘れたらあかんで。“当たり前”の生活はすべてが奇跡でできているんやで。」今、私の本棚の一番端に2冊の絵本がある。それは震災から1か月ぐらいの時、東京から来たボランティアの方からいただいたものだ。今でも大切に保管している。絵本の裏表紙にはメッセージが書かれている。『いつまでも応援しています』と。

あれから17年の年月が経つた。神戸の街は生まれ変わつた。この短いようで長いような

17年間でたくさんの人たちが立ち上がり、神戸を震災前よりもよりよい街にしていった。私はそのような中でもう17歳になった。震災とともに年齢を重ねていった。

私は3歳の時に淡路島に引っ越した。淡路島は阪神・淡路大震災の震源地である。その淡路島で高校2年生まで生活をした。小学校や中学校では毎年1月になると震災を忘れないということできまざまな行事があった。その中でも先生たちが自分の被災経験を語ってくれることは私に大きな影響を与えた。震災を経験した人、一人ひとりに体験談があり、辛さや苦しさ、様々な思いがある。それを私たちは聞くことしかできない。少しは分かることができるとしても本当のことはその人にしかわからない。しかしそれを多くの人にわかつてほしいために、忘れてほしくないために、私たちに辛い震災体験を話してくれるのだと考えた。

では、それを聞いた私たちに何ができるのだろうか。そう考えていたとき、今私が通う舞子高校環境防災科という学科に出会った。今まででは人の役に立てる人になりたい、そう思っていた。しかし具体的な内容につながっていなかった。この学科に行けば何か変わるかもしれない、自分の考えが、疑問が解決するかもしれない。そう思い、この学科に入学した。入学すると今まで以上に震災体験を聞く場があった。家族がいても地域の人を優先に守らなければならなかった、しかしそれは自分の使命だった…一刻も早くみなさんに電気を届けたかった…みんなに笑顔になってほしかった…話してくれる人たちはみんなそれぞれ自分の感じた思いをそのまま語ってくれた。その言葉一つ一つの重みを考え、それをまた違う人たちに伝えていかなければならないと感じた。

今回、一番身近な存在である母に震災体験を聞き、改めて自分も被災者だったのだと思った。記憶には全くないが、私は実際に避難所で生活し、たくさんのかたに助けていただいたのだと感じることができた。いくつもある震災を記録したものでも、語れないものがたくさんあるのだと思った。その中でも人ととのかかわりはとても意味のあることだと思った。大きな災害が起きれば、日本各地、または世界中からボランティアや支援が来る。その時、どんなに孤独な環境にいたとしても誰かがそばにいてくれるだけで安心するということがある。私は避難生活をしている中で本当にたくさんの人たちのお世話になった。ある人は私のミルクを確保するために何時間も何時間も長い列に並んでくれた。その避難所で出会ったたくさんの人たちに支えられて生きて行けたのだと感じることができた。今度は私が恩を返す番だと思った。

2011年3月11日、未曾有の災害が東日本を襲った。東日本は私たちからすればとても遠い地域だ。しかし、母と津波の映像を見ていると私にも何かできないかと考えた。そこで私は募金活動に積極的に参加した。毎日毎日同じ場所で何度も呼びかけた。そうするとまちの人から「ありがとう」や「頑張って」など励ましの言葉をたくさんいただいた。遠くに住んでいて何かしたいけど何もできない人たちと一緒に想いで募金活動を行った。

5月、私たちは宮城県東松島市に1週間ボランティアを行った。正直、最初は不安だった。

どういう風に接したらいいのかとか、なにをすればいいのかなどわからないことがたくさんあった。しかし、現地の人たちはとても温かかった。兵庫県から来ましたというと、「遠いところからありがとう。」「神戸もあの時は大変だったでしょ」「私たちの街も神戸のように必ず復興してみせます。」などの言葉をいただいた。これが人と人とのつながりなのだと実感した。人には言葉がありそれを思ったまま、感じたまま伝えることがいかにその人とつながれるかということだと感じた。

兵庫県から宮城県まではバスで14時間もかかる。しかしその距離を感じることがないくらいにつながりを持ちたいと思った。阪神・淡路大震災で神戸はボロボロになった。しかし何年という月日が神戸を新しい街に生まれ変わらせた。東北も同じように何年かかっても新しい街に生まれ変わってほしいと思った。

私は阪神・淡路大震災を経験したが、全く覚えていない。私は東日本大震災を体験していないが、実際に被災地に行き、自分の目に現状を焼き付けることができた。このような私には、将来なにができるのだろうか、そう考えることが増えた。私たちにできることはこのように自分が聞いた話、体験した話を忘れない、二度と同じことを繰り返さないようにと思った。そのためにはたくさんの人たちに知ってもらい意識を上げていかなくてはならないと思う。

阪神・淡路大震災は決して忘れてはならない出来事だ。その裏で、だんだん震災を知らない年代の人が増えてきている。震災を最後に体験したのは私たちの世代である。私たちには「語り継ぐ」という使命があるのではないかと考える。そしてその次の世代、次の世代へとつないでいくことが最も大事であると考える。まずは身近な人から自分が生まれる前のことを聞き、それをまた広げていかなければならぬと思う。

今回このような機会があり、自分の被災体験を形として残すことができた。これをたくさん的人に見てもらい、知ってもらいたいと思う。

「語り継ぐ」

小林真依

1. 震災のエピソード

(1) 地震が起きた瞬間・・・

私の家は三宮や新長田よりはほど遠い西区に住んでいた。まだ住む町が出来て間もなく、家も新築で建って3か月ぐらいの家だった。私の家は今の町内で出来て2番目ぐらいだったため、まだ隣近所はだれも住んでいなかった。ちなみに私はまだこの世にはいない時の話である。

「もうすぐ生まれるね」

私の家族は母と父だけだった。出産予定日は1月20日ぐらいだった。生まれる私と新築の家で家族は新たな生活のスタートをきるところだった。

17日、午前5時46分。あの地震が起きた。

いきなり地面から突き上げるような衝撃に家族はびっくりした。母はお腹の私と自分の身を守るために寝ていた布団にもぐった。揺れがおさまると父は避難経路確保のため家のあらゆる窓を開けた。そして外に出た。幸い電柱が倒れるや、地割れが起きるなどの大きな被害は屋内は高いところから物が落ちていたり、食器棚内の食器が乱雑になっていたりと家の被害は大きかった。次にライフラインの確認をした。電気、水道はダメだったがガスはなんとかつけることは出来た。そして父は車にエンジンをかけラジオをつけた。するとラジオ局が混乱状況だったのがよくわかった。「神戸で大きな地震が発生。震源地は・・・」など地震に関する情報をずっと聞いていた。母はそのころ布団にくるまり、家内でじっとしていたという。身動きがあまり取れない母に変わり、父が忙しくしていた。

(2) 地震から数時間後・・・

実は、叔母さんが新神戸の辺りに住んでいた。新神戸は西区よりも被害が大きかった。また叔母さんの住んでいたアパートは築歴が何十年と半老朽化もしていた。父はとても心配になった。すぐに電話をかけた。しかしながらつかながらない。やっとの思いで電話がつながって、安否を確認できた。叔母さんは無事だった。アパートの目の前に小学校があったためそこに避難していたという。叔母さんはつながっていた電車でいけるところで行って、父の車で途中から家まで連れてきた。神戸にいる全員の安否を確認できた。

お昼——。電気が復旧した。水はまだこのころは出てなかった。母はテレビをつけた。

「なにこれ！？」

どのチャンネルを回しても新長田の火災の映像が報道されていた。そこで地震の詳細を知った。起きた時刻、マグニチュード、震源地・・・。ここより新長田、三宮あたりは被害

が大きすぎると確信したのだった。たびたび起る余震にビクビクしていた。

夕方——。水が出た。これですべてのライフラインはつながった。まず水が出て初めてしたこととはお風呂に入ったことだったという。その時のお風呂は一段と気持ちよかったです。そして、ガスも使えるということで家に残っていた食材で晩御飯を作った。3人分作るのに十分量は足りた。そして、一夜を過ごした。まだ、新長田のほうはひどい状況なのにこれで本当にいいのか・・・？母は少し考えた。

2. 震災後・・・

(1) 震災から1日目

家族はなにもなかつたように朝、起きた。しかし、たびたび起る余震には体をビクビクしていた。私の生まれる予定日は刻一刻とせまっていた。いきつけの産婦人科は須磨区にあった。今、出産の時を迎えるなら大丈夫かなと少し不安だったらしい。須磨区はまだライフラインの完全なる復旧はしていない。いつ起きてもいいように心構えはしておこうと思った。今日は食材を買いに近くのスーパーに行った。するといつもとは違う光景が見えた。看板には「人数制限を行っています」という文字があった。いつもはお昼にぎわうスーパーがこの日は憊ただしかった。店員さんはお客様の対応やスーパー内の仕事で忙しくしていた。数ある入口も今回は1か所だけの入場になっていた。数時間待ってようやく入れたスーパー。陳列棚をみると物一つもなくて、店員さんが段ボールを急いで切っては並べ、切っては並べを繰り返していた。しかし、とある陳列棚は商品を並べる気配はなかった。何の商品かというとそれは「インスタント食品」である。緊急の食材として皆が一番頭に思い浮かぶものである。それだけは「品切れ」という張り紙が貼ってあった。そして段々と商品がなくなつて「品切れ」という張り紙がたくさん貼られていくのであった。新長田や三宮といった大きな被害を受けたところは物資みたいなのがすぐに届くのであるが、西区のように地震の被害は他と比べたら小さかったといって物資がなかなかこちらに回つてこなかつたのである。だから次にいつ物が入つてくるか本当に定かではなかつたのだ。母はそれについて語ってくれたあと

「もっと物資とかについてはこっちのことも考えてほしいわ。確かに被害が大きくて大変なのはわかっているけど、被害が大きい小さいで物資の配送の格差を分けないでほしいよね。」

と言っていた。その意見についての個人の感想はまたあとで書くことにしよう。

その日に頑張って並んで買った食材は入荷の見込みがないので日に日に大切に食べたと言っていた。そして、また1日を過ごした。

(2) 会社への道中・・・

私の父の会社は海岸線の御崎公園駅の周辺で、今も働いています。震災から数日。会社のほうが気になった父は会社に向かうこととした。地下鉄は西神中央～板宿間までしか走つ

ていなかった。この時代は海岸線なんてなかったので新長田から歩いて会社に行っていた。しかし、電車は板宿までしか走っていないため父はしかたがなく板宿から歩いて会社まで行くことにした。海岸線の通るところは工業地帯であったため会社員の人が多い。電車に乗ると電車の中はいつも以上に人がたくさん乗っていた。みんな考えていることは同じ。「会社がどういう状態か気になる」や「会社から召集された」など理由は多々ある。また普通の会社員ではない子づれの人も乗っていた。「親戚がどうなっているか気になる」とかこれも理由は多々あると思う。人でギュウギュウになった電車内。その姿は東京駅の朝ラッシュみたいな感じでもあった。とりあえず、板宿の駅に到着。電車はそのあとの新長田駅には行けないため板宿駅で待機していた。改札も混雑していて、なかなか外に出るのに時間がかかりそうであった。やっとのことで改札から出ることができた。そして、地上に出た。すると目に見た光景はとても悲惨なものであった。道を進むにつれ光景は悲惨度を増した。家は倒れ通り道の妨げになり、窓や店のガラスが道に散乱していた。道中の公園には避難していた人がいた。西区とは真逆の光景。父はそんな中見るも悲惨な状況の中ただ歩いて会社を目指した。

「あの時の光景はひどかった」

今でも震災の記念日近くになると忘れず語りだす話であった。幸い会社に大きな被害はなかったという。しかし、重工業の会社のため機械などが会社内で散乱していた。機械の部品が工場のあちこちにばらまかれていた。機械も損傷を受けたものもあったそうだ。しばらくは動かすことができなかつたとされていたが、震災から数か月後には動いていたという。しかし、大きな被害はなくても建物にヒビが入っていたりしている箇所もあった。やはり父が気にかかっていたのは「周り」の様子だった。板宿からの光景あれは本当に悲惨な光景だった。

「でも、今の神戸は本当に前以上に良くなったような気がする」

その言葉は実際震災を見てきた人がしみじみ思うことだろう・・・。

3. 私の誕生

(1) 私の誕生

私が生まれたのは震災から 10 日経った 1 月の 27 日である。予定日より 7 日経った日である。

いきつけの須磨区の産婦人科で私は誕生した。母はこう言っていた。

「20日に出産されたら大変よ。それが、27日になったのは何かの偶然かと思った。」確かに、20日に出産を本当にしていたらもっと大変な状況のなかすることになっていたかもしれない。正直、出産はタイミングも必要である。そして 27 日私は無事にこの世に生まれた。その後も世話をしっかりしてくれていた。ご飯は少量であったが食べることができた。しかし、度々起こる余震などは不安がってみんな怖がっていた。私にはそんな実感はないけど怖かったのはわからなくもないと思う。私が生まれて一番苦労したのが親だ

と思う。なぜならこの時期だからだ。震災から1週間しか経っていないのに大変な状況のなか本当に頑張ってくれた親に感謝をしたい。

3. 復旧・復興

(1) 復旧・復興への兆し

阪神・淡路大震災から数か月・・・。震災からの復旧への兆しがある程度見えてきた。新長田のほうでも崩れた家などが綺麗に片づけられ、新たな町の開発への準備が着々と進んできていた。こちらのほうでもスーパーに食材が並べられ普段の生活に戻ろうとしていた。

ある日、私の住んでいる町に大型のトラックがたくさん来た。そのトラックは私の住んでいる丁の隣の丁に行った。また新たな家が建つ準備かなとは思っていた。しかし、数日しても建つのは新築の家ではなくてプレハブのような家がたくさん建てられていった。そう。私たちの町は震災で家をなくした人のために作る仮設住宅の建設地に指定されていた。日に日に増えていく仮設の家。それは新長田や三宮のほうで被災された人たちの数を表していたといつても過言ではない。そして最終的にはその丁はプレハブの家のための町になった。プレハブの家がたくさんの光景。初めて見た仮設住宅。復旧への兆しが見えてきたと感じた。次第にプレハブの家の中には震災で被災された地域の住民がたくさん移住してきた。殺風景な場所はいつしか人でにぎわっていた。私の近所でも新たな家が建ち、私の町も復興への兆しが見えてきた。やがて日は経った。プレハブの家は普通の住宅へと姿を変えていった。そして、プレハブから作られた新たな町は今でもにぎやかさを変えずに日々を過ごしている。

4. 現在から未来へ

(1) 今の私たちの町

何もなかった開発都市。しかし、今となっては活気のある街に変わってきた。あれから数か月。私たちの町は「西神南ニュータウン」という名前になって呼ばれている。私の家はその町が出来て数か月で引っ越してきた。だから、今までの町の様子は知っているといっても過言ではない。何もなかった土地にプレハブの家が建ち、新長田や三宮といった被害が大きい町からたくさん的人が移住してきこの町は段々と発展していった。今も発展途上なのである。そして、私たちの町でも「防災についてなにかできないか」ということでNPO法人の人たちが私たちに「防災Jr. チーム」というチームを作った。最高責任者の人は「阪神・淡路大震災のことから」と言っていた。今でも発展を絶えない町。今後どうなるかはわからないが、町の発展を見届けてみたい。

(2) 震災～今の神戸

震災から17年経ち、震災を知らない世代が神戸を変えていく年代となった。私たちは

震災を境に生まれていない人と生まれて間もない人と分かれている。私も生まれていない人の世代に入る。しかし、毎年、1月17日になると関西地区では阪神・淡路大震災の報道又はイベントを各地で行う。今年は東日本大震災のこともあるってイベントがたくさん開かれた。東日本と神戸をつなげるプロジェクトという主題のイベントが多々あった。復興まで数年かかる。口では簡単に言えるけれども実際やると大変だ。「神戸は復興に10年かかる」と言われた。しかし、神戸が一体化して10年かかるところを数年で元の姿に戻したのであった。しかし、その数年という長い年月には様々な物語があったといえよう。2年生のときに長田の町歩きという校外学習があった。私たちの班では長田の人々に「新長田」という町ができるまでの歩みのビデオを見せていただいた。そこには私たちが知らなかつた新長田のヒストリーが書かれていた。町の人が協力をしたり時には奮闘しあい討論になり・・・。しかし、それは皆が早く「もとの町に戻したい」という願いが一緒だったから。そういうことを知って新長田の町を歩くと意外にも新長田を違う視点から見ることができる。また、大きな被害を受けた三宮。これも昔はこんな姿だったと知って三宮に行くところもまた違った視点から三宮を見ることができる。震災が起きて17年。これからも神戸の発展に私は協力していくと思う。

●感想・考えたこと●

今回改めて震災の話を聞こうと親に尋ねるとまたしみじみと考えることもあったり、初めて聞いたという話もあり、もうそれはたくさん聞いたよっていう話もあったりとたくさんのお話を私にしてくれました。親は私がこの環境防災科に入った影響なのか防災に関して少しだけ意識をするようになった。棚の上にたくさんの物が置いてあたら「地震の時怖いから下げとこうか」とか「タンスの上にストッパーつけておこうか」などなどにかしら耐震のことやら災害があったときのことやら・・・。私が中学のときより意識が高くなっている。また、募金活動などに積極的に協力するようになってる。どこかの学校（舞子高校含め）が募金しているのを見ると必ず入れるようにしている。私が防災の勉強をして、それを家族に話したりしているからだと思う。また、地方誌に舞子高校環境防災科の記事が載ってたり、新聞に同じ記事があると家族だけでなく親戚からも「新聞見たよ！！」っていう報告が多々来る。それだけ私たちの学科が特別でみんなに見られているかがよくわかる。帰り道に知らないおばさんから「どの学校？」と聞かれたことがある。「舞子高校です」と答えると「ああ！防災科っていう学科がある学校でしょ？！」とか。何回も聞いた展開である。それだけ有名って意味もある。そんな防災科に入って本当に良かったと思っている。私は別に一つ上の先輩でもいた「震災で誰かを亡くした」なんていう悲しいエピソードを持っているわけでもない。ましてや、中学の進路相談でもいわれた「公務員に希望しているの？」というわけでもない。上にも書いたが私は「防災Jr. チーム」の卒業生である。それが入学のきっかけである。前に二つ上の先輩の三好先輩がこの「防災

Jr. チーム」の説明に来てくれた。私は、町は違うが同じようなチームに入っていた。環境防災科のように現地に行って活動をとかどこかで功績を発表するとか大きなことをするわけではない。町の清掃活動や赤い羽根共同募金や町のお祭り、イベントのお仕事、防犯の呼びかけなど小さなことをやっていた。しかし、今思うと小さなことでも町の助けにはなっていると思う。それから高校進路相談の時、この学科があると聞きとても興味を持ち入学することができた。話が変わってしまったが上記のことで考えたことを書いていこうと思う。

まず、物資である。この環境防災科の授業でも少し勉強した項目もある。上記の話からすると被害がそんなにひどくはない場所に物資が届かない、ということだ。確かに新長田や三宮のほうは私たちの住んでいる場所よりもとても被害が大きかった。それは誰がどういってもわかる話である。そういった地域に救援物資が来たり、各地から物が届いてみんなに配布されるのはわかる。しかし、それは被害の大きかったところはそうなるのだが、逆に地震の揺れは同じく受けたものの、大きな被害が出なかった地域の「差」というものを考えてほしかった。被害の大きさによって物資を送るところを一か所に定めるのではなくもっと地震で同じく揺れた地域全体を考えてほしい。あとは順番の話。どこを優先すればいいか、どの地域から物資を送っていかなければならないのかは役所とか物資を配布する側が決める話。今回の東日本大震災でも同じだと思う。確かに津波を受けたところは阪神・淡路大震災よりの数十倍大きな被害を受けた。しかし、地震で揺れたのは東日本の地域全部。津波で襲われたところの物資も必要だがまた私たちのように地震の揺れは受けたものの、大きな被害はなかった地域が物資ストップになっていたかもしれない。今は震災から1年経ったからそれは解消されているはずだと思う。そのへんもこれからの「支援」という形ではまだまだ課題になっていると思う。

少し上の文章には関係ないが「ボランティア」についてだ。阪神・淡路大震災でも多くのボランティアの人がこの神戸に駆け付けてくれた。私たちも「ボランティア」についての授業をたくさんしてきた。「ボランティア」をする意味や自分はなんのために「ボランティア」をするのか、「ボランティア」をしてなんになるのかなど・・。阪神・淡路大震災では新長田や三宮方面にたくさんの人たちが手伝いにきてくれた。その励ましには神戸のみんなが感謝をしていると思う。2年のときに行った「町歩き」で聞いた話の中に「ボランティアの人がいたからこそ今の町があると思う。」といっていた方がいた。その方は「今度は自分が東日本に恩返しをするんだ」と言っていた。その話を含めボランティアをやる意味がなんとなくわかった気がする。しかし、ボランティアはいいことをする人もいる反面悪いことをする方もいる。ボランティアをしに行くという流行か「私も行ってみよ」とか「友達が行くからしかたがなく」とか安易な考え方で行く人もいる。それは今回の震災のほうがよくわかる気がする。ボランティアをやる反面休憩時間には態度がでかくなったりして被災された人に迷惑をかける。最低限のマナーが守れていない。「ボランティアをさせてもらう」ではなく「ボランティアをしてやる」という意思になっている。これはすべて矛

盾しているのではないかなど私は個人的に思う。また、今回のボランティアの全体を見ていると有名人とかもそれに便乗してやっているという姿も目に入る。やっただけで後片づけとかせずに終わってしまう人たちもたくさんいたそうだ。それに被災地の人たちは大変困っているそうだ。あと、私たちが東北のボランティアに行って1年経つ。そのときはボランティア団体とかが多く、ボランティアの人手には困ってなかったのだが、今はボランティアをしてくれる人が低下してきているというニュースを最近見た。1年前のボランティアをやろうという気持ちはどこに行ったのか。時期というのもあるかもしれない。学校や会社などで時期的に行けないということもあるはず。しかし、出来るだけまだまだ復興から遠い東日本を助けなければいけないと思う。私たちも含め。それは東日本が元の姿に戻るまでの私たちの使命かもしれない。

最後になったが震災の起きた神戸でも今でも必要なこと。「語り継ぐ」震災を体験していない世代がたくさん増えてきている中私たちは語り継いでいくことで震災のことを忘れない、又は次の世代に伝えていく。そうすることでこれから地震での対策や、震災についての考え方方が変わってくるかもしれない。未来は私たち若者にかかっていると言われている。本当にこれから日本を支えて、変えていくのは私たちの力だと私は思います。

阪神・淡路大震災

城田 直昌

1. 震災前日

震災の前日。連休だった為、夫の実家のある加西市に帰省し普通に休日を過ごしていた。

実家からの帰りの車中、夫と私は北海道南西沖地震の事について、「関西には大きな地震は起きないのかな」「当分は大丈夫だろう」などと語っていた。

その夜、いつも寝つきの良い生後5ヶ月の息子が、何故だかぐずってなかなか寝付かず、浅い眠りを繰り返し、私は眠ることができなかつた。

2. 震災の朝

何時ぐらいだろうか、やっと息子が深い眠りにつき、私もいつの間にか眠りに落ちた。

それからどのくらいたったのだろうか、何やらただ事ではない様子に睡眠を邪魔された。寝室の箪笥が激しく揺れだした。しかし、私はなかなか眠気がさめず意識が混沌としていて、しばらくその揺れの正体が地震だと理解できなかつた。止まない揺れにだんだん恐怖を覚え、私は別の部屋で寝ているはずの夫を起こそうと大声で叫んだ。だが、夫の返事は無い。

だんだん頭がはっきりしてきた時、自宅団地前の建設資材の会社の鉄パイプがすごい音をたてて崩れる音を聞き、その揺れが地震であることにそのときようやく気付いた。当時3歳だった娘と息子と私が寝ていたのは大きな箪笥がある部屋だった。暗い中私は目を凝らし息子と娘の安全を確認した。幸い箪笥は倒れることなく、棚の飾り物なども子供たちを避けるように落ちていた。また、眠りが深かったのか、目を覚ますことはなかつた。隣の部屋は、キャビネットが開き、中に飾ってあった洋酒の瓶や飾り物が落ち、割れて床に散乱していた。台所も同じように食器棚などのガラス戸が割れ、中の食器が散乱していた。その部屋の状態を見てかなり大きな規模地震なのだと私は実感した。

夫はすでに仕事に出かけていた。(夫の仕事は朝が早い) 本能的なものだろうか、夫の実家、そして自分の実家に無事を知らせる電話をかけた。この時はまだ電話回線は正常で、電話はすぐに繋がつた。夫も公衆電話から電話をかけてきた。

とにかく、子どもたちが起きる前に割れたガラスや食器等の片づけをしなければとお

もった。

そうこうしていたら、階下の奥さんがまだ小さい子のいる、我が家を心配し様子をみにきてくれた。そして、またしばらくすると、同じ団地に住む友人が訪ねてきた。「主人の実家に電話したけど繋がらんから、車で様子を見に行こうと思う。子供たちも皆一緒にいるほうが心強いし一緒に来ない?」と言ってくれたので同行することにした。

団地の敷地を出てみると自宅周辺は停電していたもの大きな町の様子の変化には気づかなかった。須磨寺あたりの道では、毛布や布団を羽織った人がたくさん道にあふれ寒さに震えていた。皆我が身に起きたことに戸惑い途方にくれているようだった。どこかでガス漏れをしていたのだろうか車中にガスのにおいが侵入してきた。

二号線に出ると、大きな道の陥没や地割れなどが目に入り、地震による被害がどんどんと目に飛び込んできた。兵庫警察の前の道を通ったとき、人々がビルを囲んで建物の方にむかって大きな声で何か叫んでいた。よく見るとビルの一階か二階がつぶれていた。おそらく建物のなかに人が取り残されていたのだろうとすぐに理解できた。

そのあと友人のご主人の実家や、その付近に住む友人宅を回り安否を確認した。その時間はまだ、倒壊家屋は無く、不気味なほど静まりかえっていた。(しかし、その後その町は、火の海にのまれてしまった。)

そのあと兵庫区にある夫の会社に連れて行ってもらい、夫に自分たちの無事を知らせた。子どもの顔を見て安堵したようだった。なんでも自宅と連絡がとれず、皆不安を抱えたようだった。なかには、間もなく出産予定の奥様の安否を確認するため、自転車を走らせた方もいたようだった。

友人の家族の安否が確認出来たので帰宅した。家の中はまだ危険な状態であった。息子はまだハイハイができなかったため、被害の無かった部屋で娘に息子の相手を頼み、とにかく必死にガラスを片づけた。夕方には夫も帰宅し、夫から地震が起きた時の話を聞いた。

地震が起きた時、夫は会社ですでに仕事をしていた。揺れが起り始めたときは屋内ではなく、高々と商品が積み上げられ作業現場にいた。捕まるものも無く、身動きもできず、激しい揺れのなか必死にこらえたらしい。アスファルトの床は大きく波打ち、積み上げられた商品のダンボールはまるで積木が崩れるように、一瞬にして当たりに飛び散ったそうだ。幸い社屋も倒壊せず、大きな怪我をした人も無かったようだ。

ようやく、家の中の危険を取り除き、少し落ち着いた。

たまたま、浴槽の湯を抜かずにおいたのでトイレを流すことはできた。カセットコンロを所有していたので、それで夕飯の調理をした。しかし、その日は娘に何を食べさせたのか記憶が無い。

3・自宅団地の被害

自宅の団地は、11階建て高層棟が2棟、非常階段で繋がっていた。

各階8戸、廊下をはさみ北向きと東向きと4戸ずつ並んでいて、我が家は5階西側の端の南にもベランダがある部屋だった。

南北に向けて設置していた家具は、大きく揺れ倒れそうになっていた。しかしソファに支えられたりして、完全に倒れる事はなかった。外国製の上下に分かれた家具もあつたのだが、東向きに設置していたので、左右には動いてはいたものの倒れずに済んだ。

団地は階層や部屋の位置で被害の差は大きかった。

高層階では、揺れが大きく、ガスコンロ、大きなテレビが吹っ飛んだそうだ。婚礼箪笥の上置きが落ちてきたり、部屋が歪んだのだろう、ふすま等の建具が閉まらなくなってしまったりした家庭が多くあった。また、端の部屋より棟の内側棟がつながっている側(1号棟南と2号棟北側)の部屋の方が、被害が大きかった。

エレベーターが止まってしまったため、高層階の方は復旧までかなり御苦労されたようだ。

4. 避難

子供たちの事を考え、大阪の実家に行こうと思ったが、ルートが完全に塞がれてしまつたので、加西市の夫の実家に世話になることになった。

加西市の大型スーパー や ドラッグストアでは、インスタント食品、粉ミルク、紙おむつの陳列棚が空っぽになっていた

被災した家族や親戚への救援物資の買い出しをしている方がたくさんいた。

話を聞いて

話を聞いて最初に感じたのは、当たり前だけど災害や事故に遭うのはすごい確率だと思った。僕の家族は前日実家に帰省していて地震発生の前日に帰ってきたが、もし帰るのが一日ずれたりしていたら地震の被害に遭うことはなかっただろう。地震の被害で家族や親戚を亡くしてしまった人も、もしかしたら助かっていたかもしれないということを考えるとなんとも言えない思いがこみあげてくる。

僕の家族は地震に遭ったものの被害はほとんどなかったのは本当に良かった。もしかしたら自分自身死んでいたかもしれないし、家族のだれかも死んでいたかもしれない。そん

なことを考えるとすごく恐怖を感じるし、家族、身内誰一人亡くならなかつたのは奇跡だと思う。

地震発生当時、ぼくが住んでいたところはそこまで被害は大きくなかったらしいが、住んでいた団地自体はそこまで耐震化は進んでいなかつたので、倒壊しなかつたのも正直すごい。母も言つてゐたが、自宅周辺は地震の被害が見て取れる程ひどくなかったらしいので、住んでいたところの地震規模は大きかつたものの、被害が大きかつた長田などの町と比べるとそこまで被害はなかつたみたいだつた。母は地震発生後すぐに祖父母の家に電話を掛けたと言つてゐたが、電話も発生直後は繋がつたみたいだが、後々電話回線がパンクして電話が繋がらなくなつたことを考えると、母の判断は正しかつたのだろうと思った。もしここで電話を掛けていなかつたら祖父母に心配をかけることになつたし、母も祖父母のことを気にかけてほかの行動に移せていなかつたのかもしれない。結果、電話を掛けることで母も心配ごとが一つ減り良かったのだと思う。心配事が多いと思考がすべてそのことだけになつてしまつて、気持ちの余裕がなくなつてまともな判断もできなくなるとぼくは思う。

母の友人の実家は見に行つたときはあまり変化がなかつたが、後に火事が延焼して焼野原になつてしまつたということから、どれだけ火事が長時間続いたのか、どれだけ火が遠く移ってきたのかよくわかる。阪神・淡路大震災の主な死因は建物倒壊によるものが8割くらいをしめているが、焼死の割合も1割と少なくない。おそらく建物の倒壊に巻き込まれそこに火事が延焼してきて焼死になつたのだろう。

目の前に家族や親戚が建物の倒壊に巻き込まれているのがわかつてゐるが助けられず、そこに火が移ってきて何もできなくて大切な人を失つた方もきっとたくさんいるだろう。どのような思いだつたのだろうか。その思いがわかるのは被害にあつた人にしかわからないうとだつたけど、もし自分がその立場にあつたなら本当に何も考えられなくなりそうだ。人が死ぬということだけで悲しいのに、それが知り合いであり身内ならばなおさらだ。しかも自分は無力で助けることは一切できない。そんなこと考えたくもないが、それがたくさん起つたという事実を考えると恐ろしく、とても悲しいことだと思った。

最近は耐震化されている家が増えてきているが、僕の住んでいたところでもそうだが、被災したときにしばらくそこで生活するようになることを想定するとマンションや団地の高い階に住むことはできるだけ避けるべきだと思った。ただでさえ、被災後は体力を消耗することが多いのに、配給された水や食料を運ぶことに体力を使うことは避けたい。高層階、低層階、どちらもメリット、デメリットがあるが防災の観点から考えると低層階のほうがいいと思った。

これから自分がするべきこと

ぼくの家族はすぐに実家に避難したが、避難できない人もたくさんいた。被災地で過ごすとなると様々な不自由がでてくる。家族から話を聞いていて被災地で過ごすことはとても苦労することだということを改めて感じた。被災したその瞬間も大変だが、それから復旧するまでも大変なのだと。話を聞いてそのような人達を助けられる人に成りたいと思った。簡単なことではないということは分かっているけど、少しでも役に立つ活動をもっとしたい。

今は東日本大震災があったため、阪神・淡路大震災を関連して思いだしている人も多いと思うが、また年がたてば、次の大災害までどんどん記憶は薄れていいくだろう。だから、そのようなことがないように、自分が震災について勉強したこと聞いたことなどを少しでも多くの人に語り継いでいけたらいいと思う。しかし、ただ語り継ぐことだけを考えるのではなく、語り継ぐことの意味も考えないといけない。語り継ぐことで、聞く側は新たな知識を得たりすることができますが、語り継ぐ側でも話をする際に話すことをいったん整理し、何か自分にとってプラスになることを発見できればいい。そうすることで、より確実な情報を伝えていきたい。

伝える側だけでなく、聞く側も積極的にしていきたい。

聞く側では、自分で気づかないように気づけたりできるのですごく大切だと思う。また、今回話を聞いて、被災経験にない人に話を聞くのもいいかもしれないと思った。それまでは、被災した人にしか話を聞けないという考えもあったけど、被災していない人にも災害に対して思うことはあると思うので、そういう人から話を聞くということも大事だと思う。

被災した人にしか話せないこともあるだろうと思うけど、逆に被災していない人だから気づけるようなこともあるかもしれない。だから、何か人と話す機会があったら、災害の話を聞いてみるのもいいかもしれない。またそれを他の人に伝えることができたらいいと思う。

語る側、聞く側がそれらを意識して、いろいろな人に広がっていけば、災害の記憶が薄れることも少なくなってくると思う。ただ伝えるだけではなく、それをまた誰かに伝えてもらえるような努力をこれからしていきたいと思う。

あの日の記憶

杉崎 和

1. 家族の記憶 [語り手 母（母視点）]

(1) 震災直後～2日目(家)

私たちが当時住んでいたのは神戸市灘区宮山町付近であり、現在は神戸市灘区八幡町付近である。

地の底から唸るような音の後、「ドーン」という音がして飛び起きた。
私は子供（生後5か月）の上に覆いかぶさるのが精いっぱいで揺すられるままだった。
父は箪笥が私と子供の上に倒れてこないように押させてくれていた。
結構長く感じた。
「振り返しがあるはずやからまだ気をつけとかな」と父が言っていた。
父は仕事に行く用意をした。父は仕事上こんな時はすぐ仕事場に行かなければならない。
私は育児休暇中だったので子供と2人きりでお父さんを見送った。
地震の直後は電話が通じたので堺と長岡京市の各実家にかけてお互いの無事を伝えあつた。
まさか神戸があんなに大惨事状態になっていたなんてこのときは全く思いもよらなかった。
以前、父が関西でもいずれ大きい地震が来るといっていたけど本当に来た。
父が出かける前にマンションの周りを見ていたけど運が良かったのか近所でつぶれている家はパッと見た限りなかったし、ライフラインで一番早く回復するのは電気だといっていたから停電状態なんて数時間だと思っていた。
小さいイヤホンで聞くだけのラジオで情報を聞いていたけど垂水でマンションがつぶれて1名亡くなったと聞いた。変な言い方だけど亡くなる方の数ってそんなにいないとこのときは思っていた。
しばらくしたら出かけたはずの父が戻ってきて、阪急が止まっている、JRは駅が落ちてつぶれているらしい、という情報を阪急六甲駅で聞いてきて自転車で行くといった。私のマウンテンバイクがあったので父はそれで出勤した。後で父に聞いた話では自転車で南へ下っていくとJR六甲道駅の南はすごく燃えていたらしい。
地震の前に炊飯器でご飯は炊けていたし、冷蔵庫の中には牛乳があつたりと、父が出かける前に一緒に確認した。お風呂には残り湯があるのも見た（揺れてまあまあこぼれてい

たけれど)

食器棚から食器が落ちてたくさん割れた。破片が散乱していたので靴を履いて歩いた。寝ていた部屋は

大丈夫だったのでそこだけ靴を脱いで入るようにし、子供をとりあえず寝かせるところにしたが、余震があつてそのたびに子供のそばに走った。

このころは携帯もまだそんなの無くて、家の電話だけが外とつながった重要ななものに感じて、電話が鳴ったらすぐとれるようにと家から離れることは考えなかつた。近所に知り合いが全くいなかつたからものすごく心細かつた。

子供はまだ寝返りができたばかりで何かあっても這つて出ることもできないから私がしっかりとしないといけなくてものすごく緊張していて片付けしながら揺れるたび子供のところに走つた。

寒いから布団にくるまつていた。唯一近所で言葉を交わすことがある隣のおばちゃんが「お乳出さなあかんから、これで水分取りや」と、みかんをもらつた。ラジオをずっと聞いていたけど、ラジオは窓に近くないと電波状態が悪く、スピーカーもなかつたので窓辺で聞き続けなければいけなかつた。

1日が長かつた。

夜は懐中電灯を布団でうまくはさんで天井に向けて照らして部屋を明るくした。でも、少しづつ照度が落ちていくのでこれがいつまでもつか不安だつた。近所で声がするけど夜は多分どこかに集まつて過ごすのか、どんどん人の気配が消えていくので取り残された感じで怖かつた。

昼間線路上を大阪方面に向かつて歩いていくたくさんの人を見ると神戸からみんな脱出するんだと、今の私たちはどうしようもなかつたのでうらやましく見送るしかなかつた。

ものすごく気が張つていたのか、アドレナリンのせいか、ほとんどおなかも減らず、眠くもならなかつた。トイレの水はお風呂に残つてお湯を使って流した。

割れたお皿とか少しづつ片付けながら本棚が倒れなかつたのは向きの関係かな？とか食器棚が倒れなかつたのは扉が開いて中身が飛び出したからかな？とか飛び出した食器がたまたま下にあつたベビーラックの上に置いていたお父さんのセーターの上に落ちて、セーターがクッションとなつたので割れなかつた物があつたりしたのかな？など考えたりしてつた。

元々部屋はベランダと台所のところ以外は窓がないから薄暗く、電話機も電気がないと番号が見えないタイプの物だったので白いマジックで番号ボタンに数字を書き込んだ。5ヶ月の子供を連れてどこにも行けそうに無かつたからずっと家にいた。1日がものすごく長かつた。

(2) 2日目～(神戸から出る)

2日目の深夜、お父さんの父が来てくれた。バナナを一房もらったので隣のおばちゃんに渡してしばらく実家に帰ることを告げて、家のドアにはべたべたと色々と張り紙をしていった。

車の中でお義父さんが持ってきてくれた巻き寿司を少し食べた。あちこちで家がつぶれていた。

特にどの家も1階がつぶれている物ばかりであった。六甲道のコープもつぶれていたし、JRの線路も落ちていた。その下をくぐって南(2号線)まで出た。公園とかに人がいっぱい集まっていてたき火をしたりしていた。信号は壊れてぶら下がっていたり、道路に亀裂がはいていたりしてそれが延々と延びていた。車はほとんど進まなかった。

東灘の警察署の前あたりで止まっていたときは、署内に向かって車からライトを照らして署内で仕事をしていたようだった。

時々うつらうつらして過ごした。原付バイクは歩道の上を走り、ノーヘルで、何となく無法地帯のような感じであった。燃えている家のそばも通ったがみんな、どうしようもない状態だった。

西宮あたりまでほとんど進まない状態で、道に面した家がここでもみんな1階がつぶれて道路の方へはみ出していた。西宮を過ぎたあたりから少し流れるようになってきて、うとうとしているうちに大阪に入り、そのあとはそんなに渋滞もなかつたと思う。所々寝ていてあまり記憶がない。

神戸から長岡京市まで10時間ほどかかって帰った。実家に帰ったとき母が「2人とも汚い顔して・・・」と言っていたけどそんなに汚れていたのかな?って思う。

その後ライフラインが復旧するまでずいぶんかかった。神戸に帰れたのは3月になってからだった。そのときも鉄道が戻って無かったからJRで住吉駅まで行ってそこから阪急御影まで歩いて御影から六甲の間のみ復旧していた阪急電車に乗って帰った。私の父が一緒に来てくれた。リュックサックの人がたくさんいた。

その後神戸の町は取り壊す建物などではこりだらけで遠くから見ていると煙っていたようだ。たぶんアスベストも舞っていたからきっと吸い込んでいるだろう。その後、アスベストが問題になったりしているので子供の体に影響がないかということがいまだに気がかりである。

2. 私の思い

(1) 感想

この話は「私」と書かれているのが私の母で、「父」または「お父さん」と書かれているのが私の父で、「子供」が私のことである。

私がこの話を聞いて思ったことは、とても大事に守られてきたんだ、ということだった。

私は5か月でまだ小さくまだはいはいしかできなかつた、そんな私を必死に母が守ろうとしてくれていたということが今回分かってとてもうれしかつたし、母に改めて感謝しないといけないと思った。

この話を聞いてこれから私たちがしなくてはならないと思ったのは、日ごろからの備えである。

この災害の時はたまたまご飯が炊けていたりしたのでよかったが、もしかしたらまだご飯が炊けていない時間に災害が起こるかもしれない。そういうとき食料がなくなってしまう。だから、いろんな災害のパターンや状況を考えて食料や水などは常に用意しておく必要がある。特に私が小さくお乳を出さなくてはならなかつたので水分や栄養のあるものを日ごろから常備しておかなければならない。

もう一つ母からの話を聞いていて事前からもっと対策できたのに…と思ったことは、近所とのつながりである。母は近所に知っている人が全然いなくて心細かつたと、言っていたがもっと前に対策がとれたはずである。会うたびにあいさつなどをしていれば多少の顔見知りくらいにはなれるはずである。

そうすればこのような災害が起つたときもお互いが気に掛け合つて助け合うことができるはずである。

今回は隣のおばちゃんが多少の知り合いであつたから、子供がいることもわかつていてお乳を出さな、ということでみかんを持ってきてくれたりしたが、普段からもっと周りの人とのつながりを大事にしてあいさつなどをしていれば乳幼児がいることもわかつていて多くの人が気にかけてくれたと思う。だから、日ごろからの関係は大切である。

(2)語り継ぐについて

私はこの「語り継ぐ」を書いていて伝えていくことが大切だと改めて思った。

私がこの環境防災科に入ろうと思ったのは、2008年の7月28日に起きた神戸市灘区都賀川での増水事故があつたから。その事故で亡くなられた小学生が通つていて、学童保育所は私も昔通つており、亡くなられた小学生のうち、女の子の方は私が妹のようにかわいがつていた子だつた。事故のあつた当時、事故現場には私の弟もいたので話を聞くと、とてもすごい勢いで水かさが増していったとのことだつた。その後いろんな人に話を聞いたが都賀川が、あんなにすごい勢いで増水することを知つてゐる人は本当に少しあらずそれも川の近くに住んでゐる人がほとんどだつた。私はこれを知りこういった情報は一部の人だけが知つてゐるのではなくもっとたくさん的人が知るべきだと思った。そんなとき知つたのが環境防災科、私はこの都賀川の事故を語り継ぐためにこの環境防災科に入った。

そして今17年前の阪神淡路大震災について語り継いでいる。あんなに大きな傷を神戸に残した阪神淡路大震災であつても少しずつ風化していっている。規模的には大きくない都

賀川の事故は4年がたとうとしている今、もうすでに多くの人の心からは消えて行っている。しかしどんな災害で、どんな規模であったとしても人の命の灯火が消えたことには変わりはないし、どんな災害にだって教訓が残るそれをこのように聞いて伝えていくことは何よりも大切なことだと思う。

私はこの環境防災科に入って多くのことを学んできた。阪神淡路大震災についてもそうだし、そのほかにもたくさんの災害について学んできた。

私たちが今、防災の大切さについて学んでいれるのは今まで多くの人がこのように過去の災害を語り継いできたから。今少しでも防災グッズという名の商品を買えるのはこのように語り継いできたことを生かして研究してきた人たちがいたから。

多くの人が今まで続けてきたことによって今の私たちが生きていける。そのことをこの「語り継ぐ」をしていて改めて思った。

だから、私たちもこの今までの人たちのようにこの「語り継ぐ」という活動を続けてていきたい。どんな災害であっても忘れてはいけない、そのことを自分自身でも都賀川の事故を通して感じたし、この環境防災科でも学んだ。だから、これからも私は災害の事だけでなくこの環境防災科で学んだこと、感じたことを伝えていきたい。

1.17 を忘れない

高橋 瞳

1. 震災の朝

私の母から聞いた震災体験である。

私の家族は当時、明石市大久保町に住んでいた。

1995年1月17日午前5時46分。母は、まだ1歳にも満たない私が全く眠りにつかず起きているのに一晩中付き合っていて、ようやく私が眠りに就いた時、うとうとと眠りにつこうとしていた。そのとき、下からゴオ～～っと大きな地鳴りがきこえて目が覚めた。ドーン、ドーンと、世界が終ってしまうのではないかと思わされるような、今までに聞いたことのない音だったという。大きな揺れに襲われるとき、私の眠っているすぐ隣にタンスがあったので、母はとっさに幼い私の上に覆いかぶさり、タンスを支えながら私を守ってくれた。それでも、小さな私はまだすやすやと眠っていたという。

住んでいたところは、震源地から遠く新築から間もないアパートだったので、被害は食器が何枚か割れた程度であった。2階に住んでいる人のベランダが大きな揺れの影響でずれて、水漏れを起こしたぐらいで、建物にも大きな損害はなかった。

当時はまだ携帯電話もまだ普及しておらず、固定電話だけでは連絡手段に乏しかった。だから、連絡をとりたくてもできなかった。

2. 震災から次の日

震災の翌日、また大地震が襲ってくるかもしれないという不安があったので、私たち家族は加古川に住んでいた父方の祖父母の家に一時避難したこと也有った。しかし、すぐに怖いという気持ちから落ち着いたので、1日泊っただけで、家に戻ることにした。

テレビ番組はすべて被害の様子を映していた。その映像を見ても、赤ちゃんを抱えたまま被災地に入ることはできなかつたので、もどかしい思いをした。

3. その後

私たちの住んでいたアパートは、電気・水道もすぐに復旧して、ガスはプロパンガスだったのでライフラインにも困らなかつた。だから、神戸で被災した友人や親せきを自宅に呼び、ご飯を食べてもらったり、お風呂に入つもらつたりした。被災地の銭湯はとても混んでいたから、長田にいた母の友人は、長田の避難所から何時間もかけて来たという。

母の姉の家族は当時、垂水区神陵台の団地に住んでいた。その団地は地震によって傾い

てしまった。そのため、姉家族は、団地の裏手にあったグラウンドに出来た仮設住宅に一時期住むことになった。震災の起こる少し前まで、私たちの家族もその団地に住んでいたので、もしまだそこに住み続けていたら、仮設住宅で生活していたかもしれない。

4. 震災による変化

明石はお店も普通に営業していたが、買い物に行くと、缶詰やインスタント食品などの保存食がなくなっていたという。

その頃の不安といえば、赤ちゃんのおむつなど、赤ちゃん用品の心配。

また、もしもの為にしばらくお風呂の水はためておくようにしていた。

余震が起こるたびに、こわいので玄関まで走り、玄関扉を開けていた。

さらに、通販を利用してエマージェンシーブランケット(体に巻いて保温するための防災グッズ)を購入し、除菌シート(小さい子供がいるので衛生用品はたくさん用意した)等はまとめて、かばんに入れてもしものために置いていた。

5. ボランティア

母のお兄さんたちは、大阪から船やバイクで神戸の被災地に入り、水を運ぶなどしてボランティア活動をしていた。しかし、当時はまったく連絡が取れない状況だったので、母がこのことを知ったのは震災からずいぶんと時間がたってからであった。

・母が震災を通して思うこと

「喉元過ぎれば熱さ忘れる」という言葉通り、やはり忘れていいてしまうものだなあとと思う。

しかし、阪神・淡路大震災をきっかけに、地震に敏感になった。震災を経験する以前は、地震が起きたときには何も感じなかったが、今では少しの揺れでも体に緊張が走る。震度1や2でも怖いと感じるようになった。2度とあのような体験はしたくないと思う。

住むところが誰でも選べればいいと思うけど、経済的にも、みんなが皆なかなかそうすることはできない。だから、今できる限りの防災はしようと思う。常に家はきれいにしておくことで、どこに何があるかちゃんとわかるようにしてしたり、たくさん物を置かないようにしたり、ベランダにモノを置かないなどを心がけている。

赤ちゃんがいたのであまり頻繁には外出しなかったし、被災地が落ち着くまで現地には入らなかつたが、自分の家にいてもできることはあった。

・母の震災体験を聞いて思ったこと

母から、阪神淡路大震災の話は学校の授業の宿題などで何度も聞いたことがあった。今回また改めて母から細かく当時の状況について聞くと、母のこと、私のこと、震災のことで知らなかつたことがまだまだあることに気付いた。また、当時の様子を聞いていると、東日本大震災の時と似ているところも発見できた。たとえば、お店から缶詰やインスタント食品などの保存食が消えていたのも、人々が急に災害に警戒して買い込んでいったからだと推測されるが、このような現象は、17年前だけでなく東日本大震災直後にも各地で起つたことである。

母から話を聞いているとき、母は「あんまり覚えていない」と何度か言い、うろ覚えだった。母が「のど元過ぎれば熱さ忘れる」といった通り、母だけでなく、過去に災害を経験した人も少なからずそうなのではないかと思った。神戸は、1.17のメモリアル行事やルミナリエなどで、阪神・淡路大震災を風化させないように様々な取り組みをしている。私たちが昨年東北にボランティアに行った時も、被災地の方々はみな口をそろえて「忘れないでほしい」といった。過去の記憶が薄れていくのは人間として仕方のことだが、“災害を風化させない”取り組みと、“災害の教訓を伝える”ことが大切だと感じた。こうした授業の一環というきっかけでも、家族で定期的に災害について話し合ったりする機会はとても大切なことだと考える。それが、家族や身内だけでなく、友達や地域、そして全国、世界へと広がつていけばいいと思う。

私の家族は、阪神・淡路大震災の時、様々な幸運が重なって大きな被害を受けてはいない。しかし、家が無事だったからこそ、被害を受けた人たちにご飯を食べてもらったり、お風呂に入ってもらったりしてもらえた。このようなことも各地でたくさんあったと思うし、同じく3.11の時も多くの方がボランティアをしたと思う。

家族の話だけでなく、母の友達や私の親せきについての話も聞けた。身近なところだけでも知らない震災体験がたくさんあるのだから、当然すべてのエピソードを知ることはできない。一人ひとり感じたことや震災についての記憶は違うけれど、そこから学べることは共通していると思う。それは、災害に対する備えは必要だということ、当たり前の日常がどれほど幸せなことかということだ。

母の震災体験から読み取れたことは、当時誰もが不安を感じていたということ、知らないところでたくさんの人々が支援に駆けつけてくれていたということ、災害は怖いけれど時間の経過とともに忘れ去られてしまう恐れがあるということだ。

母はあの日がきっかけで地震に対して敏感になったと言っていた。被害が大きくても小さくとも、また、私たちが東日本大震災で影響を受けたように被災地から近くても遠くても、誰もが災害によって何かしらの影響を受けたり、心の変化が生じたりするのだと感じた。

・語り継ぐ

震災の記憶を語り継ぐことは語る側にも、聞く側にも良い効果をもたらす。語る側は震災の記憶を語ることで、その記憶を整理すると同時に心の整理も行うことができる。私の母のように震災から18年もたてば、震災の記憶を語ることは、震災教訓を忘れないための、思い出すきっかけとなる。聞く側は、同じように震災を経験していれば共感することができるし、震災を知らない立場であれば、それを知り、いかに災害が怖く備えることが大切なことなのかを学ぶきっかけとなる。

私は、東日本大震災の後被災地に行き、出会った方から被災体験をきかせていただいた。その後神戸で、聞いた話を語った。「語り継ぐ」連鎖は、防災においてとても重要な役割を占めると思う。なぜなら、災害はいつどこで起きてもおかしくないのだから、一人ひとりの体験による教訓が、いつどこで誰の命を救うことになるかは分からないからだ。この行為は、災害においてだけでなく、日常の中にも生かせることだと思う。経験を共有することは人生において重要である。

母から、そして親せきや語り部の方、東北で聞いた被災体験は、将来私の子供にも語り継いでいくことになるだろう。そうして世代を越えて語り継いでいくことで、一人でも多くの命を災害から守ることができたら素晴らしいことだと思う。

大きな災害は、街、家、思い出、そして命など、多くのものを失ってしまう。犠牲になってしまった命や大切なのために、教訓を語り継いでいかなくてはならない。また、失ったものばかりだけではないので、失って気付いた日常の幸せや命の尊さ、助け合いの心、人々の絆の大切さなども、忘れないために語り継いでいかなくてはならないと思う。

「語り継ぐ」

田中 志苑

阪神淡路大震災の時は、4階建ての県営住宅の4階に住んでいて、そこは新築で4年ほどしかたっていなかった。そのため地震で団地が揺れてもまだ大丈夫だった。だが、地震後音が響きやすくなり、コンクリートにひびが入るなどのある程度の被害はあったそうだ。しかし、震災当時の住んでいたところはそこまで被害がなく、家の倒壊とかが他に比べたらあまりなかったし、ある程度の物資は手に入る状況だったので、まだ恵まれた状態だった。

当時、ぼくは生まれてまだ1か月にならない時だった。家族構成は、父、母、兄2人と僕の5人家族だった。当時は今と同じ垂水に住んでいたので、住んでいた県営住宅の被害は少なくてすんだが、それからが大変だった。電気はその日のうちに戻ったそうだが、水が出るまではおよそ2カ月近くかかり、ガスが復旧するまでは震災が起きてからおよそ半月近くでなかったそうだ。水が出るまでの2カ月の間、母の弟さんがコンスタントに水を運んでくれていたそうで、生活するには大丈夫だったそうだ。水が出るまでの間水を節約しないといけなかったので、水をあまり使わないように食器にサランラップを引いて水で洗う手間を省いたり、紙コップ、紙皿など処分できるものを使ったりしてできるだけ水を使わなかったそうだ。

洗濯をするときに多くの水を使い、特に洗濯機を使うと1回で大量の水を使うので手洗いで洗濯をして水を少なく使うという工夫をしていたそうだ。

震災後2カ月たって水が出た時の感動は今でも忘れないと言っていた。
今では水のない生活が考えられないでいつ震災などが起きても大丈夫なように水の用意をしっかりとしておくべきだ。備えあれば憂いなしということわざがあるようにしっかりととした備えができるいると震災が起きても大丈夫だ。この話を聞き、今後の生活でも水を大切にしておきたい。

(1) 震災の朝

今まで感じたことのない揺れがきて、揺れている間が長く感じられた。揺れている間、ベビーベッドに寝ていた僕を抱きかかえて、上のお兄ちゃんに覆いかぶさるようにして揺れがおさまるのを待ったそうだ。幸いにも寝ていた部屋には大きな家具もなく、倒れることはなかったそうだ。揺れがおさまった後、安否確認のため県営住宅の一階に降りて、同じ棟に住んでいる人たちと何が起こったのかという話をして帰ったそうだ。そのときは何千人の死者が出るほどの被害が出ているとは思っていなかったそうだ。リビングの被害がひどく食器棚の食器が飛び出し、食器が割れていたので足を怪我しないように上履きを

はいて片付けをしたそうだ。その他にコーヒーメーカーなどの家電も少し壊れたそうだ。とくに玄関と洗面所がひどく、玄関の靴箱が倒れてドアをふさいでいて、洗面所は、洗濯機の上に乾燥機をのせていたので、それも倒れて、壁に穴が開いていたそうだ。これがもし自分のところや、家族の寝ているところに倒れていたとしたら考えただけでもぞつとする。だから、今地震などが起きても大丈夫なようにしっかりと備えをしておかないといけないと思った。例えば、家具を固定しておくこと、非常持ち出し袋を用意しておくなど今までの最大限の備えをしておきたい。そして備えの大切さを話を聞いて実感した。

(2) 電気が戻り

幸いにも水があったが（団地だったので貯水タンクに入っている水を使用した）昼ごろには水が出なくなった。その水を使って洗濯だけは出来たので、ベランダに干していると黒い灰がいっぱい降ってきて、最初は何か分からなかったそうだが、電気はその日の午前の10時過ぎについたので、テレビを見ていたら長田地区の火事の灰だとわかって衝撃を受けたそうだ。僕は赤ちゃんだったので、母乳だけじゃ足りなかつたそうで、ミルクも飲んでいたが、水とガスがすでに止まっていたので、まず、色々な物に何かと必要な水の確保が大変だったそうだ。近所の自動販売機はすぐに売り切れ状態、スーパーに行っても買える量に規定があつたらしく、そこまで十分な量の物資は調達できなかつたそうだ。

今でこそ当然のように電気・水道・ガスを使っているが、被災した当時にはそのライフラインがつかえなかつたと考えると、とても大変なことだった。それにここ数年は、地震や津波などの災害に対する意識が高くなつてきているけど、当時は関東大震災以降大きな災害もなかつたせいなのか、やっぱりそれで阪神淡路大震災の被害が大きくなつた。当時、しっかりと備えをしていたら、そこまで食べ物や水にあまり困ることがなかつたと考えると、やっぱり備えが大切だと思った。それは今も同じで、これから来る大きな災害のことを考えると、今しっかりと備えをしておかないといけないと、話を聞いて再認識した。当時、物資も少なく、それに兄が2人いたので、食料などが足りなくて、食べるものの、飲み物の確保のために2時間ぐらい消防署などに並んでも少ししかもらえず、家族5人が暮らしていくのにはとても大変で、紙おむつやすべてのものに困る状態だった。当時、赤ちゃんだったので自分にとって紙おむつなどは必須のものだったと思うので、母はとても大変だつただろう。今は成長して自分のことは自分でできるので、地震などが起つた際には最低限自分のことは自分でやりつつ、近所の方や家族のことに気をかけて助けられるようにならないといけない。

(3) 当日の母

とりあえず水や飲み物、食料を確保するために、原付でいろいろと回つたそうだがどこも売り切れていて、炭酸飲料しかなかつたそうだ。近くにコープがあり、そこが空いてい

ると聞いたそうで、そこへ行って見たが入場制限をしていて待つのを覚悟で並んだ。でも買う数が決まっていて、しかも店内にはほとんど商品がなくて買ったのはマーボー豆腐の素や豆腐、他にはパンなどしかなかったそうだ。その日の夜はマーボー豆腐を食べて辛かったことを覚えているそうだ。買い置きしてあった食品と簡易ガスコンロとガスボンベがあつたおかげで何とか調理して食べられたそうだ。電気だけでもその日のうちにすぐに復旧してくれたのも幸いだったそうだ。水や紙おむつなどもたまたま買い置きしていたそうでそれもよかったですかもしれない。震災直後ということもあり、想像を絶するぐらい大変だっただろうと話を聞いて思った。今では当たり前のようにいろいろな食料があるけど、当時は普通の暮らしができなかつたと考えたらとても大変だ。母は当時、たまたま備えができていたから大分楽だったと言っていたので備えの大切さが改めてわかつた。

(4) 地震後3日間

はっきり言って、無我夢中だったそうだ。当時はまだ携帯電話やパソコンが普及していなかったので、電話で親族と安否確認をとりあつたそうだ。

淡路に住んでいる叔母の家は、1階がひしゃげて全壊になっていたそうだ。幸い、みんな外にでて助かったそうだ。

たまたま、当時、お母さんの弟が高砂に住んでいたそうで、そこでスーパーに勤めていたので5～6時間かそれ以上かけて、水や紙おむつ、食料などの商品を持って駆けつけてくれたそうだ。パンやレトルト食品を多く持ってきてくれたこと、紙おむつと水を持ってくれたことは、本当に助かったそうだ。また、地方に住んでいる友人からも物資を送ってもらったそうで、大変ありがたかったそうだ。

僕たちの家の場合、母の弟さんが被害の少なかつた高砂に住んでいて、そしてたまたまスーパーに勤めていたということもあって色々と物資を送ってくださって、まだ恵まれていた状態でごく運が良かったのだ、やっぱりそういう風に考えてしまう。長田区などの被害の大きかったところのことを考えると、とてもぞつとする。今、特に大変なこともなく普通にご飯を食べられているが、当時は満足に食事もできなかつたと考えると、ぼくにはそういった状況では生きていけなかつたかもしれないと思った。だからこそ備えが大切で、特に食糧や水などは一番用意しやすいものだと思うので、震災が起きても最低3日間分の食料や水は用意しておきたい。他に生活していく中で自分にとって必要なものを用意しておき、どんな場面でもあまり困らないような備えをしておきたい。

・トイレとお風呂

トイレは汚い話ですがおしっこの場合は流さずに、大便のときにお風呂にためていた水を使って流していたそうだ。でも、貯めていた水も残り少なくなっていたため、給水車が小学校に来ると口コミがあったそうで、もらいに行ったこともあるそうだ。ここでも並んだそうだ。また、いつになるかもわからず2時間ぐらい並んでいたそうだが、来なかつた

ときもあったそうだ。この時ほど、20ℓのポリタンクなどを家に置いておいた方がよかつたと思ったそうだ。

もらった物資で水があったので、当時生まれて1か月も経たない僕を、風呂に入れたかったらしいが、水を大切に使わないといけないので、簡易コンロで湯を沸かし、最低限の水を使って体を拭いてもらったりした。

お風呂に関しては、3日後に加古川の方のお風呂が空いていると聞いたそうで、近くに住む祖母もつれて車で出発したが2号線西行きは大渋滞、明石に行くのに1時間以上かかり、たまたま西明石で銭湯の煙突が見えたのでそこに行ったら、やはり1時間待ち。入場制限もあったそうだ。でもその時には入れたお風呂は格別だったそうだ。僕は1ヶ月だったけれど一緒にお風呂に入り、乳児湿しんが出ていた顔も少しあったそうだ。

また、お風呂は3日に1度ぐらいの割合でグリーンピア三木やしあわせの村などにあいでいるお風呂があるので、お風呂に入るためにそういうところまで時間をかけて連れて行ってもらった。比較的行きやすかったのは、しあわせの村の方だったそうだ。乳児用のベッドがなくて、僕を着替えさせるのが大変だったことを覚えているそうだ。当時、普通に風呂も入れなかつたので、今では考えられない。今、普通にお風呂に入ったり、ごはんを食べたりできているが、それに感謝して生活していかないといけないと、話を聞いて実感した。今ではものすごく水を使っていたりして勿体ない事をしている。当時ではコップ1杯の水でも大切だっただろうに今こんなに水を使っていていいのかと思った。これから生きていく中で水の大切さをかみしめて生きていかないといけないと思った。だからできるだけ節約していきたいと思う。

・子供たち

当時、4歳の兄と2歳の兄と約1ヶ月の僕がいた。4歳の兄は幼稚園に行っていたそうだが、2週間近く休園だったそうだ。その間は家で遊ぶことが多く、外は道路もガタガタになっていたりしていたので、ストレスがたまることが多かったそうだ。僕は生れて約1ヶ月だったため母乳が必要だったが足りなかつたそうで、足りないのをミルクで補っていたそうだ。

まだ赤ちゃんだった僕は紙おむつをしていて、そのせいでお尻がかぶれるというのがあったそうだ。だから母が特に気をつけていたのは、体を清潔にすることだった。コンロでお湯を沸かして、顔と頭、首やわき、お尻まわりは特によく拭いて清潔にしていたのを覚えているそうだ。

お風呂に入っていないだけで乳児湿しんなどが発症してしまつたりするので、風呂に入ることの大切さが分かった。また、この震災が起こった時は冬だったので温かいお風呂に入れることができるものすごく幸せなことだっただろう。どれだけ水を備えていたとしても入浴ともなるとさすがに厳しいと思うので、お風呂という問題はおそらくとても大きな問題であつただろう。

今考えると赤ちゃんだった僕だけではなく、当時4歳だった兄や2歳だった兄もとても危なかったので生きていて本当によかったです。やはり震災後とはいって、まだ幼くて当時の状況をあまり分かっていない兄2人と僕をどうにか育てていた母はすごく偉大だ。

今回このような話を聞きいろいろと考えさせられることがあった。僕は震災当時まだ生まれて1ヶ月だったので被災したことはもちろん何も覚えていない。そんな中でこのような話を母から聞けたことはとても貴重だった。僕たちの家族は特にひどい被害がなく大丈夫だったけど、長田の方などはひどい火災などでたくさんの人が亡くなった。それで大切な人を亡くした人や家族を亡くした人がいるということを忘れてはいけない。そのためにはこのように母などから聞いた話を語り継いでいく必要がある。例えば、家が倒壊したことにより長時間体が圧迫されて、助けられた後にクラッシュシンドロームを発症して亡くなつた人がたくさんいた。そういうことも知らなければまた同じようなことが起きてしまうかもしれない。そういうことのためにこういう話は語り継いでいかないといけない。

今回話を聞くとやはり備えをしておかないといけないと母は言っていた。例えば、水。母は20ℓのポリタンクを用意しておけばよかったですと言っていた。人間の体の70%は水分でできているといわれているぐらいですから、水の大切さが分かる。特に入浴やトイレ、体を洗つておかないと発症してしまう病気もあるかもしれないで体を清潔にしておくことは重要だ。トイレも放つておくと菌が発生してしまうかもしれないで、そういうことを解消するためには水が大切だ。

他には食料が大切だ。最低でも1人で3日間の食料を用意しておかなければならない。およそ3日間待てば食料などの配給が来るといわれているので、常温でも保存可能な食料、例えば乾パンなど用意しておくべきだ。

母は普通の生活に戻れた時の感動は忘れないと言っていた。電気、ガスなどのライフラインが今ふつうにあることに感謝しなくてはならない。現在、阪神・淡路大震災が起きてから17年がたち母からこういう話を聞いたということは、次の世代に語り継いでいかないといけない。次またいつこのような震災が起こるか分からないので、普段から備えておくことが大切だと思った。今回このような機会がありとてもいい経験となった。1日1日大切に生きていきたい。

復興と共に17年

辻村 佑季

(1) はじめに

震災から17年が経過した。当時0歳の私には記憶もなければ、その時の恐怖も分からない。

しかし、この神戸に住んでいるものとしてこれからも語り継いでいかなければならない。それは、これからの中未来のためにも、また自分自身この神戸に生まれ復興と共に成長してきたからだ。

(2) 1995.1.17 5:46

—両親より—

私が生まれたのは平成6年11月2日である。その3ヶ月後、阪神淡路大震災が起きたのだ。当時、私は長田区の丸山の高台のほうに住んでいた。被害の大きかった菅原地区や新長田までは車で約10分ぐらいの距離だった。

今まで経験したことのないような体が勝手に起き上がるぐらいの「ドーンッ」という強い揺れ、あまりの恐怖で揺れが少し治まった時に地震だと分かったそうだ。恐ろしい揺れの瞬間、死ぬという事が頭をよぎった。母は心臓の鼓動がドキドキしたというよりも、ドーン、ドーンという感じがして全体が熱くなり血の気が引くようだった。その時、家族全員で死ぬのだったらいいと思ったそうだ。そんなことを思ったら少しづつ体の震えが止まって我に返ったそうだ。とっさに母は兄と姉を抱え、父はベビーベッドで寝ている私に覆い被さった。すごい揺れだったが幸い物が割れたり、倒れたりということがなかったのでそのまま生活することができた。

私は長田区の山のほうに住んでいた。外はまだ暗く、山から見た街並みは黒煙が上がり町の所々では火の手が上がっていた。母は「えらいことが起きた…」と思ったそうだ。建物に居ては危険だと思った両親は毛布を持って車に避難した。地震の揺れで周りの住民と「怖かったなあ」と話していた。

後になって近所の人たちは「六甲山の強い岩盤に守られたんや。」と言っていたそうだ。

長田には祖父母も住んでおり、地震が起きてから1時間くらい経ってから様子を見に行つた。

車で5分ほど降りた町はブロック塀が崩れ、家は流れるように倒れていたので車が通ることが出来なかった。父は歩いて一人で祖父母の家に向かった。祖父母の家は全壊で住める

状態ではなかったが、怪我ひとつなく無事だった。

そして祖父母と曾祖父を連れ自宅へ戻った。

—ライフライン—

電気はその日に通ったそうだ。

ガスは止まっていたので料理が出来ずカセットコンロを使っていた。

お風呂は妙法寺に住んでいた父方の祖父母の家へ入りに行った。

祖父母の家はライフラインには支障がなかったので知り合いの方がたくさん入りに来ていたそうだ。その時のガスや水道代が何万円となったそうだ。その時、祖母は「お互い様やからしやーないな」と笑って話してくれた。震災当時、皆、自分のことで精一杯のはずなのにお互い助け合って生活することにとても胸が熱くなるものがあった。

飲み水はペットボトルでなんとか間に合ったのだが、一番困ったのはトイレだったそうだ。

近くに大きい池だったので、池の水をタンクに汲みに行きその水をトイレに使った。ため池だったので水の色が奇妙な色をしていたことを父は今でも覚えていた。

車のラジオで情報を聞いて大きい地震が起きたことが分かったそうだ。

父は神戸のまちがボロボロになっている姿を見て不安と絶望を感じたそうだ。

これから車が必要だと思った父は石油を満タンにしておかないと想い鷦のほうまで入れに行ったそうだ。ガソリンスタンドではお金を払って石油を買っていく人、勝手に持っていく人がいたが、皆怒ることもできず仕方がないと思ったそうだ。もし、自分がその場にいたらどんな行動をとったのだろうかと考えた。買ったかもしれないし、勝手に持つて行った人と同じ行動をとったかもしれないし、正直分からない。

揺れは激しかったが丸山のほうは被害が小さかった。

父は仕事に行っており買い物にも行けず、子供が3人いたので母は大変困ったそうだ。買い物に行っても店がしまっており、なかなか買い物が出来なかつた。しかし、親戚の方が食料や日用品などを持ってきてくれたのでなんとかやり過ごすことが出来たのだ。震災後、祖父母と一緒に生活していた。

2、3日経つから祖父母は避難所に行った。

仮設住宅の申し込みを何回かしていて、やっと仮設住宅に入ることが出来た。仮設の場所は大変辺鄙な場所にあり、買い物する所など全くなく生活するのが大変だったそうだ。

—仮設住宅—

仮設住宅の壁はベニヤ板1枚で夜になって電気を消すと隣の家の光が入り、咳払いひとつにしても響き、物音にも注意しないといけないので住みやすいという環境には程遠かつ

た。今現在仮設住宅が建っていた場所はお墓が立ち並んでる。

周りに住んでいる人達は全く知らない人達で不安が大きかったそうだ。

私も仮設住宅ではないが東日本大震災のボランティア活動を行った、1週間体育館で生活したがとても気を使う環境だった。阪神淡路大震災や東日本大震災を経験し避難所生活や仮設住宅で生活を送ってきた方の気持ちを完璧に理解することが出来たわけではないが、少しはこんな感じだったのかなと考えることができた。

全国から物資がたくさん届き助かったそうだ。避難所からは救援物資や粉ミルク、紙おむつ、食料品など頂いた。私はまだ赤ちゃんだったので育てるのにとても大変だったと感じる。誰かのために何か出来るわけでもなく、自分のことすら出来ない状態だ。また、兄や姉も幼かったので一生懸命育ててくれた母には本当に感謝している。

—地震後—

地震直後、父は実家に電話しようとしたが頭が混乱していて電話番号が思い出せなかつた。私は普段しっかりしている父でもこの地震が起きた時は本当に怖かったのだと思った。次にお母さんの妹に電話で「みっちゃん、はよ外で一や!」と言ったそうだ。治まった直後は電話が繋がったそうだ。

父は建築関係の仕事をしていて、昼ごろから仕事現場に向かった。道路は盛り上がってたり、陥没していたりしていた。そのため、現場に向かうにも困難だった。

また、材料が入らなかったので現場はストップして仕事が出来なかつた。

しかし、それから新たに仮設住宅の仕事が入りとても忙しくなつた。父は不謹慎だが楽しいと感じていた。震災前は不況だったからだ。また一からやり直すという気持ちで一生懸命仕事を行った。朝から晩まで働いて本当に体は疲れ切っていたけれど復興に携わるということが自分を奮い立たせたのだ。そして、これから復興に向けて前に進んで行こうと思ったそうだ。

母は余震が続くなか子供と家にいて不安だったが、毎日ドロドロになって働いてくれたお父さんに感謝していると言っていた。

町の人たちは途方に暮れる人、泣き言をいう人、これから前を向いて進んでいこうという人、皆この先が不安だった。余震があるたびに恐怖を感じていた。

何日か経っていくうちに新聞でライフラインの復旧情報を知ることが楽しみだったそうだ。

—祖母より—

祖母は高速長田から歩いて15分のところに住んでいた。祖父母の家の下には断層が通っていたのか、家が傾いて畳が盛り上がり、玄関の扉が曲がり、出ることが出来なかつたが近所の方がバールで扉をこじ開けてくれ助けてくれたそうだ。地域の方の絆、助け合う心

があったからこそこんな行動が出来たと思うのである。近所の家もほとんど瓦屋根が崩れていったり、壊れているところが多く、斜め向かいに住んでいた方は救助されたが病院に搬送された後亡くなつたそうだ。

道路は水道管が破裂し水で溢れ、ガス管もどこかに亀裂が入っていたのかガス臭く地震の恐怖もあったがガス管が破裂するのではないかと思ったそうだ。

水道管やガス管はいろんな地方からやってきた人達が直してくれたそうだ。祖父母たちは一時は私の家に避難していたが、何日かして自宅の近くの避難所で生活していた。

自宅は全壊したが、電話はダイヤル式だったので家の外に出し近所の人達にも使ってもらっていたそうだ。

被害の大きかった新長田のほうで仕事をしていたので、知り合いも多く、皆の安否が気になり小学校やいろいろな避難所に行き歩き探していた。その時にスニーカーを3足も履き潰したそうだ。

喫茶店をしていた知り合いが避難所に居て祖母が物資で頂いたカセットコンロを持っていくとその知り合いは壊れた店から出してきたコーヒーをカセットコンロで沸かしたお湯を入れて無料で配っていた。

—ボランティア—

長田の区役所の近くにボランティアのテントがあり、インド人の方が道行く人達にカレーを配っていたそうだ。カップ麺以外温かいものを口にすることはなかったので、熱々のカレーは美味しかったそうだ。

祖母のいた避難所ではいろんなボランティアの方が来てくれてお手伝いをしてくれたそうだ。

の中でも立命館大学の学生さん達が毎朝4時に京都を出発して炊き出しや物資を運んできてくれた。

祖母は今でも立命館と聞くと涙が出そうな気持ちになるそうだ。震災で辛かったことよりボランティアの方々や助けてくださった方々に対する感謝の気持ちで一杯になると話してくれた。

(3) 現在

—今—

阪神淡路大震災で大切な人や思い出が奪われ失つたことのほうが多いと感じることもあるが、この震災があったからこそ出会えたもの、得たこと気付かされたものがある。それは、人と人が助け合って生きているということだ。私が赤ん坊の時にたくさんの方の支

えがあったからこそここまで大きくなることができたのだ。

いろいろなところからたくさんの支援があって神戸は復興できたのである。日本国内だけでなく、世界中からの支援もあって今がある。

今回この震災体験を書くにあたって私には語り継ぐことができるのだろうかと不安になる部分もあった。記憶にはないが私が仮設住宅の前で遊んでいる写真が残っているだけだ。私は幼すぎて記憶になく、聞いた話を伝えていくだけでいいのだろうかと考えることもあった。しかし、ただ聞いた話をそのまま伝えていくのではなく、自分なりに聞いて感じたことを伝えていくことが語り継いでいくという気がするのだ。それがこの神戸に生まれて復興と共に大きくなってきた私に与えられた使命なのだ。

語り継ぐことで次の災害に備えることができたり、語り継いでくれた両親もこれから私が大人になって子供が出来た時にでも伝えていってほしいと言ってくれたのだ。

震災当時のことは本で読んだり写真を見たりテレビで放送しているのを見たことがある。

しかし、両親の口からあの時の話を聞くことはとても辛かった。祖父母も鼻をつまらせながら話してくれた。一生懸命話してくれた家族のためにも、これから自分の未来のために語り継いでいくことの大切さを感じた。

—環境防災科—

自分の住んでいる町に環境防災科があるということは中学生の時に知った。

最初は友人の誘いがあり、自分も受けてみようかなという思いがあった。私の将来の夢と関わる部分もあり、普通科とは違う3年間を過ごしてみたいと感じたのだ。今、この環境防災科で防災の知識はもちろん、様々なボランティア活動、小学校に行って出前授業や六甲山フィールドワークと言った校外学習、外部講師の方のお話など貴重な体験を重ねていくことができたのだ。入学してもう2年と少し経つが本当に環境防災科に入ってよかったです。私はこの神戸に住んでいて阪神淡路大震災のことは、あまり深くは知らなかった。自分から当時の話を両親に聞くこともなかっただし、自分は生まれて幼かったから他人事というふうに思うこともあった。しかし、この科に入りたくさんの方の震災体験や、復興していくまちを自分で見たり、1・17の追悼式に参加したり、震災を見つめ直すことでこの神戸に住んでいるからこそ阪神淡路大震災のことは風化させてはいけないと感じたのだ。この科で防災について学んだこと、人ととのつながることの大切さ、阪神淡路大震災のことを語り継いでいくこと、学んで感じたことはたくさんある。

—未来—

将来、私はまちづくりに携わる仕事をしたいと考えている。まちづくりと防災というのはこれから未来を作っていくにあたってとても重要なものになってくる。皆が住みやすい

と感じるようなまちを作つて行きたい。そのために、今回聞いた阪神淡路大震災のこと、今まで学んできたことを多くの人に伝え、将来の夢とつなげていきながらこれからも未来に向かって進んでいきたい。

「語り継ぐ」

釣 慎一朗

母の語り

1、震災の朝

震災日の朝、突然ひどい揺れで起こされた。
とっさに地震と感じ、生後7ヶ月の慎一朗を探した。
枕元にベビー布団をひいて寝ていたはずの慎一朗はなぜか私の布団の中で寝ていた。
夜中にトイレに起きた主人が、何の気なしにベビー布団から私の布団に慎一朗を移動させていた。
私はすぐに慎一朗を抱き上げ、何もない壁に背をつけゆれがおさまるのを待った。
すごく長いように感じた
やっとゆれがおさまってみると、慎一朗が寝ていたはずのベビー布団の上にいろんなものが落ちてきていた。
それを見てゾッとした。
もし、主人が慎一朗を私たちの布団に運んでいなかつたら、きっと大けが、または死んでいたかもしれないと思った。
キッチンでは食器棚があいて、食器が全部落ちて割れていた。
まず、したことは窓を開けること、ガスの元栓を見ること、そして私と主人の親に電話連絡をすることだった。
まだ、ニュースにも流れておらず早朝だったため、どちらの親も反応はイマイチだったが、とりあえず、大きい地震があったけど無事だから、ということを伝えた。
その頃社宅の4階に住んでいたが、社宅下に人が集まりだしたので私たちも下りて、社宅の人達と無事を確認しあった。
幸い、私たちの社宅の住人は怪我などあまりしていなかった。
家に戻り慎一朗のミルクを作ろうとした。
社宅の下に降りる前に、ポットを沸かしていたから、ミルクをつくることも出来た。
でも、私はスリッパで用心しながら割れた食器の上を歩いていたら、電気がまだつかなかつたせいもあり、足首を割れた食器で切ってしまった。
結構深い傷だったが、病院が通常とおり営業しているとは思えず、包帯で巻きながら自力で治した。
今でも、足に傷が少し残っている。

2、飲食の確保

しばらくすると、社宅の人が断水を知らせに来てくれた。

でも、社宅には屋上に水のタンクだったので、ためられるだけ水を確保した。昼ごろに家の近所を少し歩いてみると、小さな酒屋さんでご主人が割れた商品などの片づけをしました。

「すみません、少し水や飲み物を売っていただけませんか？」と聞いてみると、

「え？ ぜんぜんいいですよ！」

と言って、水や飲み物を売ってもらった。

そして、夕方には近所のスーパーが開いた。

といつても、店内の商品は大方無く、それでも食べ物を少しでも確保するため、お菓子なども買ったり、

駄菓子なども、買い物カゴに入れていった。

レジに並ぼうとすると、そこはすごい行列。

みんな考えることは同じなんだなと思った。

レジで、会計するまで2時間待った。

その間にも店内の商品はどんどんなくなる。陳列棚が空っぽになっていくのを見て、これから、どうなるんだろう。とても怖く感じた。

しかし、今考えると、日本はすごいと思った。

あの時は確かに怖く感じていたけど、

ちゃんと並んで、暴動も起きないで買い物ができる。

ほかの国に災害が起こった時では、暴動が起きていると聞いたこともあったから、日本はいい国だなと思った。

電気が1番に復旧した。電気がつけば炊飯器も使えるし、ホットプレートで何か焼くこともできる。とても寒い時期だったので部屋を暖めることができて本当にうれしかった。

3、避難所

そして、夕方になると、社宅の人が、

「ガスの匂いが充満していて危ないかもしれないで避難しましょう。」

と伝えに来てくれた。

私も、「はい、わかりました。ありがとうございます。」

と言って、慎一朗を毛布で何重にもくるみ、オムツやミルク、ラジオなどを持ち、主人と3人で近くの高校（県商）の体育館に行った。

寒いしすごい人だし、これからのが不安でとても眠れない。

また、ペットを飼っている人は体育館に連れてきているので余震があるたびに、犬たちがいっせいに吠えるのだ。

すると、びっくりして慎一朗も泣き出す。

そんな感じで疲れぬまま夜が明けた。

社宅でのガスの匂いがおさまったので、やっと社宅に戻った。

割れた食器を片付けたり、開いてるお店を探したり、食べ物や生活スペースの確保することにした。

開いてるお店はほとんどなかつたし、食器も結構細かく割れていたものもあつたり、とにかく大変だった。

4、身近の人の温かさ

一方、地震後、すぐに両家の親に電話で連絡していたものの、その後すぐ電話がつながらなくなつた。

たぶん、混雑していたのだろう。

無事を知らせてあるから大丈夫だろうと思っていたが、私達の両親は安心など、していかなかったそうだ。

私たちからの電話の後に、ニュースで流れる映像、どんどん増えていく被災者の数。

あちこちから心配してかけられてくる電話。

そして、私たちとは電話がつながらない・・・そんな状況があり、もしかしたら電話後に何かあったかも、と不安にさせ、とても心配していたそうだ。

今ならば、携帯電話があるのでここまで不通にはならなかつたと思った。

現に、去年の東北関東大震災のとき、主人は仕事で東北に行つてゐたが、すぐに連絡がつき、メールもこまめに出来てゐたのでとても安心できた。

地震後何日間かは、主人も仕事に行けず、ただ食べ物や飲み物の確保に店をさがす、という感じだった。

震災で困るトイレについては、最初にお風呂を溜めていたから、全然困らなかつた。

私は余震があるたびに、震えあがるぐらい怖く、とても神経過敏になつてゐたと思う。

次にまた大きな地震がきたら慎一朗を守れるだろうか、これからどうすればいいのかと、そんなことばかり考えていた

西明石まで電車が復旧したとき、とうとう主人の父が島根から私たちを迎えてくれた。

主人は仕事が始まるまで帰省できず、私と慎一朗だけが主人の父と帰省することになった。主人を1人残していくのは気が引けたが、正直ホッとした。

これで安心して眠れる、と思った。

部屋の中にある物は壊れたり割れたりしたが、建物は崩壊とともになく、怪我も私の足首の怪我だけだった。

被害の少なかつたほうだと思う。それでも、友達や知人が見舞いをしてくれたり、食器を贈ってくれたり、いろんな人の優しさやあたたかさに触れることが出来た。

そして、被害が少なかつたと思いつつも、生きた心地のしない日々をすごしてゐた事も事実だ。

5、防災への心構え

今、我が家では、防災グッズ、備蓄、そして各枕元にはライトと蛍光色のホイッスルを置いている。

そして、環境防災をしっかりと学んでいる慎一朗がいてくれてとても頼もしい。

無いに越したことはないが、いつ災害にあっても対応出来るような心構えが大事なのではないだろうか。

最後に、震災を見つめなおす機会を与えていただいたことに感謝して終わりにしたいと思う。

祖父の語り

私は、17日の朝、電話によって起こされた。

「今、地震が起きたんだけど、俺たちは大丈夫だから？」

という息子の声が聞こえて電話が切れた。

なんのことだ？

よく状況を理解できていなかった。

私は、妻を起こし、テレビをつけた。最初は特になにもなかったが、すぐに地震が起きたと

テレビに出てきた。

私は、それでやっと理解ができた。息子たちが住む神戸に、大きな地震があったことを・・・

そして、すぐに息子に電話した。だが、でない。

5回ほど電話したが、出なかった。

妻も心配して、「どうしよう～。」と混乱していた様子だった。

私もどうすればいいのかよくわからなかった。

私は息子のことが心配だったが、大丈夫という言葉を信じて、私はその日は仕事に行った。

仕事場でも、同僚に

「君の息子さん、神戸にいるんだよね？大丈夫なの？」

と聞かれたが、私は、「大丈夫だ！！」

と自分に言い聞かせるように言った気がする。

家に帰った後も、電話が鳴っており、電話に出ると、

「釣君は、大丈夫なんですか？」

と、息子の友達からも電話があり私は、

「大丈夫だ。心配してくれてありがとう。秀雄から電話があって、大丈夫と言っていたから、

大丈夫だと思う。だから安心してくれ。」

と言って私は電話を切った。

ほかにも、電話はなっていた。息子の心配をする友人もいれば、私の知り合いの人からも心配の電話があった。また、妃登美さん（息子の妻）の友人までもが電話してきていたのだ。

私は1人1人丁寧に

「大丈夫、ありがとう」と言って電話を受けた。

何日後かは、忘れたが、車で神戸まで行けるようになったとき、私は、妃登美さんの両親に連絡を取って、みんなを迎えて行くと言って、急いで神戸に向かった。

向こうの両親もすごく心配していたようで、

「よろしくお願ひします。」と深々と頭を下げられた。

責任重大なのである。神戸に行くと言ったが、神戸に行くのは初めてなのである。

だが、そんな心配よりも、それより先に息子たちが心配でそれどころではなかったのだ。

特に道に迷うこともなく、息子たちがいる社宅についていた。

妃登美さんは私が来たとき、本当に安心したような顔をしていた。

来てよかったですと思った。

だが、息子は仕事の関係でもう少し残らないと行けなかつたから、

私は、妃登美さんと慎を連れて島根に戻った・・・。

そのあとは、妃登美さんの実家に2人を送つてやり、私は家に戻り、妻に大丈夫なことを知らせた。

そして、息子も1週間後くらいにいったん帰ってきた。

自分のこれを書いてみての感想

僕は、母や祖父から震災の話は小さい頃から聞かされていた。

僕が赤ちゃんのときに下手したら、死んでいたことや、お母さんの足が血だらけだったことなど話してくれていた。そのあとは、おじいちゃんが助けに行つたことも。

もちろんそのときは怖いなって思つたり、大変だったんだなと思っていた・・・。

そして月日がたち、高校生になり、環境防災科に入った。

地震について、勉強したり、ボランティアの勉強をしたりいろんなことを勉強してきた。

そんな中で、この語りつぎの文章を書くことになり、またお母さんからいろんなことを聞いた。

昔に聞いた話を聞いたり、新しい話を聞いたり・・・。

でも、昔に聞いた話を聞いて見ると昔考えていた事と少し考え方があつわっていたのだ。

もちろん大変だな思つたりもする。

でも、この環境防災科で勉強していたおかげで、こういうことが大変だったのかとかああいうこともあるんだなと考えている自分がいたのだ。

それは、自分が成長したんだなと思った。

僕は、これを書いてとても勉強になったと思う。

人の助け合いや気の配り合い。とても大切なことだと思う。

それを、僕はこの語りつぎで改めて、教えてもらったり勉強したりすることが出来たような気がする。

僕は、こんな話をたくさんの人々に読んでもらったり聞いてもらったりしてほしいと思う。

震災は恐ろしいもので、人を簡単に殺すもの。大切なものを壊すもの。

それを防ぐために、防災を学ぶことは、大切だと思う。

でも、防災をしない人もいる。そういう人は、苦しみを知ってから防災を知る。

そういう学び方もあると思うが、僕は、そういう考え方で防災を学ぶより、苦しみを知る前に学ぶ方がいいような気がします。

当たり前のことを書いているようだけど、それをしない方の人間の方が多いと僕は思ってしまうのだ。

「語り継ぐ」

戸高 幸星

はじめに

私は1994年に起こった阪神淡路大震災のことは全く記憶はない。だから、これから書くことは両親が体験したことだ。

1. 地震発生当日

(1) 発生前

私は震災が発生した当時から垂水に住んでいた。

当時の両親は神戸で地震が起こるなんて全く想像していなかったという。

私は生まれてからたったの4か月しか経っておらず、その日もベビーベッドで寝ていた。その隣で両親と1歳11か月になる姉が川の字になって寝ていた。
いつもと何も変わらない夜だった。

(2) 地震発生

早朝、大きな振動が家を襲った。

両親はこれまで大きな地震を体験したことが無かったので、その大きな振動がいったい何によるものなのか分からなかった。父は最初“ゴーン”という音を聞いて「飛行機が落ちたのではないか」と思ったそうだ。しかし揺れが続くので地震だとわかり、父はとっさに隣で寝ている姉の上に覆いかぶさり、母は私の所へ来て覆いかぶさり守ってくれた。両親は揺れているあいだはただ覆いかぶさってじっと耐えることしかできず、立つことさえ難しい状態だったが、私たちが寝ていた部屋には大きなタンスがあったので、それが倒れてこないか心配だったという。幸いその大きなタンスはなんとか持ちこたえた。

ちなみに、その時の私と姉は何が起こったのか全く分かっていない状態で、特に大泣きをするといったこともなくただ「ポカーン」とした様子だったという。

(3) 発生後

揺れがおさまって家族全員の無事を確認した後、真っ暗な中、他の部屋の様子を見に行つた。すると、どの部屋も小物が散乱していた。特に酷かったのはキッチンで、電子レンジが床に転がっていたりしていた。

中でも両親が衝撃を受けたのは、食器棚の下に割れた皿が入り込んでいたことだった。つまり揺れている最中に食器棚が浮いて、その隙間に皿が入り込んだのだという。両親はその時は何故そのような事が起こるのか理解できなかつたそうだが、後日それが縦揺れに

よるものだということを知ったそうだ。今もその食器棚は家にあるが、あんなに大きくて重たそうな食器棚が浮いたのだと思うと、揺れがどれほど凄まじいものだったのかが思い知らされる。

私たち家族は一通り家中を見回った後、家が壊れるのではないかと思って外にでた。すでに外にはたくさんの人がいて、もう空は薄明るくなっていたという。

両親は外に出てすぐ、近所の電気屋さんに電池を買いに行った。しかし、もう既に大勢の人が買い占めた様子で電池は売り切れていた。

また、パン屋の前には大行列ができていた。両親もパンを買いたかったらしいが、あまりの行列に断念したという。酒屋にはシャッターが閉まっているのにも関わらず物欲しさにこじ開けようとする人がいた。このようにとにかく人が溢れかえっている状態だった。当時は、地震なんて起こると思っていた人が少なかったため家に物を蓄えている人もほとんど居らず、皆この先がどうなるのか不安だったのではないかと思う。

そんなことをしていると、空から黒い燃えカスのようなものが降ってきた。それによつて多くの車に黒いススがついていたという。最初は何かよく分からなかつたそうだが、後日知った情報によると、それは長田や須磨の火災によって発生した灰が風にのつてやってきたものだった。長田周辺の火事がどれほどの規模であったかが伺える。

近所の人たちの間では水道ができる公園があるという情報が行きかっていたらしく、私の両親たちも水はミルクをつくるのに絶対必要だと思いその場所へ向かった。

公園にも人は大勢いたが、無事そこで水を貰い、余震が続いているのを怖いと感じつゝも家に戻った。母は余震が怖くて、実は家には戻りたくなかつたそうだ。

家はライフラインが止まっておりガスが使えなかつたので、母は上にやかんが乗せられる石油ストーブを使って公園で貰ってきた水を沸かし、私のミルクを作ってくれた。(当時、この型の石油ストーブはだんだん売れなくなつてきていたらしいが、阪神淡路大震災についていざという時に使えることが実証され、また売れるようになったという。) その石油ストーブを使って焼きそばや目玉焼きを焼いて食べたという。そのストーブのおかげで家族皆が空腹を感じることがなかつたのだと思うと感謝の気持ちでいっぱいになる。

ミルクを飲んだ後、私は籠のような物に入れられて、余震によって落ちてくるものから守るためにテーブルの下にいた。その頃には既に電気がつくようになつておつり、テレビが見られるようになった。テレビでは神戸の被害の様子が報道されていた。そこで両親は初めてこの地震がいかに大きなものだったのかを知つた。そして長田の街が燃えている光景を目の当たりにし大きなショックを受けたという。

(4) 長田の街

長田には母の友人が住んでいたので、安否が気になり家族全員で長田に行くことにした。もちろん電話は繋がらなかつたので、住所だけを頼りに出発した。しかし、電車はJR鷹取駅までしか通つていなかつたので、鷹取駅から徒歩で友人の家まで向かつた。私もベビー

カーに乗せられて長田に向かった。

長田の街は燃えている建物がたくさんあり、それはもう凄まじい光景だったという。現在は鉄人28号の像が立てられている辺りにも行ったが、建物がほとんど建っていない箇所もあった。

焦げた臭いも充満していた。母はまるで「戦後の焼け野原」のようだと感じたらしい。

母の友人が暮らしていた家の辺りも酷かったらしく、隣の家が友人の家にもたれかかっている状態で窓の隙間から見える部屋のドア付近には血がついていた。

また、2階は完全に潰れている状態だったという。結局その家には友人は居なかつたので、伝言の紙を残して帰った。後日伝言を見た友人と連絡がついて避難所にいることが分かつたそうだ。友人は何とか救出されて助かったという。

長田を訪れた後、母の妹が車で私たちを迎えて来てくれてそのまま北区の鈴蘭台にある父の実家に行くことになった。

2. 祖父母の家の生活

(1) 鈴蘭台での生活

鈴蘭台に移動した理由は、やはり私のミルクが必要ということが大きかったという。

鈴蘭台は神戸市ではあるものの山を越えたところにあるので、地震による被害は少なかった。

垂水では近所の公園まで取りにいかないと貰えなかつた水が、鈴蘭台では普通に家の水道を使うことができる状態でライフラインはすべて通っていた。だから、ミルクも普通に作って飲むことができた。

鈴蘭台での生活はほとんど地震前の生活と変わらなかつた。テレビでは神戸の悲惨な状況が映っているのに、自分たちは普通に暮らしているので、まるで他人事のように思つてしまふ時もあったという。

しかし、鈴蘭台でも震度3～4レベルの余震が何度も起つる状態が続いていた。それに1月17日の大地震と同じ規模の余震が来るかもしれないと言つていた者もいたので、余震が来るたびにとても怖かつたそうだ。私は昨年東日本大震災のボランティアに行ったときに初めて震度3レベルの余震を経験したが、少し揺れて窓ガラスがカタカタと音をたてるだけで、とても不安な気持ちになつたことを覚えている。あれ以上の余震を何度も、ましてや大地震を体験した後に経験するというのは本当に怖くて全然安らぐことができなかつたと思う。

(2) 父の体験

地震発生から2～3日経つと父は地震後初めて仕事場に向かつた。

当時父は六甲の法律事務所で働いていたが、そこに向かうまでの道のりも震災による被害が多く出ていた。自衛隊が必死に民家を掘つて捜索活動を行つてゐる姿や、友人の住ん

でいるマンションの1階部分が潰れているのを見ると心が痛くなったという。また、仕事場は六甲の北の方だったので、まだ被害はましだったが、少し南に行くと状況は悲惨だったという。

これは父が後で知った話だが、その辺の土地は、山側は強い岩盤があるので丈夫だが、海側は砂地でやわらかい地盤だったそうだ。このことが被害にも繋がったのではないかと考えられる。

その時は全く仕事ができる状態ではなく、ようやく仕事が行えたのは震災から2週間経った後だったそうだ。

(3) 大阪での生活

私たち家族は鈴蘭台で約1週間過ごしたが、鈴蘭台にいた祖父母は2人とも仕事をしていたので、

これ以上迷惑をかけられないということになった。だから姉の車で今度は大阪にある母方の実家へ移動した。父は仕事があったので、神戸に残った。大阪までの移動の道中はどこも瓦礫の山で渋滞も相次いでいたという。いつもなら2時間弱で到着するはずの所が5時間以上もかかったそうだ。

父も仕事がない日に一回大阪に行ったそうだが、その時は電車で三田まで行ってからぐるっと回る形で大阪に向かったという。震災当時の移動がどれほど大変だったかということがよく分かる。

実家には祖父母と2人の叔母が暮らしており0歳の私と2歳になる姉の面倒を見てくれたので、母からすると大変ありがたかったらしい。大阪にいる間もテレビでは常に震災の情報が流れており、ライフラインの復旧状況などは神戸に住んでいる人から聞いたという。神戸で辛くて大変な毎日を過ごした人たちと比べると、鈴蘭台や大阪で何不自由なく過ごすことができた私たちは本当に恵まれた環境にいたのだと思う。

大阪には完全にライフラインが復旧するまでの約1か月間過ごした。

そして、また本来住んでいた家に戻り生活を始めた。

3. 震災を通じて

震災後、変わったことがあるという。例えば、震災後しばらくは派手な服装を着る人が少なくなり

リュックサックを持つ人が増えたらしい。派手な服が少なくなったというのは、やはり震災後の自粛ムードによるものや動きやすくあるべきだという考え方で、リュックサックはいざという時に行動しやすいようにだったり、自動販売機に頼るのではなくマイボトルを持とうといった神戸の人たちの変化の現れではないだろうかと父はいう。

そして一番の変化は皆の防災の意識が上がったことだろう。

私たちは団地に住んでいたので、比較的地震には安全と言われていたが、震災後は避難

場所をお互いで確認したり緊急連絡先を決めておくようになったりした。両親は改めて地域の繋がりの大切さも確認した。集会所に人がよく集まるようにもなったという。そして両親は寝室に水や乾パンなどを入れた非常持ち出し袋を置くようにもなった。もし何かあってもすぐに安全に逃げることができるよう父は靴下を履いて寝るようにもなったという。地震が発生したときに倒れるか心配だったというタンスの上には物をギュウギュウに詰めてなるべく揺れないように工夫した。

また、自分の目線よりも上の位置にはなるべく物を置かないようにした。その物自体をあまり買わないようにもした。このように、両親や地域の人たちは震災前一切行っていなかった防災対策に次々と取り組むようになった。

幸い私たちの家族の周りで亡くなった方はいなかった。しかし、当時誰かが亡くなったという話は

日常的にあったし、両親の知り合いで家族を亡くした人は何人かいた。そういった人たちの話を聞くうちに母は、命があるだけでものすごく幸せなことなのだということを実感したという。

そして神戸の人たちは震災が起こってから結構早い段階で前向きになり始めたようだと父は感じたらしい。それはやはり人や地域同士の繋がりがあったおかげだと私は思う。

その反面、連日ニュースで流れていた変わり果てた神戸の状況を見ることが次第に嫌になってきた人が多かったという。

4. これから

(1) 環境防災科

阪神淡路大震災から今年で17年が経った。当時のことは全く記憶にない。

当時0歳だった私も17歳になり、今は舞子高校の環境防災科で毎日のように防災の勉強をしている。環境防災科に入ったのも、幼い時からずっと阪神淡路大震災の話を聞いてきたことがきっかけだ。

気が付けば防災を勉強したいと思うようになっていた。環境防災科では色々な人に出会うことができる。

こういった出会いを大切にしていきたい。

そして、こうして当たり前のように毎日が過ごせているのは、あの日揺れから私の身を守ってくれた両親や、震災後ライフラインが使えなくて困っている私たちの面倒を見てくれた親戚の人たちがいたおかげなのだと改めて思う。そういった感謝の気持ちを忘れないでこれからも防災の勉強に励んでいきたい。

(2) 家の様子

17年経っても垂水には住んでいるが、両親から体験談を聞いた後、改めて周りの様子を見てみると問題点が山積みだということに気が付いた。

震災直後は備えてあったという避難袋も、乾パンなどは賞味期限が切れかけていたので食べてしまっていた。懐中電灯も確認すると電池切れだった。実際使えるものといえばスリッパぐらいだった。このように全く使い物にならない避難袋となってしまっている。またタンスの上には物がギュウギュウ詰めにされておらず、家具の固定も見た限りされていない。緊急連絡先も私は知らない。

やはり 17 年経って意識が次第に薄くなっているように感じる。だから私はもう一度この「語り継ぐ」をきっかけに家族と防災について考え直していきたい。

(3) 語り継ぐ

私たちよりも下の世代は、阪神淡路大震災を全く経験していない世代になっている。だからといって、この震災のことを忘れても良いということには決してならない。

今年、私は初めて 1 月 17 日の追悼式に参加した。あの日から 17 年も経っているにも関わらず、

その場の空気は本当に悲しみで包まれていたように感じる。涙を流している人もいた。ろうそくの火を見ていると私の心も締め付けられる気持ちになった。この追悼式でどれほどどの月日が経とうとも災害で受けた傷が完全に癒えるわけではないということを思い知らされた気がした。それと同時に決して風化させるべきものではないと強く感じた。

だから、私はこれからもこの両親から聞いた体験や環境防災科の授業で学んだことを次の世代へ語り継いでいきたい。私が語り継ぐことによって、相手にどんな影響を与えるかはわからない。だけれども私が語り継ぐことで防災に興味を持つてくれる人が出てくるかもしれない。そして阪神淡路大震災や東日本大震災のような大災害が二度と起こらない社会に繋がっていったらいいと思う。

最後に父が「震災直後の人々はお互いが助け合っていた。恥ずかしいと思うことも笑顔でやってのけていた。」といった。私はこの言葉を聞いて、こういった人々の本来の優しさというものも次の世代へ受け継いでいきたいと思った。

語り継ぐ

中島 康

僕が生まれたのは震災が起こる 3か月前の 11 月だ。

僕が住んでいたところは西区の学園東町というところで、その当時はマンションに住んでおり、

家族構成は父、母、と僕の 3 人家族であった。

僕が住んでいたところは、あまり被害がなく生活する中で絶対必要な電気、ガスは止まらなかったが水道は止まったそうだ。僕と母は寝室で一緒に寝ていたけど、父はその日、住吉で徹夜して仕事をしていたそうだ。

1. 震災直後

(1) 摆れの最中（父）

当時の父は生協の情報システム部に勤めており、職場は東灘区の JR 住吉駅の北側にあるコープこうべのビルにある。

その日は、財務処理のスケジュールミスでデータに不都合が発生しており、前日から泊り込んで復旧作業をしていたそうだ。データを戻してコンピューターを動かしていた瞬間、急に体が浮いたと思ったらドスンと下に落ち体が横に飛ばされたそうだ。周りのコンピューターーやパソコンも横に飛ばされ倒れていた、そのあとも揆れを感じて立ち上がることができなかつたそうだ。この話を聞いただけでも、父がとてつもない揆れに襲われたこと、また震災の恐ろしさが伝わってきた。

(2) 揆れの後（父）

しばらくして揆れもなくなり立ち上がると、薄暗い中であったが、事務所は資料などが散乱し壁なども崩れ臭いにおいが漂っていて、何が起きたかわからなかつたそうだ。

当日は、父のほか 3 人で作業をしており無事を確認した後事務所から出て廊下にいくと、一方は壁が崩れて通路がふさがれて先に進むことができなかつたし反対側は階段への出入り口の鉄の扉が、くの字型に曲がり開けることができなかつた。

とりあえず 4 人は怪我もなく無事であったが、このまま脱出できないと不安になっていたが、状況から判断して地震が発生したことは理解できたそうだ。それだけ、突然に起こつたことだったということがわかつた。

外から「お父さん」と叫ぶ声が聞こえ、家族のことが心配になってきた。今のように携帯電話もなく連絡の手段がなかつたからである。誰であってもこの状況で一番心配なことは家族の無事だとおもう。父もとても心配であったし不安だつただろうと思った。

脱出するには窓から出るしかないと思い、但し、事務所は 4 階にあるのにどうすればよい

か思案していたが、幸い隣のビルと隣接しており窓の横にあるトイをつたってビルに移ることができ、無事外に出ることができた。

後で知ったのだが、ビルの1階部分がつぶれて実質3階建ての状態になっていたのが幸いだったそうだ。

もしかしたら父が死んでいたかもしれないと思うとぞつとした。今こうやって生活できているのも父のおかげだし父なしの生活はとても今となっては考えられない。本当に生きていてくれてよかったですとおもった。

2. 外の状況(父)

父はビルから出て周りを見ると、倒壊した家があり悲惨な状況であった。

職場のビルはL字型をしているのだが、その一辺が崩れ落ち残ったほうの事務所の中が丸見えになっていた。

後で知ったのだが、倒壊した方にいた顔見知りの守衛さんが亡くなっていたそうだ。

事務所がそちらにあれば、私たちもこの世にいなかつたかもしれないと聞き、事務所がつぶれたほうになくてよかったです。

今度は家族が心配になり、この状況を見ていると不安でたまらなかったそうだ。

電話をするために駅に向かい公衆電話から電話をかけたが家にはつながらず、親の家にもつながらなかったそうだ。

あの時は職場のことよりも家族の事しか頭にはなくとりあえず家に帰ろうと思ったそうだ。

そこで他の3人とはお互い無事であることを祈り別れることになった。

家に帰るのはよいが、手段がなかった。電車は動く気配もなくタクシーやバスも見当たらなかった。

僕の家は西区の学園都市にあるのだが、父は歩いて帰ったそうだ。住吉から学園都市はとても遠く歩いて帰れば半日以上かかる距離である。それだけ家族のことが心配だったということがわかった。

国道を西へ向かって歩き始めたが、周囲はさらに悲惨な状況であった。

家は倒壊し煙が立ち込めていた。家の様子をうかがっている人や何か叫んでいる人、途方に暮れている人などさまざまであったそうだ。

このまま歩いて帰ると何時になるのか不安であったので、車が何台か走っていたので思わず手をあげて乗せてもらおうとおもった。すぐにワゴン車が止まってくれたが、行き先が灘であったため、乗らずに歩くことにした。すぐに止まってくれたのはとてもうれしかったといっていた。

こういう状況なので、みんな大変であるが優しさに触れた感じがして頑張って歩くことができたそうだ。

こんな状況だから止まってくれたと思った。この車の人は自分も大変な状況なのに人の事も考えられるすごい人だと思った。でも、もしかしたらみんな一人一人が助け合わないと

いけないという事がわかっていたのかもしれないと私は思った。

ようやく三宮近辺にきた。高層ビルの立ち並ぶ都會とは思えない状況であり電柱が倒れ高圧線がくねっているのを見ると、通行するのが怖くなつたといつてはいた。

近くのコンビニの公衆電話で家に電話したら、無事であることが確認できた。この時どれだけ不安から解放されたか計り知れないと思う。とりあえず家族が生きていてくれたらこれから生きる望みがあり頑張れると思う。

連絡がとれた頃にはちょうど昼ごろだったそうだ。

不安が解消され、気分的にも楽になりまた歩き始めた。道路の陥没や総合病院の倒壊など見るものすべてがこの世の出来事なのか疑いたくなる光景で、戦場とはこういうものなのかなと思ったそうだ。

特に長田区はすごかった。

倒壊以外に火の氣や黒煙が立ち込めサイレンの音が鳴り響いていた。

叔父が長田区に住んでおり、心配だったので立ち寄ることにした。

全員無事でよかったです、家の中は割れた食器が散乱し外壁もひびが入っていた、朝から何も食べていなかつたのに気づき、パンを頂きまた歩き始めたそうだ。私も長田区の家に行ったことは何回かあり木造でできている部分もたくさんあり、特に被害がひどかった長田区で全員無事だということはとても奇跡に近かつたと思う。

無事の確認は取れていたが、両親が須磨に住んでいるので様子を見に行くことにした。

幸いに食器などの散乱もなく安心した。あとで分かったが屋根瓦がずれ落ちていたようで、後日修理ができるまでブルーシートをかけるのを手伝ったそうだ。

ようやく我が家に着いたのが夕方であった。

妻と二ヶ月になる僕と無事に会えて安心できた。

こんな長い一日は初めてであり、そして二度と忘れる事はないだろうと思った。いや忘れてはいけないと思ったそうだ。僕も父から震災の事を聞いたことは何回かあったけどここまで詳しく聞いたことはなく知らなかつたことがたくさんあり、少し驚いた。僕も父から聞いたこのことを忘れずしっかりと心に留めておきたいと思った。

3. その後の状況

父が夕方近くに戻ってきた時、体は砂ぼこりにまみれていたそうだ。幸いマンションのタンクの水が残っていたため、水が出ていたので風呂を沸かして入つたそうだ。家族が無事であったことに安心できたが、神戸の町が壮絶な状況になっていることを知って悲しみがこみ上げて來たと言つてはいた。そのあと水が止まつてしまい、水を溜めていなかつたので、その夜は大変であったそうだ。

次の日に水道がとまつた。近くの中学校の水道は水が出ているという噂を聞いたので、もらいに行くことにした。その時丁度、隣の人がバイクで水を貰いに行くところだったのでいつしょに便乗させてもらった。普段はあまり会話することはなかつたが、それ以降親しくなつた。

3日目からは水も出るようになり、ライフラインは復旧したそうだ。復旧していない地域に住んでいる父や母の友人や職場の同僚がお風呂に入りに来たそうである。通勤にも時間がかかりトイレや休憩の中継地点として僕の家を利用してもらったそうである。

親戚や知り合いから食料や水を送ってもらったが、水は幸いにもすぐに復旧したので水の出ない叔父の家に配達したそうだ。

父はあの状況を見ていたので、仕事はしばらく休みだと思っていたが、職場から安否の確認と出勤依頼があった。

次の日から、仮説の事務所を設けて、今後の対応の検討が始まった。

そして、壊れてしまったコンピューターと失ってしまったデータの復旧作業に3ヶ月間没頭したそうだ。

4. 当日の母

あの日いつものように2ヶ月になる息子とぐっすり眠っていたそうだ。

夫が仕事のトラブルで帰えられないことは知っていたので二人で寝ていたが、あの揺れには驚いてすぐに目を覚ましたそうだ。何が始まったのかわからなかったが、すぐに起きて揺れが収まるのを待って、僕を抱いてすぐに外へ出たそうだ。

家は3階建ての低層住宅で部屋は2階にある。あたりは薄暗く静かで周りで騒いでいるわけでもなく、いつもと変わりなかったそうだ。しばらく外にいたが、誰も出てこないので家に戻ったそうだ。後で知ったのだが、部屋に戻った後、他の住民は外へ出てきたそうだ。

その時は、こんな惨事になっているとは、夢にも思わなかつたそうだ。なぜなら、あの揺れであったがリビングに置いてあつたぬいぐるみが1個落ちただけであったからと言っていた。

ようやくあたりも明るくなり、起こった状況が認識できるようになってきた時に、よく見ると、寝室のたんすの上に置いていた天板がずり落ちかけていた。一步間違えれば、私たちの顔面に落ちていたかもしれない。　冷や汗を搔きながらも、息子を抱いて震えたことは未だに忘れないと言っていた。この話を聞いてとてもぞつとした、もしかしたら私がこの世にいなかつたかとおもうと。

5. その後の母

買い物に行くが、商品はなくなっていた。当時は、駅にあるスーパーだけであった。

親戚や知り合いから食料や水を送ってもらい粉ミルクを貰ったのがうれしかつたそうだ。

震災がおこつてから、祖父、祖母が姫路から僕たちの家まで物資などを届けてくれたと聞いた。

私の家までは普通1時間くらいでつくのに3時間もかけて届けてくれたそうだ。

母はなにかボランティアをしたかったけど、まだ生後2か月の僕がいたのでなにもできずただただ

テレビのニュースを見て泣いていたそうだ。もし僕が母の立場にいたとしても自分は何もすることができないということに腹が立ち泣いていたと思う。

6. 環境防災科にはいって

僕が環境防災科に入ったのは、消防学校体験や消防士の体験、など消防士に関わることが多く、僕の将来の夢が消防士なのでこの学校に入りたいと思った。入学してからは外部講師のお話や、校外学習に行ったり、阪神淡路大震災のお話も聞く機会がたくさんあった。この聞いた話はしっかり頭に記憶し次の世代に伝えていかないと無意識に思った。前までの自分だったら、自分でいいや、と思う考え方でしたが高校生になり、環境防災科に入り誰かに伝えなくてはという感情がふつふつと沸いてきた。環境防災科に入学してからは、消防士関係だけではなくとても貴重なお話を聞けたり、体験したりできとても将来の夢に生かせるとことばかりでした。この環境防災科で学んだことは将来絶対役に立つと思うし、自分でなくたくさんの人々に知ってもらいたいと思う。

また昨年起こった東日本大震災のボランティアも環境防災科でいかせてもらうことができた。学校のクラス全員で東北にボランティアにいくなんてなかなかできることではないと思う。学校の先生も企画したり大変だし、地域の人たちから支援してもらったりしたと聞きました。たくさんのひとが影で支えてくれているから東北にボランティアにいけたと思っている。実際、東北にボランティアに行きたくさんの貴重な経験ができた。正直本当に役に立てるのかと思っていたが、現地の人から私たちが活動したことに対して「ありがとう」をたくさんいってもらい、とてもうれしかったし、少しは役に立ったと思った。今回のボランティにいったことの教訓などを次世代の人々に伝えていきいろんなことを学んでほしいと思う。

7. これから

僕の将来の夢は消防士だ。消防士になったら日本はもちろん世界の災害でも活動したいと思っている。

今回のボランティアを通してより一層消防士となり、被災者の救助活動を行いできるだけたくさんの命を救いたいと思っている。

また、防災・減災をするために、広報活動を通して伝えていきたいと思っている。自分が知っていることを伝えまた想定外をも頭に入れて行動したら今回みたいな未曾有の被害は出ないと思う。

私は社会のため少しでも貢献できるよう努力していきたいと思っている。

「震災の記憶」

南雲 梨沙

1. 私の記憶

私は震災当時まだ5ヶ月。震災の記憶は何一つとして残っていない。
今まで17年生きてきていろいろなところで震災を経験した最後の子供たちと言われてきた。

しかし自分たちは経験したけれども記憶がない。それは経験していないのと同じではないかと思う部分がある。

それでもこの阪神淡路大震災を風化させないためにこれから震災を経験していない世代に伝えていかないといけないと思う。

このあの記憶は家族の記憶になるが私が文章にすることによって次の世代へ語り継いでいきたい。

2. 1月17日

(1)揺れの最中

“ゴー”という地鳴りの音からあの悪夢は始まった。
私はその当時、尼崎の園田というところに住んでいた。
地面が持ち上げられたような感じがしたかと思えば、いきなり激しい横揺れが始まった。

私は生まれて5ヶ月、タンスのある部屋で眠っていた。
母は揺れを感じ私をとっさに抱きかかえようとしたが揺れの激しさと怖さで動けず四つん這いになり私の上に多いかぶさり物が落ちてこないよう守ってくれた。
父は目が覚めたが何が起こっているのかわからなかった。
その時父は戦争か何かが起ったと思ったそうだ。
揺れ初めは布団の中で頭を守ることしか考えられなかった。
隣の部屋で私と母が寝ていたがそのときは全く頭になかった。揺れが収まってからふと気が付いたらしい。
頭のすぐ横にブラウン管のモニターが落ちてきて壊れた。あと数センチずれて布団を敷いていれば危なかつただろう。
冷蔵庫が横揺れでスライドしました元の場所にすっぽり収まるのを見たらしい。

(2)揺れの後

ライフラインはもちろんすべて止まっていた。
揺れが収まったものの1月なのであたりはまだ暗く、車を持っていた人がヘッドライト

トをつけて外の状況を確認していた。
住んでいた建物は比較的新しかったので大きな損害はなかった。
暗闇の中、何度も強い余震が起こった。
日が昇るのを待ち、寝室を見渡してみるとタンス類は倒れはしていなかったが、かなり前に出てきていた。
リビングでは幸いにも食器棚から食器は出ていなかったがパソコンが落ちておりその小さな破片などが散乱していた。
寒かったので社宅の人と外で火を焚こうと思ったが周りがガス臭く怖くてつけられなかつた。

3. ライフラインと食糧

(1) ライフライン

ライフラインはすべて止まった。震災から2日でまず電気が復旧した。
しかし水道とガスは全く目途がつかなかった。
お風呂や洗濯など大人ならしのげても赤ん坊には無理だったがどうしようもなく途方に暮れた。

(2) 食糧

家には食糧の買い置きが少しだけあった。
しかしこのようなこの先どうなるのか目途がつかない状態で買い置きだけでは到底足りなかつた
母は地震の怖さから母乳の出が悪くなりミルクに頼らなければいけなくなった。しかし水は出ない。
ご近所の方が私がいることを知ってペットボトルの水を分けてくれた。
母は涙を流した。

4. 祖父母の家へ

しばらくして川西市に住んでいた祖父母と連絡が取れ、祖父母の家はほとんど被害がないことがわかつた。
両親は水が出ることを確認して移動を決断した。
移るときにご近所さんの電話番号を聞きその後の状態を教えてもらえるようにした。
祖父母の家に行ったものの母はちょっとした音が地鳴りの音に感じたり、眠りが浅くなり熟睡できず辛いときがあつた。

母は実際そこではじめてテレビをみた。

画面に映っているものは別世界の話のようで淡々と見ていた。

火事で何もかも無くなってしまっている。家が倒れ、がれきにまみれた街。悪夢とはこのことだった。

5. 知り合いとの再会

震災からしばらくたって母は被害のすごい地域に住んでいた知り合いに会うことができ、その人の話を聞くことができた。

街を歩いていると今までの風景は全くなく自分が生活していた場所なのか、あまりにも変わりすぎて愕然とし、そして時間が経つにつれ何とも言えない空気が漂っていたそうだ。

そのときはこの先どうなるかという不安ばかりでおしつぶされそうだったとも言っていた。

町はほぼ焼野原と瓦礫に埋め尽くされていた。

避難所での生活は本当につらいものだったという。

トイレは水が流れないため悪臭を放っていた。

プライバシーなど関係なかった。みんな気を休められる時間などなかった。

1月の体育館はとても冷えたが、毛布も一人一枚あるわけではなく体調不良になるお年寄りの方がとても多かったらしい。

県外からの支援物資が届いたときには被災者全員の顔から安堵の表情がうかがえた。

6. 社会の反応

父は震災時の勤務先が大阪の東の方だった。

震災当日は会社になかなか連絡が取れず公衆電話に並び何度も電話をした。

昼前にやっと連絡が取れたときには上司に「なぜ連絡してこない」と理不尽に怒られた。

父はこれでクビになるなら仕方ない。今は命優先とずっと思っていた。

父は震災の翌日から出勤した。

震災翌日も連絡が取れなかつたことに対する風当たりは強かった。

勤務先は全く何事もなかったように一日が進んでいた。

父の会社の支店長は社宅のあった住吉区で被災し、社宅は全壊した。

会社まで出勤するのに丸1日かかったという。

そこまでして出勤させたいかと父は疑問におもったらしい。

大阪の東の方では震度3程度だったので、ニュースでは阪神淡路大震災を見ているが実際の恐怖感というものは共感してもらえない。

震災当日、出勤できないということに関して大阪に住んでいる社員には今一つ緊迫感が

伝わらなかった。

神戸方面在住の人間との温度差は相当あった。

「なんで出て来られなかつたのか」的な雰囲気が流れていたらしい。

水道、ガス、電気も普通に使えた。

水や食料品といったものについても買付騒ぎのようなものは全く起きておらず隣の都市とは思えない感じだった。

多少の買いだめはみんなしているようだったが奪い合いになるようなことは全くなかった。

すべてが他人事のようにほかの県では日常がながれていた。

7. 小中学校での防災教育

(1) 小学校

私が初めて防災について勉強したのは小学生のときだった。

私の通っていた西須磨小学校には震災資料室という部屋があった。

その部屋には5時46分で止まった時計、避難所になっていた体育館の写真や震災直後の町の写真などが多く置いてあった。

小学1～3年のときは何も考えずにそれらを見てきた。

しかし小学4年生のときに授業で親の震災体験を聞いてくるという宿題が出た。

人生ではじめて親の震災体験を深く聞いた。

その話をしてくれているときの母の泣きそうな顔は今でも忘れられない。

その時まで避難訓練は授業がなくなってラッキーと思って真剣にやっていなかつたけれど、

この行事は真剣に取り組まなければいけないと思った。

(2) 中学校

中学校では毎年震災メモリアル行事があり、避難訓練、消火訓練、バケツリレーなどを行っていたそのような訓練を行つて人と協力することが災害時には一番大切だと思った。

1月17日には新長田駅の前の広場での震災追悼行事で「しあわせ運べるように」を歌っていた。

私はその新長田での追悼行事に毎年参加した。

私たちの歌を聴いて涙を流した方々が多くいた。

震災当時長田で被災されたおばあさんとお話しすることができた。

おばあさんは私たちと同じ年のお孫さんを震災で亡くしたと言っていた。

「阪神淡路大震災は年月とともに風化されている気がする。しかし私も含めて被災者の方々は一生消えない心の傷を持っている。」

この震災は絶対に風化させてはいけない。これからはあんたたちが後世につなげていくんやで。」と

涙ながらに言われた。

自分には震災を語り継いでいく義務があると強く思った。

8. 環境防災科に入って

私は中学3年生の進路選択の時に災害救助犬の訓練士になりたいと思っていた。
だからどうしても防災の勉強がしたかった。
外部講師の先生の話を聞いたり、校外学習に行きもっと防災について学びたいとすぐに感じようになった。

(1) 東日本大震災

2年生の5月に東日本大震災の復旧ボランティアに行かせてもらった。
実際に津波で流されたまちをみると涙が自然と溢れてきた。
被災された家の泥かきを主に行った。テレビ等で被災地の現状を知った気でいたがそれは大きな間違いだったとすぐに気付かされた。
マスメディア等で伝えられていたことはほんの一部にすぎなかった。
映像や紙面ではヘドロのにおいなどは全く伝わらない。
被災者の方に話を聞くと、テレビなどで取材を受けた時本音は言えないと言っていた。
せっかく善意でやってくれていることに文句など言えないと言っていた。
東北の学校の先生は千羽ヅルはうれしいが置くところがなくて正直困ると言つていった。
芸能人が学校でのサプライズライブをやってくれるのは生徒はとても喜ぶが、先生たちはその用意をするのに時間と労力がかかるので少し迷惑だったと言っていた。
最近では東日本大震災のニュースはほとんど流れていない。
震災から何年という節目の年に特番などで思いだしたかのように流すのではなく、毎日少しの関連したニュースでもいいから流すことが大切だと考える。

(2) ネパール訪問

私はこのネパール訪問に参加することによってもう一つ夢が増えた。
発展途上国に行って防災を広げていきたいという夢だ。
私は2年生の夏休みにネパール訪問に参加し、発展途上国の防災や建物について学んだ。
ネパールに行って最初に驚いたことは壁のない家に住んでいる人がいたことだ。
災害が来た時にネパールの建物のほとんどは全壊してしまいそうな造りだった。
ネパールには建築基準法のようなものはない。
7日間滞在したけれど大災害が来た時に安全に避難できるような場所はカトマンズ市内以

外に見受けられなかった。

こんなところに大災害がきたら多くの犠牲者ができるることは目に見えて分かった。

ネパールは衛生面がとても悪い。

日本のようなきれいな水はほとんどない。

私もシャワーの水が少し口に入ってしまっただけでおなかをすぐ壊した。

水は雨水を貯めて使っていたので雨が降らなければ生活していけない。

発展途上国は大災害の後に二次災害としてコレラなどの感染症がはやる可能性が高い。

そういうことを早く把握してその状況を開拓するために支援することが先進国の役割だと考える。

9. これから自分

語り継いでいくということはとても難しいことだ。

自分が実際に経験していないことを人に確実に伝えることは不可能に近い。

私はこの語り継ぐを書くにあたって知らないことを書くことの難しさを知った。

わたしは将来災害救助犬の訓練士かセラピードッグの訓練士になりたいとおもっている。

この環境防災科で学んだことを生かしていきたいと思っているからだ。

ほかにも発展途上国に防災を広げてみたいという夢もできた。

私はこのふたつの夢をかなえるために精一杯生きていきたい。

長い、ながーい1年間と少し。

西江 真友子

1、だいちゃん

彼は今高校2年生。私の愛する息子の1人。家族のみんなと素敵な彼女もいて毎日楽しく生活している。だいちゃんは一家のとっても頼れちゃう長男なのだ。そんなだいちゃんが生まれたのは1994年11月12日。この子が生まれてきてくれたのは、あの日の2か月と5日前。とっても元気な赤ちゃんだったのを今でも覚えてる。でも、この年は誰もが忘れる事のできない衝撃的な出来事があった。1995年1月17日午前5時46分。そう、阪神・淡路大震災があったのだ。

2、ゴゴゴ・・・って、ブルドーザー・・・！？

震災当時、私たちは東須磨にあるアパートの2階に住んでいた。私と旦那、そして生まれたばかりのだいちゃんの3人だった。冬も深まりインフルエンザなどが心配になってきた頃、旦那が風邪をこじらせてしまった。まだまだ小さくて手のかかっちゃうだいちゃんには些細な風邪も大ごとになりかねない。そう思っていつもと寝る場所を変えたの。いつもは私と旦那が同じ部屋で寝て、隣の部屋にあるベビーベッドにだいちゃんが寝る。でもその時は私とだいちゃんが一緒に寝て、ベビーベッドのある部屋で旦那が寝る。いつもと違うことをした日に限って何か起きたりするものね。

部屋を変えてから2,3日がたったある日の早朝、言葉では言い表せないような衝撃で目が覚めた。最初は暗いし、何が起きたかも分からなかった。ものすごい揺れと音が鳴り響いてて、立てるような状況じゃなかつたのは覚えてる。ただ小さいだいちゃんを覆いかぶさるように抱きかかえて必死に叫んだ。あの時は地震なんて概念が無かったし、誰かにブルドーザーで家を壊されてるんじゃないかと思って「やめてーっ！ 壊さんといでーっ！！」って必死に叫んでた。

揺れが収まってから旦那が「大丈夫か！？」って言いながら私たちがいた部屋に来てくれた。とりあえず外に避難しようとしたけどタンスやら食器棚やらが倒れたり、破片とかが床に散らばっていて危なかつたから旦那が玄関に行って靴を取ってきてくれた。その日もすっごく寒かった日だったし、パジャマだけじゃ寒いから着れるもの全部着込んだ。だいちゃんは私たちのジャンバーにくるんだのを覚えている。そして家族3人で自宅を出たんだ。

3、…

家から出できたら、辺りはまだ真っ暗。とにかくアパートの2階から階段を降りて下に行った、はずだった。なのに、唯一の頼みの綱である階段が壊れてた。これじゃあ下に降りれない…、どうしたらいいんだろう。こういう時、人の力ってすごいと思った。近所の人たちがね、近くの壊れたブロックとか瓦礫を持ってきて、積んでくれたの。階段みたいにね。あの時は必死で、正直どうやって下まで降りたかは分からない。と、言うよりも覚えてないかな。近所の人たちの協力もあって何とかアパートからの脱出に成功したんだ。この時はまだ暗くて気づかなかったけど、うちのアパートは斜めに傾いててほぼ全壊だった。ほんとにみんな無事でよかった。

4、現実ってたまに信じられなくなるよね

とりあえず家から出できたけど、周りのこともよく分からないし、近所の人たちと一緒に近くの小学校に避難した。暗いちは本当に訳分かんなくて不安だったけど、とにかく避難しようってことになった。当時は冬だったから明るくなるのも遅かったなあ。7, 8時くらいにやっと明るくなってきたら、いろんな事が一気に分かつてきただ。もうマンションは壊れてるわ、車はひっくり返っているわでとにかくメチャクチャだった。うちが住んでいた住宅はほぼ全壊、板宿の実家は半壊程度。

避難した小学校が自家発電をしていたおかげでテレビは見ることができて、みんな気になるからってずっと付けっぱなしになっていた。そのおかげで地震とか、いまどういう状況下にいるのか、とかは結構すぐに分かった方じやないかと思う。今でも映像でよく流れるって言ったら良くないけど、長田の火事とか三宮の兵庫県庁の辺りの映像を見たときはホントにショックだった。「もう神戸はアカンな」ってホンマに思つたし、気持ち的にも辛かった。でもだいちゃんが居てくれたからやってこられた部分って思った以上にあって、あの時は本当にあの子に助けられてた。だいちゃんも小さいし、このままじゃ不安だったから板宿の実家まで避難することになった。でも実家の方も半壊状態で片づけもあったから、そっちが一通り落ち着くまでの間だけそこの小学校にお世話になることになったんだ。

5、小学校の体育館って大人になると珍しいよね

避難所にいるときだいちゃんはほとんど泣きっぱなしだったなあ。普段慣れていない場所にいるからか、知らない人に囲まれているからかどうかは分からぬけど、だいちゃんなりにも不安だったんだと思う。でもあんなに体力が持つのかっていうくらい朝から晩まで泣きっぱなしだった。これが家ならいいんだけど、避難所だし周りの人の迷惑

にもなつちやうから、ずっと抱っこして母乳をあげてたなあ。でも、その避難所には小さい子がだいちゃんしかいなかったから、声をかけてくれたり心配してくれたりと、周りの人たちがすっごく良くしてくれた。今思えば、あの頃のだいちゃんは母乳とかの飲みすぎでとってもぼっちやりしてたなあ。本当にあの避難生活はきつかった。実家が大方片付いたのが、地震の日から3日後、1月20日。その日から私たち3人は板宿の実家に避難しに行ったんだ。

6、父さんってこういう時ものすごい力を發揮する、と思う

実家に避難して新たな生活が始まるとほぼ同時に、旦那も会社に通勤するようになつた。たしか地震の3日後から再開したんだつけな。不幸中の幸いか、職を失うってことは無かつた。って言つても、勤務先は兵庫だから2,3時間かけて歩いて通勤。もちろん電車なんか復旧してないんだから、当たり前っちゃあ当たり前か。でもあの時期はほとんどみんなが、徒歩通勤をしてた。すっごく苦しかったし、家は全壊しちゃったけど、職を失ったわけじゃない。ほんとにそこは助かったと思う。旦那は大変だったと思うけど、すごく感謝してる。仕事の負担はもちろん、急激な生活の変化に慣れるのには時間がかかったんじゃないかなと思う。でも過去のことだからかな、神戸はけっこう復興が早かったんじゃないかなって思う。

7、いたやどライスじゃなくてライフです

板宿の生活は困難を極めたな。ライフラインが全部止まっちゃって、大変だった。電気は1,2週間で戻ったけど、水とガスはずっと駄目だったなあ。特に水！赤ちゃんは清潔にしないといけないし水をたくさん使うんだよね。給水車でもらってきた水をカセットコンロで温めて、タライで産湯に入れてあげなくちゃいけないから。あと赤ちゃんは洗濯物が多いから、自分たちはできるだけ汚さないように、洗濯しなくていいように裏返したりと、工夫して頑張った。でも本当に困ったのはオムツ。あの時期は紙オムツが市場制圧してなくて、布オムツもけっこうあった。それに布オムツのほうがオムツ離れが早いからっていうのと、初めての子だからってことで、曾おばあちゃんが手縫いで一つ一つ縫ってくれたんだよね。

という経緯からだいちゃんは当時、布オムツをつけていたんだ。それが逆に障害になつちやつた。布オムツだってそんな頻繁に洗えないから、オムツが無くなつちやうかもしれないという事態に陥つた。そしたら、小学校で避難生活をしていた時、お世話になった避難所運営の方が紙オムツを待つてくれた。板宿まで。粉ミルクと瓶詰の離乳食も一緒に、一年分位。私たちが実家に避難してからも、ずっと気にかけてくれたらしい。赤ちゃんはだいちゃんしか居なかつたもんだから、そこに支給さ

れたベビーグッズは殆ど全部持ってきてくれた。本当にあの時は助かった。人の力、つながりって凄いんだなってつくづく思った。

両親の家に避難してからも相変わらずだいちゃんはよく泣いたなあ。曾おばあちゃんとか近所の方々が、忙しい私の代わりに面倒を見てくれた。抱っこしたり、母乳がちゃんと出るようにお母さんにも栄養がいるって、いろんな物を差し入れしてくれた。そういう些細なことが精神的にものすごく支えられた。すごく不安になったりしたときもあったけど、親がいてくれたから頑張ってこれた。親の力ってホントにすごい。

8、私たちの空間ってドコにあるんだろ、ね。

板宿に避難して、親もいて、家も親のだけあって、切羽詰まってヤバイ！！っていうのは無かった。でも、贅沢かな、自分の、自分たち家族3人だけの空間がほしかった。ワガママかもしれないってわかってる。どんなに小さくてもよかつた。でもそんな願いもなかなか叶わなかつた。とにかく家探しは難しくて、足元を見られてるのかつて思うくらい高いんだ！これが。みんなが欲しがるし、物件数はそんなに多くないから、どんどん値段が上がっていったんじゃないかな。○万円くらいの物件が○十萬円になってる感じ。絶対そんなに価値無いでしょ！ってツッコミを入れたいくらい。こんなんだから、神戸じや家は探せないような状況だった。

西へ西へ移動して家を探している中、高砂の知り合いの親戚（？）の大家さんの親切心で、ちょっと小さかったけど不便はない家に住むことができたんだ。それが、1995年の4月8日、板宿の両親の家にお世話になったのが大体3か月だね。やっと私たちの生活ができるって思ってホントに嬉しかった。私の知り合いによれば、仮設住宅もなかなか取れなかつたらしい。

そこから、運良く7か月後の11月8日に垂水の復興住宅に当選→引っ越し。だいちゃんが1歳になる前にちゃんと神戸に戻ってくることができて良かった。ホント、ラッキーだったよ。その家には13、4年位ずっと暮らしてて、その後いま住んでる家に引っ越ししてきたんだ。

9、元気が取り柄なんです、だいちゃんです。

ふにゅふにゅでとっても小さかつただいちゃん。よく泣いたのはだいちゃんなりに異常事態を感じ取って不安だったからじゃないかって、今は思う。でも、よく泣いたけど病気は一切なかつたなあ。

病院には、あの時期だったら3月に3か月検診に行った位じゃないかな。本当は2月の予定だったんだけど、震災で忙しかつたんだろうね。いろんな病院で断られちゃつた。ずっと良くしてくれたお医者さんがいたんだけど、やっとその人に診てもら

えたんだ。そしたら、「親はやつれるけど、赤ちゃんはぬくぬく育ってんなあ。」って言われた。まあだいちゃんを守るのに必死だったからね。

大人だけだと震災の後とか暗くなりがちだけど、だいちゃんがいて、成長するたびにみんなが元気づけられたんだよ。笑ったり、首が座るようになったり、寝返りを打ったり、ホント日々の成長が嬉しかった。同級生や知り合いを失って、辛かった。でも私はマシって言っちゃいけないかもしないけど、マシだったんだろうと思う。本当に「生きててナンボ」状態だった。

地震が起きた時、だいちゃんがいつも寝ていた部屋はベビーベッドの上にタンスが倒ってきて、壊れてる感じだった。もし、旦那が風邪をこじらせてなかつたら…。想像しただけで恐ろしいって思う。不幸中の幸いってヤツかな？風邪菌に感謝なんていふもはしないけど、この時だけは感謝したな。

10、ずっと・・・

こういうこともあってだいちゃんは今も元気に一家の長男をしてるんだ。あの時はいろんなことが一気に起きて、大変だった。でも震災を乗り越えて頑張ってきた私たちやだいちゃんなら、これから先何が起きても大丈夫じゃないかって思う。とにかく生きるのに必死だったあの時も、今ではすごい衝撃的な思い出になってる。いま東日本が震災で大変なことになってるけど、神戸が大変なことになった時も何とかやってこれた。だから東日本の人も大丈夫じゃないかな。どのくらい時間が掛かるかは分からぬけど、絶対元通りになれる。きっと私みたいに生まれたての赤ちゃんと生活して、心が救われている人もいると思う。子供の力って本人や私たちが思っているよりも大きいものだから。

生まれてきてくれてありがとう。今までだいちゃんに救われてきてるけど、これから先も何回だいちゃんに救われて、支えられていくんだろうね。本当にこれからのだいちゃんの成長が楽しみです。どんなに大きくなっても、母親の私からしたらいつまでたっても可愛い息子だなって思う。こうやって震災当時の話をすると、あの時のことを思い出して辛いけど、だいちゃんから貰ったたくさんの愛情も一緒によみがえってくるんだ。だいちゃんの母親でよかった。これからも元気で健やかに、たくましく生きてね。だいちゃんの成長を今も嬉しく思ってるよ。だいちゃんの将来がとっても楽しみです。どんな道を歩んで、どんな人たちに出会うのか、幸せなことも、辛いことも、あると思うけど応援してるよ。精一杯生きて、親孝行してね（笑）。孫の顔、ちゃんと見せてね。生まれてきてくれてありがとう。

母さんより

震災が起きて

8組 21番 仁科 彩夏

【私の誕生と父の事故】

9月26日に私が生まれて、3週間ほど後に父が通勤途中に事故に遭った。そして、鷹取の病院に入院した。母が病院に通うのが不便だったし、「整形外科でいいところがあるよ。」と医者に勧めてもらい、尼崎の病院に転院した。そこで手術をして入院していた。

母方の父母が豊中に住んでいたので、そこに兄と私を預けて毎日父の入院している尼崎の病院に通っていた。たまに外泊許可をもらえたので、父も一緒に神戸にある自宅に帰つて一緒に泊まった。

【地震発生】

地震のあった1月17日の前日まで父は外泊許可をもらっていたので、家族で神戸にある自宅に帰ってきた。

震災の前日の日に父はまた尼崎の病院にもどり、母と兄と私は豊中の祖父母の家に帰った。すると、次の日の朝方、地震が起こった。ものすごい揺れだった。

「神戸におらんかったから助かってんで。だから生きとってんで。」と母は言う。余震などの揺れが続いた頃、母方の祖父が「彩ちゃん押し入れに寝かしどき。その方が安全やわ。」といって、私はずっと押し入れで寝ていたそうだ。

【震災時の父】

父は震災が起こったとき足の骨を骨折して立つことができない状態のまま寝ていた。そして激震が起り、飛び起きた。父は大部屋で寝ていた。ベッドが6つほどある部屋だ。信じられないほどの揺れで、部屋にあるキャスター付きのベッドは、右往左往にあちらこちらに動いていたそうだ。

そして、南棟のガラスが次々とバリバリ音を鳴らして割れていった。病院の床や天井は割れ、「こらアカン。死ぬ。」父はそれしか頭になかったそうだ。激しい揺れは続いたが、どうにか命は助かった。

【病院の様子】

父は車いすに乗り病室を出て病院の状況を見に行くと、皆怪我をしていたり、家族や友達に電話をかけていたりしていた。

ふと、窓の外を見ると、ガソリンスタンドは大炎上していた。病院の正面の方へ行ってみると、次々とキャスター付きのベッドで搬送される人で溢れかえっていた。

火災が起こった際に天井から水を出す消火設備のスプリンクラーが作動し、床じゅうが水浸しになっていた。そこへ次々と死んだ人や、大けがを負い血まみれの人、そのまま靈安室へ行く人が続出していた。

父が患者同士で話していると、自分の家が半壊や全壊して、住む場所がなくなった人がいた。電話で祖母が死んだと泣きじゃくっている人もいたそうだ。他に周りから聞こえる電話の声は悲痛な泣き声や嘆き、そんなものばかりだった。それはもう修羅場としか言いようがなかった。

そんな状況だった当時、交通は麻痺しており、入院患者に食事を届けることができずに、おにぎり一個、パン一つ、そういう日が何日も続いたという。

これだけ被災した病院だが、病院にいるよりも、神戸の自宅にいた方が父の命は助かつていなかつただろうと母が話す。

足が折れているため、身動きは取れず、上からモノが落ちてきても避けることができない状態だったからだ。もし、自宅にいたら父に逃げ場はなかつたのだ。

【自宅】

父方の祖父が、自宅の様子を見に行ってくれたそうだ。その自宅の様子は震災前と大きく異なっていたという。

重いステレオテレビは元の位置から動いていて、電子レンジは棚から床に落ちていた。上にあるものはすべて落下していた。食器棚にしまってあった食器も、ほとんど割れており、足の踏み場がない状態だった。

当時、私が寝るために使っていたベビーラックは台所にあった。だが、ベビーラックの上にも割れた食器が散乱していたそうだ。

もしも私が震災時にそのベビーラックで寝ていたら、おそらく食器棚の下敷きになっていただろう。ベビーラックに寝かせていなかつたとしても、ベビーチェアの上にも食器が散乱していた。ベビーベッドの上にも、モノが落ちていたそうだ。

【豊中でも地震が】

豊中でも揺れは起きた。食器棚は倒れ、皿はほとんど割れ、散らばっていた。

だが、豊中から愛知に引っ越しするということが決まっていたため、豊中の家にはほとんど荷物がなく、食器が割れたくらいで済んだのだ。

しかし、豊中にいて助かったものの、水道管は途中で破裂し水が止まった。そして、水道管の破裂しているところから水が噴水のように漏れていて、そこに人は皆並んでいた。私は飲ませるミルクをつくる水も得ることができたため、水道管の破裂は生活をするのに大変助かったらしい。

【偶然】

もしも神戸にいたら、本当に家族全員が助かっていなかった。偶然、祖父母が豊中に住んでいたから助かったのだ。偶然にも父がこの時期に入院していたから、偶然、豊中から引っ越しと分かっており、豊中の家に荷物があまりなかったから…。“偶然”が重なって、私たち家族は助かったのである。

【関心】

私が阪神・淡路大震災の存在を知ったのは小学生低学年のときにクラスで担任の先生と勉強した時の事だった。先生に、阪神・淡路大震災の写真で有名なあの、高速道路からバスが落ちかけている写真を見せてもらったときは、とても大きな衝撃を受けた。その衝撃は今でも覚えている。私が阪神・淡路大震災が起きたことを知り、関心を持ったのは覚えている限り、それが最初である。

それから、小学校2年生か3年生ぐらいで自分の小さい頃の写真を貼ってアルバムのようなものをつくる授業があった。そのときに家にあったアルバムを見返していると兄よりも私の写真の方が少なく、「彩ちゃんの小さいときはちょうど地震があったからなあ。ちょっと写真少ないんよ。」と、母が言った。当時は震災があり、震災当時がどのような状況だったのか特に想像するわけでもなく、「へえ～」というふうにしか、あまり思わなかった。

他に深い関心を持った訳でもなく、当時の私は「自分が生まれた時にこんなおつきい地震あったんや…」程度であった。

【環境防災科の存在】

私が今いる、この「環境防災科」という存在を知ったのは中学2年生の時であった。確かに、親との三者面談の時に担任の先生に「舞子高校にこんな科があるよ。」というのを聞いた時だった。どうしてその科の存在を教えてくれただとか、過程は分からぬ。だが、担任に教えてもらったのは覚えている。

そこで私は環境防災科に何となく興味がわき、そこへ進学しようと思った。他に特に行きたいところもなかつたし、深く強い思いがあるわけでもなく、なんとなくそこへ決めた。中学三年になり、本格的に面接練習などが始まった。その時に、あまり詳しく知らなかつた環境防災科について、環境防災科の過去の活動や震災のことについて調べ始めた。すると、段々と環境防災科の良さや魅力が感じられ、「ここに進みたい」という想いが強まつた。

【環境防災科での活動】

無事、環境防災科に受かり環境防災科での学校生活が始まった。人生で初めての募金活動や防災の学習。入学するまでは震災や防災などを学ぶことに少し戸惑いや不安を感じていたが、ボランティア活動やそういった学習を重ねていくうちに、この学校に対しての誇りが尋常じやなく膨らんでいった。「この学科に入ってよかった」心からそう思った。そして、ボランティアに対する意欲や、震災などに対しての関心がとても深くなつた。

【阪神・淡路大震災との関わり】

一番深く関わりがあるのが、やはりこの環境防災科が設立したきっかけとなった阪神・淡路大震災だ。高校一年の時には『災害と人間』という科目で沢山の外部講師の方が来られて、阪神・淡路大震災当時の話を沢山聞かせて頂いた。こんな機会は中々ない。貴重なお話だ。そして当時の話を聞かせて頂いたとき、改めて「この震災では、こんなにも多くの方々が被災されて、こんなにも多くの方々からの支援を受けていたのか」と、ものすごく勉強になった。

二年生では自ら長田のまちを歩き、お話を聞き、当時の“ここには何があった”など、そういうものを自分の目で見て、自分の耳で聞いた。当時の長田の写真も見たが、すさまじいものであった。今まで見たことのない写真だった。当時被災された方から直接お話を伺つたうえでその写真を見たので、余計に当時の阪神・淡路大震災後の長田の情景を想像することができた。

【過去の自分と今の自分】

前述したように、私は正直あまり阪神・淡路大震災について詳しく知らなかった。だが、この環境防災科に入って震災関係に关心を持つようになり、道端でゴミを見つけたら拾って近くのごみ箱に捨てに行ったり、人が面倒でやらないようなことも進んでやるようになった自分がいた。明らかに過去とは違う自分がいた。そして、この学科に入って発表もするようになり、人前で話すことが大の苦手だった自分が、少しではあるが堂々と話せるようになった自分がいた。

二年生で、生まれて初めて「1. 17」の早朝の追悼式に行ってきました。テレビではよく流れていたが、自分の目で見るのは初めてだった。5時46分に黙とうをして、献花もした。その後、震災当時被災された方のお話を聞き、「しあわせ運べるように」を女性の方が歌っているのを聞いた。涙を流さずにはいられなかった。胸が痛かった。うまく言葉にすることができない、とても複雑で悲しい気持ちになった。

過去の自分はもしかすると、悲しい気持ちにはなっても「そんな被災体験をしたんや」ぐらいで、涙を流すことができていた自信はない。『しあわせ運べるように』も、被災された方々の気持ちになって歌えていた自信はない。小学生の時の私は、何度かしあわせ運べるようにを歌ったことがあるけれど、何も考えていなかったと思う。

ここまで、被災された方のお話に感情移入できること、しあわせ運べるようにの歌詞の意味を考えたり、考えようとしている自分になれたこと、これはきっと、というより確実に、環境防災科での経験や生活が変えてくれたのだと私は思う。

【伝えること】

二年生で、初めて学校外での発表をした。授業で自分がつくったパワーポイントや、参加したボランティアを終えての感想を言うような発表はあったが、見ず知らずのお客さんを目の前に発表するのは初めてだった。

まずは、母校の中学校で実際に東北の被災地に行った時の事を友達と一緒に二人で発表した。「お昼ごはんの後だし、きっと（中学生の）皆は寝るだろうな」と思っていた。私としては、だれか一人の生徒だけにでも何か伝わるものがあるといいな。そんな程度に考えていた。

だが、いざ発表すると中学生たちは、本当に真剣な表情で私と友達の発表を食い入るように聞いていた。感動した。そして、明石の図書館でも東北のボランティア活動について発表した。発表の対象は年配の方が多かった。発表をするときに思わず語り口調なつている自分に気が付いた。想いを伝えたくて仕方なかった。

その想いが伝わったのか、発表のあと、発表を聞いてくれていた方のうちの二人のおばさんが『貴方たちの発表、すごくよかったです。』『ものすごく感動して涙が出てしまいました。』『“人に伝える”っていうことは本当に大切な事だから、これからも、この素晴らしい発表で色々な人に伝えていってあげてくださいね。』そう言ってくださった。

こうして、自分たちの言葉で伝えて、心を動かしてくれる人がいる。そういう人の存在を知り、私は“いろんな人に伝えたい” そう思った。

【語り継ぐということ】

私はこの授業を通して、改めて親に震災当時のことを見た。覚えてる限りは話してくれたが、「もうこれ以上思い出せない」「もう大分前やもんなあ…。」と、言われた。こういう親御さんは少なくないとは思う。

これから、震災を経験していない子、過去の震災を知らない子、そういう子が増えていると思う。私が中学校へ発表しに行ったときに、私はそう感じた。「この子たちは震災を知らないんだなあ…」と。私も当時は生まれたての赤ちゃんだったから、何一つ覚えていない。

でも、震災を体験した最後の年の私たち。この学科に入り、様々な災害と向き合っている私たち。こうして色々な人に震災当時の話を聴いている私たち。そんな私たちには、“人に伝える義務”があるのではないかと私は思う。

上述したように、震災当時のことを見失かけている人もきっと増えると思う。そうなる前に私たちは知っているすべてのことを、しっかりと漏らすことなく沢山の人に伝えることが大切だと思う。常に災害と向き合う事、過去に災害で傷ついた人が沢山いること。人は一人では生きていけないから、助け合って生きている。震災は、その大きな証拠と言えるだろう。だからこそ、傷ついた人たちを無視しないように、ずっと傍で寄り添うために、伝える事は大切だと私は思う。

風化させてしまって、伝える人がいなくなってしまって、災害が起きたら…。伝える事で、過去の災害を語り継ぐことで、初めて知れる事は沢山あるし、傷ついた人々。亡くなった人々。そういう方たちと、ずっと支え合い、繋がっていけるように思っている。

だから、私は阪神・淡路大震災や東日本大震災について伝えていくことはもちろん、“伝えることの大切さ”も様々な人たちに広げていきたいと思う。

阪神・淡路大震災

野村 ゆず

はじめに

私の阪神・淡路大震災の体験のことを書きたいのだが、当時生まれて1ヶ月しか経っていないなかったため記憶がない。そこで、お母さんに聞いてお母さんの目線から語り継ぎをしたいと思う。当時から私の家族は朝霧に住んでいた。家族構成はお父さん、お母さん、お姉ちゃん、私の4人家族だった。震災後、家族は全員無事だった。

1、震災の朝

(1) 午前5時46分

震災当日の朝、生後1ヶ月しか経っていないゆづにミルクをやりリビングで新聞を読んでいた。いつもなら夫を車で駅まで送るのだが、この日は家で図面を書くと言っていつもよりゆっくりしていた。建築関係の仕事をしている夫はよく出勤前に図面を書くことがある。いつもなら寝るまでにぐずるゆづもこの日はすやすやとベビーベッドで寝ていた。

リビングで新聞をよんでいるとゴオオオーッというような音、地面が叫んでいるような音が聞こえた。えっ?と思うと同時に激しい揺れが突き上げてきた。わけもわからず揺られテーブルを掴むのに必死だった。前を見るとゆづが寝ているベビーベッドにガラス張りの本棚がスローモーションのように倒れていくのが見えた。私は這うようにしてゆづに覆いかぶさった。揺れがおさまり顔を上げると夫が体を張って本棚を止めていてくれた。ベビーベッドの横に図面台を置いていてため夫がすぐに本棚を止めてくれたのだ。たった数秒の出来事だったかもしれないが、私にはとても長く感じた。そしてこの後、私は悲惨な神戸の街を目にすることになる。

(2) 揺れの後

リビングは食器が散乱し、前日の夜に作った鍋もひっくり返っていた。足の踏み場もないほどぐちゃぐちゃだった。廊下には買い置きのシャンプーやリンスが散乱していた。私は急いで隣の部屋にいる順子を見にいった。「順!大丈夫か!?」私が部屋に入ると順子は寝ぼけてベッドの上に座っていた。「こっち来たら危ないからゆづと2人でベッド居るんやで!」そう言って私は寝ぼけている順子のベッドにゆづを置き、2人をありったけの毛布で包んだ。なんとか、家族は全員無事

だった。電気・ガス・水道は止まりライフラインが断たれた。電話が地震直後は繋がった。母の無事は確認できたがそのあとは、電話が繋がらなくなつた。母はタンスとタンスの間に空いた空間で生き残つたらしい。もし、どちらかのタンスが倒れるのが遅かつたらと思うだけでゾッとする。とりあえず、足の踏み場を確保するためにガラスなどを片付けていった。何が何だかわからないまま、何の情報もないままただガラスを集めていった。

2、昼

昼くらいになると電気がついた。テレビをつけると神戸の悲惨な状況が映っていた。これは何かの映画じやないのかと思うほど荒れ果てた神戸の街がテレビに映し出されていた。震源は淡路島だった。まさか神戸に地震がくるなんて思ってもみなかつた私は目の前の光景を信じることができなかつた。阪神高速道路が根元から横に倒れており、いたる所からの出火。ああ、神戸の街が燃えている。あの美しい街が燃えている。全てが嘘であつてほしい、悪い夢であつてほしいそう願いながらテレビから目を離すことができなかつた。外を見ると長田の方面から黒い煙が何本も上がっているのが小さく見えた。

夫が車を走らせて周辺の店を見に行ってもカップラーメンや水などは売り切れていた。「あかんわ。どこの店も何もないわ。道もでこぼこ盛り上がって通られへん。」車も道が盛り上がって進むことができずに1時間くらいで帰つて來た。その日は家にあるパンなどを食べて過ごした。

3、ライフライン

水は母が住んでいた野田通りのマンションでは出たのでそこに汲みに行った。夫と順子も何回か学校に汲みに行ってくれた。水がなくて一番困つたことはお風呂だった。4日ごとくらいにしか頭を洗うことができなかつた。体はタオルを濡らして拭いたりして過ごした。ゆずは流し台のたらいにお湯を張つて入れていた。赤ちゃんだったので毎日入れていた。電気が復旧すると電気ポットが使えたのでミルクを作ることができた。電気ポットが使えばお湯が作れるので助かつた。寒い季節だったので電気ストーブが使えることがありがたかつた。ガスは3月くらいまで復旧しなかつた。

4、1週間後

震災から1週間すると夫が仕事に戻ることになった。現場が大津だったので簡単に帰つてくることができず、ありつけの着替えなどを順子が使つていたガルスカウトの大きいリュックサックに詰めて行つた。泊まるところも会社が用意するから仕事に戻つてくれとのことだった。電車は動いていなかつたが西宮まで

出るとバスが出ていたので須磨まで歩いて行った。帰ってきたのは5か月後の5月くらいだった。夫が帰って来たころにはゆずは首が据わっていた。

洗濯などを母のところにするため野田通りと自宅の行き来になった。1週間くらい母のところに居ては片付けをしに自宅に戻る。しばらくそういった生活が続いた。順子も学校が午前中だけ再開したが、野田通りに居たためそこから通える学校に転校するか送り迎えをしてほしいと言われ毎朝、順子を学校まで送りそのまま自宅を片付けに行った。

1週間くらい経つと仕事の同僚が高槻から水やラップなどを送ってくれた。配達はできなかったので郵便局まで取りに行った。いろんな人からものを送ってもらったりで食べ物に困ることはなかった。本当にたくさんの人の支えてもらったと思う。

5、しばらくして

震災から少し落ち着いたのは4月の終わりから5月にかけてだった。順子も学校が再開していた。4月になると母の家より自宅のほうがガスの復旧が早かったので行き来する回数が少なくなった。5月になると夫も帰ってきた。家族が全員そろって家に居られることがこんなにうれしいことなのかとしみじみ思った。なんだかあっという間に時間が過ぎていったような気がする。

順子も学校に行っており、午前中はゆずと2人だった。テレビには焼けたあと長田の街が映っており、真っ黒だった。真っ黒な神戸の街を見るたびに涙が止まらなかった。あのきれいな神戸の街が真っ黒になっている。そう思うだけで心が痛んだ。しばらくの間テレビをつけることができなかった。

6、17年間

当時のこととは順子はあまり記憶に残っていないらしい。子供は嫌な光景を見ると忘れようとするのだろうか。大好きな神戸の街が燃えている光景を見るとショックだったのかもしれない。心に深い傷を負っていたのかもしれない。そんな順子も今年で30歳になる。立派な社会人として日々を送っている。当時おしめをしてミルクを飲んでいたゆずも今年は大学受験生だ。ゆずの成長とともに阪神・淡路大震災も年月が経っていく。3年前に県立舞子高校の環境防災科に入学し、3月11日に起こった東日本大震災の現地ボランティアにも行った。阪神・淡路大震災の記憶がないゆずが地震のボランティアに行きたいと言った。月日が流れしていくのは本当に早い。「阪神・淡路大震災の年に生まれた子」というのは一生ついてまわるだろう。20年経っても50年経っても私たちは震災を一生忘れない。忘れてはならない。これからどんどん震災体験者は少なくなっていく。既にゆずの1つ下は震災を体験していない。こういった「語り継ぎ」が大切な教訓

となっていくだろう。

あの日から人生観が変わったと思う。命があればいいと思うようになった。家族の大切さや子供たちの大切さを震災から学んだと思う。神様が教えてくれた気がする。子供たちには出会いを大切に生きてほしいと願う。どんな形であれ巡り合った人たちを大切にしてほしいと思う。環境防災科で学んだことをいろんな人たちに伝えていってほしいと思う。そして、自分の命を大切にして生きてください。

7、家族

私が生まれて5年後に妹が生まれ、5人家族になった。阪神・淡路大震災で学んだことや東日本大震災を知っていくうちに家族がどれほどかけがえのないものなのかということを知った。いつもはそこのいるのが当たり前。家に帰れば誰かが家に居て誰かが帰ってくる。そんな当たり前はないのだと思った。当たり前が当たり前じゃなくなる。日常から非日常へと変わるのはあまりにも早すぎて残酷だと思う。そんな非日常時に家族を守ることができるのだろうか。環境防災科で学んだことを生かして家族を助けられるだろうか。今のところ答えはわからない。実際に記憶がある中で大きな災害を経験したことはない。だから自分がそういう時にどういう行動をするのかわからない。でも、何もできないうちに大切なものを失いたくない。だから防災や災害を学んでいく。いざという時には自分の身は自分で守るしかない。今、できることは家族に学んだことを伝えていくことだ。いざというときに全員が自分を守れるように伝えていきたい。

8、しあわせ運べるように

小学校の授業で「しあわせ運べるように」という本をもらう。道徳や総合の授業で使ったりする。本には私の4つ、5つ上くらいの人たちが当時のことを書いた作文や阪神高速の写真や長田の写真が載っている。写真を見ると小学生ながらにショックだったのを今でも覚えている。写真から目を離すことができなかった。自分はいたけど記憶がない時間。あんなに悲惨なことがあることがショックだった。1月17日が近づくにつれて学校では阪神・淡路大震災のことを学ぶ。家に本を持って帰ってお母さんと当時のことを話したりした。ただ、すごかったのだとことしかわからなかった。それでも1月17日が近付くとなんだか気持ちが沈むのは今でも同じだ。その日は必ず家族で震災の話をする。当時の映像がテレビで流れると目が離せない。長田の街が燃えている映像や阪神高速が倒れている映像を見ると泣きそうになる。今の神戸の街からは想像できないくらいすさまじい映像だと思う。震災を知らない世代の子どもたちも「しあわせ運べるように」で何かを感じとつていってほしいと思う。小学校でもらった「しあわせ運べるよ

うに」は今でも家においてある。

9、環境防災科

環境防災科を知ったのは小学校4年生のときだった。新潟中越地震が起こり、現地で救助活動をしている人たちを見てかっこいいと思った。自分も誰かの役に立てられるような仕事に就きたいと思うようになったきっかけだった。お母さんから舞子高校に環境防災科があると聞き地震やボランティアについての活動が盛んだと知って絶対に行きたいと思った。

環境防災科に入り自分の記憶にはない阪神・淡路大震災を学んだ。地震のメカニズム、防災・減災についてもたくさん学んだ。そして、2011年3月11日、東日本大震災が起きた。たくさんの犠牲者が出て、大きな被害が出た。現地のボランティアには3回行った。「神戸から来ました。」と言うと必ず阪神・淡路大震災のことを聞かれる。記憶がないから聞いた事しか伝えられない。東日本大震災もどんどん体験者が少なくなっていく。伝えていくことがとても大事なことだと思った。震災を伝えていくことが一番の減災なのではないかと思う。これからも防災を学びたくさんの人に伝えていきたい。

あとがき

私は震災当時生まれて1ヶ月くらいしか経ってなかったため地震の記憶はない。震災の話になると「阪神・淡路大震災のときに生まれた子だね。」とよく言われる。正直、自分の中に“震災”という実感がなかった。震災を意識し始めたのは環境防災科に入ってからだった。1年生のときに「災害と人間」という授業がある。その授業では外部講師が授業をする。水道局や大阪ガス、関西電力などのライフライン関係から消防、警察などが来てさまざまな視点から阪神・淡路大震災を学ぶことができた。また、震源地の野島断層や震災記念館の「人と防災未来センター」にも行き地震のメカニズムも学んだ。その度にレポートを提出する。レポートをまとめていくうちにこんなに大変だった時に生まれたのだと思った。もし、あの時お父さんがいつも通りに仕事に行っていたら、お母さんがいなかつたらきっと私は生きていなかろう。なんの奇跡が起こって助かったのかはわからない。自分を大事にして生きていきたい。

私たちが生きている間には東海、東南海、南海地震は必ず起こるだろうと言われている。「備え」の大切さを環境防災科で学んだ。いくら「備え」をしていても災害を防ぐことはできない。だけど、被害を少なくすることはできる。突然来る災害に備えてしっかり準備しないといけない。自分の身は自分で守れるように生きていきたい。

語り継ぎ

長谷川 笑里

1. 1月17日

(1) 5時46分

私が生まれたのは震災の起こる7ヶ月前のことである。夜泣きは少ない方で1月16日の夜もよく寝ていた。地震が起きた瞬間は、爆弾が落ちたと思ったと父は思つたらしい。揺れのあった10~20秒くらいの間、母は上から落ちてくるものから私を守るためにずっと覆いかぶさっていた。母はその時、「絶対にこの子だけは守る」という気持ちだった。一方、その間、父は怖くて動けずにいたらしい。

大きく家が南北に揺れ、家がつぶれると思い、父は二人を連れてどこかへ移動しなければと思ったが揺れがおさまるまでなにもできずに居た。揺れている間も私は眠っていた。

(2) 駐車場

まず、父は靴を履き家の中を確認した。電気はついた。家の中では食器が割れたり、家の物が散らかっているだけだった。家の確認を5分程度で終え、家が壊れて下敷きになるのは嫌だ、広い場所に出たいと思い、懐中電灯と毛布を持って駐車場へ移動した。

駐車場に着き、車のラジオをつけて情報を得た。そこで地震だと知った。6時10分くらいから8時くらいまで余震で揺れる電柱を見ていた。

8時ごろになり、とりあえず食料を調達しなければいけないと母は思い、コンビニに行こうと父にいい、車でコンビニに行った。コンビニに着いたのはいいが、ほとんど品物はなく、店内は散らかっていた。かろうじて残っていたおにぎりとお茶を買い、駐車場に戻った。

コンビニで買ったおにぎりを食べているとサラリーマンらしき人々が駅に向かっているのを見て、「自分も会議いかなかんな、でも、家族はおいていけへんなあ」と父は思っていた。しかし、駅に向かったサラリーマンらしき人々が戻ってくるのを見て、今日は無理やな、と思った。

(3) 決断

10時ごろになり、余震が落ち着きだしたので家に戻ることにした。

電気は通るが、ガスと水道はダメだった。電気は通っていたので、とりあえず、テ

テレビをつけて情報を得ようと思った。いつも電車で見ている長田の町が火の海になっている光景や、高速道路が倒れている光景をみて、自分たちが思っている以上に今の神戸は大変な状況なのだと実感した。

神戸に残るか迷ったが、今いる赤ん坊が生きていくのは困難だと思い父方の田舎である島根に避難しようと考え、荷物をまとめ始めた。

14時ごろに出発。近くにある高速道路のインターから乗ることはできなかつたので、一般道で姫路の方まで行き、姫路の方から高速に乗つた。長い渋滞などの影響で通常6時間ほどで着くのだが、田舎についたのは翌日の昼頃だったという。

2. 田舎にかえつて

(1) 神戸への思い

田舎に帰つた瞬間極度の緊張がとされたからか、二人とも40度近い熱を出して寝込んでしまつた。その間、私は祖母やおばにお世話になつてゐた。2,3日すると二人の熱も治まり、テレビで流れてゐる神戸の姿をみて自分たちの知り合いは大丈夫なのかととても心配になつた。特に母は神戸育ちなので、知り合いが無事か不安で不安で仕方がなく、今、自分がこの場にいることが申し訳なく感じることが多々あつた。

そんな中、島根のでは「大丈夫?これ、神戸にいる知り合いに送つてあげ。」と、毛布、食料などを持つてきてくれた近所の方があり、近所だけでなく、市町村、県などの団体からも様々な生活で必要不可欠なもの、必要としているものが送られてきた。人の温かさを実感するとともに、自分が今ここにいてもできることがあると、前向きに物事を考えることができたという。

(2) 一人

10日ほどすると、父は会社を復元するために大阪に戻つた。母と私はライフラインが復旧するまで、島根に残ることになった。父がいなくなり、母は余計に一人でいる時間が増え、神戸にいる友人や親族のことを考え、ふさぎ込むことが多くなつた。

そんな時、会社で働いていた時お世話になつた先輩が亡くなつたということをテレビで知つた。田舎は島根で仕事は神戸。父とも意気投合し、家族ぐるみで仲良くしていたらしく、母は本当にショックを受けた。最後にあったのは年末で「また、神戸で暇が出来たらお茶しようね」と別れた矢先のことである。

親しい人を災害で亡くすということを身をもつて体験し、友人や知り合いなどの人たちの安否が気になるのだが、何も出来ない自分が悔しくて、普段からふさぎ込みがちだったが、更にふさぎこむようになつてしまつた。そんな時に、母は当時、赤ん坊の私の笑顔を見たりすると、心が落ち着いたり、なんとかなると笑顔になれたという。

(3) 単身赴任

父は、一人大阪にある会社で働いていた。まだ、神戸と大阪はつながっていなかつたので、一か月ほどホテルを転々とする日々を送った。昼は仕事に専念して辛いことを忘れることができたが、夜になり一人になると不安になり、島根に残してきた私たちのこと、神戸にいる友人などのことを思い、寝付けなかった日も少なくなかつたらしい。

また、余震はおさまってきてているのだが、最初の頃は地震で建物が崩れるのではないかと不安で仕方なかつたらしい。そんなときは、部屋にこもらず、ホテルのロビーや近くの飲み屋に行ったりして、人と話したりすると、落ち着くことができた。

(4) 安心感

一か月くらいすると神戸、大阪間でバスがつながった。やっと、家に帰れるということで、喜びはしたが、同時に不安もあったという。自分の家の範囲はまだ地域的にはひどい地域ではなかつたのだが、万が一、家がつぶれていいたらどうしようという不安から、長い間、留守にしていたからなにか盗まれていないだろうか、という心配などをして、家に帰るのが怖かった。家に着き、何も問題はないと分かった瞬間、ほっとするあまり、家の床に座り込んだそうで、とにかくうれしかつたらしい。

三月下旬、ライフラインがすべて復旧してきたので母と私が帰ってきた。二ヶ月ぶりの家族と家。無事にまた、家族とこの家で暮らすことが出来たこの瞬間、本当に安心した。そして、今まで当たり前だったことが本当に幸せで素晴らしいものなのということを改めて実感することが出来た。

3. 今になって

(1) ラッキー

震災からずっと家族四人で暮らしてきて、自分たちは本当に運が良かった。家も壊れなかつた。大切な家族を失うことも無かつた。それどころか、田舎に避難することで、避難所生活や給水活動などの辛い体験をすることも無かつた。

もちろん、友人、親戚、近所の知り合い、同僚が今も避難所で辛い生活を強いられている中で、自分たちは田舎で悠々とすごしていたという現実から、当時は後ろめたい気持ちになつたこと也有つたが、今は、自分たちには避難できる場所があり、私を一番安全な方法で守ることが出来た。本当に、自分たちは運がよかつたと思える。

(2) 今出来ること

東北大震災が起こり、17年前のことを思い出す機会が増えた。当時、自分たちは運がよく、経済的にも精神的にも余裕があつたにもかかわらず、何も神戸のためにする

ことは出来なかった。今回の東北で、17年前に出来なかった支援や恩返しをやりたい。家庭も職場もあるので出来ることはものすごく限られてくる。

あの時助けてくれた恩返しに何が出来るか考えたところ、まず、募金が思い浮かんだ。次に思い浮かんだのが「私を応援する」ということだった。環境防災科という特別な環境に居る私ができる限り応援して「私たちの思いをこの子にとどけてもらおう」ということである。

4. 感想

(1) 話を聞いて

父と母に震災の話を詳しく聞いて、本当に二人とも色んな見えないものと戦いながら私を守ってくれたんだと実感した。阪神淡路大震災が起こったとき、母が私に覆いかぶさり守ってくれたこと。今まで、とっさにとった行動については何度か聞いたことはあったけど、そのとき思った気持ちは、はじめて聞いた。父もただ動けなかつたというだけでは聞こえが悪いが、ちゃんと頭の中では私たちのことを考えてくれていた。私は何も覚えていないけれど、二人が私のことを守ろうと思ってくれていたことを知り、少し嬉しくなった。

田舎に帰り、島根の人たちは本当にあたたかいのだなと、話をきいて改めて実感した。今、「絆」といわれているけれど、阪神淡路大震災のときも絆はあったのだと分かって、嬉しかった。いつも田舎に帰ると「おかえり、ようかえったね」と声をかけてくれるおじちゃんおばちゃんは、辛い時に私たちを支えてくれた方々。いつも、照れくさくて笑顔で軽い会釈をするだけだけど、今度、田舎に帰る時は「ありがとう、ただいま！」と、笑顔で返したい。

また、兵庫から離れてしばらく避難するということも、普通の目から見れば、いい生活送っているんだろうな。と思う方もいるかもしれない。しかし、母の話を聞き、疎開の生活も寂しく辛いものがあったということも分かった。もちろん、避難所で過ごしている方々とは比較できないが、ずっと、寂しく歯がゆい思いで送っていた生活を聞き、被災者は本当に辛い思いをしていない人なんていないんだという当たり前のことを実感した。そんな、辛い思いをしている母を少しでも当時の私は支えていることが出来ていたのなら、たとえ無意識でも、記憶に無くても嬉しい限りである。

母の近しい関係の人が亡くなったというのも聞いて、驚いた。当時、赤ん坊だった私に服をプレゼントしてくれたりして、本当にお世話になったんだよと母が声を震わせているのを聞いて、死亡者の名前をテレビで見たとき、どれほど辛く悲しかったかなんて想像もおよばないと思った。

2人の話を聞いていると、いかに自分たち全員が残って家も残って、普通の生活を送れるこの状況は素晴らしいのかということがわかった。くだらないことで、喧嘩したりす

るけれど、これからも感謝の気持ちを忘れずに、家族4人仲良く暮らしたいと思う。

(2) これから

今回のこの「語り継ぐ」という作業を行って、語り継ぐということの大切さを実感した。東北に行った時なども、避難所にいる方々のたくさんのお話をきいて、それを語り継いでいくという作業を行った。

語り継ぎとは、自分が体験をまったくしていなくても当時のことを経験していなくても、当時の方と同じ体験を経験したような感じになれる。聞き手側は被災者の気持ちを完全に理解することは難しいが、少しでも理解しようとすることが大切。

聞いた話を自分の中だけにしまいこんでいてはもったいない。せっかく聞いた話は、他者に広める。こうすることで、被災者の方々と共感することのできる人たちがどんどん増える。

だから、私はこれから東北や阪神淡路での自分の聞いた話を少しでも多くの方々に語り継いでいきたいと思う。1人でも多くの方に被災地の方々が経験したことを話して、1人でも多くの方に共感してもらい、東北、兵庫で何があったのかをずっと忘れないでいてもらう。そうすることが、環境防災科でたくさんのことを体験させていただける、恩返しの1つなのである。

たくさんの物事を語り継ぐためには、たくさんの体験を自発的に行っていくということが大切。もちろん、部活もあるし日常生活もあるので、何から何までやるというのは不可能に近いが、残りの環境防災科として過ごす、数か月は何も悔いが残らないようになんかの経験を行っていきたい。せっかく、両親2人が、できることならなんでも協力してあげたいと言ってくれているのだから、その言葉に甘えて、自分のできる精一杯をやりたいと思う。

では、具体的にどういう風に語り継いでいくのか。何らかの形で発表、出前授業。もちろん、家族や親せきにも語り継いでいく。

語り継ぎで話していく中で「備えの大切さ」を理解してもらうことも重要。地震があり、備えが大切なことはみんな理解してはいるが、「自分は震災にあわない」と根拠のない自身を持っている人が多い。だから、そんな人たちの考えを少しでも変え、自分はいつ地震にあってもおかしくない状況なのだということを理解してもらう。

ただ、誰かの体験を話すだけかもしれないが、その体験を話していくことで、共感し、学び、次につなげ、ずっと、心の奥にとどめてもらう。そんな語り継ぎをこれからずっと続けていきたい。

語り継ぐ～父が見た神戸の被害～

藤井洋輔

＜父から＞

地震発生

1995年1月17日。私と妻と息子の3人は大阪市旭区のアパートに住んでいた。当然私たち家族は深い眠りについていた。午前5時50分に満たないころ、大阪を非常に激しい揺れが襲った。大阪が震源だと思うほどの激しい揺れだった。妻は全く動じず、揺れが収まるまでじっとしていた。私は息子は何もないかのように眠り続けていた。地震の揺れが収まるとすぐにテレビをつけてみた。点いたのでニュースを見ると、淡路が震源とでていた。私の両親の家が神戸市垂水区にあるので私は慌てて安否確認に電話をかけた。すぐにつながり、2人の安全を確認し安堵した。しかし一度電話を切るとその後繋がらなくなってしまった。不安になったが、どうしたらいいのか分からなかった。

祖父母の家へ

地震発生から1~2日後、垂水区の両親に生活用品などを届けに行くことにした。しかし、道や線路は所々被害を受け、通行が困難だった。だから、友人からほぼ新品のマウンテンバイクを借りて、それで行くことにした。まず須磨水族園の近くにある親戚の家まで水を届けに行った。その親戚の家は大黒柱が欠陥工事で壊れやすくなっていた。そのため、揺れにやられて大黒柱がずれてしまっていた。それから両親の家に行った。垂水区は電気・水道・ガスが止まっていた。私が持った水はそう多くないので西神にある知り合いの元へ水をもらいに行くようにした。父の車で何度も行った。毎回灯油などを入れるようなポリタンク2つ分の水をもらいに行った。ポリタンクは1つで180もあるので1回に2つにしていた。これを帰るまで何度も手伝った。

両親は知り合いが助けてくれていて生活に大きな支障はなかった。家屋は所々亀裂などが見えたが、生活するうえで特にこれといった支障はなかった。ただ、大きな揺れに遭ったために食器棚の食器が台所の床に散乱していた。今思えば、よく使う食器は手前の方に置いてあったので、あまり使わない食器は多少残っていたが、よく使う食器は全滅していた。

ボランティアへ

地震発生から 3~4 日後、家で何気なくラジオを聞いていると、FM802 でリスナーへのボランティアの呼びかけが耳に入った。「阪急西宮駅に自分たちで役に立ちそうなものを買ってきて、集まってください」と呼びかけていた。何としても参加しようと思った。阪急梅田から乗り、阪急西宮北口へ向かった。ボランティアの内容は阪急電鉄の西宮北口に集合し、集まってきた人たちで 7~8 人ごとにグループを作り、指示を受けて動くというものだった。指示は「自分たちで買い集めた救援物資を被災者のもとへ持っていく、配る」というものや「学校の体育館などに運ばれてくる救援物資などを運び、分ける」などがあった。多くの人が阪急西宮駅に集まった。私は登山リュックに水やお菓子類、紙おむつ、電池など色々買い集めて詰め込んでいた。

西宮から歩いていく途中、本当にしんどかった。寒いし重いし地面は割れたり凸凹で歩きにくい。けど、「私たちよりももっとしんどい思いや辛い思いをしている人たちが大勢いる。そういう人たちの役に立ちたくて来ているのに弱音なんか吐いてたまるか」という思いで歩いた。活動していると色々な人から「ありがとう」という言葉をかけられた。大したことは何もしていないのに言われた。私たちからすると何でもないことでも、被災された人たちからすれば大きなことなのか、などと色々考えたりもした。

一緒に活動していた人たちは本当に色々な人がいた。黙々と言われたことだけを忠実にこなす人、すぐ疲れた、しんどい、のど乾いた等と文句を言う人、言われた仕事は全然しないくせに神戸の人とすぐ打ち解けて色々なニーズを聞き出せる人など本当に色々な人がいた。活動していくうちに神戸の人の笑顔が少しずつ増えてきているような気がした。もし、私たちのようなよそ者でも活動していたら神戸の人たちの笑顔を増やせるのかな、等というようなことも色々と考えながら活動し、帰った。

道中

両親の家に行く時やボランティアに行く時に被害を受けた色々な場所を見た。自転車で行った時には国道 2 号線や 43 号線を通っていたので、長田など被害の大きかった場所をよく通り、見た。自転車に乗っている時には鎮火してすぐだったからか、焦げ臭いニオイも漂っていた。阪急電車に乗っていた時には線路の左右で景色がまるで違っていた。被害のあった場所とそうでない場所がはっきりと目に見えた。住宅街とゴジラの通った後のような跡。様々な被害の状態を見て、映画のセットの街の中にいるのではないかと本気で思ってしまった。

あまりにも普段の日常からかけ離れていて、普段は全く想像できない世界だった。戦後の焼け野原というように表現されることもあるようだが、まさしくその表現が合っていた。もし自分が被災していたらどうしただろうと答えの出ないことを道中延々と考えていた

最後に

あの時は本当に信じられない光景が広がっていた。本当に普段の日常から遠く遠くかけ離れていた。戦後の焼け野原という表現がよく合っていた。阪神・淡路大震災のような大きな災害が起こると普段の当たり前が当たり前じゃなくなる。これは被災しなかった私でも本当に怖い。実際に被害を受けた神戸の街を見て、信じられないという気持ちと恐怖の念が沸き起きた。災害はいつ起こるかわからない。どこでどんな規模の災害が起こるかわからない。だから普段から備えていくことが必要だと思う。

また、備えだけではなく臨機応変に行動できるようにならなくてはならない。この前の東日本大震災の津波も指定の避難所よりも高い位置にある場所へ避難した人は大勢助かつた。私たちも災害に遭ったらただ誰かの指示を待って、その通りに行動するのではなく、自分で考えていかなければならない。そしてまた阪神・淡路大震災を初めとする今までの災害を忘れてはいけない。過去の教訓を活かし、災害に負けないようにしなければならないと思う。

＜私の感想＞

父にここまで詳しく震災について聞いたことがなかった。私たちは当時大阪に住んでいたので、被災はしていない。しかし、父がボランティアを行っていたということで父に語り継ぎしてほしく、聞いた。父に話を聞いていた時、父の表情を見ると無表情だった。笑顔で話すような内容ではないが、被災をしていないのに思い出すと無表情になるような状況だったのかと驚いた。不安になったので PTSD のようなことにはならなかったのかと聞くと、さすがにそれはなかったという。ただ、思い出して気持ちのいいものではないと言っていた。

祖父母の家へ自転車で行ったというのは私が小学校の頃から聞いていた話で、高2の夏休みに私も自転車で垂水にある家から大阪まで行ってみた。距離は70kmもなかったが時間は5時間30分かかった。私はかなり飛ばしたので6時間以内だったが、父が通った道は所々地割れが目立つ道で、どうやっても飛ばすことはできなったと思う。それに、確かに国道2号線を通るので長田の街が見える。今は賑やかな街だが、以前は焼け野原と化していた。写真でよく見るあの道々を父は通ってきた。父は感受性が高いというイメージがある。焦

げ臭いニオイを嗅ぎながら通っていた時はとても辛かったのではないかと思う。

今回は直接祖父に話を聞いていないが、祖父母の家屋の被害状況を父から聞けてよかつと思っている。私はよく祖父の家に泊まりに行くのだが、風呂場のタイルが所々割れたり、穴が開いているのをボンドのようなもので補強しているのを見たことがある。祖父に聞くとこれも震災の傷跡なのだという。何故直さないのかと聞くと「補強したから使えるし、無理に高い金払って直さんでもいいやろ。それにこれ見て震災を思い出すようにしているねん。」と言っていた。祖父の家の風呂は一種のモニュメントと化していた。こういうのも大事だなと感じた。とにかく家族みんな無事でよかつたと思う。あと、食器のことも祖父は教訓を活かしていた。よく使うのは手前に置かなければいけないが、大事な食器は奥に置くということをしていた。「なんで奥に隠してるん？」聞いたら「割れたら困るやろ」と笑いながら答えてくれた。

今私は防災教育というものを受けている。中学の時、この学科を目指したのは将来の夢が消防士ということと、ボランティアをしたいということだった。なぜあの時ボランティアをしたいと言い出したのか覚えていないが、もしかしたらあの頃父の話を聞いていたのかもしれない。父がボランティアに行ったから私がこの学科に入ったのかもしれない。ある意味、父は私がこの学科に入った切っ掛けであると言えるのかもしれない。

語り継ぎは災害のことを後世に伝えていくことに大変有効な手段だと思う。実際にその当時を経験した人から聞く情報は確かな情報であり、鮮明に過去の状況を思い浮かべることができる。しかし、全員が同じ内容ではない。個々に経験されたことを話してくださるので、語り継ぎは多くの人から聞くことで、当時の状況がより分かるようになる。性別が異なれば、当時の悩みも違う。住んでいた地域が違えば被害の状況も違う。救助する側の意見とされる側の意見。家族を亡くされた方と助けられた方の意見。様々な意見があり、様々な世界がある。だから私は、語り継ぎは有効な手段だと考えている。今回父から聞いたことを語り継ぎ、誰かの役に立てたら、と思う。

私の将来の夢は救急隊になることだ。中学の頃は消防士になりたいと思っていたが、今は違う。救助するのではなく、救命したいと考えている。これは、母方の祖母が救急隊に命を救ってもらったからである。そして、この語り継ぎを書いているうちに、救急隊で語り継ぎをしていきたいと考えるようになった。救急隊であれば、ほとんどの災害に出動する。むしろ出動しない災害があるのかどうかわからないくらいだ。救急隊は要請のあった現場へ急行し、患者の容体をチェックしながら病院へ搬送する。誰でも知っている仕事だ。病気や怪我をしている人を助けるために働いている。そのような立場の救急隊であれば、他の職業の人よりも災害について伝えたいことが多いのではないかと考えた。語り継ぎは教訓と訳せるような気がする。他の人が経験したことを自分に取り込んでいく。簡単なようく思えて、実は難しい。聞くことは簡単だが、聴くとなると、心で話を聞かなければならない。話に入り込んで、自分に置き換えて聴くと必ず、自分の糧になり、教訓となるようになる。

語り継ぐ

藤岡 伸一郎

私は阪神・淡路大震災を直接は経験していない。しかし、沢山の人から体験したことや当時のニュースで見たこと思ったことを聞いてきた。それは、語り継ぎ後世に残すべきものなので多くの人に見てもらいたい。

阪神・淡路大震災

1月17日午前5時46分災害発生。死者6400人以上という、終戦以降最大の地震が神戸の街を襲った。

神戸市垂水区

垂水区に私の祖父母が住んでいた。祖母は頭を床にうち目をさましたらしい。祖父は、寝ていたので起こし二人で揺れが収まるまで抱き合っていたそうだ。ほんの数秒であったが、非常に怖かったそうだ。家の土壁がパラパラと落ちる音・食器がカタカタと揺れる音・外でガラガラと何かのものが落ちる音いろいろな音が聞こえたそうだ。揺れが収まって外をみに行くと家の近くにある少しおおきな駐車場に近所の人がいっぱい集まっていたそうだ。周りの家の屋根の瓦などが落ちているのを見たけど、そんなに被害はなく大丈夫だろうと思ったそうだ。「地震すごかったね・怖かったね」などと近所の人とちょっと話あったそうだ。近所のひとと一通り話したあと家に帰りニュースを見てみると、知っている場所のはずのところがぐちゃぐちゃになってしまっている。さらに火事などのすさまじい被害をみて、やっぱりこの地震の揺れは普通じゃなかたのだなと思ったのだそうだ。明石に親戚の人がいたので電話をしたそうだ。無事だったので少し安心して、家の中が散らかっていたので片付けたそうだ。土壁にひびがいっぱいはいっていたからボンドでくっつけたりもしたみたいである。家は屋根の瓦もおちてなかったけど近所の人が集まって村の家一軒一軒まわって村の家の屋根の修理だけは2日で終わらせたみたいだそうだ。畠もみにいって大丈夫だったらしい。畠でそだっている白菜をとってそのよるは不安だったので近所の人とみんなで鍋をしたそうだ。何回か鍋をそれからもたべたみたいである。なぜそんなことができるのかというと今の町ではすくないぐらい近所の人が仲良しからだ。仲良しの理由は村の祭が頻繁に行われているからだ。1月7日には鬼(大人3人が大鬼になり踊り邪をはらい子鬼にふんする子供4人が法螺貝のリズムに合わせて可愛く踊るもの)4月には酒のたるをかついで坂を登る(20歳以上しか通常は参加できないが、村に子供が少なくなってきたのでまれに未成年がやることもあるがその時は飲ませない。通常の場合は坂を上りながら頂上につくまでに酒を飲み干さなければならない)・10月には獅子舞(寺の近くのマンション・家などはもちろんコンビニや飲食店をまわって厄を払う。3軒ほど庭で躍らせてもらう。)。さまざまなイベントを行っている。そして祖父は村の自治会というところ

で会長みたいなのをやっていたし、元消防士だったのでみんなが集まってきたと祖母は話した。それからも何回か地震はあったが最初の揺れに比べると全然揺れなかつたのであまりこわくなかったらしい。「あ、また揺れている。びっくりするな～もう！」みたいな感じで、ちょっとしたら地震になれてしまつたらしかつた。しかし、自分のところは普段と変わらず生活をできたが他の地域では大きな被害がでて大変なのだとおもうとご飯を食べるにしてもよるに寝るにしてもなにか罪悪感があり祖母はなにをするにしてもあまりできなかつたそうだ。それを見た祖父にちゃんとしろよと怒られたらしい。それで勇気がわいてきたそうだ。そして、自分たちもなにかできないかなと考えた結果、家で作った漬物を避難所にもつていこうとなりもつていつたらしい。避難所に、行って大変感謝されたのだといつてた。有名人でないのに握手もたくさんもとめられたらしい。それからも2回ぐらい同じ場所に行ったみたいだ。みんなが喜んでくれて非常にうれしかつたらしい。そこで友達ができ遊びにいくこともあつたみたいだ。たくさん的人が神戸のためにボランティアをきいていることをニュースなどで知つて嬉しく泣きそうになつたみたいだ。特集とかで災害のことをとりあげている中で知つてゐる人がでていたらしく、その時はそのテレビにていた人のところにあるいて行き、一緒に祖父母の家に帰り2週間ぐらいとめていたらしい。そこで「家が全部なくなつちやつた、なんとか自分でげだしたけど地震があつたその日は家があつた場所の前で動けなかつたらしい。近所の人が声をかけてくれなかつたら今も家の前にいたかもしれない」と話してくれたそうだ。その話をきいて「このまづつとここでくらしていいよ」といつたらしいが2週間ぐらいしたら「戻るわ」といわれたので送つて帰したらしい。その途中なぜ戻るかの理由をきいたが「迷惑かけちゃいけないから」と全然迷惑でないのにそう何回も繰り返し言つてたらしい。自分たちがなにかいやになることや面倒がつてゐる顔をしてしまつたのではないかといまでも後悔しているみたいだ。この人だけでなくほかのところでもいろいろな思い出が、一瞬でなくなつてしまつた人もいる。その人のために遠くから支援してくれる優しい人たちがいる。その優しい人たちを、自分もいつか、どこかで、なにかが、あれば自分のできることがあれば絶対に何かをしようと心決めたらしい。今の東北地方太平洋沖地震では年を取つて現地にいてボランティアにいけないことが悔しいと祖母は言つてゐる。買い物にいくと東北の地震の募金があるときは必ずいれていたみたいだが、今は前ほど募金をしていないからもっと募金活動をして東北の人を助けてあげたいといつてゐる。この阪神淡路大震災を通して、祖母はボランティアはすばらしいものだと感じたらしい。村の婦人会のボランティアとしてやつてゐる村の掃除には、もう腰がわるくいけないけれどお茶会などは日があればいっている。今も村の人全体が仲良くなつてゐるのでうれしいらしい。もし、地震などの災害が起つてしまつてもこの地区の団結力なら互いに助け合うことができると感じた。これからも、自分もこの地区で鬼・獅子舞などのイベントを一生懸命やって盛り上げていきたい。そのことで地域の防災力をより高めより高い街づくりをして、街の活気を昔みたいに取り戻したいと考える。

東京都千代田区

私は、その時千代田区に住んでいた。[地震が神戸で起きた]と両親が気付いたのは地震発生から少したってからだ。始めはたいしたことないのだろうと思っていたらしい。だが、ニュースを見ているとすごく大変なことが起こっていると気づいたらしい。すぐに祖父母のところに電話をかけたそうだ。祖父母が、安全だったので一息ついて父は仕事にむかつたらしい。父がおもうに祖父がいるなら大丈夫という気になったらしい。祖父なら、なんとかしてくれるだろうと思える人だったみたいだ。祖父はなんでもできるスーパーマンと昔話していたことがある。そんなにすごい祖父ともっといたかったなど今の僕は感じる。でも母は家にいて祖父母が心配になり3回ほどかけたみたいだ。そのたびに、祖父にわらわれたらしい。でも祖父の笑い声をきいたらなぜか安心したみたいである。そんなすごい祖父に、自分もそうなりたいし父も今でもそうあろうと努力している。九州のおばあちゃんは神戸の祖母にかけたあと地震がおこっていない東京にいる自分たちのところにもかけてきたみたいだ。母の心配症は九州のおばあちゃんからきているらしい。もし、ここでも地震がおこったらどうしようと何回も考えていたそうだ。少しのあいだ夜ちょっとの音がしても「地震！！」ってびっくりしたりなどもあったそうだ。それから避難袋を買うなど地震対策のことをいろいろしたそうだ。父はNTTで働いていたから、神戸に行くかもしれんとわかっていた母は自分も祖父母のところにいこうかなと考えたみたいだがいったら邪魔になるよと父にいわれたのでいかなかつたらしい。結局、父もいかずそれなら祖父母のところにかけつけたらよかったですと感じたらしい。その日からニュースも阪神淡路大震災のことがたくさんがれていて見ていてすごく悲しい気持ちになったそうだ。今まで安全だとおもっていた高速道路が根本からおれてしまっているのを見て地震って怖いなと痛感したらしい。でも、悲しいニュースだけでなく生き残ったニュースなどをみると自分たちも勇気づけられたと話した。なくなってしまった人の話でなく、生き残った人の話だけを聞きたくなる。現実逃避したくなるぐらいのすごい災害であった。その一方で、自分の祖父母は助かったのだけど他のところで悲しんでいる人がいる。親をなくした子供がいるのを想像してすごくモヤモヤしたそうだ。最後の方になると自分は被災していないのに、悲しくなるから地震のテレビを見ることができなかつたそうだ。今でも災害のニュースをみて人がなくなったのをみるとものすごい怒りを覚えるらしい。そして、その災害のニュースをみるたびに「自分は頑張らない」と思うそうだ。あの時自分はボランティアにいけなかつたのがちょっと反省しなければならないところだなとおもっていたそうだ。今、自分の子供が東北の地震のボランティアにいっているのをうれしく思うらしい。自分たちはいそがしく時間がなくて災害ボランティアにいけない分、自分たちのこどもがほかの人のために災害ボランティアをしていることを、応援していると話した。だから、自分はより多くの人のためになるような職業に就きたいと考えている。

災害から学ぶ

この災害を通じて学ばなければならないことが2つある。

一つは《災害》についてのことだ。「地震は怖いもの」と祖母は話した。この国に住んでいる限り地震はいつどこで起こってもおかしくはない。地震だけではない台風や、火山噴火などさまざまな災害が起こるだろう。しかし、その災害のことについてしらなければ「同じ手口で空き巣に入られるようなものだ」。空き巣に入られないたくないのならば、犯人の手口を知っているなければならない。災害でも空き巣の対策と同じことが言えるだろう。災害の対策をするのならまず災害についてくわしくなることが必要である。まず、自分の住んでいる地域で過去に起こった災害をしらべてみるとよい。そして、まずは過去の災害でおこったことについて詳しくなろう。その災害のメカニズム・その時の防災力などをしらべて今の防災力により近く、同じぐらいの大きさの災害をしらべてみればよい。過去におこった災害だけが起こるとは限らないので、過去の災害を知れば次は、ほかの災害を調べより多くの知識をふやしておこう。

しかし、災害を知っているだけでは、ダメだ。災害を学べば次は対策をする必要がある。それが二つ目に学ぶべき《防災》である。だからといって、個人が堤防などはたてられないだろう。自分のできることを一つずつやっていけばよい。まず、費用があるのなら耐震診断・耐震工事をしなければならない。家ごとつぶれてしまえばいくら防災知識があっても一巻の終わりだ。防災の知識がいくらあっても使うことはできない。だから地震が起きた一瞬を生き残ればいい。それをいきのこれがあとはほとんど安心である。つぎは、避難袋を用意することからはじめよう。避難袋の中身は、食糧、ライト、靴ぐらいをいれておけばよい。あまりかさばる物で大きなカバンになってしまえば、持ち運ぶのが大変だし、部屋の中が片付かない。戸棚に収納できるぐらいの大きさにしていて寝るときに枕元においておくので良いと思う。しかし、災害がおこれば避難袋が役に立つのだが家にいないときに起これば役にたたない。昔なら、ペンライトだけでもいつも持ち歩いておこう、「ペンライトなら、ポケットにもしまうことができるし、手ぶらでちょっと出かけるときも持ち歩くことができるだろう。もし、暗闇にとじこめられたとき少しでも光があれば恐怖はやわらぐことができるだろう。」と言われていたが今は携帯がある。日本人のほとんどの人が携帯をもっている時代だ。だから、携帯を充電できるような太陽光発電や手回し充電器を携帯のストラップとしてつけておけばよい。このストラップは災害が起こったとき以外でも出かけている先で充電がなくなりそうになれば充電できるので実用的である。今のスマートホンは充電がすぐなくなるのでいいのだろう。

そして次に自分達ができることの中で大切なことは、「地域の人との付き合いを大切にすること」であろう。なぜ地域の人と仲良くしなければならないかは、阪神・淡路大震災から学べる。阪神淡路大震災では生き埋めから救助されたひとで隣人等に救助してもらった人がおおくいる。救助専門機関（消防、警察など）は、災害時大混乱になるなか助けになるのは近所の人が一番考えられる。自分の命のためにも日頃の近所付き合いが大切なので

ある。阪神淡路大震災でも地域のイベントが盛んに行われているところは地域の人の救助された事例が多くある。なので地域のイベントなど地域の人があつまるようなものがあれば積極的に参加するとよい。なくても、あいさつを繰り返すことで仲良くなれるかもしれない。とにかく行動することが大切だ。近所の仲の良さが防災力の高さになるだろう。地域のボランティアに参加するとよりよくなるだろう。ボランティアがなければ自分が中心となって巻き込めばよいのである。ボランティアのいい環境をつくりそこですごしていくことが大切なことであるから努力してほしい。

ボランティア

阪神・淡路大震災の年が「ボランティア元年」と言われているのは、阪神・淡路大震災時に多くの人が災害ボランティアに参加したからだ。災害ボランティアは家具を運ぶ・泥かき・家の掃除や、ゴミの処理などいろいろとある。ボランティアは災害が起ったときだけにするのではない。地域の掃除・小学生の通る交差点の見守りなどもボランティアである。簡単なボランティアは募金である。なんとなく募金をすることもあるだろう。でもその時でもこの募金はどこでどのように使われているのか、そして、この募金をもとめている人は何に困っているのかをよく学ぶことで募金一つでも自分が人のタメになっているのだと実感できるのかもしれない。それを感じることができたのなら、ラッキーである。ボランティアを多く経験すれば一つぐらい自分の中で何かを感じられるものもあると思う。しかし、ボランティアは自分がなにかを感じるためにいくべきではない。「自分がほかの人の力になりたいから」という気持ちでやらなければならない。しょうがなくしてやるや、ボランティアしてあげているという気持ちではよくはない。ボランティアをさせていただいているという気持ちで挑むのが理想的である。しかし、ボランティアをするために自分の日常をさいしていくこともしないほうがよい。まず自分の日常を大切にして、そのなかでボランティアをすればよい。とにかく1回でも参加をしてみることがたいせつである。

感想

この話をきいているときみんな重い思いがあるのだなと感じた。祖母のボランティアの話、地震の時感じたこと、遠くからニュースなどで感じた阪神淡路大震災、神戸にいけなかつた悔しさ・・・すごい思いをかんじた。たくさんの思いの中僕はそだてられたのかと思うと、強く優しく生きていけないと思う。祖父のようにみんなから信頼してもらえるように、祖母のようにみんなの気持ちをすごくかんがえられる優しい心のように、遠くからでも困っている人のためにボランティアをしにきてくれるようなフットワークの軽さを持ち備えた大人になりたいと思っています。自分はまだまだ未熟であるが今、まだ17なのでこれからもっと大きな人になっていきたいです。それを持ち合わせた人間でも災害で死んでしまったら元も子もないで、防災の勉強をしっかりしていきたいです。

自分の夢をかなえ大きく、大きく羽ばたいていきたいです。

語り継ぐ

紅田和馬

1、 僕産まれる

僕が生まれたのは震災の4か月前の9月に生まれた。本当は12月に産まれるはずだったが母のへその緒がのどにからまり、はやく産まないと死んでしまうということで緊急手術の帝王切開で産まれた。

2、 摆れている最中

普通に過ごしていて寝た1月16日。まさか次の日の朝にこんなことがおこるなんて夢にも思ってなかつた。

お父さんがいには最初ドーンという音が鳴りそこからぐらぐら揺れ始めたそうだ。
最初に起きたのがお父さんで、初めは何が起きているのかわからなかつたらしく、とりあえずお母さんを起こした。

地震が起きたとき自分は寝ていて両親が必死に守ってくれた。
5秒ぐらいでお父さんが地震と気付き、とりあえず和馬を守らないといけない、と思つたらしく僕に覆いかぶさってくれた。

地震が一番大きい揺れの時に僕の横においてあるタンスが倒れてきてお父さんの上に倒れた。

お父さんがいには、その時は痛くなかったけど時間がたつにつれて痛くなつていったそつだ。

お母さんもお母さんで精一杯僕を守ってくれた。
何がどうなつてもいいから、和馬だけは助かつてと祈つてくれたそうだ。

3、 揆れの後

お父さんはとても暗かつたので、まず電気がつくかどうか確認した。電気はつかなかつた。

そして外にでようとしたら、下駄箱が倒れていて、しかもドアがひずんでいて開けづらかつた。

とりあえずどうなつてゐるかの情報がほしかつたので、車にラジオを聞きにいった。

外の状態は自分が住んでいる公団にひびがはいっており、信号が消えていた。

すごい静かで、誰もおらず家の近くのコープの警報ベルが鳴り響いていた。

余震がきて、これはやばいと思い家族全員車のなかに避難した。

ラジオはそれほど深刻ではないみたいな感じでながれていた。

車の中でラジオを聞きながら明るくなるのを待っていると、公団の電気がついた。

電気が復旧したのがわかった。いそいで自宅に戻りおばあちゃんに電話した。

おばあちゃんの家は丹波なのでそんな被害はひどくなかったらしい。

電話したときものんきだった。心配して電話しているのにこちらのほうが心配された。

いとこにも連絡をとり安否確認をした。いとこは姫路に住んでいてこちらも被害はそれほどでもなかった。

電話がつながったのはその時ぐらいでしばらくはつながらなかった。

そのため、みんなは大丈夫かどうか不安になった。なにか連絡がとれる手段が1つないと不安になるそうだ。

震災がおきた後は水がとまった。

だから水がなく大変困った。

だが小学校で給水をしていると近所の人が教えてくれ、小学校に向かった。

小学校ではすでにたくさん的人がならんでいて、にぎわっていた。

すごくならんでいる時間がながかったため、前にならんでいる人に話しかけた。

するとすぐに仲良くなった。そしてその人の友達とも交流ができ、ネットワークが広がった。実はその人は近所の人らしく、給水が終わった後でも様々な情報を教えてくれた。

近所付き合いは大事だと実感した。

お父さんは職場のほうがひどい状況なんじゃないかと思い、車で職場に向かった。

あまりラジオでは深刻ではないと聞いていたので、すぐにつくだらうと思っていたらしが、普段通れる道が通れず、電信柱が倒れていたせいで道がふさがっており、あちらこちらにものがあったので町中はとりあえずひどい状況だった。

車でいくのはなかなか大変だったそうだ。

あまりの町の変貌に愕然となった。

しかし自分の家はつぶれなかったので家がつぶれた人の気持ちを考えれば気持ちをしつかりもつことが出来た。

そのときは町がめちゃくちゃでかんがえることもできなかったが、また地震がおきたらこんな町になるんだと地震の破壊力と怖さを知った。

だれがどうやってこの町を元にもどすんだろう、どうやってもどすんだろう。

そしてどれくらいで、もどるんだろうという不安と絶望感でいっぱいだったそうだ。

4. おばあちゃん家に移動

お母さんと自分はお父さんが帰ってくるまで待っていた。

お母さんは大丈夫だろうかとお父さんを心配した。

自分はまだ赤ちゃんだったので、なんとも思っていないがお母さんはそんなに深刻ではないと聞いているので家でゆっくり片づけをしていた。

そんな中、町の状況を知ったお父さんが帰ってきた。

電信柱がたおれていたり、そこらじゅうに、ものが転がっているということを伝えた。

お母さんははじめ信じなかった。

そんなことがあるわけないと思っていた。

しかし町の風景を写真でとっていたお父さんが、「見てみ」とさしだした写真を見て本当なんだと実感した。

ここは危険だとお父さんが思ったので、どこか安全なところに避難して和馬だけでもどうにかしようということになった。

地元らへんは被害がすごいので、丹波のおばあちゃん家に避難することにした。

とりあえずはやくでないといけないと思い、車で脱出した。

高速道路は封鎖されており、下道で行った。本当にかんがえられない景色が広がっていて、あちこちでもものが倒れていた。

車の中では両親両方とも「うわー」「こりやひどい」などの言葉しか出なかつた。

高速道路封鎖の影響で普段は1時間でつくはずの道が、その日は4～5時間かかってついた。

丹波の町の風景は神戸と比べたら、すごくましだった。

おばあちゃんがのんきなのもわかつたそうだ。

2～3日はおばあちゃん家で待機。

お母さんは自分を置き、一度帰宅。

家の様子を確認したかったそうだ。

そのときの様子をビデオに残した。ドアはひずみっぱなし、かたづけもまだまだ終わらない。でも家族全員無事でいたこと、それだけでよかった、とその時つくづく思ったそうだ。

そして掃除をした。割れたガラスや食器、割れ物は全部掃除して、最低歩ける程度までは、家のなかを片づけた。

おばあちゃん家には1週間ぐらい滞在していた。自分はまだ赤ちゃんなので粉ミルクをもらうなど、すごく世話になった。そのため特に困ったことなどはなかつた。

おばあちゃんの家に滞在している間のテレビ番組はほとんどが阪神淡路大震災のニュースだったそうだ。

5、 家族からの話を聞いた自分の気持ち

家族からこの話を聞いたとき自分は大きく4つ思ったことがある。

1つ目はほんとに親に感謝しないといけないということだ。

自分を産んでくれたこと、自分を地震から守ってくれたこと、自分をタンスから守ってくれたこと、わがままな赤ちゃんの自分を育ててくれたこと、そして今まで育ててくれたこと。ほかにもたくさん感謝がある。

特に自分は習い事が親なしではできない。毎月の月謝、東京などで開催される大きな試合などではお金をたくさんだしてもらっている。

今振り返れば大変世話になっているにもかかわらず普段は親にエラそうなことばかり言ったり、いうことを聞かなかつたり、自分を情けなく思う。親に感謝の気持ちを伝えたいと思う。

しかし普段の生活ではなかなか感謝の気持ちを親に伝えるのは難しい。

だからこういう話を聞いたときに感謝の言葉を親に伝えようと思う。

2つ目は地震の怖さを知ることが出来たということだ。

自分はまだ本当に大きい地震を体験したことがない。

水が止まってとか、電気がつかないとか、ライフラインが止まって生活したことがない。この話を聞いて、地震が起きたらどうしたらいいのかというのを少しでも学ぶことが出来た。

実際に起きたらどうなるかはわからないが、この話を活かして少しでも行動に移せたらいいなと思う。

3つ目は災害の時は、団結力、助け合いが大事だということだ。

自分の家族だけの力だけで阪神・淡路大震災を乗り越えた家族はいないと思う。

必ず親戚や知り合い、近所の人に助けてもらっていると思う。

自分の親も近所の人たちを助けていると思う。また家族の団結力が自分たちの家族を救ったと思う。

必死に自分を守ってくれ、家族全員が絶対生き残るという気持ちをもてば、絶対助かる。

話しあは変わるが自分が生きているうちに、ほとんどの確立で東南海地震が起きるといわれている。

それも阪神、淡路大震災よりも強い揺れだそうだ。

自分はとても不安だ。

お父さんみたいに自分の家族を守れるか、周りのことがちゃんと見えて、今自分がなにを

したらいいのか臨機応変に対応できるか。

仮にも自分の夢は消防士なので、まず現場にいかないといけない。

仕事もあるし、家族も守らないといけない。自分は家族か仕事どちらをとるかと聞かれた
ら、自分は家族をとる。

まず家族を守る。この震災の話しを聞いて、一番力になったのは家族の力だと思うからだ。

4つ目、災害に勝つ一番の力は大切な人を守るという気持ちだ。

家、お金、家具、これらのものは失ってもまた手にはいるが、人の命は一度失ったら、二度と帰ってこない。失ってしまうと、残された家族、友人、恋人は、すごい悲しみに襲われ、せっかく災害で生き残ったのに勇気、未来へ生きる希望を失いがちになってしまうと思
う。

自分でいうのもおかしい話しだが、もし自分が阪神・淡路大震災で死んでいたら、自分の
家族はどうなっていたかわからない。

だから自分の家族は自分をまもるのに必死だったと思う。なにをうしなってもいいから子
供の命だけは守りたかったんだと思う。

自分がなぜこのようなことを言えるかというと、家族からこの話しを聞いたとき自分が赤
ちゃんの時は本当に愛されていた。

自分はこのような両親の下で生まれたことがとてもうれしい。

自分が大人になって結婚し子どもができたとする。そして同じ授業を受けたなら自分の子
供は、自分の下で産まれたことがうれしいと言ってくれるか。

正直言ってくれる自信がない。自分はしっかりしていないし、どこかぬけているからだ。

逆に子供にお世話をされそうだ。

このままでは自分はだめだとわかっている。

今から親のいいところができるだけ盗んで、自分も子供に生きてよかったですと言わせる。

そして自分の子供にも自分と同じ職業についてほしい。

震災と向き合う

本間 愛海

(1) 震災前日

1月16日。私の両親は家にいた。その日は母親の妹のゆかちゃんが遊びに来ていた、かに鍋をしていたそうだ。

わいわいしている中で3人は空の異常に気づいた。いつもとは違う色の月。その日の月は真っ赤であるで太陽のようだった。

「なんか月変やで」「ほんまやなー」「気味悪いなー」なんて話をしていたが、あんまり気にかけることもなく、鍋を楽しんでいた。

次の日雑炊にするためにカニをむき、2時頃に寝た。

(2) 震災発生当日

その後すさまじい揺れが起こった。何が起きたのか理解できなかった。

しばらくしてこれが地震なんだと感じた。

地震への恐怖よりも「とりあえず愛海を守らなくちゃ」そう思つたらしい。

隣で寝ている私を見ると頭の数センチ先にテレビが落ちていた。

もう少しづれていたら私は死んでいたと言っていた。

両親は私を守り、揺れがおさまるのを待った。揺れがおさまり部屋を見渡すと、ものが散乱し、食器が割れ、家具がたくさん倒れていた。

揺れが収まり両親が心配になったのは私の祖父と祖母のことだった。

とりあえず必要なものだけ持ち、鍵を閉め、地震から20分ぐらいしてから家を出た。

車を出し、まずは新長田にある父親の実家に向かった。

早く家を出たおかげで幸い道は混んでおらず、崩れた建物を避け、実家についた。

2階建て木造建築の家は2階が1階になっていた。

車から飛び降り見に行くと、無事に生きている祖父と祖母と叔父がいた。

たまたま2階で寝ていて助かったらしい。「本当に無事でよかった。」と両親は言った。

しかし無事だったのはよかったです、これからどうするかという話になった。

両親は母親の方の実家に行くつもりだった。

祖父と祖母を置いていくのは心配だったので「一緒にいこう」と誘ったが、祖父と祖母は断り「ここに残る」と言った。

祖母は家と近所が心配だったという。新長田は木造建築の家が多く、いつ火の手が来るかもわからない。

そんな中家を置いて親しい近所の方を置いていきたくなかったそうだ。

そして祖父は目が見えない。

絶対に弱音を吐かず、人に迷惑をかけることを嫌う。

そんな祖父は一緒に行って周りに迷惑をかけたくなかつたらしい。

だが目が見えない祖父は避難所に行くこともできない。

両親は祖父にとって知らない人がたくさんいて、知らない場所での生活は精神的にも肉体的にもキツイと思った。

すると祖母が「おかあちゃんここ残るからおじいちゃんだけ連れて行ったってくれんか」と言った。叔父も残り祖母の面倒を見ると言った。

祖父は「すまんけど連れてってくれ」と言った。

そして祖父だけ連れて母親の実家に行くことになったが、とりあえずその日は夕方まで父親の実家にいて、夜は車の中で寝た。

(3) 震災後

朝起き、母親の実家がある滝の茶屋に向かった。

西に行くにつれだんだん倒れている建物が減っていった。

実家に着き、祖父と祖母が出てきた。

「大丈夫だったの？」「よかったです。無事で」なんて会話をした。

家に入ると何も散乱しておらず、家具も倒れていなかった。

私たちの住む中央区と垂水ではあまりにも被害がちがっていた。

揺れはすごかったけど家具が倒れるほどの揺れではなかつたらしい。

ライフラインも水道は止まってはいなかつたが、ガスがでないのでお風呂には入れなかつた。

その日は缶詰やあるものを食べた。

父親は自営業、母親は大丸の靴屋さんで働いていたが、一年の育児休暇をとっていたので職場に行くことはなかつた。

何日経ってもライフラインは復旧しなかつた。

みんなの中にも少しづつ限界が来ていた。

そんな中何日もお風呂に入ることができていなかつたので、ライフラインが通っている知り合いの家でお風呂を使わせてもらうことになつた。

週2回お風呂を使わせてもらった。

温かいごはんもいただいたそうだ。

その方が心優しくて本当によかつたと言つていた。

両親は置いてきた祖母と叔父が心配だったので数日に1回は新長田に戻つていた。

その時にみた長田の町の真っ赤な海。

いまにもこちらに火が来そうで、それを見て眠れない夜もあった。

あの時の恐怖は一生忘れない　と言っていた。

家族は懸命に生きていた。

避難所に行くわけではなく自分たちの力と被害が少なかったまわりの力だけで生き抜いた家族はすごいと思った。でも、もっと避難所などを頼ってよかったと思った。

わたしは祖父の目が見えないという理由で祖父が避難所に行かなかったと聞き、もっと避難所が障害者的人に合わせたところになってほしいと思った。

例えば、障害者の方、高齢者の方を優先的に入口の近くやトイレの近くのスペースで生活できるようにし、物資を外で配るのではなくボランティアなどが体の不自由な方には配つていけばいいと思った。もっと避難所が行きやすい場所になってほしい。

これは私が願う一番のことだ。

私の両親は地震発生後比較的早くに逃げたから道は混んでおらず、祖父のもとにいたので、これから未来でも震災があったときは「必要なものだけ持ちすぐ逃げる」ということを忘れないでいたい。これは両親が教えてくれたとても大切なことだ。

なにごとも油断せず、親のように判断力を身につけたい。

震災から 17 年

丸尾 侑

① 震災発生

(1) 家族構成

私は震災が起こったとき祖母の家がある長田にいた。

私たち家族は 5 人家族で父、母、兄、姉、私の 5 人で当時は明石市にある魚住に住んでいた。

震災の前の日私たち家族は長田にある祖母の家に遊びに来ていた。

その日は泊まる予定ではなかったが母が体調を悪くしたので父が次の日学校がある兄と姉を連れて帰り私と母は泊まることになった。今思えばあの時帰っていればそこまで被害を受けなかっただろう。

(2) 震災当日

そして 1995 年 1 月 17 日 5 時 46 分阪神淡路大震災が起こった。

震災が起こった時母はまだ赤ん坊だった私のうえに覆いかぶさり上から降ってくるものから私を守ってくれた。

揺れがおさまった後母は分厚いコートを一枚持つてすぐに私を抱きかかえて外に出た。私はその時全然泣かなかったのでありがたかったそうだ。

そしてすぐ横にある公園に行くと同じように逃げてきた人たちがたくさんいた。

そこで赤ん坊の私を抱いてベンチに座っていると逃げてきていた人が私を見て「赤ん坊がおるで」と大声で言うとそれを聞いた人たちが集まってきてどこから持ってきたのか毛布やミルク、おむつなどを持ってきててくれた。

母は持ってきてくれた人たちに何度もお礼をいって毛布などを受け取った。

私は当時の記憶は全くないがこの話を聞くたびにもしかしたら私はあの時上から降ってきたものが当たって死んでいたかもしれない、寒くて風邪をひいていたかもしれない、ミルクがなくておなかをすかして大泣きして周りの人に迷惑をかけたかもしれないと思うとたくさんの人たちに守られながら震災を越えてきたのだなと思い感謝の気持ちでいっぱいになる。

(3) 明石の状況

当時住んでいた明石は長田に比べると天と地のさがあった。家は一部損壊、外壁にひび

が入っていたり瓦が数枚落下しただけだった。家の中は食器棚の扉がひらき中の食器が飛び出て割れていた。幸いライフラインもすぐに復旧したのであまり不自由なことはなかった。周りの家も全壊、半壊はほとんどなく、どの家も屋根の瓦が少し落ちていたり外壁にひびが入っているだけだった。しかし瓦がはがれていて雨が降ると雨漏りしてしまうのでどの家も屋根に青いビニールシートをかぶせていてそれはまるで波のようでした。そのビニールシートを屋根にかけるのも大変だったので近所が協力し合ってやりました。食料や水も割と早く手に入ったのでよかった。

(4)避難所生活

明石はそんな状況だったが神戸はひどく祖母の家は全壊、避難所生活を余儀なくされた。最初は体育館で、その後自衛隊の人が公園にたててくれたテントで生活をし、最終的には小学校へ移動した。

60歳代の夫婦にはなかなか仮設住宅が当たらず永い間避難所生活をした。しかし避難所生活は大変つらく耐えられなくなった祖父が我が家にきた。以前からこっちに来ないかという話をしていたのだがなかなかきてはくれなかつた。しかし祖母は結局時々お風呂に入りに来るぐらいで一緒に住むことはなかつた。その際に避難所で配られた冷たいおにぎりやお弁当を持ってきてこちらで温めなおしていた。私たちもときどきおかずやおにぎりを持っていった。そしてJR東加古川駅の近くに大規模な仮設住宅が建ちやっと当選した。

(5)親戚の状況

兵庫区に住んでいた叔母家族は、家は住める状況だったがライフラインの復旧が遅く我が家に来てもらった。その時にお風呂に入って、あたたかいご飯を食べてもらった。本当に喜んでいた。灘区に住んでいた親戚は六甲道が焼失して何もかもがなくなってしまい、避難所に会いに行った際もどうやって声をかければいいかわからなかつた。

② それからの私

それからの私はごく普通に暮らしていた。震災で苦労したという記憶は私にはなく幼稚園、小学校、中学校と過ごしていき中学3年の時進路を考え始めどこに行こうか迷っているときに担任の先生から舞子の環境防災科を紹介された。それまでの私は舞子高校という名前すら知らず場所もどこにあるかわからなかつた。私が住んでいた地域ではでは舞子に行く人が全然おらず舞子の情報が全くなかつた。私は最初迷いました。紹介されたもの今まで存在すら知らなかつた高校にしかもほかの友達はだれも行かないで正直行く気があまりしなかつた。しかし学校のホームページを見て舞子のことを、環境防災科を知って

いくうちにどんどん舞子に行きたくなつた。ホームページを見ると先輩たちの活動を見ていって周りにいる高校生とは全然違う感じがした。新潟中越地震や四川の活動を見て驚いた。私はボランティアといえば募金ぐらいしか思いつかなかつたが、募金だけではなく被災地に行って活動をしたりしていと私と2、3歳しか変わらない人がこんなことをやつていると知つて自分が小さく見えた。そして環境防災科に行こうと決めた。そのために必死で勉強して入試を受け合格することができた。

入学してからの1週間は知つてゐる人がだれもおらずとてもつらかつた。しかしだんだんと友達ができて皆で一緒に活動をしていった。募金活動も見たことはあつたけど実際やってみると思つていたよりずっとしんどく大変だということがわかつた。ただ単に募金を呼びかけるのではなく入れてもらえるように被害の状況などを加えて言うなどいろいろやり方があることを知つた。そして入学して一年が経とうとした春休み、東日本大震災が起つた。

③ 東日本大震災

3月11日東日本大震災が発生した。震災が発生したとき私は家にいた。家で音楽を聴いていたとき友達から電話がかかってきて友達と話していた。友達と電話でドラマの話になりちょうど時間だったので見ようと思つてテレビをつけた時にその映像が映つっていた。東北がぐちゃぐちゃにつぶれ火事で町は燃えていた。最初映像を見たとき本当に同じ日本の映像か分からなかつた。そして同時に親から聞いていた阪神淡路大震災のイメージが浮かび上がってきた。あの時もこんな感じだったのかそう思うと自分が今生きていることが本当に幸運なことだと思つた。そして少しした後メールが届いた。友達からで内容は被災地に電気を送るのでみんなで節電しようという内容だった。チーンメールだった。こんな時にもこんなことをする人がいるなんて少しいやな気持になつた。メールを回した人は書いている情報を信じて回したと思うが最初の人は何を思つて送つたかわからない。こんな情報がたくさん流れ社会が混乱していく。こんな社会をどうにかしたいと強く感じた。東北でボランティアをしていろいろなことを感じた。その中でも子供の力の大きさを一番感じた。そして将来自分も次の世代を作つていく子供を少しでも防災に興味のある子供に育つていいきたいと思うようになった。

感想

今回17年前の震災の事を親から聞いて当時親がどれほど苦労したかを少しでも知れた気がする。そして今生きている事をすごく感謝した。私は阪神淡路大震災や東日本大震災をいつまでもわすれないと共にもしもまた大きな災害が起こつてしまつたときに被害が最小限でおさまるような社会になればいいと思う。

語り継ぐ

三砂 りさ

1. 先に…

諸事情により、私が慕っている塾の先生に話を聞いた。

当時彼は神戸市垂水区高丸に、父、母、妹と別棟に祖母という家族で一軒家に住んでいた。仕事は塾の講師をしており、本部は摂津本山、勤務地は芦屋であったらしい。

2. 震災当日

(1) 午前5時46分

彼は午前1時頃に帰宅し遅い夕食をとった後、疲れていたのでぐっすりとリビングのソファーで寝てしまっていたらしい。すると、ゴーっという音が聞こえて目が覚めた途端、体が宙に浮いたそうだ。最初、何が起きたのか分からなかったが、周りにあった家具がめちゃくちゃに倒れていたので、当初は少し大きな地震が来たくらいの感覚であったらしい。幸いに彼には怪我がなかった。時計を見ると、午前5時46分を指していた。

(2) 揺れがおさまってから

彼は揺れがおさまった後、リビングにみんなで集まりラジオを聞いた。ラジオでニュースを聞くと、新長田のほうが大変になっていることを知った。親戚がたくさん新長田に住んでいたので、状況を知るためにひとり原動機付自転車でそこに向かった。

(3) 新長田

新長田では、家々が崩れ落ちていて、あたりは火の海になっていた。親戚の家に行ったら家は崩れ落ちていたけど、全員無事であった。まわりには、倒壊した家屋から家族を助け出すために瓦礫を必死で除去している人々、崩れ落ちた家を茫然と眺めている人々、泣き叫んでいる人々があちこちで見られ、歴史で習った戦後の状況のようだと感じたということであった。

彼は親戚たちの無事を確認した後、自宅に戻ろうと原動機付自転車を走らせたが、須磨あたりでパンクしたので、そこに原動機付自転車を乗り捨てて歩いて帰ったそうだ。

(4) 当日夜

電気もガスも水道も止まっていたため、ろうそくで明かりを取り、卓上ガスコンロで冷蔵庫に残っていた食料を温め、皆で食べた。当然のごとく風呂は入れず、まだ地震が来るかもしれないのに、一つの部屋に皆で固まって寝たそうだ。

3. 震災翌日

仕事場がどうなっているか分からぬ状況であったので、本部（本山教室）に電話を入れようとしたがつながらず、垂水の教室に行ってみた。すると垂水の教室には教室担当の先生方が集まつておられ、生徒達の無事を確認する作業を行つていた。鉄道も動かず、垂水から東の道路はどこも大渋滞であったので、自分の職場である芦屋へ行く手段がなく、垂水の教室で仕事を手伝っていた。そこへ塾の代表から連絡があり、何とかして芦屋に行き、自分の教室の生徒達の無事を確認するようにいわれたため、車で芦屋に向かつたが、普段1時間30分で着く道のりが、着くまでに12時間かかったそうだ。

芦屋に到着して、当時商業ビルの4階にあった教室へ行くと、教室の中は机やいすがめちゃくちゃに散乱しており、その中から何とか名簿を探し出し、その名簿に載つていた生徒一人一人の無事を避難所を回りながら確認していった。

4. 翌日～1週間後

全ての生徒の無事を確認するのに3日間を費やした。幸い生徒達は皆無事であつたらしいうが、夏期講習だけに参加していた中学3年生の女の子が亡くなつたらしい。

先生はその後も、しばらく芦屋に留まり、渡哲也が率いる「大門軍団」と一緒に炊き出しを手伝つたりしたらしい。当時一番つらかったのは風呂に入ることができなかつたことであった。あたりは砂埃が立ち込め、冬とはいえ汗をかきながらの作業が多かつたので、その汚れを落とすことができず翌日を迎えることが本当につらかつたらしい。お風呂に入れたのは震災後10日経つてからのことだった。

芦屋での活動がひと段落ついたので、自分の家へ戻ると家も毎日の水くみや買い出しで大変なことになつてゐた。垂水から西方面は被害が少なかつたので、西の方へ行くと食料品なども少しは売られていたらしい。一つびっくりしたことは、震災後1カ月ほどで加古川の方のパチンコ店が営業を行つており、結構多くの人が遊びに来つたことらしい。こんなに大きな天災が起つたのにも関わらず、被害の少なかつた地域の人々の意識ってこの程度なのだと寂しくなつたらしい。

そのころになると、垂水にあるさくら銀行の社員寮のお風呂や「太平の湯」が開放されていたので、風呂の心配はなくなつたとのことだそうだ

先生の住んでいた地域は、電気の復旧は早かつたが、水道とガスは他の垂水の地域と1週間ほど復旧が遅れたらしい。一番大変だったのは、庭に池があり、コンクリートで固めていた池の底が地震で割れてしまい、そこから水が漏れていたため、50mほど坂を下つたところにある交番の水道から50ℓのゴミ捨て用のバケツで12杯毎日水を運んだことだったそうだ。

5. 話を聞いて

残念ながら、親から話を聞くことができなかつたが、身近な人の実際の体験談を聞けてよかつたと思う。環境防災科で震災の時のことについて学んできて3年目になるが、それぞれの震災体験は心痛む話ばかりで、全く同じ話は無いということが分かつた。

今回、先生の話を聞いて、今と違い、周りの人の配慮が欠けているきがした。

「震災後1カ月ほどで加古川の方のパチンコ店が営業を行つており、結構多くの人が遊びに来ていた」

これには、あまり納得できなかつた。先生と同じで寂しくなつた。確かに、震災での心の傷を癒す手段になる人もいるかもしれない。また、震災の発生で大切な人も亡くしていなはいし、そこまで傷ついていないかも知れない。

私は今まで学んだ防災の知識をある程度持つてゐる視点で話を聞いていたので、私だったら…と思う点がいくつかあつた。しかし、防災についてしっかり考えている人は實際には少ない。先生も、震災時は全くと言ってよいほど防災についての知識はなかつたといふ。

私も、しっかりと学んでいるつもりだが、実際に大きな地震を体験したことがあるわけではない。そう考へるともし震災が起つたとき、この学科で学んだことすべてがマニアカルとなつて活かされるわけではないかも知れないと思つた。

また、17年前の阪神淡路大震災は決して、いい思い出になつた人はいなない。体験した人は、何かしらつらい思い出がある。環境防災科に入った以上、大切にこれらの話を語り継がなければならない。私も少しでもその任務を果たせたらいいなと思つた。

6. 東日本大震災

(1) 震災のニュースを聞いたとき

私が高校2年生の時に起つた。まさか、環境防災科にいる間にこんなにも大きな地震があると思わなかつた。ニュースを聞いたとき、とても身近に感じた。友達に「環境防災科だから何かしないといけないんじゃないんじやないの?」と言われたときなどもすることができなかつた自分に、無力さを感じた。

たくさんの人からメールが届いた。“東北の電力が足りないから、関西のみんなで節電をしよう!!”という内容だった。何もすることができない私は、たくさんの友達に転送した。自らも、節電に努めた。しかしその内容は全くの嘘で、ただのチェーンメールだったことを知り、またショックを受けた。

(2) 募金活動

舞子高校では、募金活動始めた。舞子高校から近い垂水駅で春休みの間、ほぼ毎日活動した。環境防災科の生徒だけではなく、普通科の生徒や、他校の生徒、近隣の中学校の生徒も一緒に活動をした。私も参加した。

部活動の一環として私が所属していた柔道部で募金活動に参加したとき、みんな慣れてい

ないのに一生懸命声を出して活動する姿に、私も頑張らなくては…と思った。

別の日、よく垂水駅を通る知り合いの方にたまたま会い、「舞子高校の子達、毎日頑張っているね。」と言われた。私は「ありがとうございます。」と答えた。その方は笑いを交えながら「毎日、舞子高校の子が頑張っているのは分かるけど、毎日あそこを通る私にとって、目の前を通るのが嫌になってきたよ。みんなが止まって募金している中、昨日も一昨日も募金した私でも、また募金しなくてはいけないんじやないかって、圧かけられている気がする。一生懸命声を出して募金活動している彼らの前を、募金をせずに通り過ぎるのは悪いと感じて、最近遠回りするようになった。」と言った。私は何も言うことができずに「ごめんなさい。」と言った。なんとも言えない気持ちになったのを覚えている。「あなたたちがしていることはいいことだから、これからもがんばってね」と言われて、「はい」としか返事ができなかった。

（3）現地でのボランティア活動

学校が始まってから数日後に、たくさんの人の協力で、東北に行ってのボランティア活動をさせていただいた。張り切って活動に臨もうと思っていたが、地域の方のニーズを聞くのもうまくいかなくて悔しくなり、いざ、がれき撤去を始めて、たくさんのヘドロとともに流れてきた思い出のものを、瓦礫として扱う自分に嫌悪感を抱いたことを覚えている。大きな庭にある乾いたヘドロを、とっていく作業を3人程で担当していたが、2日ほどかかった。復旧、復興はすごく遠いなと思った。

避難所の方とお鍋を食べて、交流する機会があった。被災体験を私に話してくれた。

「災害当日の夜の寒い中、学校のグランドに津波で流されてきた車が積み重なっている。“誰かたすけてくれー！！”と声が聞こえるが、どこから聞こえるかわからない。俺はお母さんを探すために、その声を聴いていないふりをして去ったんだ。その人が今、生きているか分からない。俺は、那人を見捨てたんだ。」

私はどう、声をかけたらいいか分からなかった。

（4）身近なこと

1週間で東北ボランティアを終えて神戸に帰ってきてから、たくさんの人々に私が経験こと、聞いたことの話をした。

友達に話した際、「身近なことのように感じた」と言われたときうれしかった。

私は、環境防災科に入る前は、テレビで自然災害の被害のニュースなど見ても、正直「大変だな～」と思う程度で特に何も感じなかつた。でも今は違い、地震や津波、台風や洪水のニュースを見るたびに、意識して見るようになった。この意識は、大切なのだと思った。

友達から、「身近なことのように感じた」という言葉を聞いて、一人でも多くの人に災害に興味を持ってもらいたいなと思った。

（5）メッセージ

学校で、東北の小学校にメッセージを送ることが多々あった。メッセージを送る際にある“ルール”があった。—「がんばれ」と言ってはいけない。今、一生懸命頑張っている

人に対して、頑張っていない人が「がんばれ」と言っても心に届かない。—

このルールを聞いて、私は送るメッセージにとても悩んだ。結局、うまく思いを伝えることができなかつた。

(6) さまざまな問題

授業で被災体験された方の新聞記事や資料を読むことが増えた。皆さんのリアルな心境がつづられていた。ボランティアについて、「救援物資」「買占め」「原子力発電所」「“がんばれ”ということば」「避難所」「災害要援護者」など、さまざまな問題についての意見もあった。でもまだ、それらの問題に対する自分なりの答えが出てきていない。もっともっとたくさんのリアルな意見を聞きたいと思った。

7. これから

私が環境防災科に入った理由は、ボランティアがしたかったからだ。人と関わることが好きで、喜んでもらうことが好きで、たくさんのことに対する興味を持ち、さまざまな経験がしたかった。そして3年間で、普通の学校では経験できないようなこともたくさん経験し、災害についての専門的な知識を学ぶこともできた。

3年生になり、進路や夢について考える機会が増えた。クラスのみんなの将来の夢は「消防士」や「警察官」、「看護師」、「教師」、など職業と防災がつながりやすく、環境防災科で学んだことを生かせる夢を希望している人が多い。

そんな中、私は「美容師」になりたいと思っている。だから、私の夢を聞いて、もったいないという人が多い。でも、私はそんなことを思わない。私が将来就きたい職業に直接関係なくとも、日々の生活で災害に遭った時に、環境防災科で学んだことを生かせればいいなと思っている。将来家族を持ち、地域の防災訓練などに参加する際に、私持っている知識の中から意見して、質の良い訓練や活動ができたらいいなと思っている。

また、少しずつでいいので、私が環境防災科で学んだこと、経験したことを、私の周りにいる達人に話をして、知識や教訓を語り継いでもらえればいいなと思った。

語り継ぐ

溝口 真琳

家族構成

私の家族は、ガスの仕事をしている父と専業主婦の母。そして当時8か月だった私の3人で神戸市垂水区に住んでいた。離れてはいたが長田区には母のお母さん(おばあちゃん)が一人でくらしていた。

1月17日

私は8か月前に生まれていた。そんなまだまだ小さかった私は父、母の間で寝ていた。1月17日もいつものように寝ていたのだ。そんな中、5時46分阪神淡路大震災発生。私がその時暮らしていた垂水区の家付近は幸いひどい揺れではなかった。けれど父も母もすぐに目が覚めた。私は起きることもなく何もなかったかのようにいつも通り寝ていた。赤ちゃんの私には震災という危機感がなかったのだろう。そのため今でももちろん何も覚えてはいない。揺れは強くなかったものの続く余震にどきどきしながら少しの間、父も母も私の上に覆いかぶさってくれていたようだ。

長田区の様子とおばあちゃん

それから、母が一番に頭によぎったのが長田区で一人で暮らしていたおばあちゃんのことだった。すぐに電話をしたものの当然繋がらず。すぐに長田区にむかった。垂水区と長田区の災害の違いに驚いたらしい。トンネルをでるなり土砂で片側半分つぶれており通ることができるのか不安だったと言っていた。何とか通ることができた。離宮公園をこえ踏切部分では数々の家倒壊。信号は全て停止。付近の住民達が手信号で車を誘導していた。西代付近では、火の手があがり垂水区では考えられない悲惨な状態だった。そして長田につくと目の前には見たことのない長田の町が広がっていたと言っていた。

そして、おばあちゃんと再会。おばあちゃんの横並びの家はつぶれていたがおばあちゃんの家は掘り込みガレージのため倒壊はまぬがれた。だが、土壁・天井が落ち、土・ほこりまみれの状態。そんな中、おばあちゃんはとりあえず私たちの家に避難した。垂水に戻るとき火事がひどくなっていてこわかったみたいだ。無事垂水に帰ることができ父母はもちろんおばあちゃんがほっとしていたといっていた。

垂水に戻るとライフラインは駄目だったけれど目立った被害はやっぱりなかったようだ。

ちなみに私はぐずぐず言うこともなくずっと寝ていた。助かったと言っていた。そんな長い1月1月17日が終わった。

次の日

翌日、おばあちゃんの貴重品や必要なものをとりに帰ろうと試みるが渋滞でとても帰れる状態ではなかったようだ。そしてこの日からガスの仕事をしている父が私たちの家は災害が少なかったためガスの復旧に携わった。

父の仕事

最初は、神戸市全体が被害が大きいと言われていた。だが、1番最初は至急明石基地に出動要請があり行ったそうだ。明石地区も思った以上に被害が大きかった。倒壊した地域が多かったために、市内に入るのが難しかった。明石基地から北区の方・平磯までたくさんまわっていたそうだ。普段の仕事とはすこし違う内容をしたと言っていた。ガス管も水道管も亀裂がはいっていてガス管の中に水道の水が入ってしまっていた。そのため、最初はガス管の中の水をぬく作業からしたみたいだ。けれど、水がぬけたとしてもガスを流そうとしてもあちこちガス管が折れていて修復するのに結構な時間がかかった。東京・九州・中部地方、たくさんの地域の人の応援もあった。何日かの間は家にもかえらず朝から晩までひたすら働いたと言っていた。

そんな中、水も電気もある程度戻ってきて少し焦る気持ちもあったそうだ。冬だったため1日でも早く自由にガスを使ってほしいとふつふつと感じていたそうだ。けれど、ガスは水や電気と違って戻るのに時間がかかった。そして！！1月に災害がおこり、3月の半ばくらいにガスのプレス発表があり一部間に合わない地域もあったけれどだいたいの家のガスが戻った。

1月17日の翌日からまだ小さい私と母を家に残して24時間態勢でガスの復旧にあたっていたため家に帰ることもできず不安だったそうだ。それは母も同じで帰ってくることさえできない父の体の心配はもちろん、また地震がきたらと不安だったそうだ。そのため、プレス発表が出されたとき父も母も安心したそうだ。

父の仕事についての私の思い

今、もし災害が起こってこのように父が、毎日毎日仕事に携わると言われたら「頑張って」や「気を付けて」の言葉だけで応援できるかと思うときっとそんなに簡単に応援はで

きない。もちろんそんなことを言つてゐる時間がないことは分かってはいるけれど不安で仕方ないと思う。阪神淡路大震災の時、母も父も仕事に行くと言つてきっと不安の中送り出した人もたくさんいたと思う。そんな中、私だったら送り出せないという気持ちが少しでもある自分がなきなく今は思う。

どのような生活だったか

母は余震がくるたび不安になり外にでては近所の人と情報の交換をしたと言つていた。近所の家には私と同じ年代の子供もたくさんいたため、皆同じ気持ちだったと感じたようだ。少しでも近所の人と私達子供の話をすると気持ち安心したと言つていた。

そして、不便だったのはお風呂だ。電気や水が復活するなかやはりガスの復活が遅くお風呂が中々入れなかつた。そこで、私が使つてゐたベビーバスをだしてきてポットにお湯をくみ家の中で行水したそうだ。赤ちゃんの私はそれでも何とかなつてゐた。母と父は加古川に住む母の姉のところに行き、お風呂をかりて生活していった。そんな中、加古川に行くとスーパーなどがあつてあり私のミルクや離乳食はもちろんインスタントの食べ物なども買ったそうだ。どれだけ垂水の被害がすくなかったとはいへ近くのスーパーとコンビニは十分にはあつていなかつたためすごく助かつたみたいだ。他には父はたくさんの地域に行つていたためその日の食べ物だけは持つて帰つてくれたのでなんとかはなつてゐた。日がたつごとに関東方面の親戚から食品や子供用品などを送つてもらひものすごく助かりありがたかった。本当にたくさんの人の協力で生活ができてゐたとふつふつと感じてゐる。

それからのおばあちゃん

長田の家は半壊とはいへ中は全滅。私は覚えてないが母は出産のためこの間まで戻つてゐた自分の部屋がたちよれないほど被害をうけていたためただただ啞然として言葉もでなかつたようだ。それでもおばあちゃんは住み慣れた長田の町から離れることは嫌で大工さんを呼び工事をしてもらつた。その間はもちろんおばあちゃんは私の家で一緒に暮らしていた。おばあちゃんは自分の家が半壊のためかなり落ち込みをかくせなかつた。垂水と一緒に暮らしている間も毎日のように長田の家を見に帰れば気分が落胆している様子だつた。「はたして私は長田の家に帰ることができるのか」という思いを抱き、気持ちがしんどくなつていいつてゐるのが見ている母にも分かつたらしい。そんな中、おばあちゃんは体調を崩すことも多くなつてしまつた。母も何かしてあげたい気持ちがあつたものの私がまだ小さいためいっぱいな部分があつた。

夏くらいにやつとの思いでおばあちゃんは長田の町に戻ることができた。ただ、戻ったのちも残された後始末などかなりのストレスをかかえた。崩しがちになった体調はよくなることはなかった。せっかく戻れた長田の家が片付いたもののおばあちゃんは病をわずらい入院・退院を繰り返した。

ここで余談だが…長田の家で母が大切にしていたピアノ。震災当時は砂ほこりまみれになってしまってとても使える状態ではなかったものの調律を繰り返し、今は私が使っている！

そして！今の私

阪神淡路大震災で幸いそこまで被害にあっていない私は正直、阪神淡路大震災について詳しくは知らなかった。けれどその中でも、長田のおばあちゃんが震災で大きなストレスを感じたことや環境が変わったことで体に異変がでたことは昔聞いたことがあったので震災に対して嫌な感情しかなかった。もう、長田のおばあちゃんはいないからどんな気持ちだったかわからないけれどしんどかったんだろう。そんな誰でも考えることのできることしか考えられない自分に悔しく思ったこともあった。そして、中学3年生の夏。環境防災科と出会い入学することができた。私が環境防災科にはいった目的としては、たくさんの人から震災にまつわる話を聞きたいことがおおきかった。震災についてほとんど無知状態でただただ「おばあちゃんの病気の原因」「たくさんの命うばっただけ」というイメージしかなかった私。けれど、それはイメージなだけ。大きな被害をうけたわけでもない私が勝手なイメージをするのはよくないとおもった。そこで、環境防災科に入り私も阪神淡路大震災をうけた最少年齢として災害のことを頭に残す必要があると思った。そこから、必要なかもしれないけれど少しでもおばあちゃんの気持ちを考えられるようになれたらいいなと思った。そんなこんなではじめは基礎知識から。その中でも語り部さんの授業ではたくさんの発見があった。娘さんを亡くした方の話が印象に残っておりそのときの私は震災の話を聞き始めて涙した。やはり今でも震災のイメージは変わらない。でもそれが当たり前なのだろう。何回話を聞いても私の中では変わらない。

けれど、その聞いた話を自己の中で納得して終わってしまうのでは意味がない。聞いた話を次は私達が語り継ぐ必要がある。その語り継ぐことを私は将来取り入れていきたいと思っている。

私の夢

私の将来の夢は…幼稚園の先生。ただの幼稚園の先生ではない。幼稚園で防災教育を取

り入れたい。残念ながら、阪神淡路大震災でも1年前の東日本大震災でもまだ体力が完璧ではない小さな子供やお年寄りが命を落としがちだった。そんな発見をしたのも環境防災科に入ってから。もともと、幼稚園の先生になりかったのだが環境防災科に入るまでは単純な理由だった。小さい子供が好きだということ。幼稚園の先生をすごく憧れていた。そんな理由だった。けれど、今足りないのは私達より下の子供達の防災教育だという気がする。せっかく生きてきた大切な命を震災なんかで失ってしまうのはもったいない。だから私は幼稚園の先生になって防災を伝えていきたい。

方法としては難しいことはきっと幼稚園の子供も興味ももたないと思う。だから、簡単な自分を守ることを第一としたことを紙芝居や絵本にして伝えていきたいと思っている。もちろん！防災訓練も取り入れる。

そうやって私が聞いた話などを伝えることで震災の怖さや恐ろしさが分かってもらえばいいなと思っている。そして、これから世界を支えていくだろう世代の子供達に防災力を身に着けてもらい、いつ起こってもおかしくない大震災に負けないでほしい。一人一人命を大切にして一人でも多くの命が助かってほしいと思っている。

出会い

環境防災科にはいりたくさんの出会いがあった。その中でも私にすごく影響したのが東日本大震災へのボランティアだった。

正直ボランティアに行くのは戸惑った。テレビで見ていることを自分の目で見ることが怖かった。私が感情的になってしまっていいのか…そんな疑問が頭にはあった。そんな気持ちで宮城県へボランティアに行かせていただいた。周り一面何もないところも少なくなく、ただただ嘆然とすることしかできなかった。

そして一軒一軒のお宅を回り手伝えることはないかと尋ねて行った。そして初めてボランティアさせていただいたのが保育園だった。私にはとても大きな出会いとなった。夢が左右するほどの出会いとなった。初めは「君たちにできることはない。むしろできない。」といわれてしまったことが事実だ。悔しかったし私達の無力さにがっかりした。それもうだ。何も体験していない高校生に急に手伝わせてほしいと言われても戸惑うのが普通だろう。何もできないと思われるのが普通だろう。それでも、手伝いをさせていただけたことに今では感謝している。壁をはずしたりとやったことのない作業をたくさんした。

その中で私が見たもの。どろどろになったおもちゃ。とりあえずがむしゃらに水で洗う作業を行った。このおもちゃで遊んでいた生徒の中にも流された子供もいると言われた。辛くて何を言うこともできなかった。写真を見せてくださり「もう楽しかった時間は戻つてこないのでよ」と言われた。私が幼稚園の先生の立場だったら何も知らない高校生に悲

しい話をできるだろうか。そんなことが頭によぎった。たくさんの話を聞かせていただい
て私の夢は少し変わった。幼稚園の先生は先生でも防災を取り入れたい。そのように。一
人でも多くの小さな命を守れるようにと。

最後に

今分かること。たくさんの人と繋がっているということ。人々が助け合ったことで今が
ある人も少なくないだろう。私は幸いなことに大きな震災にあったわけでもない。けれど
今、阪神淡路大震災のことや東日本大震災について勉強していることでこの忘れてはなら
ない災害のことを少しあつまかれてきているつもりだ。東日本大震災で聞かせていただいた
話を…これまでたくさん学んだ阪神淡路大震災のことを…私が発信源となれるようもっと
もっと勉強して語り継いでいきたい。そこで、まずは自分の夢である幼稚園の先生になり、
小さな子供からつたえていきたい。そして、その子供達が近くの人から伝えていってくれ
るといいなと思っている。そうやって私もたくさんの人と繋がっていきたい！

記憶をつなぐ

宮本 好

1. 私の家族

震災当時、私たちは垂水区の県住で暮らしていた。そこの13階が私たちの家だった。

当時の家族構成は、父、母、姉の3人家族だ。私は、母のおなかにいた。

明石に母方のおじいちゃん・おばあちゃんがいて、同じ垂水区に父方のおじいちゃん・おばあちゃんが住んでいた。

2. 震災の日

(1) 午前5時46分

揺れの5分ほど前に、隣にいた姉がいないことに気付いた母。TVの下まで転がっていた姉を見つけ、布団まで戻し、トントンしているときだった。

午前5時46分。「ドンッ」

この時は地震だと思わず、何が起きたのか分かっていなかった。

しかし、すぐに「グラグラッ！！」ときた。この時、地震だと理解した母は、まだ1歳3か月の姉を守った。その時、母は、何も考えずに姉をかばったと言っていた。おなかに私がいることも心配だったが、とっさの出来事で姉を守った母。布団もかぶらずに覆いかぶさったため、揺れで母の頭に照明が落ちてきた。このせいで、頭に傷を負ったが、軽傷でした。その時の痛みよりも、姉を守ることでいっぱいだったそうだ。

(2) 避難できるまで

揺れがおさまっても、余震はずつと続いたままだった。

揺れがおさまって電気をつけようとしたが、照明が壊れていたためつけられず、ガス漏れがしていないか臭いで確かめ、父がライターで火をつけた。その明りで懐中電灯を探し、外に出ようとした。懐中電灯を見つけ電源をつけたとき驚いた。今まででは、暗くて何も見えていなかったが、台所が滅茶苦茶だった。玄関まで行くのに台所を通らなければいけない。13階だったために、揺れは大きかった。食器棚も冷蔵庫も倒れて、床には食器の破片が飛び散っていた。足をけがしてはいけないと思い、スリッパを探して外に出ようとした。玄関でも、靴箱が倒れてドアをふさいでいたが父がどけて、無事に外に出られたそうだ。

外に出ると同じ階の人たちが声をかけ合い、安否を確認した。数人の男性で、1人暮らしのおばあちゃんのもとにいき、助け合ったそうだ。幸い、13階に住んでいた人々は無事に避難できた。しかし、電気がついていないエレベーターが使えないために、階段で1階の駐車場まで避難した。おなかに私がいた母にとっては、辛かったと話していた。

車のところまで行き、明るくなるのを待った。この時は、こんな大惨事になるとは思ってもいなかった。地震の情報よりも身内の心配のほうが大きかったので、いち早く、父方のおじいちゃん・おばあちゃんのもとに車を走らせた。電話をしたかったけど、当時は携帯もなく、お金も持っていないので会いに行くしか方法はなかった。

住んでいたところの1階駐車場<南側（明石方面）>は、時間をおうごとに地盤沈下し車の半分くらい沈んでいた。第2神明の上の橋と道路が、車が通れないくらい地盤沈下していた。

（3）17日の残りの生活

おじいちゃんの家に向かう途中では、ガス漏れからだらうか小さな火事が所々で発生していた。

おじいちゃんもおばあちゃんもけがなく無事だった。おじいちゃんの家から、明石のおじいちゃんの家に何度も連絡をしたけど、回線が込んでつながらなかった。やっと連絡がとれたのは、何時間もたった後だった。何とか連絡がとれて、二人とも無事を確認できたので安心したそうだ。

連絡がとれてから、姉を預けて、父と母で1度家に戻った。これから的生活に必要な、通帳や姉のおむつなどの最低限の生活用品を持って、家をあとにした。

その間、おじいちゃんはコンビニに走って、昼用の食料などあるものを買いに行つた。電気がなかったので、店員もだいたいの値段で売っていたそうだ。

夜は、家にあるものを食べた。テーブルコンロがあったので、それでうどんなど簡単な物を作つて食べた。水が出なかつたので、食器を使わずに、紙コップや紙皿を使った。その上にラップやアルミホイルをしいた。すべて、ごみになるもので食事はしていた。

3. ライフライン

電気は何の問題もなくすぐに使えた。電話の回線もすぐにつながつた。しかし、水道・ガスは復旧に少し時間がかかつた。ガスは、水道の後で復旧した。あまり被害のなかつた垂水区でもライフラインの影響は大きかつた。

水道は、震災が発生した年の4月に復旧したそうだ。トイレや洗濯の水はすぐに使えた。

揺れだして何時間かは、パイプに残っていた水が出たのでポリタンクとバケツにできるだけいれた。この水で、トイレはあまり困らなかった。水が出なくなったのは、次の日くらいだった。飲み水の復旧には、震災から半年かかったそうだ。出なくなってからは、水道局にポリタンク 18 リットル分を 1 人 2 個もらいにいっていた。母は、安静にしておかないといけなかつたので、重たいものはかつげなかつた。

震災の日、お風呂に入ることができなかつた。震災後入れたのは 3・4 日後だったそうだ。おばあちゃんの知り合いが須磨の山の方に住んでいて、そこにお邪魔した。知り合いの家は、まったく被災していなかつたから普通に使えたそうだ。

4. 震災後の生活

(1) 18日

震災から 1 月いっぱいの 2 週間は、垂水に住んでいる父方のおじいちゃん・おばあちゃんの家で一緒に暮らすことになつた。

父は 1 週間の休みをもらつた。この日からすぐに、家の片づけを 1 日 2 時間ほど行つてゐた。

食事は、朝昼兼用となり、それと晩の 2 食だけの生活が始まつた。ほとんどがカップ麺などの食器を使わずにゴミになるものだつた。

まだ 1 歳になったばかりの姉には、震災が理解できていなかつた。今までの生活と違つてゐたから少しストレスを感じているように見えた。夜はちゃんと寝付かず、小さな物音にも敏感になつて いた。余震があつても泣くことはなかつたそうだ。母も、あまり寝られずに、何事にも敏感になつてゐた。ただ、1 つ変わつたのは、大きな余震が来てもすぐに逃げられるように、枕元には最低限必要である物を用意しておいていた。

(2) 19日

おなかにいた私が心配だつた母は、すぐに病院にいった。産婦人科はあまり混んでいなかつたが、内科・外科はごつ返しになつてゐた。母は、頭に傷があつたが軽かつたから相手にされなかつたそうだ。産婦人科で軽く消毒をして終つた。

私は逆子だったので、震災が起る 3 日前の 14 日に逆子矯正をしてゐた。だから、早産の危険があり、安静にしておかないと云つてゐた。

そんな中で震災が起つて心配だつたが、先生に「大丈夫だけど、無理はしないでね」と言つて安心したと話してくれた。

(3) 1カ月の避難生活

2月いっぱいの1カ月は、明石に住んでいる母方のおじいちゃん・おばあちゃんの家で、母と姉だけ一緒に暮らした。母のお腹に私がいたから、一番心が休まる環境で過ごすことが良いと考えたからだ。

おばあちゃんの家は全壊だった。建物が崩れたわけではなかったが、大黒柱が折れていた。はなれは崩れてしまったので、失くしてしまった。家も、大黒柱がだめだったのでつぶした。母の小さかった頃の思い出もガレキとしてもって行かれた。特に大切だという思い出ではなかったが、何かさみしくなった。青春時代のものも全てを失ったのだ。

生活面では、シャワーは使うことができず、追いだきができなかつた。辛い生活が続いた。

5、私の誕生

今までの生活に戻りつつあった3月4日。

13階に住んでいた私の家族は引っ越しすることになった。私が生まれ4人家族になり、部屋が1つ多い7階になった。その2日前、私の母は検診で先生にこの事を話したところ、重たいものを持たなかったら大丈夫だろうと言われていた。しかし、母は一緒に荷物運びをした。

3月5日、私は予定より1カ月早く誕生した。

6、私の震災への思い（今の私）

震災があったとき、母が私と姉を守ってくれた。母親の強さを感じた。母は、私がおなかにいるとき、「ただ元気に生まれてきてほしい」と願っていたと話した。私は、多くの愛をもらって生まれてきた。震災で亡くなった6434人の方々の分まで精いっぱい生きていこうと思う。

私の家族や親せきはひどい被害にあっていない。私は、恵まれた環境で生まれ育った。17年前、神戸で阪神・淡路大震災が発生し、多くの傷を負った。人やものだけでなく、目に見えないものも全てが。震災が私たちに多くの教訓を残した。防災・ボランティアという考え方や行動の力を与えてくれた。

私は、環境防災科に入学した。理由は単純だった。ただ、神戸で生まれ育った人間として知らなければならないことがあると思ったからだ。阪神・淡路大震災を経験して、今の神戸がある。私は、それが知りたかった。震災の映像を見た時、1.17震災メモリアルをニュースで見た時、怖さと悲しみで涙した。命と向き合った。亡くなった方々を惜しみ涙する人々から命の大切さを学んだ。

今、震災から多くの事を学んでいる。防災とは何か。つながりとは何か。命とは何か。そして、私たちのすべきことは何か。私は、震災の記憶はない。体験もしていない。私に何ができる?何もできない。家族の痛みさえ理解できない。しかし、つないでいくことはできる。私たちは、語り継ぐ役割なのだろう。震災の年に生まれた私たち。復興の道のりと成長した私たち。何もできないことはない。私にできることは、過去と未来をつなぐ役なのだ。

7、記憶をつなぐ（これからの私）

私たちには、記憶を次世代につないでいく役割がある。

「震災をつなぐことに意味はあるの？」

環境防災科に入学したばかりの時はそう思っていた。私は、誰かの震災体験をきき、自分の中にとどめていた。誰かに発信することはなかった。しかし、今では誰かに話すことには意味があると思っている。

最近では、東海・東南海・南海地震の話題が注目されている。そして、2011年3月11日、東日本大震災が発生した。私たちは、震災が起こらないと意識しない。今だから震災への意識が高いのだ。でも、災害はいつ起こるかわからない。人生の少しの時間だけ意識していても、人生においていつ起こるかはわからないのだから、いつでも意識を持つべきだ。記憶をつなぐことは、意識を持ち続けるために大切なことだ。それと同時に、忘れないことだ。私たち同じ人間が負った悲しみ・憎しみ・怒り。私たちはこれを無視できない。みんなが寄り添うのだ。そのためにも災害に目を向けて、誰かに伝えていこう。

そして、私たちの命を守ろう。同じ過ちを何度も起こさないように、私たちは過去の災害から学ぶ。助からなかつた命から、助かる命を増やしていこう。私たちが、震災の記憶をつないでいくことで、1つの命が守られるかもしれない。

今の私たちは、防災のきっかけを作る事しかできないが、きっかけを広げることができる。多くのつながりを大切にしよう。みんなで、過去から未来へ記憶をつなげよう。

8、東北支援を通して

私は、東北支援に3回行った。この支援を通して感じたことを書く。自然の力を初めて知った。私たち人間が、無力だと思った。私は、阪神・淡路大震災を体験していない。だから、震災の本当の姿を知らなかった。初めて見た被災地が、がれきで埋もれた「まち」になっていた。誰も住んでいない。笑い声が聞こえない。そんな、ただの「まち」だった。これが東北の第1印象。

（1）釜石東中学校のみんな

初めての訪問では、被災した釜石東中学校と交流した。ここで、東北の印象が一氣

に変わった。一言でいえば、みんなが強い心を持っていた。笑い声が聞こえなかったのではない。私が、聞いていなかったのだ。中学生のみんなは強かった。「生きる」ということの本当の意味を知っていた。私たちに歌を歌ってくれた。希望と勇気をたくさんつめた歌だった。私よりも若い彼らが、震災を憎むよりも、生きていることに感謝をしていた。「1度は死んだかと思った。でも、私たちは生きている。だから、思いっきり生きていこう。」そう語っていたように感じた。

私は、阪神・淡路大震災を体験していないけど、神戸の人に似ていると感じた。震災に負けないで、私たち未来の子どものために、素晴らしいまちをつくってくれた。今、釜石東中学校の生徒が、素晴らしいまちにするにはどうしたら良いか考えている。釜石東中学校だけではない。宮古工業高校だって、大谷中学校だってみんなが。私が、出会っていない学生も考えていると思う。この人たちが未来の東北を作っていくのだと感じた。

(2) つながり

私たちは学生との交流のほかにも、泥かきボランティアもした。ここで多くのつながりを持てた。

宮城県東松島市で活動は行った。初めは、「学生にできることはないよ」と断られていたが、「些細なことでいいんです。何かできませんか?」と尋ねると、溝掃除をお願いされた。これが私たちの最初の仕事だ。この仕事が終わると、その家の方がまた違うお願いをしてくれた。私たちの作業姿を見ていて、感心したと最後に教えてくれた。その方は、作業を一緒にしてくれた。手を付けていなかったことだったのに、私たちが入るだけで気持ちが変わったのか、手伝ってくれた。一緒に作業できたことが嬉しかった。家から出てきてくれ、きれいになる様子に涙してくれた。

そして、私たちに最高の言葉を伝えてくれた。「ありがとう。みんなのことは忘れられない。」と。ありがとうの重みが分かった。忘れないという言葉に今まで救われた。人と人がつながることの意味を少し知った気がした。

私は今も被災地の人とつながっている。なかなか会うことはできないが、手紙や電話でつながっている。震災が、私たちに与えるものはつらいことや悲しいことだけではない。こういった、出会いやつながり、感謝の心も私たちに与えてくれることを私は伝えたい。

9、最後に

お母さん、ありがとう。私を生んでくれてありがとう。

震災を生きぬいた多くの方々、傷を負った多くの方々、必死に救助活動をした方々、ボランティアの方々。私の大好きな神戸にしてくれてありがとう。今ある神戸は、多くの方々の強い思いでできました。私たち、そして未来の子どもたちのために、素晴らしい神戸をありがとう。

私の将来の夢は、児童福祉士になる事だ。私は、生まれ育った神戸の力強さを子どもたちに伝えていきたい。私たちの住んでいる町の素晴らしさを分かってほしい。子どもには、多くの夢を持ってもらい元気に遊んでほしい。命の有難さが分かる子になってほしい。感謝ができる子になってほしい。

そして、その子どもたちもつないでほしい。私たちの記憶と思いを次の世代へ。私たちの記憶が決して消えないように、切れないようにつないでほしい。私たちにできることは、探せばたくさん出てくる。私たちも強い思いを持って生きていきたい。6434人の亡くなった命と共に…記憶をつなごう。

語り継ぐ

三好 拓也

1. 自宅

(1) 震災発生

私の家族は震災発生当時、明石市の西端の二見というところに両親と4歳の姉、生後3か月の私の4人で住んでいた。父は神戸市消防職員でその日は前日から泊りで仕事をして、昼ごろには帰宅する予定だった。1995年1月17日午前5時46分阪神淡路大震災が発生した。母は壁掛け時計が落ちるほどの地震の揺れで目が覚めたという。寝ている私の上に衣装ケースが落ちてきたが、空箱だったので怪我はなかったそうだ。震災が起きたのが夏だったら衣装ケースには冬物の服がぎっしり入っていて、無事ではいられなかっただろう。姉は揺れの中でも一切起きなかつたそうだ。割れた食器やガラスの片づけをしているときに母が足を切った以外には大きな怪我もなかつたそうだ。

(2) 不安な日々

私たちの住んでいた家は電気もガスも水道も止まることがなかつたのでテレビも普通に見ることができたそうだ。テレビに映っている神戸の街を見て母はとても心配になった。なぜなら神戸には母方の祖父母も父方の祖父母も住んでおり、消防職員の父は火の海になっている長田にいたからだ。母自身も生まれたときから神戸で育つたので、テレビに映っている光景が信じられなかつたそうだ。それから色々なところに電話をかけて安否の確認などをしたそうだ。

2. 祖父母

垂水に住んでいた母方の祖母は水が出ないし自宅が傾いたので怖くなり、JR西明石駅より西だけで運行している電車に乗って私たちの家に来ようと、垂水から歩き始めた。途中で山陽電鉄が西新町駅から動いていることを知り山陽電鉄に乗り私たちの家まで来た。震災後は家が傾いたままだつたので引っ越しすることになり、新しい家ができるまでの一年少し私たちの住んでいたマンションの部屋を借りて住んでいた。私の記憶にあるのは今の家に引っ越ししてからなので、こんな理由があつて引っ越ししたと詳しくは全然知らなかつた。

父方の祖父母は長田でお寺が同じ敷地内にある幼稚園の一階に住んでいた。そういうことから庭が広く火の海になった長田の街でも燃えることがなかつた。それでも大きな揺れの影響で壁にひびが入り、危なかつたので中には入らずに幼稚園の送迎バスの中で寝泊まりをしたそうだ。二~三ヶ月は水道が止まつていたそうだ。

3. 父

(1) 震災発生

私の父親は神戸市の消防職員だ。普段は救急隊として仕事をしているが、阪神淡路大震災があった1月17日はたまたま消防隊として勤務していたそうだ。出動から帰り一人で受付業務をしていた時「ごおおおお」という地鳴りがしたと思った次の瞬間には体が宙に浮かんでいたそうだ。床に体をたたきつけられて腰を痛めたが、そんなことを言っている暇もなく受付から出ると長田の街の北のほうに火の手が上がっているのが見えたそうだ。すぐに出動命令が出たが消防署の車庫のシャッターが壊れて、開かなくなっていたり、道路のアスファルトが割れていたりと出動するのも一苦労だったそうだ。

(2) 救助活動

火災が起こっているところにたどり着いても消火栓から水が出ず、近くの小学校のプールや西代の県民スポーツプールまでホースを伸ばして水を取り、須磨との境界までを24時間以上かけて消火活動をしていた。消火活動を始めたころに放水しているときに瓦礫の下から助けを求めてきた人に「後で絶対助けに来るから」と約束したのに瓦礫の下から救出した時には亡くなっていたことや、自分の生まれ育った家も全焼でアルバムや思い出もすべて燃えてしまったことのストレスでとても辛かったそうだ。また時間が経つにつれて救出しても亡くなっている人の方が多くなっていくことや、亡くなった人の家族や友人が泣き崩れるのを何度も目の当たりにしたりするのも辛かったそうだ。この時のことは何年たっても疲れているときなどに夢に見ることがあるという。消防隊員の中には家族を亡くした方や体調不良があった人もいたそうだ。全国から消防隊が応援に来てからはその人たちを先導して救助活動を一週間ぐらい続けたそうだ。

(3) 帰宅

震災が起ってから約一週間後やっと私たちのいる自宅に帰ってこられた。神戸から帰ってくるときに大久保あたりからはがらりと景色が変わって、とても平和に見えたそうだ。家に帰ってきたときはひげも伸びていて、お風呂にも入らずに瓦礫の中で救出活動をしていたので、正直汚かったと母や姉は言っていた。自分では全く記憶はないが私もすごく泣いていたそうだ。帰ってきたとはいえた次の日には神戸に戻ってしまい、神戸と家を行ったり来たりの日々が一ヶ月ほど続いたそうだ。

4. 震災発生から16年後

阪神淡路大震災から16年と約2か月が経った2011年3月11日午後2時46分東北を中心として東日本で東日本大震災が発生した。西日本でも多少揺れたそうだが、その時私は

温水プールで泳いでいたので揺れには全く気付かなかった。その後帰宅中に父からの留守電が入っているのに気が付いた。「東北すごい地震があって、こっちにも津波が来るかもしれんから気を付けて帰ってこいよ。」という内容だった。今までに聞いたことのないぐらい心配しているような声だった。これはただ事じゃないと思い家に帰ると、父はテレビを見ていた。テレビはどのチャンネルにしても東北での地震、そして津波の報道で、被害の様子が少しずつしか明らかにならない様子を見ながら、父と母は阪神淡路大震災の時と同じだと言っていた。しばらくすると神戸からも消防隊や救急隊、レスキュー隊を派遣するという連絡が入った。父はその時期に研修が入っていたことなどもあって、たぶん行けないだろうけど行けるなら行きたいと言っていた。結局父は行けなかつたが私たちが5月に東北に行くときに俺の分も頑張ってきてくれと言ってくれた。父が思いを託してくれたのはとても励みになった。

夏休みに入る少し前には友達と二人で東北に行く計画を立てた。高校生二人だけで行くと言ったら反対されると思ったが、反対どころかむしろ背中を押してくれた。やっぱり高校生だけで被災地に行くことに対して心配もしていたと思う。それでも二人は「阪神淡路大震災の時に助けてもらった恩返しをしたいし、被災地に行ってなんかしたいと思うけど、仕事もあるしそう簡単に行けないから、そのぶんも頑張ってきてくれ。」と言ってくれた。それを聞いて、阪神淡路大震災のときのことが本当に二人にとって大きなことなのだと改めて感じた。東北から帰った私があったことや見た景色について話すと、今は無理でもいつか行きたいと言っていた。

東日本大震災や他の様々な災害の支援のためにJR垂水駅などで募金をしていると「阪神淡路大震災の時のお返し」「あの時助けてもらったから」と言ってお金を入れてくれる方がいる。このような言葉を耳にするたびに本当に神戸や西日本の人たちにとって、阪神淡路大震災の経験が大きなものだったということを感じる。

5. これまでの活動を通して、話を聞いて感じたこと

小さいころから阪神淡路大震災の話を聞いたり、小学校で避難訓練をしたりしてきたがそのころは深く考えることもなく「そんなことがあったんだ。」と、考えるぐらいだった。しかしだんだんと年を重ねるにつれて、父の仕事に興味を持ったり、姉が環境防災科に進学して防災についての話を聞く機会も増えたりして、阪神淡路大震災の話を少しづつしっかりと受け止めるようになっていった。そして、自分もボランティアで困っている人に何かできる人になりたい、もっと防災について学びたいと思うようになってき、環境防災科に進学しようと決めた。環境防災科に入ってからは地震のメカニズムやボランティアのあり方について学んだり、様々な専門分野の方が外部講師として来てくださり、阪神淡路大震災の時の話をしてくださいました。また、様々な募金活動に参加したり、豪雨によって被害の出た鹿児島県の奄美大島に募金を直接届けに行かせていただいたりした。そんな

活動を通して少しづつ防災の知識、力、技術がついてきたと思っていた。

しかしそんなときにあの大災害が起こった。2011年3月11日の東日本大震災だ。初めはほとんど情報もなく、少しづつ少しづつ被害の全貌が明らかになっていく中で、今まで学んできた防災の知識だけではどうすることもできないと感じた。何かしたいという思いはあっても何もできない。今までしてきた活動のように先生や周りの人たちに支えてもらえないと何もできないと感じた。5月には私たちも学校から宮城県の東松島市に派遣してもらって、実際に被災地で泥かきや掃除、瓦礫の撤去などをさせてもらった。その時には一週間どれだけ片づけても瓦礫がなくならず、正直何もできなかつたという思いのほうが大きかった。それでもボランティアに入らせていただいた家の方は、みんなとても感謝してくれた。その時に、目に見えてできることは小さくとも見えないところで、何かができるている、無駄じやなかつたと感じた。

それでも先生たちが必死になって計画や準備をしてくれたボランティアは私たちにとっては本当の意味でのボランティアではないという思いはあった。それはボランティアの原則の中に自己完結というものがあると授業で学んだからだ。自分で持っていくすべてのものを準備して、泊まる場所や交通手段を確保する。本来はそれがボランティアなのだから、それを自分たちでやってこそボランティアをしたということになると考えた。そして夏休みに友達と二人で夜行バスに乗り東北まで行った。泊まる場所はボランティアセンターの横の広場のテント村のようなところだった。テントも高校の先輩に借りて自分たちで持つて行った。ボランティアの活動自体はボランティアセンターによって割り振られてイチゴ農家のハウスの泥かきをした。活動の内容は5月の時と同じようなものだったが、自分たちで計画をしていったボランティアは何もできなかつたという思いは少なかつた。

夏休みには学校からも東北に行った。このときは泥かきのような活動よりも交流をメインで行った。被災した中学生や高校生と話をしていると、みんな自分の街が大好きで早く前みたいに暮らしたいと言っていた。また、津波をかぶった写真の洗浄作業を手伝わせてもらった時に私たちと同じ年に生まれた子供の写真があった。洗っていくにつれて写真に写っているその子がだんだん大きくなつていった。その写真に写っている家族が無事なのかどうかもわからないけれど、この思い出の詰まった写真がきれいになって、持ち主のもとに戻ってほしいと強く思った。

夏休みに行った二回のボランティアでは5月に活動させていただいた方の家に行って、お話を聞く機会があった。その時にみんなが嬉しいと言ってくれた。私たちがしたことは本当に無駄ではなかつたと改めて感じることができた。東日本大震災という最悪の出来事があつたからこそできたこのつながりをこれからも大事にしていきたい。

この文章を書くために家族にいろんな話を聞いて、今まで知らなかつたことをたくさん知つた。母がガラスで怪我をしたこと。父が帰つてこない不安の中で一週間も一人で私や姉の面倒を見ていたこと。父が長田の火災現場で多くの人のために命がけで消火活動をしていたこと。一週間も帰つてくることができなかつたこと。祖父母の家が傾いたこと。

今まで知っていたことも、今回初めて知ったこともこれから忘れることなく自分の子供ができたときに伝えたいと思った。

私は将来の進路について、小学校の教師になるか消防士になるか迷っている。とりあえず大学は教育学部に進学しようと考えているが、この話を聞いて消防士という職業の偉大さと大変さ、辛さを改めて感じることができた。自分の家族が亡くなっているのに市民を助けるために必死になって救助活動を続けた人や、体調不良があったのにそんなことを口に出さず救助活動をしていた人がいたことを知った。また、いつも家ではだらだらしている父もあの火の海の中で人の命と向き合って、救助活動を続けたことや、助けるといった人が救出した時にはなくなっていたり、自分の生まれ育った家や街、思い出がすべて燃えて灰になってしまったりしたこと、そんな辛い思いやストレスが未だに疲れているときなどに夢に見るということを知った。そんなことがあることを一切口には出さず家族を支えるために救急隊という仕事を続けて、今も人の命と向き合い続けている父を本当に誇らしく思う。これからも父を男として、父親としての目標にしていきたいと思う。

2011年3月11日の東日本大震災でも多くの方が亡くなり、多くの方が住み慣れた街や家を失った。私たちは震災が起こった瞬間に東北にいたわけでもなく、実際に津波を自分で見たわけではない。それでも被災地でボランティアをして感じたことや被災地の方に聞いたこと、被災地を見て思ったことなどを家族や友達に伝えることはできる。それと同じように、生まれて間もなかったから全く記憶にない阪神淡路大震災についても、親や知り合い、先生などの色々な人に話を聞くことで誰かに伝えることができると思う。また、阪神淡路大震災や東日本大震災や色々な災害で多くの人が犠牲になって、悲しい思いをしたということを永遠に忘れられることのないように、これから世代に語り継いでいかなければならぬと思う。これから高校を卒業をして、大学に進学し、社会に出て、いつかは家族を持った時に、周りの人や家族に自分が高校時代に学んできたことや経験したこと、今回聞いた話などをしっかりと伝えていって、阪神淡路大震災や東日本大震災が忘れ去られることのないような未来を作れる大人になりたい。

語り継ぐ

向井 陸久

(地震の発生)

阪神淡路大震災がおこったのは僕が生まれて3か月後の出来事だった。

1994年1月17日午前5時46分地面からドンとつきあげるような音とともに地面は揺れ始めた。地震だ、地震がきたぞ。お父さんは気づいてお母さんに大声でしらせた。そしてとても長いあいだ揺れていたようにかんじたらしい。ぼくは地震が起こった時ベビーベッドで寝ていた。幸い僕が寝ていた部屋にはほとんど家具などがなく家具などの下敷きになる心配はなかったという。揺れがおさまり急いで僕が寝ている部屋に駆け付けたお母さんは無事に寝ていた僕を見てとても安心したという。お母さんはとりあえず外に避難しないと思い僕を抱きかかえて外に避難した。

外に避難すると同じマンションの人たちがみんな外にでてきていて声を掛け合ってみんな外に出てきているかを確認し始めたら、隣にすんでいたおばあさんだけができてていなかつたらしく心配になった人たちの若い力がある人たちで助けに行くと、となりのおばあさんはベッドで寝ていたら、地震が起ころって寝室にあったタンスが倒れてきてベッドとタンスの間に挟まってでてこられなかつたらしく、助けにきた人たちに10分ほどかけて助けられたらしい。その後おばあさんはもうこのまま誰にも見つけられずに死んでしまうのかなとおもっていたらしく助けにきてくれた人にとっても感謝していたらしい。

地震が起ころってから時間がたって、家の中に戻ってみると家具はほとんど倒れていて食器は全て割れてしまっていたらしい。

(地震後の生活)

地震が発生して家に缶詰や懐中電灯や水などの非常事態にそなえるものがなかったので急いで買いにいこうとしたが売っていなかつたらしい。

電気は2~3時間ぐらいでついたが、水道とガスは一週間ぐらい使えなくて、水道は一日に一回給水車が来てタンク2杯分水をもらってその水で生活していたらしい。食べ物は最初調理しなくともよい缶詰などたべていたが、姫路方面にいくと店があいていたのでご飯はずっと外で食べていただらしい。

父が当時働いていた会社は元町にあって、元町はとても被害が大きかったらしく、震災後3日間は出勤することができなかつた。震災後初めて会社に出勤したときは会社の中はめちゃくちゃで物は散乱してとてもそこで仕事できる環境ではなく最初は会社の片づけなどで1週間はかかつたらしい、出勤するときも電車が元町までは通つていなかつたので電車がつながっているところまでは電車でいって、そこからは歩いて通勤していたらしい。

(今の震災への思い)

今はなにげなくすごしているけどやっぱりたまに来る地震でふと阪神淡路大震災のことを思い出したりとても怖くなったりするので、ぼくの家族は震災で誰かをなくしたり食べ物に困ったり水や電気や水道に困ったりとても大変な思いはしてないけれどもう阪神淡路大震災のような地震はおこってほしくないし、もうこのような思いをする人たちが増えないでほしいとおもっているらしい。今の生活をあたりまえだと思わず今になに不自由がない生活ができることをありがたくおもって、生きてほしいといっていた。阪神淡路大震災は忘れたくても忘れられない思い出だと言っていた。

(祖父母の話地震発生)

1994年1月17日大きな揺れで湊川に住んでいたおじいちゃんとおばあちゃんは目が覚めた。この時おじいちゃんは悪い夢でもみているのかと思っていたらしい。揺れがおさまりおじいちゃんが窓を開けて外をみてみると、窓から見た風景はとても悲惨だったらしい。窓から見える範囲の家はほとんどつぶれていて叫び声が聞こえていたという。両隣に住んでいたのが高齢者だったため、おじいちゃんとおばあちゃんは、安全な場所へ避難させなくてはと思い、おじいちゃんとおばあちゃんは二手に分かれて助けにいたら、おばあちゃんが助けにいったほうはけがなどはなくてすぐに外に避難することができたが、おじいちゃんが助けにいったほうはタンスにはさまれて身動きができなくなっていたため、おじいちゃんは一人でタンスを動かそうとしたが、全然動かすことができなかつたため、下の階の普段から仲良くしていた人が様子を見に来たため、手伝ってもらって二人がかりでタンスを動かしてやっと救出することができたらしい。おじいちゃんが助けた高齢者が助けた時に言ってくれた言葉がもうこのまま誰も助けにこないとおもったらすぐに助けに来てくれてとてもうれしかった日頃から仲良くしていて本当によかったってってくれたらしい。おじいちゃんが高齢者を連れて下におりて改めて道路などをみたときに思ったのがこれは本当に日本の道路なのかとおもつたらしい、道路はぐちゃぐちゃで車が通ることはできないし歩くことすら難しかつたらしい。近くに大きなお寺があったからなんとかぐちゃぐちゃの道路を通ってあるいていくと、そこにあるはずの大きなお寺はなく大きなお寺は地震によってつぶれてしまっていたらしい。その光景を見てとても驚いたのも今でも覚えているらしい。

(祖父母の話地震発生後)

地震発生から2時間後おじいちゃんとおばあちゃんは近くの小学校にいたが、子供が無

事が心配になったため車で安全を確かめることにした、いつもなら1時間もあればつく距離なのに、通れない道が多かったことや渋滞ができたため7時間ぐらいかかったらしい、子供の無事を確認するまで心配でしかたがなかったが無事を確認できたとき地震が発生してから一番ほつとしたらしい。無事を確認したのでとりあえず家に帰ろうと思ったおじいちゃんとおばあちゃんは再び7時間ぐらいかけて湊川に戻った、家についてみたら家の周りのほとんどの家が火事で、周りの木造住宅はほとんど燃えてしまっていておじいちゃんが自分の家は燃えているのではないかと思って自分の家を見てみたら案の定おじいちゃんの家も燃えていたらしい、おじいちゃんは自分の家が燃えているのに火を消すこともできないし、周りの人たちに消すのを手伝ってくれといつても周りの人も自分の家が燃えてしまっているので人のことどころではないから助けてくれないし、おじいちゃんはただ自分の家が燃えているのをただただ見ることしかできなかつた。自分がとても悔しかつたし、自分の家が燃えているっていうことが信じられなかつたらしい。

おばあちゃんが自分の家が燃えているのをただただ見ているおじいちゃんを見つけて、このままでは火事に巻き込まれてしまうと思いおじいちゃんを連れてどこかへ避難させようと思い、おじいちゃんに避難しようと呼びかけて避難しようとしたがおじいちゃんはその場から動こうとしなかつたのでおばあちゃんはこのままでは危ないと思い、とっさにその時持っていた水をおじいちゃんの顔にかけてしっかりとしなさいといったらしい。おじいちゃんはそこでやっとその場にいることが危ないと思って避難しようと思い小学校へ避難したらしい。火はそのまま2日3日は燃え続けていて家があつた場所に5日後見に行ってみたら家はあとかたもないほどに燃えてしまっていたらしい。

(祖父母の話地震後の生活)

地震がおこった日の夜から、おばあちゃんはガレージを避難所にしてガレージに避難して車で寝泊まりしていたらしい。おじいちゃんは電力会社に勤めていたため、出勤命令がでて会社にいかないといけなくなつて、ずっと泊まりこみで働き1か月ぐらい家に帰れなかつたらしい。

食べ物は学校に救援物資が来ていたため学校に救援物資を貰いにいったり、おじいちゃんは電力会社から貰うことができる弁当を貰って食べていただしい。風呂は地震後ほとんど入ることができなくて、自衛隊の人が一回風呂を作ってくれたのと銭湯をたまにいくぐらいで銭湯もとてもならんでいて10分しか入つたらいけないルールができて大変だったらしい。

(祖父母の今の震災への気持ち)

おばあちゃんとおじいちゃんの中で阪神淡路大震災はとても思い出に残る出来事で、自

分の家が燃えているところを見ることは今まででもこれからもないだろうし今となっては凄い経験をしたとおじいちゃんは言っていた。ぼくが環境防災科に入るということを初めておじいちゃんに言った時おじいちゃんは阪神淡路大震災のことを思い出して地震の怖さを知っているから被災地にぼくが行くとなった時本当に大丈夫なのかなって思ったらしい。

おばあちゃんは地震でとても仲のよかった友達を亡くしていて、おばあちゃんは地震があるたびに今でも友達のこと思い出すらしいしおばあちゃんはもし自分が助けにいっていたらなど考えるたびにとても辛い思いになるらしい。

感想

卒業研究のために家族やおばあちゃんから話をきいてぼくが思ったことは阪神淡路大震災がおこって本当にみんな大変だったんだなと思いました。ぼくはまだ生まれて3か月だったので全然記憶がないけれど話を聞いていくうちに本当に大変なことや悲しいことなどを聞いて改めて阪神淡路大震災の怖さがわかりました。

お母さんに話を聞いているときにお母さんの昔から仲が良い友達がいて、僕も小さいころからよくめんどうをみてもらっているのですが、全然知らなかったのですがその友達のお母さんは阪神淡路大震災で家の下敷きになってしまって、その時別にくらしていたので地震が起こって心配になったから家にみにいってみたらお母さんは下敷きになってしまっていたという話を聞いて、いつもはなにもないように元気にふるまっているけれどその話をするときだけはとても悲しそうな顔をして話すつていっていたので地震が起こってその時はとても悲しいけれど、時間がたった今でも悲しさは続いているって本当に辛いのだろうなって思ったしもし自分のお母さんが死んでしまったらどうしようって改めて考えました。

お母さんは阪神淡路大震災が起こるまで実際に死んでいる人をみたことがなかったらしくておばあちゃんの様子をみにいって実際に死んでいる人や助けてという声。必死に自分の家についている火を消そうとする人、道でひざからくずれ落ちている人などを見て、本当にこれは日本なのか夢ではないのかとおもったらしいし、助けてといわれてもなにもできない自分の無力さなどを改めて感じたつていっていたし、今でも助けてという声がたまによみがえるといっていた。ぼくはもしその状況にいたらどうしていたのか、誰かを助けることはできたのか、それともただその場にたちつくしていただけなのかと考えるとたぶんぼくは急にその状態になれば足がすくんでたちつくしてしまうか怖くなってしまふかもしれない、防災の勉強をして消防学校にもいっているぼくだけどもし不意に阪神淡路大震災のような大きな地震に遭遇してしまったらたぶんにもできないと思う。だから次の地震の時に少しでも役に立てるよう日頃から訓練したいし勉強したい、もし実際に助けないといけない状況になったしたら助けられるようにしたいし大切な人を守れるようになりたいと思いました。

おばあちゃんはおじいちゃんが電力会社で1か月いなかつたので一人で過ごしていたらしいが、地震があって一人でいるのが心細くなつたときにまわりに住んでいた人や同じ避難所の人たちと声をかけあつたり、励ましあつたりしながら過ごしていた時、改めて近所の人と仲良くしててよかったです、やっぱりみんな優しんだなとおもつたらしいという話をきいたとき、僕はあまり近所の人やマンションの人と仲がよくないので、ぼくも近所の人やまわりの人と仲良くしようとおもつたし、いざ災害がおこったときに、助けあえるような環境づくりをしたいなっておもつたし、防災リーダーとしてぼくがひっぱつていけるようになりたいと思いました。

ぼくたちが阪神淡路大震災を経験した最後の世代だから、ぼくたちより後に生まれた人は阪神淡路大震災を経験していないから、ぼくたちがこれからの中の世代の人たちに伝えていかなくてはいけないと改めて思ったし、環境防災科としてみんなに地震の怖さや防災の大切さなどを知つてもらいたいなと思いました。

ぼくは正直中学生まではボランティアや防災に興味がなかつたけれども、環境防災科に入つてみんなと話したりいろんな人の話を聞いたりいろんな経験をしたりすることによつて、だんだんボランティアや防災のことに興味がでてくるようになって、東日本大震災のボランティア活動をきっかけにボランティアに自分から参加しよう思つてるので、ぼくたちが色んな経験や話を聞いてぼくたちが語り継ぐ側になりたいなとこの卒業研究を通して思つました。

語り継ぐ

村上楓香

1. はじめに

私が生まれたのは震災の約一か月前だった。父方・母方どちらの祖父母にとっても初孫で、たくさんの人々に祝福された。

生まれてからしばらくは、母方の祖父母の家である神戸市北区のひよどり台に母・父・私の家族三人が住んでいた。約一か月が経ち、「明日、そっちに帰ります」と父方の祖父母に母が電話をしていた次の日、それはおこった。

2. 阪神淡路大震災がおこったとき

(1) 震災直後

私たちはそのとき、北区のひよどり台にいた。私たち家族はもともと垂水区の学が丘（舞子高校の隣り）に住んでいたのだが、その当時は、私が12月に生まれたために母の実家であるひよどり台に里帰りをしていた。

阪神淡路大震災ときくと、家屋の倒壊や火災の被害が大変だったイメージがあるが、私たちがいたひよどり台にはあまり大きな被害はなかった。お皿が割れたりしたそうだが、家具の転倒もない。なにしろ私たちは、地震がおきた瞬間は全員寝ていた。「地震！ 地震やで！ ふうかは大丈夫？」地震に気づいた祖母が、そう言ってやっと、父と母が目覚めた。それまでは地震に気づくどころか起きてすらいなかつた。まさかそれが、戦後最大の被害をだした阪神淡路大震災だとはだれもわからなかつた。それでも、大変なことがおこったというのは分かつたらしい。寝ていてあまり地震に気づかなかつた母ですら、地震があつた後しばらくは揺れが怖かつたそうだから、地震の大きさは甚大だったことが分かる。

(2) ひよどり台での生活

いくら被害がないといつても、ライフラインは止まった。震災で家が大変というよりは、ライフラインが止まること自体が大変だったらしい。水道がないのは、とても不便で、祖母は、毎日水を汲みに行ってくれていた。それでも、比較的はやくにライフラインの復旧は終わり、他の地域に比べると、スムーズに日常に戻つていった。地震から約1か月間、私たちは母方の祖父母と一緒に、暮らしていた。

(3) 祖父母の震災

そんな私たちとは反対に、当時須磨区に住んでいた父方の祖父母は大変だった。近所の

人たちとの繋がりはあったため、地震後はみんなが一つに集まり、ガス栓をしめたりしていたため火事はなかった。しかし、家は住めない状態になっていた。一見、つぶれてないために大丈夫に見えたその家も、柱がだめになっており、住むには危険だったのだ。その家は、父が子どものころに親戚らが集まってたてた、思い出の家だった。今でもたまに、「あの家が残つとったらしいのになあ」と祖父母や父はいう。私は震災がおこる前に何度か行つたらしいが、もちろん記憶には残っていない。決してきれいな家ではなかつたらしいが、私もその家を見に行きたいと何度か思ったことがある。

家に住めないと分かった祖父母は、親戚の家々を訪ねてまわった。まずは、長田にあつた親戚の家を訪ねた。そこは、火災の被害はなかったものの、屋根がスライドされたようになつていて、家の中から空が見える状態だった。それでも、その家に住む親戚は、住めないことはないからと、屋根を直しその家に今も住んでいる。

その後祖父母は、他の親戚の家にいった。家が倒壊することがなかつた親戚の家にいき、しばらくはそこで過ごしていた。

3. 震災から1か月とその後

(1) 1か月後

震災から約1か月がたつたとき、私たち家族は学が丘の家に戻ってきた。赤ちゃんだった私の育児に困らないように、ガスが復旧するのを見計らつて戻つてきたそうだから、そのころにはライフラインはほとんど復旧していたのだろう。まだ小さい私を育てながら、両親はそこでまた生活をはじめた。

(2) 3か月後

そして震災から約3か月たつたとき、父方の祖父母が私たちの家にやってきた。もちろん、まだ新しい家は見つかっていなかつた。つまりは、私たち家族と父方の祖父母の同居生活がはじつたのだ。当時は父の兄も結婚していなかつたので、私の叔父にあたる人も一緒に生活していた。

もちろん、震災がなかつたら一緒に過ごすことはなかつたはずである。父方家族と母の仲は悪いわけではないが、生活のリズムも価値観も違う中で、一緒にすごすのは大変だつたらしい。家族三人で過ごしていたのに、夫の両親といきなり一緒に過ごしだしたのだから、精神的にも大変だつただろう。なにより、父方の両親と母方の両親は、考え方も生活も正反対というくらいに違つていた。母にとっては、若くて知らないことが多い中でのことだったので、そのときはとてもしんどかつた。それでも、その経験のおかげで、受け入れることの大切さを学んだと母は言つていた。

(3) 同居生活

母は、私の育児をしながらも、みんなの家事全般をまかされ、祖母は今まであまり繋がりのなかった親戚の靴工場へいき、祖父は運転免許証をとりにいった。両親は忙しいし、祖父母もやることがある。しかし、だからといって私が誰にもかまってもらえないかったわけではなかった。むしろ、震災がおこったおかげで親戚がたくさん集まり、いろんな人に愛されて育った。もともと私の親戚は団結力が強いため、震災がおこった後は親戚同士で集まるものがあった。家がなくなった祖父母も、そのおかげで家がないことに困ることはなかった。だから、両親が忙しくても、祖父母がいる。祖父母が忙しくても、誰かしら親戚がいる。震災のおかげで、親戚たちは集まる機会も多く、気がつけば、たくさん的人が私の周りにいた。いろんな人と触れ合いながら、私は大きくなっていた。

(4) 同居生活の終わり

私たちは、本当に恵まれていたのだと思う。こうやって助け合おうと考えてくれる親戚がいなかつたら、祖父母は家がなくなった後に住む場所がなかった。私だって、両親が忙しくて寂しい幼少期をおくっていたかもしれない。

震災から約 6 か月後、祖父母は私たちの家から仮設住宅へとうつっていった。祖父母がいた 3 か月間、母は大変だった。慣れない同居とはじめての育児で、とてもしんどかったと言っていた。それでも、母にとっていい経験であったし、私にとってもかけがえのない時間だった。

4. 祖父の話

(1) 祖父の仕事

祖父は、震災よりも前に、長年勤めていた自転車会社を辞めた。そろそろ次の職を見つけるといけない、というときに、震災がおこった。祖父は、壊れた親戚の家を直しにきた大工さんを手伝った。そして、その結果、大工という職につくことができた。

もちろん、普通なら 40 をすぎている人を雇う大工さんはいない。大工さんになるには技術が必要で、技術を身に着けるためには時間も必要だ。他の職業ならまだしも、40 過ぎで大工さんになるのはほぼ無理だ。しかし、祖父は就くことができた。なぜかといえば、それは、阪神淡路大震災があったからだった。

(2) 震災と大工さん

震災後、倒壊した家を建て直すために大工さんという仕事はとても重要だった。震災で、あちらこちらの家が倒壊している。それを直すのは大工さんの仕事で、倒壊家屋が多かつたために大工さんの仕事はとても多かった。しかし、倒壊家屋の多さに、大工さんは人手

が足りなかった。祖父のように、手伝っていた人も当時は多かったのではないかだろうか。

そして、祖父はそういった大工仕事が得意だった。父の家族が住んでいた家は、祖父やその親戚たちで建てたものであったし、自動車会社に勤めていたため、細かい部品の扱いにもなれていた。まさに大工仕事がぴったりだ。親戚の家を直しに来ていた大工さんに、親戚が話しをしてくれ、祖父は現在の職である大工さんになることができた。祖父は、震災があったからこそ、大工さんになることができたのだった。

5. 現在の話

(1) 震災後

震災後に、そこまで震災を考えたことはなかった。震災から 1 年とすこしで妹がうまれ、それから少しすると父はバイク事故にあった。大変な事故だったらしく、父の右足は曲がらなくなつたが、無事元気に過ごしている。私はといえば、楽しく子ども時代をすごした。友達もいたし、楽しいことも多かつた。小学校時代に少しいじめられたりもしたが、いつの間にかそういうこともなくなつた。特に何か震災を気とした記憶などない。ただ、普通に生活を送っていた。

(2) 環境防災科

最初に環境防災科を知ったのは、中学 1 年生のとき。そのときは、そんな学科もあるんやなという程度の興味だった。中学 3 年生になって体験入学をしたときにはじめて、環境防災科に入りたいと思った。しかし、環境防災科に入る動機に阪神淡路大震災のことは全く関係なく、単純にボランティアがしたいからというものだった。阪神淡路大震災を知るのは大切だと言いつつも、どこか遠い出来事だった。

(3) 現在

現在、私は 17 歳になった。未だに、大震災が自分の身に降りかかったときに冷静に対処できる自信は正直ない。

しかし、環境防災科に入って災害についていろいろ学んでいくうちに、阪神淡路大震災が身近に感じられるようになってきた。今までほとんど震災の話を聞いたことがなかつたのだが、たくさんの話を聞かせていただくようになった。祖父母にも、環境防災科に入ってはじめて震災の話を聞いた。はじめて話を聞いたときは、とても驚いた記憶がある。私の周りには、とくに震災でなにか被害があつたものではないと、勝手に勘違いしていたのだ。そのときは、あらためて自分が何も知らなかつたことを理解した。

(4) 話を聞いて

震災の話を聞いていると、震災は普通に生活している中でいきなりおこるものだと分かる。その話の中には、壮絶な話もたくさんある。家がつぶれた。知り合いが亡くなった。つぶれた家の下敷きになり、迫りくる火から逃げることができずに亡くなった人もたくさんいるらしい。

そうした話は、文字で見ることは多々あっても、なかなか語りで聞くことはできない。しかし、私には生の声を聴かせていただける機会があった。目の前にいる方が、震災をリアルに体験している。そして、それは決して特別なことではなく、当時神戸に住んでいた人は全員が震災の影響をうけているのだと感じた。それは、私の両親であっても同じなのだと気づいた。私が小さいころに聞いた震災の話は、「地震がおきたときは寝ていた」ということだけだった。それ以外はほとんど知らず、育ってきた。震災が大変だったと聞いても、それは他人事なのだと心のどこかでおもっていた。

しかし、それは違った。家がつぶれた祖父母も、地震の揺れに気づかなかつた両親も、震災の記憶がほとんどない私でさえ、阪神淡路大震災の影響をうけている。テレビで見るような阪神淡路大震災は、壮絶でどこかの外国でおきたことのように感じるときがある。たしかに、そういう壯絶なことが、震災では日常的におこっていたのかもしれない。そういう話は、もちろん知りたいと思う。

そのうえで、私にとっての阪神淡路大震災は、特別な出来事ではなく人生の一部なのだと感じた。

6. 最後に

私たち家族の生活は、震災から1年後には日常に戻っていた。1年と少しがたった5月には、妹がうまれた。それからしばらくたつと、父がバイクで事故にあった。震災とは関係ないが、妹の誕生や父の事故は、私たち家族にとって大きな出来事だ。幸も不幸も、けして地震だけが原因ではない。生きている限り、私たちは命の危機に直面することだってあるかもしれない。震災があるから大変なことがあるのではないと母は言った。防災とは、震災などの自然災害に備えることだけではなく、日々の日常を大切にすることから始まることなのかもしれない。

0歳の被災者として

柳 夏海

初めに

私は阪神・淡路大震災が起ったときは生後 4 ヶ月半だった。だから震災の記憶は一切ない。記憶はないがこの世に生まれていたので、一応被災者となるのだろうか。発生から 17 年が経ち、当時のことはだいぶ忘れられかけている。だからこそ記憶がないなりにも語り継いで震災のことを本当に知らない世代に教え、知っていてほしい、忘れないでほしいと思う。阪神・淡路大震災の発生時に生まれていた、一人の被災者として。

当時私は、父と母の 3 人で神戸市垂水区上高丸の公務員宿舎に住んでいた。家の中の被害はテレビが落ちてきて、上に乗せてあった時計がテレビの下敷きになって壊れたことや食器が散乱していてキッチンは足の踏み場がない状況だったなどと聞いた。18 日には母の実家がある広島県尾道市に避難した。父は仕事があったので神戸に残った。私と母が神戸に戻って来たのはガスが復旧してからだった。

今までざっと我が家の阪神・淡路大震災について書いてきたが、詳細は母が「あのこと思い出したくない」ということで聞けなかった。だからこの先は父が阪神・淡路大震災で感じた思いと私の幼なじみのお母さんから聞いた被災経験を載せることにする。

父の思い

「一般の人よりは有事に慣れていると思っていたのに、ぼう然とするばかりだった。」父には、人を助けるのが職務の海上保安官でありながら、誰一人救えなかった阪神・淡路大震災での苦い記憶がある。

当時は陸上勤務で第五管区本部厚生課勤務だった。阪神・淡路大震災発生後、第五管区海上保安本部の職員が次々と招集されたが、災害に関係ない部署で働いていた父は自宅待機を命じられた。それから 2 日間、テレビに映る惨状をただ見つめることしかできなかつた。発災 3 日目にやっと出勤命令が出た父はがれきの街を自転車で抜けて中央区にある庁舎へ向かった。救援物資の仕分け作業に追われたが、落ち着きを取り戻すと共に、発生直後の行動への自責の念がわいてきた。「生き埋めになっていた人が大勢いたのに、手を差し伸べられなかつた。何のために海上保安官になったのだろう。」父は悩んだ末、災害を防ぐ仕事がしたいと思うようになった。

それから 10 年余り、災害が起きるたびに新聞を読みふけり、テレビ番組を片っ端から録画するようになった。あの時、自分で何をすべきか判断できなかつた後悔から、自分がその場にいるならどう判断し、どう動くかを常に考えた。

目標を定めてから 14 年が過ぎた 2009 年 4 月、和歌山海上保安部に異動になり、海上防

災係長に着任した。名刺に念願だった「防災」の文字が入った。

着任してまず、阪神・淡路大震災後に作られた震災対応マニュアルに目を通した。それは、人も船も庁舎も無事で、通信機器もすぐに復旧することが前提の内容だった。「庁舎も職員も津波にのまれるかもしれない。阪神・淡路大震災も、想定外の連続だった」と上司に進言し、マニュアルの見直しを始めた。2010年9月には、抜き打ちの非常招集訓練を実施。県や各地の消防の防災担当者と打ち合わせを重ね、万が一の際、どう役割分担するかを確認した。

2011年3月に発生した東日本大震災では被災地が遠いこともあり、直接的な支援に関わらなかった。私は父に「また悔しい思いをしたのか」と尋ねた。父から返ってきた返事は「今回は直接支援に関わることはできなかつたけど、夏が舞子高校環境防災科として東北にボランティアに行ってくれたから、それでいい。悔しい思いはしていない」だった。それを聞いて少し驚いたが改めてボランティアに行ってよかったと感じた。

父は現在、和歌山海上保安部・海上防災係長から神戸海上保安部・救難係長に異動になった。勤務地が変わっても「あのときに動けなかつた分を、必ず取り返す。」という固い決意を胸に、いつ襲ってくるかわからない次の災害と向き合っている。

幼なじみの母親が語る阪神・淡路大震災の記憶

幼なじみは私と同じく当時生後4か月半で私の家とバス停1つ分離れていたところにある社宅に住んでいた。当時の家族構成も私の家と同じだった。

※以下から幼なじみの母親の視点に代わる

震災当日（1月17日）

（1）午前5時46分

当日、私と夫はベッド、息子はベビーベッドに寝ていた。

私は地震の横揺れで目を覚ました。縦揺れにかわるころには息子を守るためにベビーベッドに必死で覆いかぶさっていた。一瞬懐中電灯を隣の部屋に取りに行こうとしたが、揺れがひどくて諦めてずっとベビーベッドにしがみついていた。その頃に私の大きな叫び声を聞いて夫がやっと起きてきた。

（2）揺れ終わって

家中を見渡すとテレビや棚の上に置いてあったもの（写真立て、鉛筆立てなど）がすべて落ちていた。上を見ると電気の笠が大幅にずれていた。キッチンでは壁にくくりつけておいた棚の上に置いてあった調味料がほとんど落ちていた。買って2年になる食器棚の扉が開いて食器が何枚か落ちて割れていた。この食器棚の扉は固くて普段はとても不便に

思っていたが、初めて「扉が固くてよかった」と思った。

家の中の確認が終わって息子のミルクセットを持って家の外へ出た。それから同じ社宅に住んでいた人の大きいワゴン車に乗せてもらった。車の中でラジオを聴き、ようやく地震の情報を知った。ラジオでは神戸、宝塚などの震度を発表していた。ラジオを聴き終わった後、家に毛布を取りに帰って、西高丸小学校（現在は廃校）へ避難した。

(3) 西高丸小学校にて

西高丸小学校の体育館には100人ぐらいが避難していた。私たちはそこに一晩泊まった。ここで困ったことはトイレだった。水が流れなかつたのでプールの水を使って流したが詰まってとても汚かった。地震が発生してまだ1日しか経っていないから余震が多く、小学生たちがとても怖がっていた。だから明かりを点けたままにしていた。明かりが点いているからか息子は興奮してなかなか寝つかなかった。私は寝かしつけようとずっと抱っこをしていてその日は一睡もできなかった。

次の日（1月18日）

朝になるとボランティアの人が体育館に避難している人数分のパンと湯呑みに入った温かいお茶を配ってくれた。昨日は家にあるものを食べていた。（ご飯の炊き残りなど）

(1) 実家へ避難

避難所にいてもミルクに困るから、佐用町にある私の実家へ帰ることにした。衣類などを車に乗せて出発した。普段は国道2号線や高速道路を使うが、渋滞や通行止めなどがあったので回り道をして倍の時間をかけて帰った。姫路ぐらいになると被害という被害は見当たらずとても驚いた。皆が普通に生活していて通勤・通学をしていることが不思議で仕方なかった。

2日目以降

(1) ライフラインの復旧

実家には10日間ほどいた。夫は送ってくれた日に1泊したのち、出勤命令が出たので神戸に戻って行った。10日ほどして水道が復旧したので、私と息子は家に戻った。

電気は発災から約1週間というとても早い時期に復旧していた。ガスは復旧に時間がかかっていたので夫がプロパンガスを買っていった。お風呂は2日に1回、近所のお風呂屋さんに行った。息子には毎日プロパンガスで沸かしたお湯をたらいにはって、お風呂に入らせた。ガスは社宅に危険がないことが確認されたのち、1か月ぐらいして復旧した。

電話は、電話線が切れていたのでパンク状態が収まつたら、普通に使えるようになった。公衆電話はパンク状態にならずに使えたので、多くの人が公衆電話を求めて列を

つくっていた。少し長く電話をしていた人に対して、次の人が「遅い、早くしろ」と言って喧嘩になることも多かった。このような普段なら絶対にしないと思う喧嘩をたくさん見た。

(2) 夫の会社の被害（神戸市中央区脇浜町）

会社のビルが M 字に壊れていた。夫は普段いる 2 階のフロアが最も潰れていたので、昼間に地震が起きたら確実に自分は死んでいたと話していた。出社後、潰れたビルから取り出せるだけの備品（パソコン、データなど）を取り出した。備品はここから一番近い西神研究所に移した。それからは会社の事業を離れて、炊き出しなどをするボランティア活動を行った。

地震発生から約 1 か月後に、倒壊したビルが取り壊された。プレハブが建つまでの間は、地方に出張に行く日々が続いた。プレハブの期間は長く 2 年続いた。夫は「プレハブの特有の冬はとても寒く、夏はとても暑いということが辛かった」と話していた。

(3) 住んでいた社宅の被害

社宅にはヒビがはいっていたが、専門家による診断の結果「倒壊のおそれなし」と判断された。このような判断が下ったので、社宅に住んでいる人は全員、1 か月ほどで避難先から帰ってきた。私が住んでいた社宅では地震が原因で引っ越しをした人はいなかった。そんな中ある日、突然トイレの水が逆流してきた。調べてもらうと下水管が地中で潰れていた。外見には目立った被害がなかったので安心していたので、とても驚いた。

阪神・淡路大震災を振り返って

小さい子がいる家庭は車の中に避難したほうが、精神的にも肉体的にも楽だということを身をもって感じた。でも、避難所に行ってないからそこで配られる食べものはもらえないことに注意する。

最後に阪神・淡路大震災の教訓をもとにした、我が家で行っている災害への備え紹介する。

- ・避難をするときに持ち出す貴重品をひとまとめにしておく
- ・携帯ラジオを常備
- ・食器棚と壁をくさりでつないで、倒れないようにしている
- ・タンスの下で寝ないようにしている→もし家以外で寝るときに、タンスの下に寝ないといけないときは、タンスがある方向に足を向けるようにしている

※以下からはまた自分の視点に戻る

舞子高等学校環境防災科

私が環境防災科に入ったきっかけはもともと自然災害などに关心があり、小学 6 年生のときに父が「防災を専門的に学べる高校がある」といったことだった。当時の私は父が阪神・淡路大震災をきっかけに防災の道を志すようになったことは知らなかつたので、私が防災に興味を示したことは今思えば、偶然なような必然にも感じる。さらに言えば、父が阪神・淡路大震災で悔しい思いをしなければ、私は環境防災科にはいなかつただろう。

環境防災科に入って一番関心を持ったのは 1・2 年生で勉強した「環境と科学」という地学分野をおもに扱っている教科だった。環境と科学では地震や津波などの自然災害のメカニズムを学んだ。メカニズムを知ることによってその災害に対する対策や備えを考えることができる。私はそのことが一番環境防災科で学びたかったので、ほかの教科より力を入れて勉強した。

将来の夢

私の将来の夢は父と同じ海上保安官だ。そしてゆくゆくは父と同じ海上防災係長になりたいと思っている。しかし、海上保安官になれたとして、すぐに防災に携われるわけではない。希望が叶っても 30 代後半ぐらいになるだろうか。それに、女性で陸上勤務の人の多くは事務系の仕事をしているし、防災を専門に扱う部署も男性ばかりで女性が防災の道に進めるかわからない。人事のタイミングや自分の能力によってはなかなか希望通りにいかないだろう。それでも可能性が全くないということではないから、あきらめずに頑張っていきたい。

防災担当になってやりたいことはいくつかあるがその中でも特に「陸上と海上の合同防災訓練」を企画したいと考えている。消防、警察、自衛隊、医療機関、行政などをまきこんだ大規模な防災訓練を半年に一回、無理があるなら一年に一回のペースで行えば、大災害時の対応や連携がスムーズに進む。海上で災害が起きたときは陸上の消防などと連携して負傷者を一秒でも早く病院に搬送をする。また、陸上で災害が起きれば、すぐやく応援や支援にあたるようにするということなどを何度も訓練を繰り返し非常時に備えられるような環境を整えたいと思う。このあたりは南海地震の被害が大きくなると予想されているからなおさら訓練をしないといけないと思う。

母の震災体験と語り継ぐモノ

山下創

(1)母の震災体験

僕たち山下家の家族は、当時学園都市付近に住んでいた。マンションの一階だったが、被害もなく、ライフラインも極めて早く復旧した。だが兄弟が多かったため、母は苦労したようだ。その話を聞かせて貰った。母は、姉二人がインフルエンザなのにかわらず、一生懸命にまもってくれた。災害の語り継ぎとは関係ないかも知れが、母の僕たちに対する愛情と、母の大きさがわかった。

ここからの文章の語り部は母なので、母視点で書いていこうと思う。

4歳と3歳の娘たちは、人生初のインフルエンザで40度近い高熱でうなされていた。今晩は看病で眠れそうにないなと思っていた。

「今日は仕事があるから、別の部屋で寝てくれんか？」

主人から別の部屋で眠るよう頼まれ娘たちと5か月の長男と4人でリビングルームで寝ることにした。

1月17日未明、次女が泣き叫び始めた。インフルエンザのせいだと思うのですが、まるで火のついたような泣き声に ただならぬ感を覚えながらも何とかさせ、

「明日は朝一番に小児科に行こう」

と考えうとうとしていた。

すると次は、インフルエンザにかかっていない5か月の長男が泣き始めた。先ほどおっぱいを飲ませたばかりなのに…。インフルエンザがうつったのかなと心配しながら抱き上げた。

「熱はなさそうだけど、小児科と一緒に連れて行って診ていただこうかな」

と思いながら眠らせ、ふとんに入れてやった。看病で睡眠不足の私はすぐ眠った。

パリンパリン…

それから30分もたたないうちに、食器が次々と割れる音に目が覚めた。時々家の前の道路を通る車のライトの明かりで食器棚の扉がぶらぶら動いているのが見えた。まるで電車に乗っているかのように家が揺れいろんなものがどんどん床に落ちていくのを、わけがわからず見ていた。

「——地震だ！」

そう気が付いた時もまだ揺れ続けていました。とっさに5か月の長男を抱き上げ、寝ている子供たちに

「ふとんを頭からかぶりなさい！」

と叫びました。子供たちは怖さもあり、すぐふとんをかぶった。まだ揺れていた。子供た

ちの上にテレビボードが倒れるかもしれない。エアコンが落ちてくるかもしれない。いろんなことが頭をめぐり、ふとんをかぶっているだけじゃ危ない。そう思い

「テーブルの下にかくれなさい！」

と娘たちにテーブルの下に移動するよう叫んだ。しかし、娘たちは怖いのか、一向に動こうとしないのだ。私は赤ん坊を抱いているので、しかたなく足で娘たちをテーブルの下まで促した。まだ揺れていた。車のライトで時々見える娘たちの怖がっている顔をいまだ忘れることがない。

しばらくして部屋を歩けるくらいに揺れがおさまってからは、まずはいつでも逃げることができるよう、子どもたちに上着を着せ、いざというときは靴もはかせられないと思い靴下を2足重ねてはかせた。

窓は鍵を開け、懐中電灯やラジオを準備し、ポットにミルク用のお湯を用意した。（ガスを使ってしまった）今思えばガスを使ったのは一番してはいけないことだった。

逃げる準備ができてから、ずっと気になっていた両親の安否確認のため電話をかけた。回線混乱のため何度かけてもつながらなかった。主人は心配でイライラし自分の目で確かめてくる。と車を走らせた。私は私の両親の家に何度も何度もかけ、どのくらいたってからだろう。両親が無事である確認がとれた。本当に長い時に思われた。余震が続く中、子供たちは私から離れようとせず、割れた食器の掃除が大変だった。

主人の両親の無事もわかり、帰ってきた主人が外の様子を教えてくれた。

「想像を絶することが起こっている…」

恐怖心がいっぱいになった。

もう一つ大事なこと。子供たちを小児科の先生に診ていただかなくてはいけない。

「こんな状態で小児科は開けてくれるかな」

と心配で電話してみた。自宅で開業されている医院だった。忙しいにもかわらず

「私一人ですが来てください」

と快く引き受けてくださった。確かに先生おひとりで医師、看護師、医療事務、薬剤師の全部をこなして、午前中に予約をとっても診ていただくのは夕方過ぎになつたりした。先生はたぶん昼食もされていなかつたと思う。長女はインフルエンザから中耳炎と肺炎を併発し他の大きな病院でみていただかなくてはいけないといわれたのですが、とにかくどこかの病院に電話してもつながらなくて、家で安静にしているしか手立てがなかつた。1日中かわいた咳をし、耳が痛くて泣く娘を前に、私も泣くことしかできないのが悲しくて、たまらなかつた。

そんな中、予想通り電気もガスも止まり、水道も止まってしまった。いろんな容器やふろ場にためておいた水を細々と使い、寒いけどいっぱい服を着込み、暗い中での生活がしばらく続きました。ただ救いだったのはインフルエンザの娘たちは、何とか手に入れたパンやおにぎりをおいしそうに食べ、熱も下がり快復していったことだった。小児科の先生には本当に感謝の気持ちでいっぱい。

待合室で余震におびえる見ず知らずの子供を抱くお母さん。開いているのはここだけだからと、お年寄りも診てくださった小児科の先生。唯一水が出る水道に並び、1滴も地面に落とさないように掛け声をかけながら バケツを渡しあった近所の人たち。おむつやミルクを分け合ったお友達のママ。子供たちにお菓子をくれたお隣のおばちゃん。今から思えばあの時の私たちは 今とは違う世界にいたように感じる。誰もが被災したという共通のものを持った仲間だった。みんなが同じ方向を向いてがんばっている同志だった。その日その時を一生懸命生きていた。

我が家の方では比較的被害も少なく、ライフラインの復旧も早く、テレビ等で地震の被害の様子を見ることができた。信じられない映像の連続だった。日に日に死者の数は倍増していった。まるでドラマのようだった。

ライフラインを確保できた我が家に、両親が食事をしにきたり、お風呂に入りに来たりするようになった。お風呂に関しては、主人の職場の人の親戚の知り合い?みたいな、よくわからない人も遠くから入りに来た。とにかくみんなとても喜んでくださるのがうれしかった。誰が来ようが仲間だし、同志だった。

電車が走るようになってから、娘たちを連れて長田区に行き、がれきの中を歩いた。心に刻んでほしかったから。歩きながら涙があふれてた。

今、娘たちにあの時のことをたずねると、テーブルの下にかくれたこと。靴下をいっぱいはいたこと。割れた食器を踏まないようお母さんにおこられたこと等小さなことも細かく覚えているが、何より地震といえば小児科の先生。である。昼食も食べずにただ自分のできることを、ひたすらやり続ける姿は、私たちに感動を与えていただき、

「私も今こそ頑張らなくては。できることをやろう。」
と思うことができた。

あの懸命な先生の姿を見てからか、長女は看護師になった。

母の体験談を聞くのは初めてではないが、こんな長々と母が話してくれたのは、これが初めてだった。

最初に、

「教訓は、『命は大切や』っていうことや」

といわれた。震災を体験した人の、説得力があるひとことだった。とても重い言葉に感じた。命の危険にさらされたこともあんまりない僕より、ほんとうに命の危険にさらされた人の重いことばだった。軽く聞き流せないと思った。

靴下を二重にはかせたり、瓦礫の中を娘に見せたり、母の臨機応変さに驚いた。それから小児科の先生の話も感動した。もし同じ境遇に立たされたとして、自分は同じように一生懸命に頑張れただろうか、と少し不安になった。しかし、次このような災害が起こったとしたら、自分はこの小児科の先生のように頑張ろうという目標になった。

「目の前にある物事を必死に、自分のできることを一生懸命、自分自身を後回しにして行える先生がうらやましかった。」

と母は最後に言っていた。

もう一つ印象に残ったのはバケツで水を取るところである。蛇口を閉めてもポタポタと落ちていくしづくの一滴でも無駄に使うか、とみんなで掛け声をかけながら一瞬で交代する、というのを体験したらしい。一滴の水のために、見ず知らずの人と息をぴったり合わせた。

「当たり前のもんが、ホンマにありがたかった。」

と母は何回も言っていた。『ありがたい』を漢字で書くと『有難い』。有ることが難しい。母の一言で、そのことを改めて感じることができた。

たくさん語ってもらったこの体験談を、次は僕が子供に語らなければならない。その義務、責任がある。母の感じたものすべてを正確に伝えるのは不可能だが、自分なりに、勉強したものも詰め込んで、たくさんの人たちに語り継ぎたいと思った。

(2)四川省

僕は四川大地震の交流として、四川省へ行った。直接的に被災地と接するのは初めてだった。地震でメチャクチャになった都市を見た。本当にショックだった。先輩たちは泣いていた。僕と三好くんは、途中、黙って歩くしかできなかった。

僕が一番ショックを受けたのが、まだ埋まつたままの被災者にとってはお墓とも言えるそこに捨ててあったゴミだ。お菓子の包み紙、タバコ、ペットボトル。結構な数が落ちていた。目の前でツバを吐くおじさんもいた。

とてもショックだった。ここに来て、これだけみて、何か感じることがないのだろうかと思った。他人事と思ったのであろうか。怒りさえ感じた。あとで三好くんと

「見た？あれ」

と自分の感情を吐くように話した。

「めっちゃショックやった」

と三好くんも言っていた。夜の反省会でそのことを話した。

思わず涙が出てしまった。それぞれみんな思いをもって泣いていた。

とても悲しかったが、得るものもたくさんあった。

ただ自分が感じて終わりにしたくない。もっとたくさんの人に話して、それを防災に生かしてほしい。四川でそう思った。

帰ってから、みんなに話をたくさんした。発表もした。こうして、発表のようなもので語り継げたのは、とてもいいことだと思った。

(3)語り継ぐべきモノ

小学生の時も、毎年1月になると先生に体験談をきかされていた。震災当時のビデオも見せられた。倒れた建物や避難所のようす、助けを求める人も映っていた。ひたすら泣いている人も映っていた。娘の名前を叫ぶ父の姿もあった。息子をひたすらさがす母の映

像もあった。

今考えれば、あれは本当に大切なことなんじゃないかと思う。

本当はあのビデオを見るのが怖くて、毎年、そのビデオ鑑賞の時間が嫌だった。被害にあう人たち、煙をあげる建物小学生の自分はただ単にそれが怖かった、とか、可哀想だった、のかもしれない。でも、そうなりたくない、と思っていたと思う。

「母さん、なんであんな怖いビデオ見なアカンの？」

と、ある日母に聞いたのを覚えている。母はこうこたえた。

「あれは忘れたアカンからやで。」

忘れてはいけない。その一言を僕は阪神淡路大震災という災害を、忘れてはいけないと思っていた。しかし、本当に忘れてはいけないのは、それから学んだ教訓だと今は思う。当時はただ怖いだけだった大震災を語り継いでいくことだと今は思う。

その感情こそが防災の始まりではないだろうか。僕は自分が体験をしていないけれど、語り継ぐことはできる。たくさんの感情や思いを持っているから。

それを未来に繋ぎ、継いでいきたい。

ボランティアの時に、あるおばあさんから当時のことを話していただいたことがある。

「私は夫をなくしたのよ。」

笑顔でそう言ったおばあさんに、心がしめつけられた。震災が奪った幸せを、目の前で感じたから。

僕はおばあさんに耐震化の説明をした。

「これをしたら夫も助かったかもね」

と言われた。

とても悲しかった。もっと早くに防災に気づけばよかったのにと思った。そのおばあさんに

「長生きしてください。」

の一言しか言えなかつた。

教訓というものがあるて、初めて防災ができると思う。それもそうだが僕はもうひとつ考え方を持っている。それは震災によって生まれた恐怖がないと、防災はなかなかできないと思う。地震の怖さを知ることも必要だと思う。

こういったことも含めて、語り継ぐことは本当に大切だと思う。忘れちゃいけない震災を未来に伝え、繋いでいく。それは震災を体験した方々の義務であり、それからこうして語り継がれた僕たちの責任である、と僕は思う。地球に住む限り、災害は避けては通れない。僕たちができるのは、そこから教訓を学ぶこと。そしてそれを伝え、次に生かしてもらうこと。未来の防災、そして未来の人々に少しでも多く、語り継ぎ、伝えていきたい。

両親から聞いた僕の震災体験

山田 翔太

1,母から聞いた僕の様子

1995年1月17日、午前5時46分。

阪神淡路大震災が神戸を襲いました。

この時、僕はまだ生まれて3週間ほどしかたってない、ふにやふにやの新生児でした。

僕は5時くらいにお腹がすいて、お乳をのみ、40分くらいにやっと寝付いたところでした。

母も僕を寝かしつけ、布団に入つてもう一度寝ようとしたとき、

「ゴオー」

という地響きでびっくりして飛びきました。

一瞬夢でも見ているかのような、轟音と激しい揺れ。

飛び起きようとした瞬間、今まで経験したことのない、揺れに身動きがとれなかつたらし
いです。　この時、母と僕の距離は2メートルもなかつたそうです。

そんなに遠くもない距離ですが、なかなか僕のところにたどりつけなかつたそうです。

なんとか僕を抱き起して、安全な部屋に移動しました。

他にも5歳年上の兄と2歳年上の姉がいました。

兄や姉も起こされて、みんなで同じ部屋に集まりましたが、兄たちは地震のことは全く覚
えていないと言っていました。

揺れが収まり、団地の外に出てみるとお隣やよく知った顔のご近所さんの方が集まつてい
て、少しほっとしました。

誰かのラジオで震源地が淡路島だと知り、自分たちのところが一番ひどい揺れだらうと思
いました。

まさか長田やもっと遠い芦屋川などがすごいことになっているとは夢にも思いませんでした。

その後ライフラインが途切れ、僕たちはしばらくの間おじいちゃんの家で、お風呂に入ら
せてもらうことになりました。

僕は母乳で育ったので、水が出なくても困らなかつたそうです。

しばらくすると、水もガスも復旧し、家でお風呂にはいることができるようになりました。

いつも何気なく使っていて、あることが当たり前になっている、ライフライン。

蛇口から水が出ることがこんなにうれしいことだと初めてきづいたと母はよく言っています。

それも夜通しで復旧作業をしてくれた人たちのおかげなのだと、感謝しなあかんと言つていきました。

人と人が助け合い、助け合うことは本当に大切なことなのだと、人は一人では決して生きて行けないということを覚えておくようにと、母から言われたことを覚えています。

日頃、何気なく生活していますが、もしもの時に、家族や大事な人を守れるように、心構えをしていないといけないと思いました。

2.母から聞いた震災当時の状況

1月17日。

その日はとくにいつもと変わらず、息子に母乳をやり、寝ようとしていたところでした。

その瞬間、「ゴォー」

というとてつもない揺れ。一瞬夢でも見ているかのような今までに体験したことのない揺れ。

揺れている間はとても長く感じました。

しばらくして、揺れが収まり、団地の外に出てみるとご近所の方やよく知った顔の人が集まっていて、ほっとしました。

誰かのラジオで震源地が淡路島だと知り、自分たちのところが一番ひどいというか。

まさか長田やもっと遠い芦屋川などがすごいことになっているとは夢にも思いませんでした。

しばらくすると、電気が普及したので、TVをつけて愕然としました。

阪神高速が根っこから折れていて、横倒しになっていたのです。

あのころは、まだ携帯電話などはいまのように、一人一台という時代ではなかったので、電話がなかなかつながりませんでした。

長田に住んでいる親や、西宮に住んでいる友人など安否が心配でした。

夜になり、ようやく電話がつながり始めました。

ひとりまたひとり元気だということを確認できました。

ただひとり、主人の友人で子供たちもよく遊んでもらった三宅くんが、芦屋のアパートの下敷きになり、亡くなつたと連絡が入り、家族みんなで泣いていました。

28歳という若さでした。

それから、水道、ガスが出るまで、給水車で水をいただいたり、スーパーで出来るだけの食料を買い込んだりと、いろいろ大変でした。

一番下の翔太がなにしろ、まだ生まれて一ヶ月もたっていなかったので、お風呂に毎日はいれなくて、可哀想でした。

お風呂は私の父親が須磨の名谷に住んでおり、幸い、名谷はライフラインはすべて通っていたので、そこへ入れさせてもらいに行っていました。

子供たちは、結構楽しそうにしていたので、それはよかったです。

しばらくして、水が普及した時の感動は今でも忘れません。

蛇口から水がでることのありがたみを本当に身に染みてありがたく感じました。

日頃、当たり前のように使っていたものが、使えなくなってしまった時の不便さは想像以上に大変でした。

今、震災から17年が経ち、私たちの記憶から少しずつ少しずつ忘れつつありますが、もう一度、今、周りにある、あたりまえなことに感謝をし、

あってはならないのですが、もしもの時に備えて、準備すべきものを考えておくべきだと思います。

3,父から聞いた震災当時の状況

揺れの最中は身動きが取れなかった。子供たちのもとへ行きたかったが、自分の意思で動くのは不可能だった。

揺れがおさまってから、まず次男の元へ行った。

生後一か月の次男のすぐ頭の上に救急箱が落ちていた。

もし少しでもずれていたら頭に直撃だったかもしれない、とゾッとした。

次男はなにも気づかずやすやすや眠っていた。

私の住んでいる垂水区は比較的被害が小さかった。

私は震災後しばらく徒歩と自転車で仕事場に向かった。会社から支給された自転車は数日利用ただけですぐに壊れてしまった。めちゃくちゃになった道路や、瓦礫と尖った破片などにより、すぐにパンクしてしまった。

仕事の関係で震災を体験していない人と接する機会がある。その人たちに「あの時は大変でしたね、どんな状況だったんですか?」と聞かれる時がある。

そういったときに私は返答に困る。「被害の少なかった私が、果たして当時のことを語る資

格はあるのか」、私は申し訳なさを感じる。

震災で学んだことは、やはり普段の生活がどれだけありがたいことなのかということだ。私たちは今の生活を感謝しなければならないと思う。どれだけ「今の生活は素晴らしいのですよ」といっても、いざ不便な生活を体験しないと分からぬ部分が多いだろう。また、震災当時は、家族や会社の同僚たちといつも以上に協力し合って助け合っていた。窮地に立たされたとき、人間は人と手を取り合って生きていくのだと思い知った。

「語り継ぐ」

吉岡 勇磨

1 震災の起きた日

朝方、就寝中、地響きとともに大きく揺さぶられるような感覚に襲われた。

真っ暗なので何が起きたかわからず電気をつけようとしたけど、停電でつかない。母は隣にいるはずの父を探したがいなかった。父は生後2ヶ月のぼくをベビーベッドから抜き上げていたのだ。「大丈夫?」と母。父は「うん。よく眠っている」と言った。暖房がきかないで母は座ってぼくを抱き、毛布にくるまりながら、次第に外が明るくなるのを待った。明るくなってから、台所で食器が割れまくり靴をはいて移動しなければならなかつた。父は一応会社に行くと外出したが、長田で火災がひどくて通行できずに昼前に帰宅してきた。母は祖母に何度も電話し、やっと連絡がとれた。余震が不気味に続き一人では不安なので、お隣の一人暮らしのおばさんの家に一緒に居させてもらった。電気が復旧し、テレビを見て驚く。

ぼくはまだ生後2ヶ月で地震が起きたときの記憶を覚えていない。地震が起きてすぐに助けにきてくれた両親にとても感謝の気持ちでいっぱいだ。すぐにきてくれなかつたら、ぼくは今生きていたかったかもしれないと考えると怖くなつた。地響きや揺さぶられるような感覚はどんなものだったのか気になつた。地震が起きたこの日

両親はぼくを守ってくれたんだなと思った。嬉しかつた。

2 2日目

父の会社は休みで実家と連絡がとれないで、とりあえず行ってみることに。母の実家とも電話がつながらないまま不安は続く。余震も続き恐いので友達の家に行って一緒に過ごした。母が不安だと、ぼくに伝わるのではないかと心配があつたみたいだ。母乳がでなくなると困るという思いもあつた。ぼくはスヤスヤと眠りおなかがすいたり、オムツが汚れたりすると泣くというマイペースな感じ。周辺からガスのにおいがただよつて、余計不安が増す。地震が起きた日に連絡がとれたのにその次の日連絡してみて、つながらなかつたらとても不安になるだろうなと思った。こんな状況のときに友達と一緒にいることができるなら少しは安心できるのだろうと思う。こういうときでもぼくはいつもどおりのぼくであったみたいだ。

3 3日目

母の実家とようやく連絡がつき、安否確認ができるホッとする。水もガスもと

まっていたけど、そろそろぼくを沐浴させないといけないと思ったみたいで、配水車に水をもらいに並んだりカセットボンベでお湯を沸かしたりと何かひとつするにしても大変だった。食料や紙オムツのストックが気になりだした。近くのスーパーは閉まったままだったり開店していても品薄状態…。やはり家族や親戚の安否確認ができると安心できると思う。普段なら水は水道の蛇口をひねればでるし、お湯なんかすぐに沸かすことができる。しかし水道やガスがとまってしまうといままでしてきた生活が一気に崩れることがわかつた。食料はもちろん必要だろうし、当時赤ちゃんだったぼくがいたので紙オムツの消費はとてもはやかったと思う。それなのにスーパーは閉まったままだったり、開店していても品薄だったので物を手にいれること自体安易なことではなかったことがわかる。

4 生活するうえで困ったこと

電気しかない生活が続く。水は給水塔が損壊されていたため、2ヶ月程給水車からもらったり、買ったりして調達するしかなかった。ガスも同じくらい止まったままでお風呂と調理が大変だった。お風呂屋さんは超満員で湯の量は少なくて汚れていた。生後2ヶ月のぼくをいれる

わけにはいかずに、家でベビーバスを使用して入浴していた。両親が住んでいたのが垂水寄りの明石で被害はでていたけど、大きな被害は受けていなかった。そのため電気はかろうじて通っていた。テレビは見ることができたし、暖房器具も使えたので情報を得ることと暖をとることはできたそうだ。水とガスが2ヶ月も使えないのはとても困っただろうなと思った。風呂にはいることが難しくなるし、調理すらできない。普段なら普通にしていたことが急にできなくなる。したくてもできない。そんな生活では常にストレスが溜まる状態になってしまう。

5 住んでいた家の近所の様子

明石だったため神戸程ひどくはなかったけど、ところどころアスファルトが盛り上がりついていたりかんぽつしたりしていた。

ガスの臭いがどこからか漂っていて爆発が起こるかも…と思ったりして不安があった。アスファルトが盛り上がりつたりかんぽつしたりする光景を実際に自分が被災者になって見たことがないのでうまいことイメージすることができなかつた。アスファルトが盛り上がってたりかんぽつしているところで、小さい子供たちが遊んだりお年寄りが歩くのは危ないと感じた。ガスの臭いがどこからか漂っている状況が今は考えることができない。どこからガスが漏れているかわからなくて、爆発が起こるかもしれないという状況は本当に怖いと思う。ガスが漏れているということは火が使えないことだから、恐いと感じると同時にとても便利が悪いと思った。普段は調理するときに使うガスがときに人々

に恐怖心を植え付けるものに変わることに気付いた。

6 余震が続いていて不安な中、ホッとしたことや安心できた出来事

夜一人で遅くまで起きているのが恐かった。(いつ余震があるかも…と思い)テレビのニュースは毎日、特別報道番組をやっていて被害の大きさを思い知らされたけど、情報源の一つでもあった。近所の人や友達と声をかけて一緒にいることで、ふと安らげる時間があった。ぼくは大きな地震やそのあとにくる余震は体験したことがないけど、夜に一人でいるときに地震がきたらとても恐いと思う。ただそういう状況下で一人じゃなく、家族、友人、近所のお隣さんの人と一緒にいればけっこう落ち着けると思う。災害が起きたときのために、近所の人たちとコミュニケーションをとっておく必要があると感じた。東日本大震災のときもやっていたが、特別報道番組では悲惨な被災した姿を目にするが

同時に知りたい情報を多く流してくれるからとても重宝する。このように不安で恐いときに近所の人や友人と一緒にいることはとても大切だということわかった。

7 心の支えになったこと

ぼくがいたので「この子は守っていかなければいけない」と心の支えになっていたと思う。実家が長田だったのでスーパーで買い物を満足にできない状態(品薄、時間交代制)だったので、明石で買い物をして届けた。なにか強く守りたいと思えることや人がいれば、体力的にしんどいことがあっても気力でなんとかやっていけるもんなのかなあと思った。こういうふうに思われていると考えると嬉しかった。やはり長田の被害はとてつもなく大きいゆえに物を必要とする人がたくさんいたと思わされた。長田で満足に買い物ができなくて明石ではできたのだとわかった。

8 親戚に助けてもらったこと

千葉の親戚から水や食料が届けられた。ほかにプロパンガスのある親戚の家のお風呂に入れてもらった。

水や食料に困っているときに親戚から助けがあつたらとても助かるし、一人ではないと感じができると思う。ガスが使えなくてお風呂がはいれないときに、お風呂にはいれることはとても嬉しいと思う。

9 どのような救援物資を受け取ったか。また特に役に立った物は何か。

水や粉ミルク、オムツ、カセットボンベのガス。特にカセットボンベは調理と

子供の沐浴にとって必要不可欠である。子供の沐浴のためと調理にはカセットボンベがとても大切であることがわかった。

10 住んでいた地域が復旧しはじめたのはいつごろからか。そしていつごろに完了したか。

給水塔が壊れていたため水が出なくて、団地の外の蛇口から長いホースでお風呂の水をためた。トイレ用の水もおいておく必要があった。その後1ヶ月程経ってから、各戸でやっと水ができるようになった。久しぶりに蛇口から水ができるときは感動した。建物はトイレ、風呂の壁に亀裂がはいっていたが一部損壊にもならず幸い避難所生活は経験していない電気だけでも1. 17 当日に復旧したので助かった。

今までの普通の暮らしから一変して、でるはずの水が出なくなったり電気がつかなくなったりすると本当に困るだろうと思った。水を得るためにわざわざ団地の外の蛇口からホースを引っ張るなんてめんどうだと感じる。そんな生活を1ヶ月も過ごしたなんて驚きだ。大きな地震だったのに壁に亀裂がはいる程度で済んだみたいなので、話を聞いたぼく自身ほっとさせられる。

水の復旧に1ヶ月くらいかかったみたいだが、電気のほうは地震が起きた当日に復旧したみたいなので良かったと思う。電気が復旧しただけでも暖房をつけることができて安心できると思う。でも水がないことは多くの生活に支障をきたすものだ。調理、洗濯、風呂の水にたくさん必要になる。水が復旧しても、電気が復旧していなかったら温めるということができない。こういうわけで普通の生活をするには電気も水もいることがわかった。

震災が起きてからのわたしの周りで起きたこと

吉田 梨奈

(1) 震災発生

1995年1月17日午前5時46分 阪神・淡路大震災発生。私は生まれてから3か月と少しだった。

私の横で寝ていた母は、揺れで目が覚めた。

『揺れたな』と思ったときか、思う前か。それは大きな揺れへと変わった。

当時、世間で話題となっていた日本沈没説や地球滅亡説などが頭をよぎり、『ああ、今日が地球最後の日やったんや…そうか～…』と思ったそうだ。

一瞬にしてそのようなことを考えさせるぐらいの大きな揺れもしばらくしたら止み、今起こったことは地震だということが母にも分かった。

しかし何がどうなったのかはよく分からない、状況を把握しようとするも電気もつかない。

とりあえず寝室を出てみると、薄暗い中でも分かるくらい、普段の我が家とは違う光景が広がっていた。

食器棚は他の家具に倒れこみ、もちろん中の食器も飛び出して割れている。“倒れた”というよりも“飛んだ”というほうが表現が合っているのではないかと思うぐらいに普段と配置が違っている家具、家電の数々だった。

(2) 発生後の我が家

それからは、父も母もどうすることも出来ずにただただ家に居た。家に居ることしか出来なかつたそうだ。

そのまま夕方になり、父は自分の勤め先のホテルに行くことにした（父はもともとその日は夕方から仕事だった）。移動手段がなかったので、近くに住んでいる母の弟に自転車を借りてホテルに向かった。

残された母は、『ライフラインも使えない、食べ物も無い、小さい子供も居るんじやひとりの力だってろくに使えない、第一、お父さんだつて何日帰ってこられないか分かったもんじやないし』と思い、近くにある母の実家に小さな私を抱えて向かった。

母は当時の記憶はあまりないらしいが、この時母の実家に向かう道中で見た、長田の辺りの空が真っ黒だった情景はよく覚えているそうだ。

母の実家は被害があまりなかったそうだ。とりあえずしばらくの間、母と私は母の実家に身を寄せることになった。

(3) 私や家族の周りで起こったこと

地震発生当日、東灘区の浜側にあるガスタンクが破損し、2km圏内の住民に避難勧告が出て、その当時、住吉で一人暮らしをしていた私の叔母も避難しなければいけない状況だったのだが、避難のしかたもよく分からず、仲のいい人も近所に誰もおらず、ガスタンクから2kmギリギリだった事もあり、当日は避難せず、ガスタンクの爆発に怯えながら部屋の片づけをしていた。窓が割れて、ガラスが飛び散ったら大変なので、ベッドの影に隠れながら過ごしていたそうだ。

そのとき、窓から見た光景は、近所のアパートがつぶれている光景だった。

テレビもラジオもない中で叔母は自分が置かれている状況に気がつかず、大阪にある勤め先の会社に連絡することにした。

何度も何度も電話をしてみるがなかなか繋がらなかった。

しばらくして、やっと会社に電話することができた。大阪の会社は、被害も全くなく通勤してきた人たちで普通に動いていると電話で説明されたそうだ。

叔母は、まさか神戸がそんな大きな被害に遭っているとは思わず、

「私、まだ家にいるんだけど…家の中が地震でぐちゃぐちゃになっちゃったから、今日は休んで大丈夫かな？」

と聞いたら、神戸のひどい状況を説明され、その時初めて叔母は、神戸の現状、自分が置かれている状況が理解できたそうだ。

どうすることも出来ず、結局その日は部屋の中を片付けていた。

2日目、私と母も避難していた垂水の実家に避難することを決めた叔母は、祖父に迎えに来てくれるよう電話をしてきた。

しかし、祖父が数時間をかけ、迎えに行く間に避難勧告が避難命令に変わり、しかたなく叔母はまず近くの小学校に向かった。その小学校が満員だったので、今度は保育所に行った。保育所は、子供用のトイレが小さくて不便だったので人気がなく、空いていたそうだ。

叔母はたった一人で避難所に來たので荷物から離れる事も出来ず、何も出来なかつた。そんな叔母に食べ物を分けてくれた人がいた。当時まだあまり普及していなかった携帯電話を避難所の人みんなに貸してくれた人もいたそうだ。

住んでいたマンションの入り口に置き手紙を貼ってはきたが、携帯電話を持っていなかつた祖父に連絡を取ることが出来ず、日が暮れてからマンションに着いた祖父は置き手紙に気付かず、数か所の避難所を廻り、叔母を連れて帰ってきたのは、夜遅くなつてからだつた。

この話を書くにあたつて、叔母に当時の話を聞いた。私は最初、叔母は震災当時の事を覚えているのだろうかと少し心配だったが、叔母は事細かに当時の事を話してくれた。忘れて無かつたのかと聞いたら、

「それはない」

と言った。

「震災当時の数日間の事は今でもはっきり覚えている。避難所の人みんながほこりまみれだったこと、とにかく寒くてたまらなかつたこと、全てが目に焼き付いていたり肌で覚えている」

と語ってくれた。

その後の話だと、職場が新大阪にある叔母は電車が通るまでの1～2ヶ月間は大阪の親戚の家に居候することになり、阪神電車が梅田まで運行出来るようになったとき、久しぶりに自宅から電車に乗っていくことになった。電車に乗って、最初に発車する時の揺れがすごく怖かったそうだ。それくらい、実は身体が地震の事を覚えているんだなあと感じたそうだ。

叔母が避難所にいたのはほんの数時間だけだけれど、それでも避難所では何がどのタイミングで必要になってくるのかが分かったそうだ。そしていまでも覚えていると言っていた。

叔母は、

「少ししか避難所に居なかつた私でも分かる事はたくさんあるのだから、災害時の避難所運営のやり方などをよく分かっている人は神戸にすごくたくさんいると思う。そういう人が、今回の東日本大震災のような災害の避難所に行って経験を活かしてボランティアすることは、とても意味のあることだと思うし、きっと役にたつだろうからすごく大切なことだと思う。」

と話してくれた。

私の周りの親戚の震災当時の話はもう一つある。

地震の3、4日後、須磨区に住んでいた祖父の叔父が亡くなった。

以前から入院しており、直接地震とは関係ないが、亡くなつたあとが大変だったそうだ。

神戸では、『葬儀』どころか、個人的に遺体を引き取ることが出来ないので、震災でたくさんの方が亡くなっているのだから仕方がないのだが、祖父はどうしても葬儀を行いたかった。

祖父の叔父は、今から45年ほど前に自宅が火事になり、奥さんと一人息子さんを亡くし、その後再婚したが、もう年老いた奥さんが身軽に動けるはずもなく、祖父が全ての手続きを行つたそうだ。

親戚が多く暮らす神崎郡まで自分で遺体を運ぶための許可を得るために、震災で何をするにも時間がかかるうえ簡単には許可が出なかつたが、それでも何度も役所などに行き許可をもらい、遺体を運べる車も用意し、無事葬儀を終えることができたそうだ。

(4) 話を聞いている途中に出た話と、私が思ったこと

上に書いたことのよう、私の家族の周りではさまざまなことが起きた。

私は今まで父や母には震災当時のことを何回か聞いたことがあったけれども、それ以外の親戚にちゃんと当時の話を聞くのは今回が初めてだった。

小さいころから何回も遊んでもらっていた叔母に話を聞くときは、普段明るい叔母からどんな話が出てくるのか全く想像がつかなかったけれど、話を聞いていくうちに改めて震災の大さを感じた。当時のことを私は知らないので、心のどこかで自分にはあまり関係なかったのかなと思っていたら、身近な人が危ない目にあって避難していたことがわかつて少しショックだった。みんな口には出さないだけでそれぞれが心に傷を負っているんだと知ると悲しくなった。

上にも書いたように叔母は、神戸の人のように一度体験をした人が、新たに同じ目にあつた人を助けることはとても意味のあることだと考えている。一度経験したことある人は全然違うと言っていた。

「そんなに違うものなの？」

と聞くと、

「1分でも2分でも、経験したことは必ず活かされるに決まっている。」

と自信をもって話してくれた。

「本当は私たちのような震災を経験した大人がもっとボランティアに行かなくてはならない。でも、震災を知らない若者が同じような被災地に行くこともとても重要なこと。あなたはとても貴重な体験をさせてもらえてる。」

とも話してくれた。

最後に、

「どれも印象に残っていると思うけど、特に当時印象に残っていることはある？」

と聞くと、

「やっぱりお父さん(祖父)が避難所の保育園まで私を探しに来てくれたことかな。道路もちゃんとしてない中、行き先もわからない私を一日中探してくれたんだから。避難所でお父さんの顔を見たときは本当にうれしかった。お父さんが来てくれなかつたら、私は知らない人と知らない場所でしばらく生活していかなくちゃいけないところだったから…」
と話していた。祖父への感謝の気持ちとありがたさを改めて感じたそうだ。

祖父の叔父の話は母から聞いた。

当時は本当に大変だったそうだ。

私は今まで震災で被害にあった話を重点的に聞いたり調べたり勉強したりしてきた。け

れども、震災とは関係のないけれど震災が起こったせいで出来なかつたことの話はあまり聞いたことがなかつた。

遺体を勝手に運ぶことはもちろん出来ず、何度も役所に行っては断られていたそうだ。祖父も、地震で大変で自分の意見が通りにくいのは分かっていた。けれども叔父が亡くなつたという事実に変わりはない、震災さえなかつたら普通に葬儀が出来ていたのだから、叔父の葬儀をどうにか親戚と一緒にしてやりたい…という一心で役所に通つたそうだ。

祖父の叔父のようなケースは結構多いと思う。多くの人は、『運が悪かつたのだから仕方がない。みんな辛いのだから仕方がないところもある』という人も多いだろう。しかしそれでいいと私は思わない。

大切な人の最後をきちんとしたい。その気持ちに災害の有無は関係ないと思った。

今回、母に話を聞いている中で母自身の話はほとんど出てこなかつた。

「何かお母さんのこと無いの？」

と聞くと、

「だってあんたがいたもん」

と言われた。

「生まれたばかりの赤ちゃんがいる人、普通そんなときに外に出ないでしょ。」

と淡々と話すので妙に納得してしまつた。でも内心、『何もないなんて困るよ…』と思っていた。しかしその後母が言ったことで、私は母に感謝した。

「面白い話ならあるよ、お風呂屋さんに行けることになって、あんたをお母さん(祖母)に預けてお風呂入りに行ったの。並んで並んでようやく入れて頭洗つたらなんか違和感を感じたの。そしたら自分の周りだけやたら髪の毛が落ちて…。たぶん、当時あんたに母乳あげてたから栄養あんたにとられて食べ物もろくなもん食べれなかつたから弱つてたんだろうね。やたら抜けていくから恥ずかしかつたわ～。」

と言つた。

当たり前のように話していた母だが、本当はしんどかつたんだろうなと思う。私がいたら遠いところにも行けず、不自由したこと多かつたんだろうし、困つたこともあつただろう。

しかし母は不満も感じずに私のそばにいてくれた。私の面倒をみてくれていた。それだけで十分だと思った。

(5) 感想

私が今回、母や叔母に話を聞いていて、ほかの人にも同じように家族や親戚に当時の話を聞いてほしいと思った。

きっと機会がなかったら聞かないだろうしなかなか難しいとは思うけれど、私は今回話を聞いていて知らなかつたことがたくさんあったように他の人にもたくさんのエピソードがあると思う。

私は本当は祖父に当時の話を聞きたかったけれどももう亡くなってしまっているので聞くことも出来ず、もっと小さい時に聞いておけばよかったと後悔している。

わたしのような後悔をしないためにも、震災を知らない人々は是非一度当時の話を人に聞いてみてもらいたいと思った。語り継ぐということはとても大切なことだからだ。

もっと大人が子供に、震災のことに限らず、自分たちが経験したことや教訓を語り継いでいくことが大切だと思った。それが命を守ることや、感謝の気持ちを持つことにつながると思うからである。